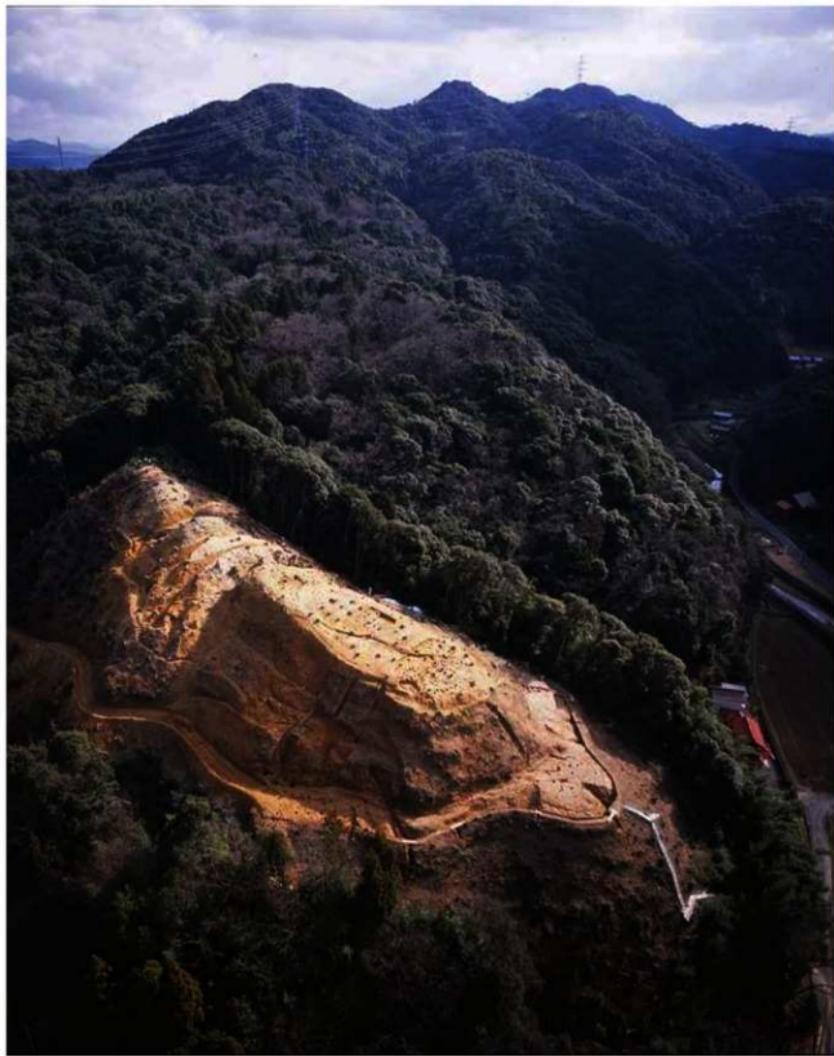


普源田砦跡

2021年

島根県教育委員会



普源田砦跡調査後全景（西から）



普源田岩跡調査後全景（南西から）

普源田砦跡

2021年

島根県教育委員会

序

本書は、島根県教育委員会が国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所から委託を受けて、平成30年度に実施した一般国道9号(三隅益田道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果をとりまとめたものです。

普源田砦跡は、浜田市三隅町の岡見川右岸の丘陵上に立地しています。三隅地域には、中世の文化財が数多く残され、三隅氏の居城高城をはじめとする数多くの中世城館が存在します。

今回の普源田砦跡の発掘調査では、戦国時代の山城跡のほぼ全域を発掘調査しました。その結果、複数の建物跡が建てられた郭や、大規模な堀切、堅堀などが確認され、石見地域における小規模城郭の全体像を解明する資料が得られました。

本報告書が、地域の歴史や文化を明らかにするための基礎資料として、学術並びに歴史教育に広く活用されることを期待します。

遺跡の調査や報告書作成にあたっては、多くの地元の方々、国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所をはじめとする諸機関にご協力をいただきました。関係の皆様に厚くお礼申し上げます。

令和3年3月

島根県教育委員会

教育長 新田 英夫

例 言

1. 本書は国土交通省中国地方整備局から委託を受けて、島根県教育委員会が平成30年度に実施した一般国道9号（三隅益田道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果を取りまとめたものである。
2. 本報告書の発掘調査対象遺跡および事業年度は下記のとおりである。

平成30年度 発掘調査 普源田砦跡（島根県浜田市三隅町岡見541-3外） 6,900m²
令和元年度 整理等作業
令和2年度 整理等作業・報告書作成作業
3. 発掘調査は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施し、角田徳幸、東森晋が担当した。
4. 発掘調査作業（安全管理、発掘作業員の雇用、機械による掘削、測量等）については、次の機関に委託した。

大畑建設株式会社（益田市大谷町）
5. 発掘調査にあたっては、次の方々から御指導をいただいた。（五十音順・肩書は当時）

小都 隆（日本考古学协会会员）、佐藤寛介（東京国立博物館主任研究員）、高屋茂男（島根県立八雲立つ風土記の丘学芸課長）、中村唯史（島根県立三瓶自然館調整幹）、西尾克己（元島根県古代文化センター長）、山根正明（元松江市史料編纂室専門調査員）
6. 発掘調査・報告書作成にあたっては、次の方々、機関から御協力、御助言をいただいた。（順不同・肩書は当時）

榊原博英（浜田市教育委員会文化振興課文化財係長）、藤田大輔（同主任主事）、小松真人（同主事）、佐伯昌俊（益田市教育委員会文化財課主任主事）、舟木聰（安来市教育委員会文化財課主幹）、生田光晴（大田市教育委員会石見銀山課建造物係長）、清水拓生（同主任）、田中義昭（元島根県文化財保護審議会委員）、村上 勇（同）、内田律雄（元島根県埋蔵文化財調査センター職員）
浜田市教育委員会、益田市教育委員会、岡見公民館
7. 本調査に伴う石器類の石材鑑定は中村唯史氏に依頼した。また自然科学分析は、次の方々・機関に再委託して実施し、その成果は第4章に掲載した。

種実同定およびA M S年代測定 文化財調査コンサルタント株式会社
人骨の分析 茂原信生（奈良文化財研究所客員研究員）・山田康弘（国立歴史民俗博物館研究部教授）
8. 本書に掲載した遺物のうち、一部については保存処理を次の機関に委託した。

一般財團法人大阪市博物館協会
9. 本書に掲載した構造・遺物の写真は、角田、東森のほか埋蔵文化財調査センターが撮影した。また、遺構図・遺物実測図の作成・浮遊写真は、埋蔵文化財調査センター職員がおこなった。
10. 本書の執筆は角田、東森が行い、第4・5章については執筆者を明記した。編集は東森が担当した。
11. 本書掲載の図面、写真、出土遺物は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（松江市打出町33）で保管している。
12. 本書の編集にあたっては、DTP方式を採用した。

凡例

- 挿図中の方位北は、第4・5図を除き測量法に基づく平面直角第III座標系X軸方向を指し、座標系XY座標は世界測地系による。レベル高は海拔高を示す。
- 本書で使用した第2・9・10図は国土地理院の1/25,000地図（益田、仙道郷、三隅）を使用して作成したものである。
- 本書に記載する土層は第4～6図を除き『新版 標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修）に従って記述した。
- 本書における実測図の縮尺は、基本的に以下の縮尺としている。

遺構配置図 1/200・1/600

遺構図 建物：1/60、堀切：1/120、竪堀：1/60・1/80、古墓1/30 等

遺物実測図 土器：1/3、石器：1/1・1/3・1/4、金属器：1/2、古銭：1/1

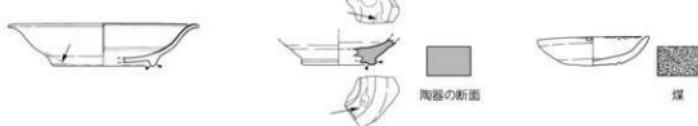
- 遺構図、遺物実測図の網掛けは、以下のとおりとした。

《遺構》



《遺物》

▼印、一点鎖線（／箇所）は施釉範囲を示す



- 土器実測図における中軸線左右の白抜きは、復元径のおよそ1/8以下であることを示す。

- 本書で用いた土器の分類および編年観は下記の論文・報告書に依拠している。

(1)貿易陶磁器

上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会 1982

小野正敏「15・16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会 1982

森田 勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会 1982

太宰府市教育委員会『大宰府跡跡XV—陶磁器分類編』太宰府市の文化財第49集 2000

片山まひ「高麗・朝鮮陶磁器の概要—14世紀中葉から17世紀初を中心にして」『第15回山陰中世土器検討会資料集

山陰における高麗・朝鮮陶磁』 2017

(2)備前焼

乗岡 実「戦国時代の備前焼編年」『東洋陶磁』Vol.46 東洋陶磁学会 2017

重根弘和「中世備前焼に関する考察」『山口大学考古学論集』 2003

(3)瓦質土器

立石堅志「奈良火鉢」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会 1995

岩崎仁志「防長型拂り鉢の成立と展開—防長型瓦質土器の再検討(1)」『山口考古』第37号 山口考古学会 2017

(4)土師器

東山信治「益田地域の土師器」『中世石見における在地領主の動向検討会資料』島根県古代文化センター 2020

本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘作業と整理作業の経過	4
第3節 調査体制	12
第2章 遺跡の位置と環境	13
第1節 地理的環境	13
第2節 歴史的環境	14
第3章 調査の方法と成果	19
第1節 調査の方法	19
第2節 基本層序	22
第3節 山城遺構の調査	24
第4節 山城遺構出土遺物	90
第5節 古墓群の調査	117
第4章 自然科学分析	133
第1節 普源田砦跡発掘調査に伴う種実同定及びAMS年代測定	133
第2節 普源田砦跡出土の人骨	139
第5章 総括	145
第1節 普源田砦跡の遺構	145
第2節 普源田砦跡出土遺物	153
第3節 普源田砦跡周辺の山城について	155
第4節 普源田砦跡と石見地方の城館跡	159
第5節 島根県内中世城館史料における城館を指す語句の検討	163
第6節 調査の成果と課題	167

挿図目次

第1図	普源田砦跡の位置	1
第2図	事業予定地内の遺跡位置図	2
第3図	調査区位置図	5
第4図	試掘確認調査トレンチ実測図(1)	6
第5図	試掘確認調査トレンチ実測図(2)	7
第6図	試掘確認調査トレンチ実測図(3)	8
第7図	普源田砦跡縄張り図	9
第8図	普源田砦跡周辺の地形図	13
第9図	普源田砦跡の位置と周辺の遺跡分布図	15
第10図	普源田砦跡と周辺の中世城館跡位置	16
第11図	調査前地形・調査グリッド設定図	20
第12図	調査後地形・遺構配置図	21
第13図	郭1Hライン断面図	24
第14図	郭1全体図	25
第15図	建物1・2実測図(1)	28
第16図	建物1・2実測図(2)	29
第17図	建物3実測図	30
第18図	建物4実測図	31
第19図	建物1～4周辺の遺構実測図	32
第20図	段状遺構1実測図(1)	34
第21図	段状遺構1実測図(2)	35
第22図	土坑2実測図(1)	36
第23図	土坑2実測図(2)	37
第24図	柱列2実測図	37
第25図	段状遺構1西側の遺構実測図	38
第26図	段状遺構2実測図(1)	40
第27図	段状遺構2実測図(2)	41
第28図	建物6実測図(1)	42
第29図	建物6実測図(2)	43
第30図	建物6遺物、石出土状況図	44
第31図	段状遺構2炉実測図	45
第32図	溝6実測図	45
第33図	建物7実測図(1)	46
第34図	建物7実測図(2)	47
第35図	郭1西側盛土内遺物出土状況図	48
第36図	郭1西側盛土下層検出遺構実測図(1)	48
第37図	郭1西側盛土下層検出遺構実測図(2)	49
第38図	段状遺構3実測図	50
第39図	段状遺構4実測図	51
第40図	郭2全体図	53
第41図	郭2平面図	55
第42図	郭2土層断面図(1)	56
第43図	郭2土層断面図(2)	57
第44図	溝1土層断面図	58
第45図	溝2土層断面図	59
第46図	堀切1・竪堀5断面図	60
第47図	堀切1・竪堀5平面図	61

第48図	堀切1・豎堀5土層断面図	62
第49図	堀切2土層断面図	63
第50図	堀切2平面図	64
第51図	堀切2実測図	65
第52図	土坑1実測図	66
第53図	豎堀1・2土層断面図	66
第54図	豎堀1・2実測図	67
第55図	土坑4、豎堀4実測図	68
第56図	郭3土層断面図	69
第57図	建物8実測図	70
第58図	柱列1実測図	71
第59図	土坑3実測図	71
第60図	豎堀9、溝13・14・15平面図	72
第61図	豎堀9、溝13・14・15断面図	73
第62図	豎堀10実測図	74
第63図	豎堀11実測図	75
第64図	段状遺構12実測図	76
第65図	郭4・豎堀12実測図	78
第66図	郭4・豎堀12断面図	79
第67図	溝11実測図	80
第68図	豎堀6・7実測図	82
第69図	段状遺構11・13・15・16、豎堀8実測図	83
第70図	郭1北側斜面土層断面図	84
第71図	段状遺構16・17、石組遺構平面図	85
第72図	段状遺構16・17・豎堀7土層断面図	86
第73図	段状遺構16石組除去後平面図	87
第74図	石組遺構実測図	88
第75図	石組遺構土層断面図	89
第76図	山城遺構遺物出土状況図(1)	92
第77図	山城遺構遺物出土状況図(2)	93
第78図	出土遺物実測図(1)	94
第79図	出土遺物実測図(2)	95
第80図	出土遺物実測図(3)	96
第81図	出土遺物実測図(4)	97
第82図	出土遺物実測図(5)	98
第83図	出土遺物実測図(6)	99
第84図	出土遺物実測図(7)	100
第85図	出土遺物実測図(8)	101
第86図	出土遺物実測図(9)	102
第87図	出土遺物実測図(10)	103
第88図	出土遺物実測図(11)	104
第89図	出土遺物実測図(12)	105
第90図	出土遺物実測図(13)	106
第91図	出土遺物実測図(14)	107
第92図	古墓群1全体図	117
第93図	古墓1実測図	118
第94図	古墓1出土釘実測図	119
第95図	古墓2実測図	120
第96図	古墓2出土釘実測図	121
第97図	古墓3実測図	122

第 98 図	古墓 3 出土釘実測図	123
第 99 図	古墓 4 実測図	124
第 100 図	古墓 4 出土釘実測図	124
第 101 図	古墓 5 実測図	125
第 102 図	古墓群 2 全体図	126
第 103 図	古墓 6~9、集石土坑実測図	127
第 104 図	古墓群および周辺出土土器実測図	128
第 105 図	調査区平面図（試料採取地点）	133
第 106 図	曆年較正結果表	135
第 107 図	曆年較正結果一覧	136
第 108 図	富田城花ノ壇 復元建物平面図	146
第 109 図	石見地方の中世後半から近世初頭の建物	148
第 110 図	島根県内中世竪穴建物	150
第 111 図	土坑 2、石組遺構と竪穴遺構の類例	151
第 112 図	普源田砦跡出土甲冑部品と県内類例	154
第 113 図	次郎丸砦跡縄張り図	155
第 114 図	碇石城跡縄張り図	156
第 115 図	茶臼山城跡縄張り図	157
第 116 図	石見地方の城館（1）	160
第 117 図	石見地方の城館（2）	161
第 118 図	石見地方の城館（3）	162
第 119 図	普源田砦跡周辺の地名	168

表目次

第 1 表	三隅益田道路発掘調査遺跡一覧表	3
第 2 表	グリッド杭座標データ表	19
第 3 表	遺構名新旧対照表	23
第 4 表	普源田砦跡出土遺物観察表	108
第 5 表	普源田砦跡石製品観察表	114
第 6 表	普源田砦跡金属製品観察表	116
第 7 表	普源田砦跡古墓群出土釘集計表	129
第 8 表	普源田砦跡古墓群鉄釘観察表	129
第 9 表	普源田砦跡古墓群出土遺物観察表	132
第 10 表	種実同定結果	134
第 11 表	年代測定結果	135
第 12 表	普源田砦跡発掘人骨上頸歯の計測値と比較資料	140
第 13 表	普源田砦跡発掘人骨下頸歯の計測値と比較資料	140
第 14 表	普源田砦跡出土陶磁器集計表	153
第 15 表	島根県内中世城館史料分類表	164
第 16 表	島根県城館城下発掘調査文献一覧	170

本文図版目次

普源田砦跡 発掘調査前遠景	4
平成 27 年度 T 6 調査風景	9
普源田砦跡北東側丘陵部全景	9
発掘調査用足場設置風景	10
郭 1 北側斜面調査風景	10
1月 19 日現地説明会風景	10
1月 22 日調査指導会風景	10
令和 2 年度報告書作成状況	12
針藻城跡から湊浦集落、高城跡、大麻山を望む	15
高城跡中丸から日本海を望む	17
発掘調査用足場設置状況全景	19
郭 1 足場・シャーター・鉄板設置状況	22
建物 1・2	27
麓から見た北側斜面の遺構	81
種実写真 (1)	137
種実写真 (2)	138
古墓 1 出土の歯	142
左大腿骨前面	142
右大腿骨前面と後面	142
左脛骨内側面、前面、外側面	143
古墓 2 出土の歯	143
古墓 2 出土の左大腿骨骨幹前面と後面	143
古墓 8 出土の頸蓋骨の一部	143
古墓 8 出土の左右大腿骨	144
左桡骨と尺骨 I の骨幹遠位部	144
古墓 8 出土の脛骨外側面と前面	144
古墓 8 出土の腓骨	144
茶臼山城跡主郭から見た高城跡	158
静間城跡遠景	159
普源田砦跡遠景	159

図版目次

卷頭図版 1 普源田砦跡調査後全景（西から）

卷頭図版 2 普源田砦跡調査後全景（南西から）

図版 1 1. 普源田砦跡遠景（西から）
2. 調査前遠景（南西から）

図版 2 調査後全景（真上から）

図版 3 1. 調査前遠景（北西から）
2. 調査後全景（北西から）

図版 4 郭 1 調査後全景（北東から）

図版 5 1. 段状遺構 1 全景（西から）
2. 土坑 2 遺物出土状況（南東から）

図版 6 1. 段状遺構 2 全景（西から）
2. 建物 6 P166 土層断面（北西から）
3. 段状遺構 2 炉（南西から）

図版 7 1. 郭 1 西側盛土内炭面検出時（南東から）
2. 郭 1 西側盛土内瓦質土器火鉢（85-7）
出土状況（南東から）

図版 8 1. 郭 2 溝 1・2 掘削前全景（南西から）
2. 郭 2 完掘後全景（南東から）

図版 9 1. 溝 2（北）縦断土層断面（西から）
2. 溝 2（南）縦断土層断面（南から）

図版 10 1. 堀切 1、竪堀 5（南東から）
2. 堀切 1 土層断面（南東から）

図版 11 1. 堀切 2（北西から）

2. 堀切 2 土層断面（北西から）

図版 12 1. 郭 3 全景（北東から）
2. 竪堀 10 調査区南壁土層断面（北東から）

図版 13 1. 竪堀 11（北東から）
2. 郭 4 全景（東から）

図版 14 石組遺構全景（北西から）

図版 15 1. 調査前遠景（南西から）

2. 調査後全景（南西から）

図版 16 1. 調査後全景（西から）
2. 郭 1 北東部の遺構（南西から）

図版 17 1. 建物 1・2 検出時（南西から）
2. 建物 1・2（南西から）

図版 18 1. 建物 1 遺物・石検出状況（北東から）
2. 建物 1 北西部磁器、鉢出土状況（北西から）

3. 建物 1 瓦質土器擂鉢（84-1）出土状況

図版 19 1. 建物 1 東西土層断面（北西から）
2. 建物 2 P245 土層断面（南から）
3. 建物 2 P248 土層断面（北東から）

4. 建物 2 P247 土層断面（北東から）
 5. 建物 2 P247（北東から）
 6. 建物 3 P 土層断面（北西から）
 7. 建物 4 P35 備前焼（83-1）出土状況
 (南東から)
- 図版 20 1. 段状遺構 1 検出時（西から）
 2. 段状遺構 1（西から）
- 図版 21 1. 段状遺構 1 土層断面（北西から）
 2. 建物 5 P234 青花（80-2）出土状況
 (南東から)
 3. 建物 5 P242 地滑り痕（北西から）
 4. 土坑 2 検出時（南西から）
 5. 土坑 2 遺物・石出土状況（南東から）
- 図版 22 1. 土坑 2 西側遺物・石出土状況（北西から）
 2. 土坑 2 東西土層断面（南東から）
- 図版 23 1. 土坑 2（北西から）
 2. 土坑 2（東から）
- 図版 24 1. 溝 7 検出時（南西から）
 2. 溝 7（南西から）
 3. H ライン地滑り痕検出時（東から）
- 図版 25 1. 段状遺構 2 地滑りによる段差（南西から）
 2. 段状遺構 2 地滑りによる段差（南から）
 3. 段状遺構 2 壁地滑り痕（南西から）
 4. 段状遺構 2 青花碗（80-6）出土状況
 (北から)
- 図版 26 1. 段状遺構 2 壁際石列検出状況（北西から）
 2. 段状遺構 2 壁際石列検出状況（南東から）
 3. 段状遺構 2 床面検出時（北西から）
 4. 段状遺構 2 床面検出時（南東から）
- 図版 27 1. 段状遺構 2 全景（西から）
 2. 段状遺構 2 壁溝、P161 土層断面（北西から）
- 図版 28 1. 建物 6（北西から）
 2. 建物 6 南側（北東から）
- 図版 29 1. 建物 6 P135・136 検出時（北東から）
 2. 建物 6 P43 土層断面（南西から）
 3. 建物 6 P136 土層断面（南東から）
 4. 建物 6 P167 上面石検出時（南西から）
 5. 建物 6 P167 土層断面（南西から）
 6. 建物 6 P171 土層断面（南西から）
 7. 建物 6 P171 内石検出時（南西から）
- 図版 30 1. 段状遺構 2 炉 土層断面（北西から）
 2. 段状遺構 2 炉 完掘時（北西から）
 3. 溝 6（西から）
 4. 溝 6 内石検出時（北西から）
- 国版 31 5. 建物 7 P59 石硯（87-1）出土状況（南から）
 6. 建物 7 P177 土層断面（南西から）
 1. 郭 1 西側盛土 8 ライン土層断面
 (北西から)
 2. 郭 1 西側盛土内瓦質土器火鉢（85-7）出土状況（北東から）
- 国版 32 1. 郭 1 西端の石（北西から）
 2. 郭 1 西側盛土下層検出遺構（北から）
- 国版 33 1. 段状遺構 3 土層断面（南東から）
 2. 段状遺構 3（東から）
- 国版 34 1. 段状遺構 4 集石検出時（北から）
 2. 段状遺構 4 完掘時（北から）
- 国版 35 1. 段状遺構 4 土層断面（西から）
 2. 郭 1 南斜面 D ライン土層断面（南東から）
 3. 郭 1 北斜面 D ライン土層断面（北東から）
- 国版 36 1. 郭 2 調査前全景（南西から）
 2. 郭 2 溝 1・2 挖削前全景（南西から）
- 国版 37 1. 郭 2 溝 1・2 挖削前全景（南西から）
 2. 郭 2 西側盛土 6 ライン土層断面（北から）
- 国版 38 1. 郭 2 調査後全景（北から）
 2. 郭 2 調査後全景（南西から）
- 国版 39 1. 溝 1 北側縦断土層断面（西から）
 2. 溝 1 中央部（北西から）
 3. 溝 1 南側横断土層断面（北東から）
- 国版 40 1. 溝 2（北）検出時（西から）
 2. 溝 2（北）半掘時（北西から）
 3. 溝 2（北）横断西側土層断面（北西から）
 4. 溝 2（北）横断東側土層断面（北西から）
- 国版 41 1. 溝 1・2 完掘時（北から）
 2. 溝 2（南）検出時（北から）
- 国版 42 1. 溝 2（南）横断土層断面（南東から）
 2. 溝 2（南）上方縦断土層断面（南西から）
- 国版 43 1. 溝 2（南）下方縦断土層断面（南西から）
 2. 溝 2（南）完掘時（南から）
- 国版 44 1. 堀切 1 中央部土層断面（南東から）
 2. 堀切 1 南側、竪堀 5 調査風景（北西から）

- 図版 45 1. 堀切 1 南側、竪堀 5 検出時（南東から）
 2. 堀切 1 南側土層堆積状況（南から）
 3. 竪堀 5 横断土層（南から）
- 図版 46 1. 堀切 1 南側、竪堀 5（南から）
 2. 竪堀 5（南東から）
- 図版 47 1. 堀切 2 北側（北西から）
 2. 堀切 2 北側土層（北から）
- 図版 48 1. 堀切 2（南から）
 2. 土坑 1 土層断面（南から）
- 図版 49 1. 土坑 1 完掘（東から）
 2. 竪堀 1・2 調査前（南から）
- 図版 50 1. 竪堀 1・2（西から）
 2. 竪堀 1 横断土層（北西から）
- 図版 51 1. 竪堀 2 縦断土層（西から）
 2. 竪堀 2 横断土層（北西から）
- 図版 52 1. 土坑 4、竪堀 4（西から）
 2. 土坑 4 縦断土層（西から）
 3. 土坑 4 上層横断土層（南から）
 4. 土坑 4 検出時（南西から）
- 図版 53 1. 土坑 4 横断土層（北から）
 2. 土坑 4 完掘時（北から）
- 図版 54 1. 竪堀 4（北から）
 2. 竪堀 4 横断土層（南から）
- 図版 55 1. 郭 3 調査前全景（北東郭 1 から）
 2. 郭 3 調査後全景（北東郭 1 から）
- 図版 56 1. 郭 3 調査前全景（北西から）
 2. 郭 3 ライン土層断面（北西から）
- 図版 57 1. 建物 8、柱列 1（東から）
 2. 建物 8 P319 土層断面（南から）
 3. 建物 8 P327 土層断面（南から）
 4. 建物 8 P335 土層断面（西から）
 5. 土坑 3 土層断面（西から）
- 図版 58 1. 郭 3 東側（西から）
 2. 竪堀 9、溝 14・15（北から）
- 図版 59 1. 竪堀 9 検出時（北東から）
 2. 竪堀 9 土層断面（南から）
 3. 竪堀 9（南から）
- 図版 60 1. 竪堀 10 検出時（北東から）
 2. 竪堀 10 造成土 8 ライン土層断面（北西から）
- 図版 61 1. 竪堀 11 調査区外の状況（北西から）
 2. 段状遺構 12（北から）
- 図版 62 1. 郭 4 調査前（南から）
 2. 郭 4（南から）
- 図版 63 1. P352 床面石検出状況（北西から）
 2. P354 土層断面（北から）
 3. P362 上層石検出状況（西から）
 4. P362 下層茶臼(88-1) 出土状況（西から）
5. 竪堀 12 調査区北壁土層断面（南東から）
- 図版 64 1. 竪堀 12 検出時（西から）
 2. 竪堀 12（西から）
- 図版 65 1. 溝 11 検出時（南西から）
 2. 溝 11 土層断面（南西から）
 3. 溝 11 東側（西から）
 4. 溝 11 西側（西から）
- 図版 66 1. 竪堀 6・7（北西から）
 2. 竪堀 6（北西から）
- 図版 67 1. 竪堀 6 土層断面（北西から）
 2. 竪堀 7 土層断面（北西から）
- 図版 68 1. 竪堀 8（東から）
 2. 竪堀 8 土層断面（北西から）
- 図版 69 1. 段状遺構 11・13（南西から）
 2. 段状遺構 11 D ライン土層断面（南西から）
- 図版 70 1. 段状遺構 13・16 F ライン土層断面（北東から）
 2. 溝 11 H ライン土層断面（北東から）
- 図版 71 1. 段状遺構 16 東側 F ライン土層断面（北西から）
 2. 段状遺構 16 石組遺構検出時（北から）
- 図版 72 1. 段状遺構 16・17 H ライン土層断面（北東から）
 2. 段状遺構 16 西側検出時（北西から）
- 図版 73 1. 石組遺構 縦断土層断面南側（南西から）
 2. 石組遺構 土層断面（西から）
- 図版 74 1. 石組遺構（西から）
 2. 石組遺構（北西から）
- 図版 75 1. 石組遺構 東壁（南西から）
 2. 石組遺構 西側の平坦面（南西から）
 3. 石組遺構 炭・焼上面（西から）
- 図版 76 1. 石組遺構 裏込め土断面（南西から）
 2. 段状遺構 16 石組除去後（南西から）
 3. 段状遺構 16 石組除去後検出 Pit（西から）
- 図版 77 1. 古墓群 1 標石検出時（東から）
 2. 古墓群 1 全景（東から）
- 図版 78 1. 古墓群 1 標石検出時（西から）
 2. 古墓群 1 全景（西から）
- 図版 79 1. 古墓 1 標石（南から）
 2. 古墓 1（南から）
 3. 古墓 2 標石（南から）

4. 古墓 2 (南から)
 5. 古墓 3 標石 (南から)
 6. 古墓 3 標石 上部板石除去後
 　(南から)
 7. 古墓 3 標石内土層断面 (南から)
 8. 古墓 3 墓坑検出時 (南から)
- 図版 80 1. 古墓 3 土層断面 (南から)
 2. 古墓 3 (南から)
 3. 古墓 4 標石 (南から)
 4. 古墓 4 土層断面 (南から)
 5. 古墓 4 (南から)
 6. 古墓 5 標石 (南から)
 7. 古墓 5 土層断面 (南から)
 8. 古墓 5 (南から)
- 図版 81 1. 古墓群 2 全景 (北西から)
 2. 古墓 7・8 墓坑検出時 (南から)
- 図版 82 1. 古墓 6 (西から)
 2. 古墓 7 (西から)
 3. 古墓 8 土層断面 (北西から)
 4. 古墓 8 (南西から)
 5. 古墓 9 (北西から)
 6. 集石土坑 (西から)
 7. 集石土坑 断面 (西から)
 8. 集石土坑 完掘時 (西から)
- 図版 83 1. 白磁①
 2. 白磁②
- 図版 84 1. 青磁① (外面)
 2. 青磁① (内面)
- 図版 85 1. 中国染付① (外面)
 2. 中国染付① (内面)
- 図版 86 1. 中国染付②
 2. 青磁②・中国染付③ (外面) 写真のみ
 　掲載
 3. 青磁②・中国染付③ (内面) 写真のみ
 　掲載
4. 中国陶器・朝鮮陶磁器 (外面)
 5. 中国陶器・朝鮮陶磁器 (内面)
 図版 87 1. 朝鮮陶器・瀬戸・美濃焼・備前焼①
 　(外面)
 2. 朝鮮陶器・瀬戸・美濃焼・備前焼①
 　(内面)
- 図版 88 1. 備前焼② (外面)
 2. 備前焼② (内面)
- 図版 89 1. 備前焼③ (外面)
 2. 備前焼③ (内面)
- 図版 90 1. 備前焼④
 2. 瓦質土器①
- 図版 91 1. 瓦質土器② (外面)
 2. 瓦質土器② (内面)
- 図版 92 1. 瓦質土器③
 2. 瓦質土器④
- 図版 93 1. 土師器①
 2. 土師器②
 3. 土製品
- 図版 94 1. 琺 (表面)
 2. 琺 (裏面)
 3. 砥石
 4. 石臼
 5. 茶臼
- 図版 95 1. 莘石
 2. 石製品
- 図版 96 1. 金属製品
 2. 古銭
 3. 鎏治津
- 図版 97 1. 古墓 1 出土釘
 2. 古墓 2 出土釘
- 図版 98 1. 古墓 3 出土釘
 2. 古墓 4 出土釘
 3. 古墓群 1 周辺出土陶器碗
 4. 古墓 7 出土土師器皿

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

1. 事業計画の概要

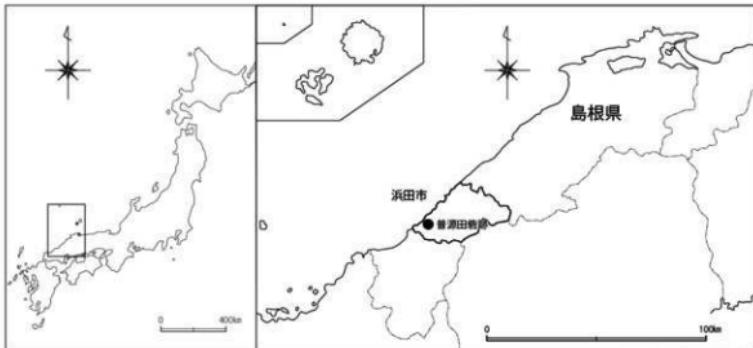
一般国道9号は、京都府京都市から山口県下関市に至る総延長距離730kmの、山陰地方の諸都市を結ぶ幹線道路である。近年は都市部を中心にしばしば交通渋滞が発生し、都市間の円滑な連携や生活環境の確保が困難な状況となってきており、島根県も例外ではない。海岸沿いを通る浜田市や益田市では急勾配でカーブが連続する区間が多く、交通渋滞や交通事故などが発生している。また緊急時の代替道路の確保が難しいのが現状である。

こうした状況を改善するため、国土交通省により三隅益田道路が計画され、平成22年10月19日に三隅益田道路として都市計画決定された。三隅益田道路は、浜田市三隅町森溝上の石見三隅インターチェンジを起点として、益田市遠田町の遠田インターチェンジまでを結ぶ延長15.2kmの自動車専用道路として、平成24年度に事業着手され、平成27年度に工事着手している。

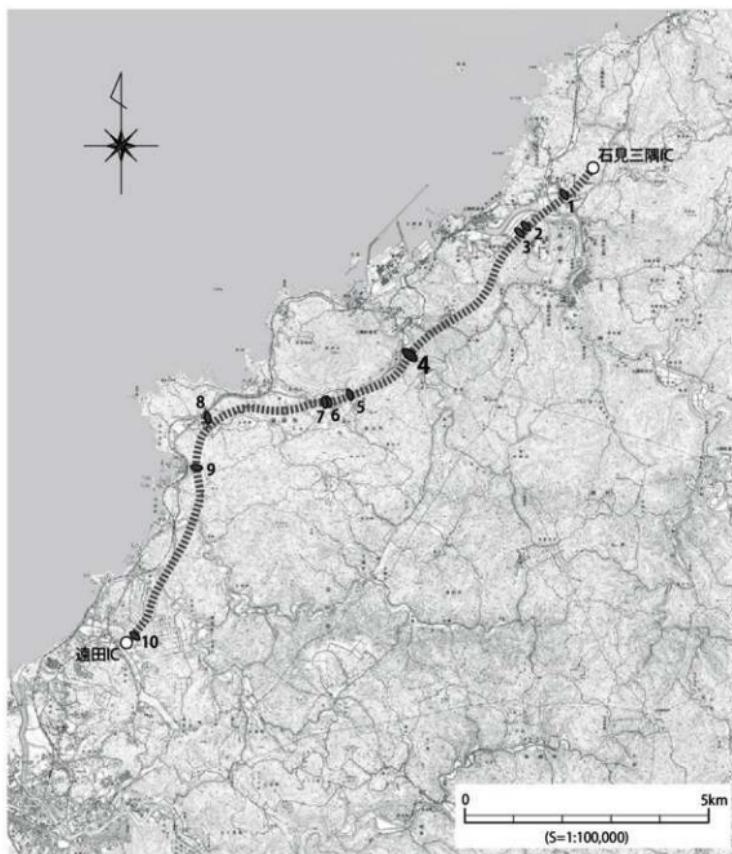
2. 埋蔵文化財保護部局への照会と調整

三隅益田道路の計画・事業化にあたり、島根県教育委員会は国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所から、三隅益田道路建設予定地内における埋蔵文化財の有無について照会を受けた。これに対して島根県教育委員会では、地元の浜田市・益田市教育委員会の協力を得て平成25年2月と平成26年2月～3月に分布調査を実施した。その結果、周知の遺跡に加えて、試掘調査を要する要注意箇所を多数確認し、島根県教育委員会は浜田河川国道事務所に対し、発掘調査および試掘調査が必要な旨を平成26年5月13日付け島教文財第161号で回答した。

この間、周知の遺跡である普源田砦跡が平成20年5月の現地確認で、『島根県遺跡地図Ⅱ（石見編）』に記載された位置が誤りであることが判明し、平成26年3月には山城跡のほぼ全域が事業地内に入ることが明らかになっている。また、平成29年度に普源田砦跡北東の丘陵尾根上で平坦面が数か所確認され、平成29年5月23日付け島教埋第214号で要注意箇所として追加で回答してい



第1図 普源田砦跡の位置



第2図 事業予定地内の遺跡位置図

る。その後も工事用道路等の付帯工事に伴う分布調査を数次にわたりおこなっている。

島根県教育委員会と国土交通省は、浜田市教育委員会・益田市教育委員会も含めて協議を重ね、分布調査の結果を踏まえた試掘確認調査を平成26年度から国庫補助事業により実施した。平成26年度は、10月6日～12月5日に浜田市三隅町地内と益田市遠田町地内の要注意箇所、21地点について試掘し、三隅町で海石西遺跡と上古市遺跡、益田市で神出西遺跡を確認した。平成27年度は4月27日～5月31日に浜田地区、4月22日～6月24日に益田地区で実施した。浜田地区的調査は、前年度に確認した古市場遺跡と周知の遺跡であった三隅町普源田砦跡の範囲確認をおこなうとともに、要注意箇所、11地点の調査によって三隅町岬口古墓と廻り田遺跡があきらかになった。益田地区では、要注意箇所、18地点を試掘調査しており、益田市土田町榎坂窯跡・近世山陰道路（馬橋地区）、同西平原町蔵廻り遺跡・国ヶ峰遺跡が確認されている。平成28～30年度も引き続き浜田市

第1表 三隅益田道路発掘調査遺跡一覧表

	遺跡名	所在地	調査年次	時代	概要	報告書
1	海石西遺跡	浜田市三隅町三隅	平成 27	弥生・古墳・平安	自然河道、弥生土器（埴町式ほか）、縄文陶器	1
2	岬口古墓	浜田市三隅町古市場	平成 29	室町・江戸	古墓、一石五輪塔、防長産陶器	3
3	上古市遺跡 (角落し遺跡)	浜田市三隅町古市場	平成 27・29	弥生・古墳・平安	杭列、木製品（建築材ほか）、青磁（獸面）	1・3
4	普源田砦跡	浜田市三隅町岡見	平成 30	室町	城跡、古墓、貿易陶磁、茶碗、茶臼、鏡、甲冑部品	5
5	廻り田遺跡	浜田市三隅町岡見	平成 28	江戸	塙状遺構（一里塙？）、道路遺構？	1
6	近世山陰道 (馬橋地区)	益田市土田町	平成 28	江戸	石畳道路、石垣	1
7	榎坂窯跡	益田市土田町	平成 28	大正・昭和初期	連房式登窯、礎石建物跡	2
8	藏廻り遺跡	益田市西平原町	平成 28・29	平安・室町・江戸	自然河道、白磁、青磁、風炉	2
9	国ヶ峰遺跡	益田市西平原町	令和元	奈良・平安	石積遺構、道路遺構	4
10	神出西遺跡	益田市遠田町	平成 28	弥生・古墳	自然河道、溝状遺構、弥生土器、須恵器、白磁	1

報告書1 島根県教育委員会『海石西遺跡・角落し遺跡・廻り田遺跡・近世山陰道（馬橋地区）・神出西遺跡』2018

報告書2 島根県教育委員会『藏廻り遺跡・榎坂窯跡』2019

報告書3 島根県教育委員会『岬口古墓・上古市遺跡』2020

報告書4 島根県教育委員会『国ヶ峰遺跡』2020

報告書5 島根県教育委員会『普源田砦跡』2021

三隅町地内で要注意箇所を1地点ずつ試掘したが、遺跡は確認されなかった。

以上の確認調査の結果、三隅益田道路建設予定地内には周知の遺跡であった普源田砦跡に加えて、海石西遺跡・上古市遺跡・廻り田遺跡・岬口古墓・近世山陰道跡（馬橋地区）・榎坂窯跡・藏廻り遺跡・国ヶ峰遺跡・神出西遺跡の計10遺跡の存在があきらかになった。

国土交通省浜田河川国道事務所は、分布・試掘調査の結果を受けて、文化財保護法第94条第1項に基づく埋蔵文化財発掘通知（平成27年3月23日付け国中整浜調設第144号で海石西遺跡・上古市遺跡・神出西遺跡、平成27年9月8日付け国中整浜調設第87号で岬口古墓・普源田砦跡・廻り田遺跡・近世山陰道跡（馬橋地区）・榎坂窯跡・藏廻り遺跡・国ヶ峰遺跡）を島根県教育委員会教育長に提出した。

これに対して島根県教育委員会は、平成27年3月23日付け島教文財第35号の103で海石西遺跡・上古市遺跡・神出西遺跡、平成27年9月8日付け島教文財第120号の40で岬口古墓・普源田砦跡・廻り田遺跡・近世山陰道跡（馬橋地区）・榎坂窯跡・藏廻り遺跡・国ヶ峰遺跡について、工事着手前に発掘調査を行うよう勧告した。

平成27年度からは、国土交通省浜田河川国道事務所の委託を受けて島根県埋蔵文化財調査センターが順次発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、平成27年度に海石西遺跡・上古市遺跡・神出西遺跡、平成28年度に廻り田遺跡・近世山陰道路（馬橋地区）・櫻坂窯跡・神出西遺跡、平成29年度に岬口古墓・上古市遺跡・藏廻り遺跡、平成30年度に藏廻り遺跡・普源田砦跡、令和元年度に国ヶ谷遺跡について行った。

3. 法的手続き

普源田砦跡は、国土交通省浜田河川国道事務所から平成27年9月8日付け国中整浜調設第87号で、文化財保護法第94条第1項の規定による通知が島根県教育委員会教育長あてに提出された。それに対して島根県教育委員会は、平成27年9月8日付け島教文財第120号の40で発掘調査の実施を勧告し、発掘調査は島根県埋蔵文化財調査センターが行うこととなった。

文化財保護法第99条第1項の規定による通知は、平成30年4月10日付け島教理第19号で、埋蔵文化財調査センター所長から島根県教育委員会教育長あてに提出した。現地調査終了後、平成31年2月7日付け島教文財第410号の8で島根県教育委員会教育長から浜田河川国道事務所長あて終了報告を提出した。

第2節 発掘作業と整理作業の経過

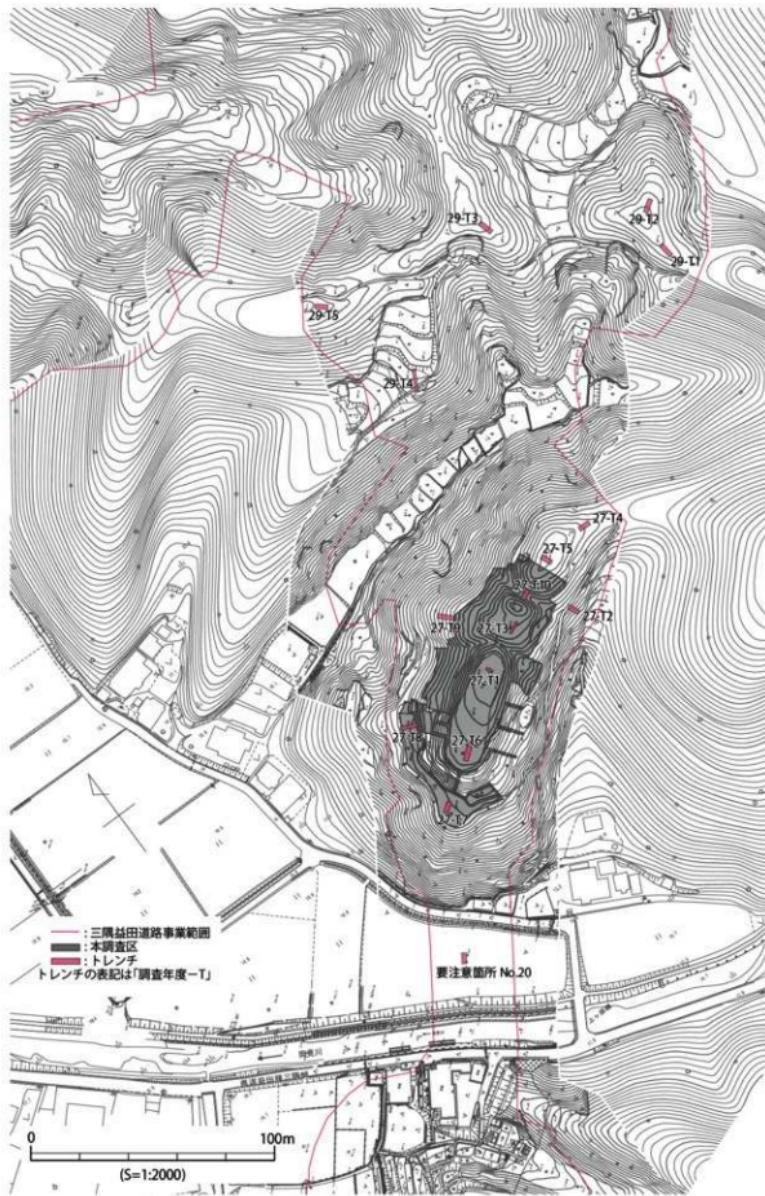
1. 試掘調査

普源田砦跡は、『三隅町誌』に記載があり、一般国道9号（三隅益田道路）改築工事の事業開始以前から知られた周知の遺跡である。平成5年度から5ヶ年かけておこなわれた島根県中近世城館跡分布調査では「普源田城跡」として報告されている。この調査では、佐々木芳資郎氏により縄張図が作成され、尾根上に郭3・土塁1・堀切2を設け、その先端部に数段の帯郭を配する城跡と考えられている。

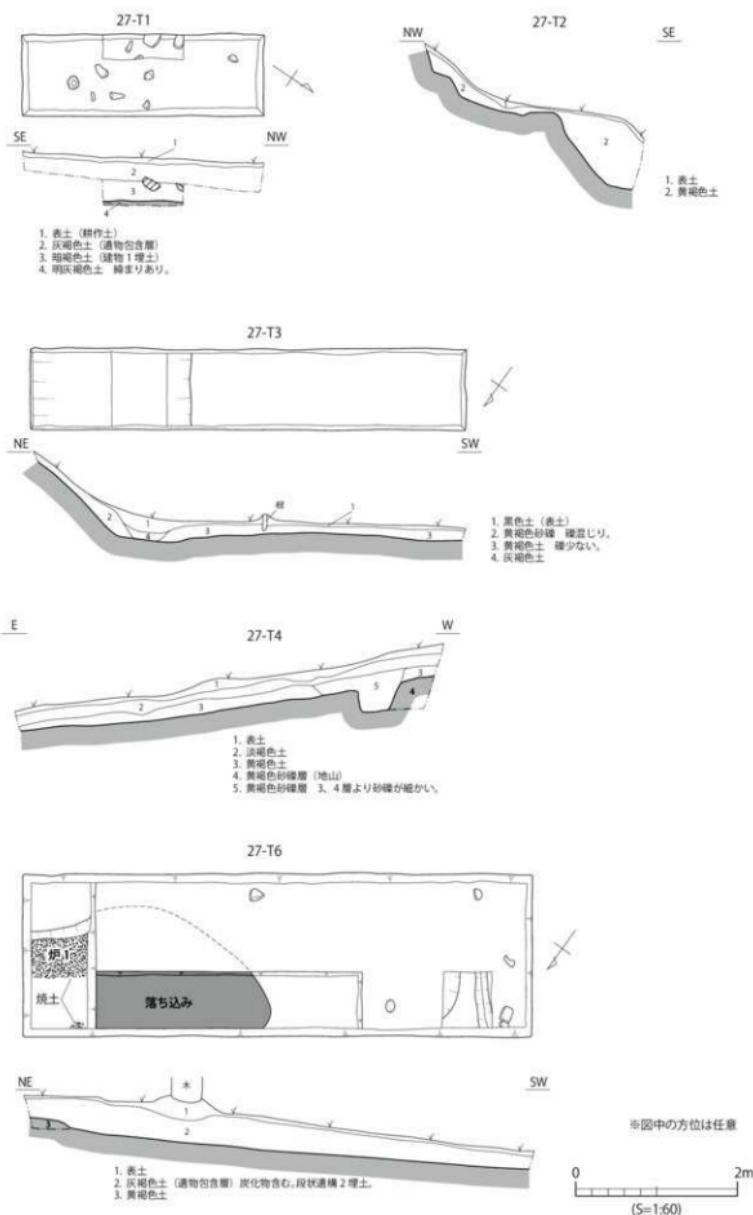
平成27年度には、遺跡の範囲を確認する目的で、計10本のトレンチを設定して試掘調査を行った。尾根上の郭に設けたT1とT6では、ピット・焼土面が検出され、青磁碗・土師器皿が出土したことから、室町時代の遺構であることが確認された。また、T3では地山を削り出した土塁、T10



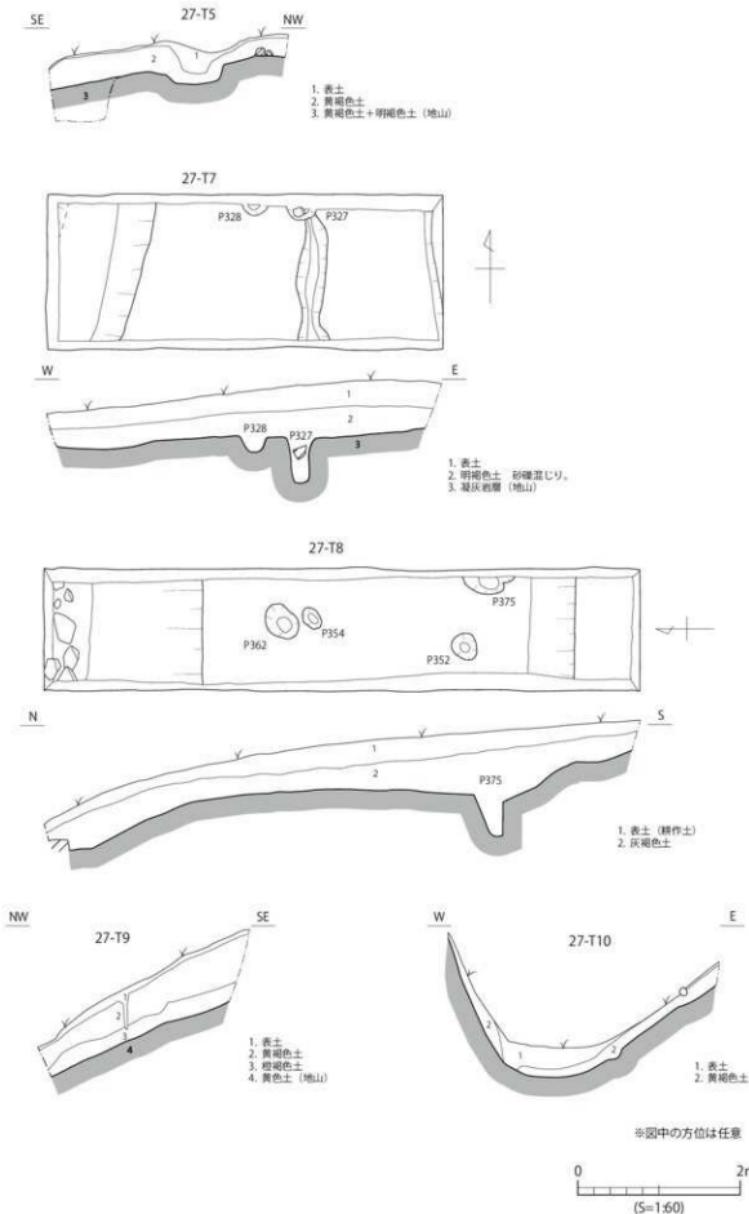
普源田砦跡 発掘調査前遠景（西から）



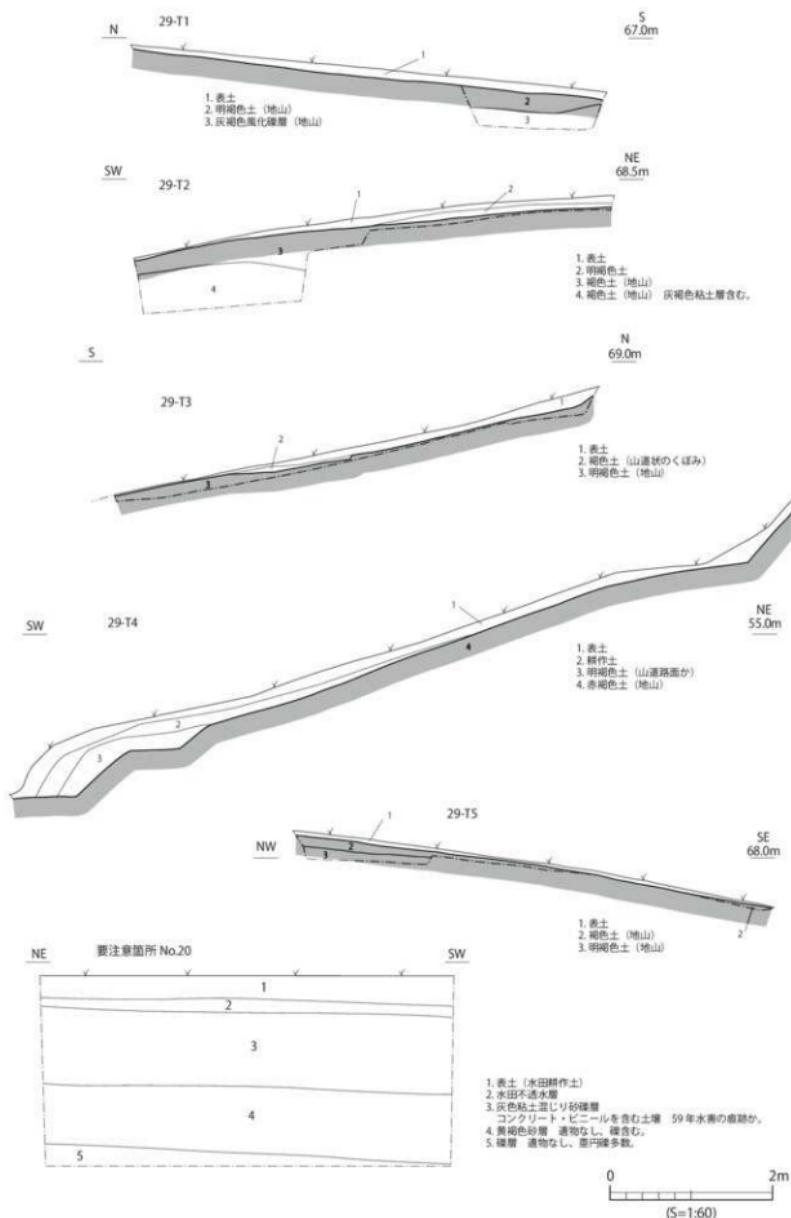
第3図 調査区位置図



第4図 試掘確認調査トレンチ実測図(1)



第5図 試掘確認調査トレーンチ実測図(2)



第6図 試掘確認調査トレーンチ実測図(3)

は堀切2、帯郭のT 7・8でもピットを検出した。T 4・T 5では遺構・遺物は見られなかったが、この時点では城域に含まれるものと考えており、ほぼ尾根全体が城跡であることが想定されるに至った。

普源田砦跡の周辺部についても、城域が及ぶ可能性があることから、試掘調査をおこなった。平成27年度は、12月1日に遺跡の西側を流れる岡見川沿いの水田部に位置する橋脚建設範囲内で、重機による掘削をおこなった。平成29年度は、6月5日～15日に遺跡北東側の丘陵部で確認した平坦地でトレーナー調査を実施し、6月14日には山根正明氏の調査指導を受けた。その結果、いずれも中世に遡る遺構・遺物は確認されず、本発掘調査の必要は無いと判断された。

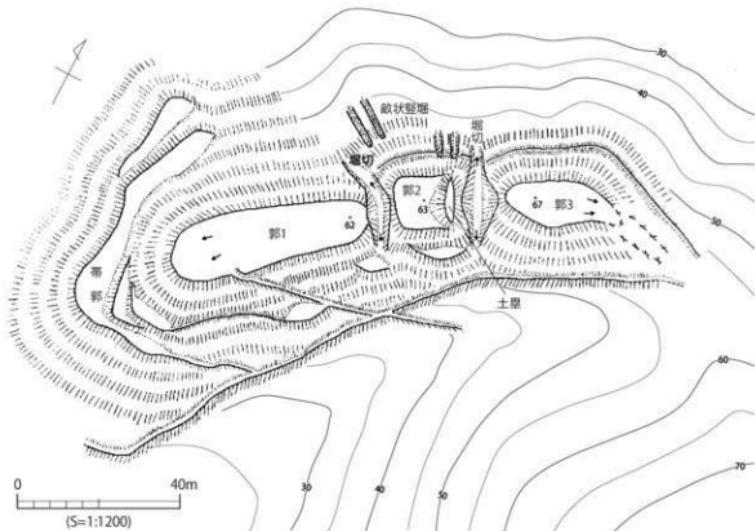
なお、平成29年10月26・27日には、山根氏の指導により縄張り図を作成した。中世城跡分布調査時の認識から大きな変更はないが、北側斜面に敵状竪堀があることが新たに指摘された。



平成27年度T 6調査風景



普源田砦跡北東側丘陵部全景



第7図 普源田砦跡縄張り図（山根正明氏作図）

2. 発掘作業

現地調査は、平成30年5月28日より開始した。当初は東森を調査担当とし、そのほか嘱託職員1名、調査補助員3名の体制とした。発掘前の状況を記録するため、まず地形測量を行い、5月30日に完了した。遺構は、尾根先端部の広い平坦面を郭1とし、東側に向かって順に堀切1、郭2、土塁、堀切2と呼称することとした。調査前の段階では、堀切2の東側に続く尾根も城域と考えていたが、地形測量の結果、尾根の削平が認められなかったこと、試掘調査で遺構・遺物が確認されていないことから、発掘調査対象は堀切2の掘削が及ぶところまでとした。

普源田砦跡は比高約50mの丘陵上に位置し、郭の周囲は急傾斜になっている。このため、高さ60mの大型クレーンで郭上に資材を運搬し、城全体に幅1.5mの仮設足場を最大6段設置して、人力による掘削、排土運搬をおこなった。

発掘調査は、6月7日に開始した。発掘の進捗に合わせて足場を解体する必要があり、調査は東側高所からおこなった。郭2は、東側に土塁をもつ小規模な平坦面であるが、地山面で郭を横断するように、深さ約1.5mの断面V字の溝が2条検出された。6月25日からは郭1にも着手した。郭1は、長さ50m・幅15mに及ぶ平坦面で、郭の北東、中央、南西にそれぞれ織まる形で、掘立柱建物7棟、竪穴遺構2基、ピット約300基が検出された。建物1は、県内の山城では初の竪穴建物の発見例である。掘立柱建物は、大きい柱穴をもつ建物2、大型の建物6など、特徴的な様相をみせる。

遺構の様相が徐々にあきらかになる中で、調査は中世城館研究者による指導を得ながら進めており、7月3日に高屋茂男氏、8月10



発掘調査用足場設置風景



郭1北側斜面調査風景



1月19日現地説明会風景



1月22日調査指導会風景

日に小都隆氏・西尾克己氏、11月14日には山根正明氏・高屋茂男氏の指導を受けた。また、郭1を中央から南西に斜めに分断するように、建物廃棄後に生じたとみられる段差があり、これについて11月13日に中村唯史氏の指導を受けたところ、地滑りの痕跡であるとの指摘があった。

このように、当初の想定を大きく上回る遺構の検出状況により、10月から調査担当として角田を増員し、郭1・3・4の調査を東森班2名、郭2周辺と北斜面の調査を角田班3名の分担とした。

10月2日には、郭2の東西にある堀切1・2と、南斜面の古墓群1の調査に着手した。堀切は深さが最大で5mもあり、堀切2は中央部を掘り残した障子堀状の構造をもつことがあきらかとなった。一方、郭1南側斜面は、調査グリッドのD・F・G・Jラインに沿ってトレンチ掘削した結果、城跡に関連する遺構が検出されなかったので、斜面全体の発掘はおこなわなかった。

12月7日には丘陵先端部から北斜面の帯郭の掘削に着手した。当初、帯郭はL字に屈曲する一つの郭と考えられていたが、調査の結果、西側と北側に独立した小規模な郭が存在することがあきらかになり、それぞれ郭3・4と呼称することとした。調査の期限が迫っており、郭3の8ラインから北側は重機による表土掘削を行った。郭3・4ではピット約100基を検出したほか、斜面下方へと延びる堅堀状の溝や古墓群2が新たに確認された。そのほか郭1の北斜面は、急傾斜地のため遺構の存在は想定されていなかったが、堀切1の西側肩を確認する過程で偶然段状遺構11を検出し、調査範囲を拡張した結果、堅堀や石組遺構を確認している。遺跡の全容が分かり始めた12月以降、城跡に伴う遺構が調査区南西外側に広がっていると判断され、現場担当者から次年度への調査延長について提案したが、事務局の判断により調査区の拡張、調査延長はおこなわないとした。

普源田砦跡の発掘調査は、周囲が急斜面に囲まれた尾根上での作業であり、調査面積も6900m²に及んだため、困難を極めた。年が明けた平成31年1月には遺跡の全容がほぼあきらかとなり、1月22日には小都隆氏・西尾克己氏・山根正明氏・高屋茂男氏から総括的な調査指導を受けた。普源田砦跡は、小規模な城郭でありながら、掘立柱建物や櫓が郭に立ち並ぶこと、16世紀を中心に一定期間の居住が考えられること、堀切・堅堀などの防衛施設が充実していることなど特徴的であり、これまでの小規模城館の認識を変える発掘になったとの評価を受けた。調査は、1月18日に空中写真撮影、1月21日に遺跡の3次元計測をおこない、1月22日の完了協議を経て1月29日に現地作業を終了した。掘削土量は、当初見込んだ1,110m³を大きく上回り、最終的に1,560m³に及んだ。

なお、調査の進行と合わせて、その成果を公開するため、現地説明会を2度開催している。9月15日は80名、1月19日には90名の参加者があった。また、10月31日には地元の浜田市立岡見小学校児童14名、11月20日にはくにびき学園西部校9名による現地見学もおこなった。

3. 整理作業

平成30年度は、発掘調査と並行して現場事務所で遺物の洗浄、注記、分類、接合をおこなった。また、遺構内土壤に含まれる炭化物採集のため、遺構埋土を現場事務所で水洗し、ふるいにかけた。現地調査が終了した2月以降は、遺構図面・写真的整理と金属製品の実測をおこなった。

令和元年度は、古墓群の遺構図作成・鉄釘の実測と淨書作業を進めた。古墓出土人骨については、山田康弘氏の指導を受け、茂原信生氏に分析を依頼することとなった。そのほか、城跡出土遺物の実測と遺構内土壤に含まれる炭化物の抽出作業をおこない、山城跡出土金属製品の保存処理を委託により実施した。



令和2年度報告書作成状況

令和2年度は、山城跡の遺構図作成と遺物の分類・集計・実測・写真撮影、原稿執筆、報告書の編集作業をおこなった。また、遺構内の炭化種実の抽出作業を完了し、炭化種実の同定とAMS年代測定を委託した。8月には佐藤寛介氏に甲冑部品の指導を受けた。

全国的に感染の拡大した新型コロナウイルスの感染予防に努め、作業スペースの調整や一時は在宅勤務もおこない作業にあたった。

第3節 調査体制

発掘調査、報告書作成は、次の体制で行った。

調査主体 島根県教育委員会

平成30年度

事務局 教育庁文化財課

課長 萩 雅人、文化財グループGL 神田康夫、管理指導スタッフ調整監 池淵俊一
埋蔵文化財調査センター

所長 植 真治、総務課長 石橋 聰、高速道路調査推進スタッフ調整監 今岡 操、
管理課長 守岡正司

(担当者) 調査第二課長 角田徳幸、調査第三係長 東森 晋、嘱託職員 松山智弘、
臨時職員 川崎英司・無川美和子・世良 啓・幸村康子

令和元年度

事務局 教育庁文化財課

課長 萩 雅人、文化財グループGL 桑谷昭年、管理指導スタッフ調整監 池淵俊一
埋蔵文化財調査センター

所長 植 真治、総務課長 和田 諭、管理課長 守岡正司

(担当者) 高速道路調査推進スタッフ調整監 角田徳幸、調査第二課第一係長 東森 晋
臨時職員 福田市子・飯塚由起

令和2年度

事務局 教育庁文化財課

課長 萩 雅人、文化財グループGL 田中明子、管理指導スタッフ調整監 池淵俊一
埋蔵文化財調査センター

所長 植 真治、総務課長 和田 諭、高速道路調査推進スタッフ調整監 角田徳幸
管理課長 守岡正司、調査第一課長 林 健亮

(担当者) 調査第一課第二係長 東森 晋
会計年度任用職員調査員 園山 薫、同調査補助員 福田市子

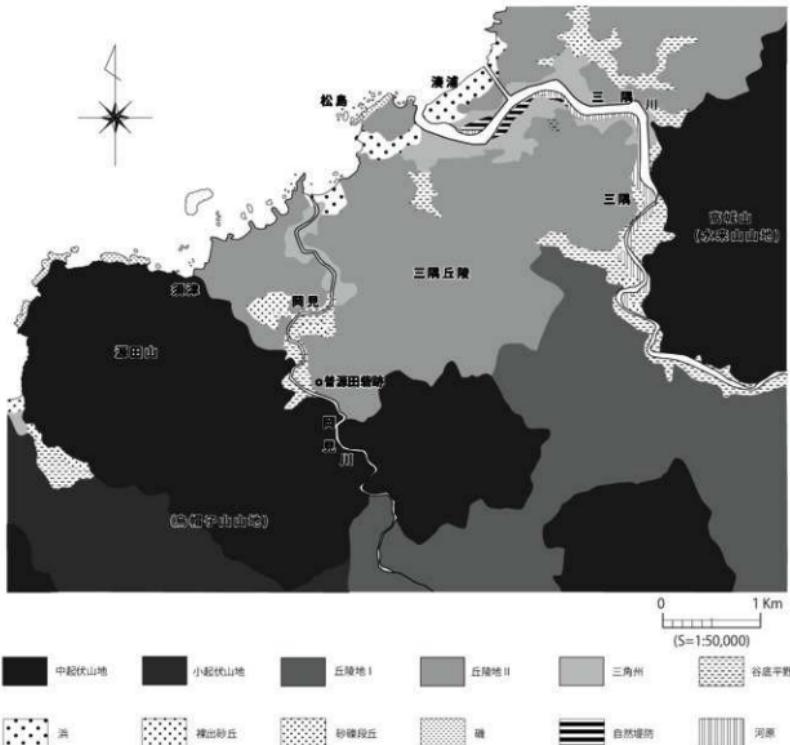
第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

島根県西部（旧石見国）の沿岸部は、日本海に迫る山地が深い入り江になったリアス式海岸と、山から流れ出す川の河口周辺に開けた砂丘が織りなす変化に富んだ景観をもつ。普源田砦跡は、このような石見沿岸部に位置する中世の城館跡である。

普源田砦跡が所在する島根県浜田市三隅町岡見地区は、明治22（1889）年の町村制施行時には那賀郡岡見村とされた。岡見村は、昭和30（1955）年に三隅町と合併し、那賀郡三隅町となった後、平成17（2005）年に浜田市と合併し、今日に至っている。浜田市三隅町は、浜田市の西端部に位置し、西と南は益田市と境を接している。

浜田市三隅町は、東側に高城山など（水来山山地）、西側に源田山・烏帽子山など（烏帽子山山地）



第8図 普源田砦跡周辺の地形図

からなる中起伏山地または小起伏山地があり、その間には丘陵地（三隅丘陵）が海岸まで広がっている。このような地形的な特色は、ある程度、表層地質を反映したものとみられる。東の高城山一帯は片状砂岩を主とする地層、西の源田山は斑レイ岩質岩石、鳥帽子山は安山岩で、その間の丘陵地は黒色片岩質岩石を主とする地層よりなる。

小・中起伏山地と丘陵地の境界付近には、中国山地に源をもつ三隅川と岡見川が流れしており、河口部の湊浦や松原地区には浜が形成されている。三隅氏が居城とした高城は、三隅川の河口から約4 kmのところにある。普源田砦跡は、岡見川の河口から2kmほど遡った地点に位置している。南の茶臼山から北西方向に延びる低丘陵上にあるが、西側は岡見川が流れる谷底平野となっているため比高差が50mあり、急峻な印象を受ける。

普源田砦跡が見下ろす岡見川は、小河川ではあるが、河口部の東には古湊地区、西には須津地区があり、日本海交易をおこなった港へと通じるルートの一つであったと考えられる。また、岡見川の川筋を遡り益田市側に越えると、益田市下種町・大草町を経て中世益田氏の居城があった七尾城方面へと向かうことも可能であった。

第2節 歴史的環境

1. 原始・古代

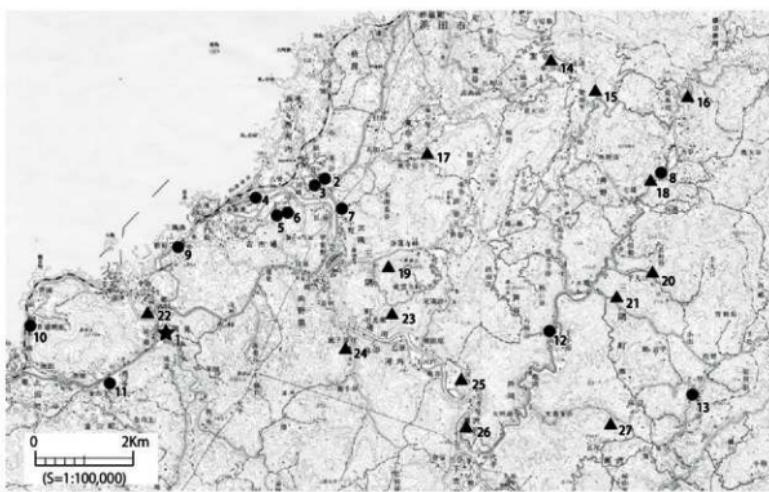
三隅町内における遺跡の初見は、縄文時代に遡る。松原遺跡・上古市遺跡では数片の縄文土器が出土しているが、詳細は明らかでない。

弥生時代に入ると、松原遺跡・海石西遺跡・上古市遺跡で前期の土器が出土しており、上古市遺跡では、杭列状遺構が確認されている。中期、後期には引き続き海石西遺跡・上古市遺跡などで集落が存続したことがわかるが、確認例は少ない。

古墳時代前期になると、上古市遺跡で多量の建築材や木製農具と未成品が出土したのが注目される。建築材は掘立柱建物の用材とみられ、低湿地の盛土中で検出されたことから、建物解体後に沈下防止のために埋め込まれたようである。後期には、大谷古墳・小野古墳・青浦古墳など横穴式石室をもつ古墳が点在するほか、三隅川下流部では高田横穴墓群・苅立横穴墓が確認されている。このうち、高田横穴墓群は、7基で構成されており、鉄刀・鉄鎌・須恵器が伝わる。また、苅立横穴墓では人骨片のほか、大刀・玉類・須恵器などが出土した。

奈良・平安時代には、三隅町域の大部分は那賀郡三隅郷に属したとみられる。上古市遺跡、海石西遺跡では、この時期の須恵器・土師器のほか、白磁や縁軸陶器も出土している。また、大麻山には大麻山神社と尊勝寺がある。大麻山神社は、「延喜式」神名帳の那賀郡11座に数えられる式内社で、「大麻山縁起」によれば仁和4（888）年に阿波国大麻比古神社と忌部神社から諸神を勧請したとされる。尊勝寺は、天暦3（949）年の建立で、吉野金峯山から飛来した蔵王権現を祀る修驗道の山として栄えた。

平安時代末頃には、普源田砦跡が位置する岡見地区は、益田庄成立に伴って美濃郡に組み込まれ、納田郷となった。



- | | | | | | |
|-----------|-----------|---------------|-------------|----------|-----------|
| 1. 普源田砦跡 | 2. 莲立横穴墓 | 3. 海石西遺跡 | 4. 高田横穴墓群 | 5. 上古市遺跡 | 6. 峰口古墓 |
| 7. 小野古墳 | 8. 大谷古墳 | 9. 松原遺跡 | 10. 青浦古墳 | 11. 球田遺跡 | 12. 久瀬遺跡 |
| 13. 笠取の墓 | 14. 室谷炉跡 | 15. 築地平かなん流し跡 | 16. 周布地鐵治屋跡 | 17. 平原炉跡 | |
| 18. 石佛炉跡 | 19. 鍛冶床炉跡 | 20. 大口炉跡 | 21. 満子炉跡 | 22. 中山炉跡 | 23. 竜ヶ谷炉跡 |
| 24. 鹿子谷炉跡 | 25. 井手山炉跡 | 26. 九艘原炉跡 | 27. 叶谷遺跡 | | |

第9図 普源田砦跡の位置と周辺の遺跡分布図

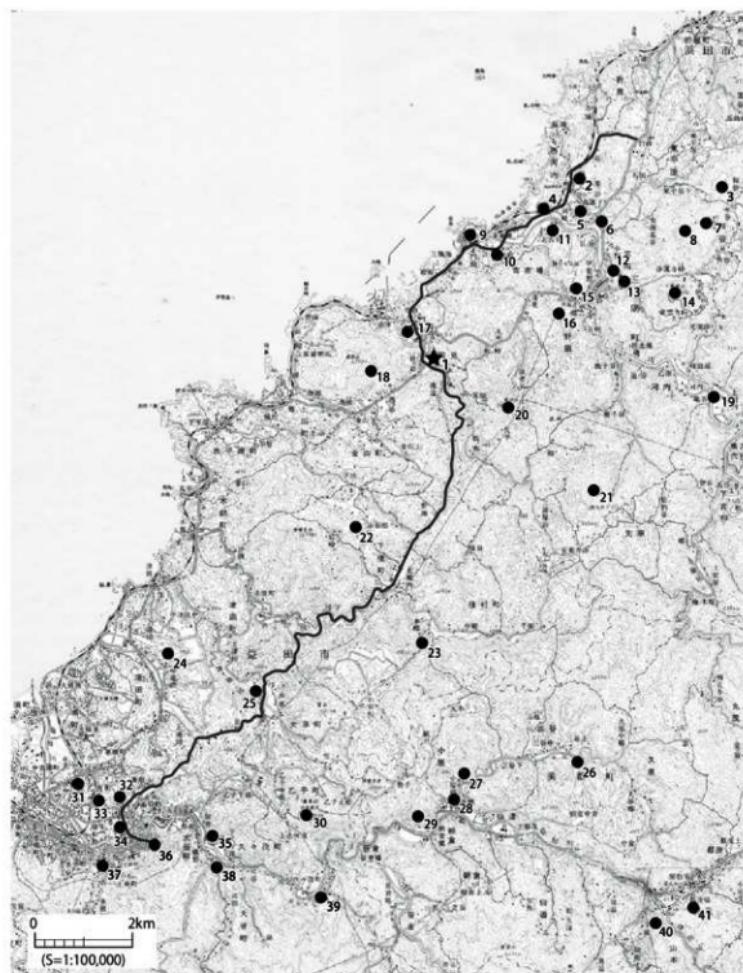
2. 中世

中世三隅を支配した三隅氏は、益田氏の支族である。寛喜元（1229）年に益田兼高の次男、兼信が納田郷ほかの地頭職の譲与を受け、三隅氏と称するようになったといふ。

三隅氏は、高城を拠点とした。南北朝時代には、三隅氏は南朝方として、北朝方の益田氏と争っており、高城をめぐる攻防戦も伝えられる。15世紀末の明応年間（1492～1501）には、三隅氏当



針藻城跡から湊浦集落、高城跡、大麻山を望む



- 県道 171 号 益田種三隅線については第 5 章で説明
- | | | | | |
|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|
| 1. 普源田砦跡 | 2. 八ノ木砦跡 | 3. 岳城跡 | 4. 風呂の木砦跡 | 5. 梅之城跡 |
| 6. 石田城跡 | 7. 水来城跡 | 8. 三本松城跡 | 9. 針藻城跡 | 10. 小金町城跡 |
| 11. 古市城跡 | 12. 鐘尾城跡 | 13. 今城跡 | 14. 高城跡 | 15. 城ヶ迫岩跡 |
| 16. 陣ノ尾砦跡 | 17. 次郎丸砦跡 | 18. 碓石城跡 | 19. 河内城跡 | 20. 茶臼山城跡 |
| 21. 矢原城跡 | 22. 宇治城跡 | 23. 城山城跡 | 24. 嶽城跡 | 25. 大草城跡 |
| 26. 都賀根城跡 | 27. 竹城跡 | 28. 背戸山城跡 | 29. 四ツ山城跡 | 30. 横現山城跡 |
| 31. 稲岡城跡 | 32. 稲干山城跡 | 33. 糸ヶ松城跡 | 34. 三宅御土居跡 | 35. 大谷城跡 |
| 36. 七尾城跡 | 37. 稲積城跡 | 38. 大谷土居跡 | 39. 上久々茂土居跡 | 40. 要害山城跡 |
| 41. 都茂城跡 | | | | |

第10図 普源田砦跡と周辺の中世城館跡位置図

主と老臣の三浦氏一族が銳く対立し、三隅氏内部は大きく動搖した。のち、三隅氏は永正12(1515)年に金山や古和で、同15(1518)年に三隅洞明寺山（浜田市三隅町三隅小野）で、いずれも益田氏と激しく戦った。天文24(1555)年には、益田氏が三隅湊を手中に收め、付近の鐘尾城（針藻城）の修築を命じている。永禄5(1562)年、益田氏は三隅氏の拠点であった板井川城も攻略している。

三隅氏が居城とした高城は、山頂部の主郭を中心に多数の郭と堀切、畝状堅堀などで構成され、修築を繰り返しながら使われた大規模な城郭である。主郭付近では、龍泉窯系の青磁や備前系陶器など15世紀頃の遺物が出土した。山頂部からは眼下に沿岸部の古市場、湊浦など三隅湊が一望にすることができ、高城は日本海を意識した城であった。1443年に朝鮮で編まれた『海東諸国紀』には「石見州三住右馬守源氏朝臣正教」が朝鮮に使者を送ったことが記されている。三隅湊は、多くの船を所有していた大賀氏が拠点としていたことが知られる。大賀氏は永享4(1432)年・天文6(1537)年に大内氏、永正5(1508)年に三隅氏から諸権益の保証を受け、広範囲の海域で経済活動を行っていたと推定されている。三隅湊に近い上古市遺跡では、青磁・白磁・土師器皿等がまとめて出土している。

高城の周辺地域には、繰り返し行われた攻防戦を反映するかのように多数の山城跡、砦跡が分布しており、普源田砦跡もその一つである。河内城跡、針藻城跡、次郎丸砦跡は、『石見の城館跡』で縄張図が公表され、郭の配置状況等がわかるが、その他には内容がわかる城跡は少ない。普源田砦跡は、南東の茶臼山城跡から延びる丘陵先端部に所在する。茶臼山城跡は三隅高城の支城とされており、元龜元(1570)年に高城とともに落城したと伝えられる。

城跡以外の中世遺跡としては、久瀬遺跡がある。宝霞印塔・五輪塔のほか、中国陶器壺と錢貨が出土している。錢貨は300枚以上あり北宋錢が多いが明代の洪武通宝も含まれており、14世紀後半頃のものとみられる。また、市指定史跡である笠取の墓は、南北朝の戦いに関わった石見宮らの遺品を納めたと伝えられる五輪塔である。



高城跡中丸から日本海を望む

普源田砦跡のある岡見地区は、「岡見村」とみえる永徳3(1383)年の史料以降、ほぼ益田氏の所領であったことが確かめられる。その中心にある岡見八幡宮(多鳩山八幡宮とも)には、永禄5(1562)年に益田氏が神領を寄進している。同社には、天正14(1586)年寄進の銘がある隨身坐像が伝えられている。

3. 近世

江戸時代に入ると、浜田市三隅町域は石見銀山領となる。その後、元和3(1617)年に井野村は津和野藩領となって幕末に至り、他の地域は元和5(1619)年の浜田藩成立に伴って同藩となつた。浜田藩三隅組代官所は、岡崎村(三隅)にあり、上市・下市と呼ばれる町場が形成されていた。山陰道は、宿場町であった上市から三隅川を渡って進み、岡見川沿いに出た後、源田山の谷を抜けて益田方面へと向かう。この地点にある廻り田遺跡には一里塚を思わせる塚状遺構があつた。また、その西側に位置する近世山陰道跡(馬橋地区)では、石畳の敷かれた道路遺構が確認されている。

街道関係以外の近世遺跡としては、岬口古墓がある。17世紀代の一石五輪塔と18～19世紀前半頃の基壇状石積みが3基確認されている。付近では、山口県須佐産の播鉢や防府市佐野焼の大形鉢が出土しており、舟運で運ばれ三隅湊を経由し流通した製品とみられる。

三隅湊は、浜田藩の西の拠点として番所が置かれており、津和野藩も井野村を飛地としたことから御蔵で紙や蠍を保管した。井野村では砂鉄採取も盛んにおこなわれており、陸路で安芸、海路では長門方面に砂鉄を移出している。三隅湊の竹屋は、文化年間(1804～18)には井野村の砂鉄を長門の大板山鉛へ送っていたことが知られる。製鉄遺跡は、山間部を中心として多数分布するが、ほとんどは実態が不明である。その中で、須津湊に近い岡見の中山鉛では本床・小舟など大規模な製鉄炉地下構造を備えた高殿鉛が確認されている。

【参考文献】

- 池橋達雄監修『定本島根県の歴史街道』樹林舎 2006
- 島根県『土地分類基本調査 益田・飯浦』1975
- 島根県教育委員会『石見の城館跡 島根県中近世城館跡分布調査報告書第1集』1997
- 島根県教育委員会『海石西遺跡・角落し遺跡・廻り田遺跡・近世山陰道(馬橋地区)・神出西遺跡』2018
- 島根県教育委員会『岬口古墓・上古市遺跡』2020
- 島根県立石見美術館『石見の戦国武将一戦乱と交易の中世一』2017
- 中司健一・濱田恒志・目次謙一「浜田市岡見八幡宮所蔵古文書・隨身坐像」『季刊文化財』141号、2017
- 浜田市教育委員会『島根県浜田市道路地図Ⅲ(三隅自治区)、史跡石見国分寺跡、平成21年度市内遺跡発掘調査報告書』2011
- 広田八穂『西石見の豪族と山城』1985
- 平凡社『島根県の地名 日本歴史地名大系33』1995
- 益田市・益田市教育委員会『記録集シンポジウム「中世山陰の流通と国際関係を考える」』2015
- 益田市教育委員会『中世益田ものがたり』2017
- 三隅町『三隅町誌』1971

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

1. 発掘調査区とグリッドの設定（第11図）

普源田砦跡は、浜田市三隅町岡見に所在し、岡見川河口から約2km上流の標高約65mの丘陵上に立地する。調査前の遺跡は山林で、郭1には杉が植林されていた。そのほか遺跡南側の斜面には墓地があった。平成27年度に試掘確認調査を実施し、本発掘調査範囲を決定している。さらに立木伐採後の地形測量の結果から、当初「郭3」とされていた堀切2東側の尾根上は、遺構ではないと判断し、堀切2東肩から約10m東までを発掘調査範囲とした。

遺跡は、発掘調査前から郭、堀切の方向が明確で、郭の周囲が急傾斜地であることから、調査効率を考慮し、グリッドは座標系ではなく地形に合わせて設定した。また、堀切1を境に尾根筋が屈曲することから、調査区の東西でグリッドの方向を変えている。調査区の西側は郭1と堀切1の中軸N-53°-Eを基準線（8ライン）とし、そこから調査区を覆うように5m四方のグリッドを設定した。南西に向かアルファベットを、南東に向かアラビア数字を振った。調査区の東側は郭2と堀切2の中軸N-69°-Eを基準線（6ライン）とし、西に向か平仮名を、南に向かアラビア数字を振った。それぞれの区画は各交点の北端をもってグリッド名称とし、遺構等に伴わない遺物はグリッドで取り上げをおこなった。基準となる杭の座標は以下のとおりである。

第2表 グリッド杭座標データ表

堀切1以西

杭No	X座標	Y座標
A1	-137103.489	-21924.389
A13	-137151.640	-21888.59
R1	-137154.204	-21992.602
R13	-137202.355	-21956.803

堀切1以東

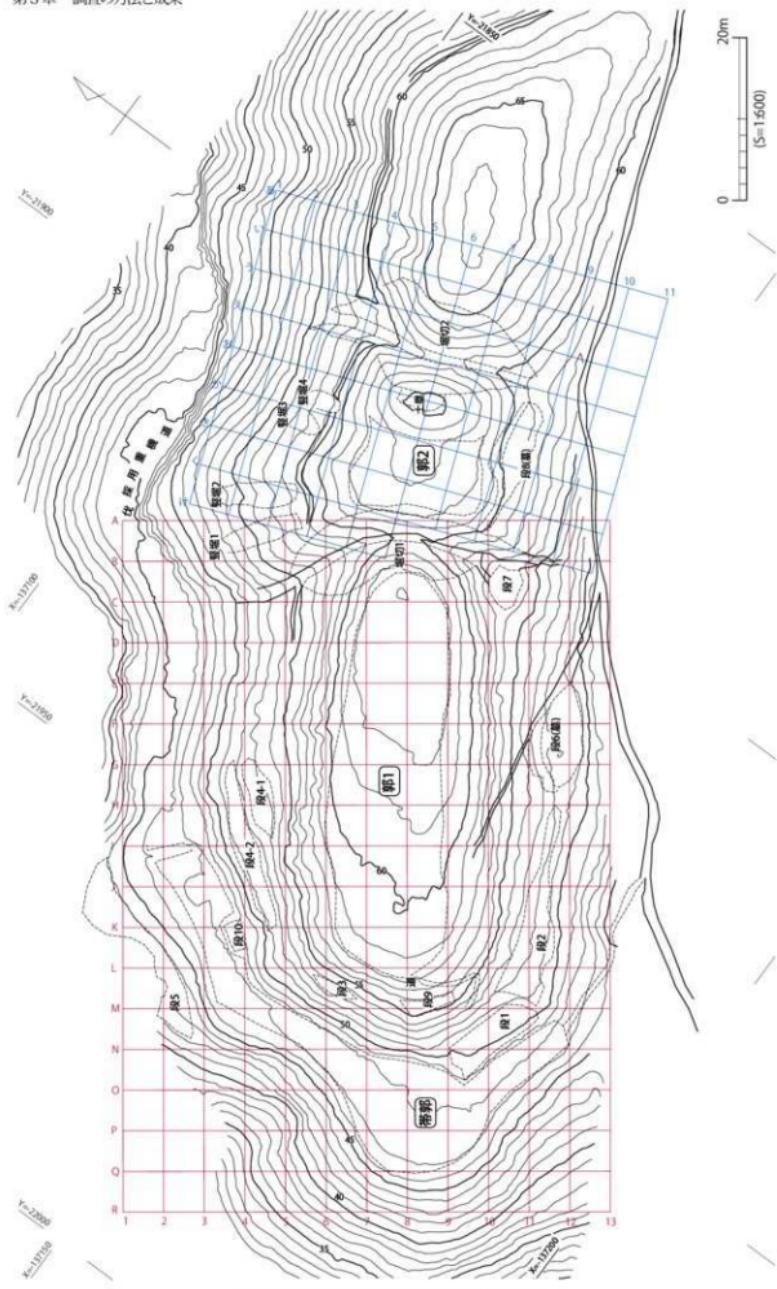
杭No	X座標	Y座標
あ1	-137094.483	-21880.486
あ11	-137141.14	-21862.51
く1	-137107.066	-21913.146
く11	-137153.723	-21895.17

2. 表土・包含層掘削と遺構検出

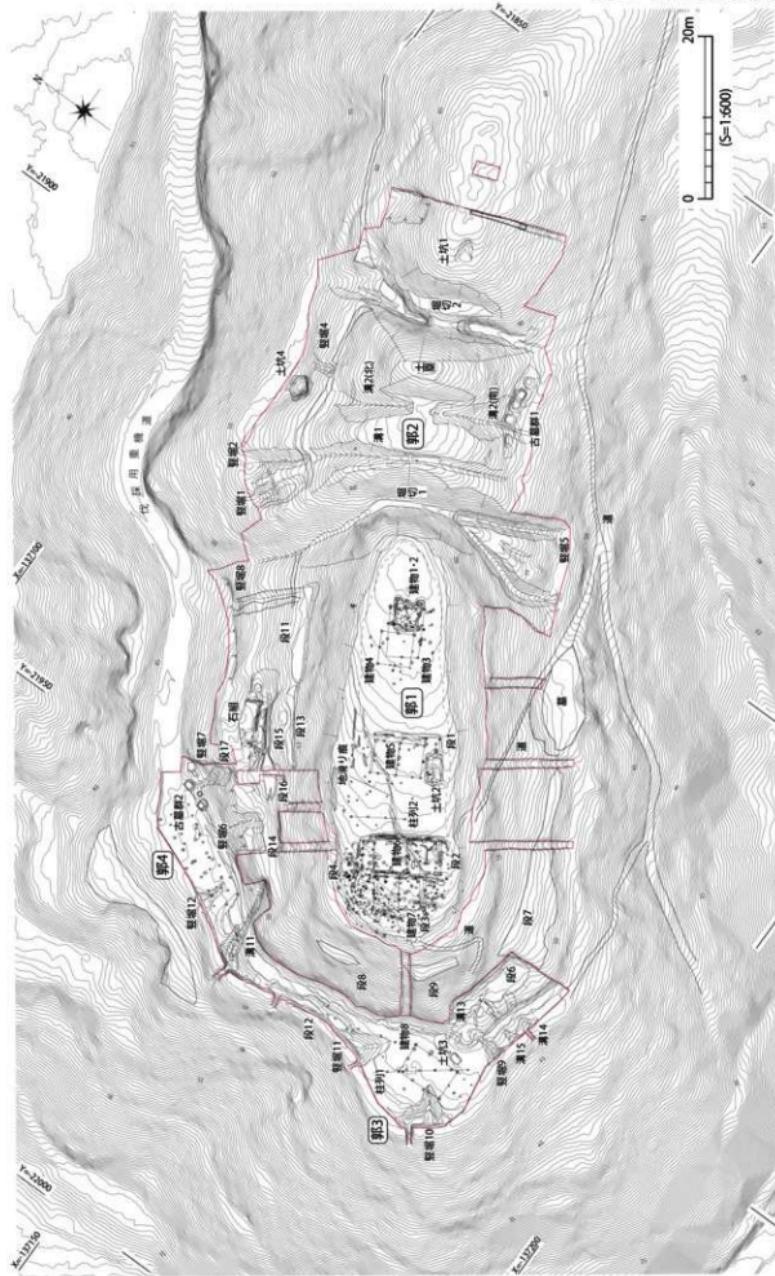
遺跡の立地と良好な遺構の残存状況、試掘調査の結果から、重機による表土掘削は行わず、表土から地山まで人力により掘り下げ、排土は小車運搬により排出することとした。急傾斜地での安全確保と排土運搬の通路とするため、尾根上の平坦地以外は幅1.5mの作業用仮設足場を調査区全体に設置した。足場は6段設置し、上段から下段への排土の運搬は、シャーターを使用した。これらは、各段まで包含層掘削・遺構調査が完了した後、順次撤去した。また、資材の搬入、排土の仮集積場



発掘調査用足場設置状況全景



第11図 調査前地形・調査グリッド設定図



第12図 調査後地形・遺構配置図



郭1足場・シーター・鉄板設置状況

所を確保するため、郭3に鉄板を敷き郭1の調査完了まで作業ヤードとした。

表土・包含層の掘削時は主として鍬、スコップ、ジョレンを使用し、出土する遺物の粗密に応じて適宜、草削りや移植ゴテ等を使用した。伐根にはチェーンソー、ツルハシも使用した。

遺構検出は草削り・移植ごて等を使用した。

3. 遺構掘削

遺構の埋土掘削は、土層観察用のベルトを設定するか半裁し、土層観察をおこないつつ掘り下げた。土層断面については、写真撮影撮影後必要に応じて断面図を作成した。遺構から出土した遺物については、適宜出土状況を記録し取り上げた。

また、竪穴遺構や段状遺構の床面には、遺構の時期の炭化物が残存していると考えられたため、床面から10cm上までの埋土を土嚢袋に入れ持ち帰った。

4. 記録の作成

遺構の平面図は、遺跡調査システム「遺構くん」を用いて測量し、出力後補正をおこなった。断面実測図に付いてはオートレベルを用いて測量をおこない、高低差のある壁面については平面図と同様に遺跡調査システムによる記録作成をおこなった。遺構等の写真撮影はデジタルカメラを使用し、必要に応じて6×7版フィルム（モノクロネガ・カラーポジフィルム）カメラによる撮影をおこなった。

5. 整理作業（第3表）

遺構は検出状況や性格を検討し、種別・名称を調査時から第3表のとおりに変更した。出土遺物は分類をおこなった後、陶磁器類については形状・釉薬・胎土の特徴から個体同定をおこない点数を集計した。そのほか、遺構出土の遺物や各分類の代表的な遺物を、実測・撮影した。報告書作成はDTP方式を採用し、遺物図面は実測図を、遺構図面は平面図・断面図等をレイアウトした下図をデジタルトレースした。デジタルトレースや図の加工等はAdobe社のIllustratorCC、PhotoshopCC、を用いた。遺構・遺物写真はデジタルカメラで撮影した後、PhotoshopCCを用いて階調、コントラストの調整を行い掲載した。最終的な原稿執筆・編集作業はIndesignCCを用いて行った。

第2節 基本層序

土層観察は、基本的にグリッドのラインに合わせて設定した土層観察用ベルトでおこなっている。郭1と堀切1は、中軸線である8ラインと、直交するD・F・H・Jラインで土層観察をおこなった（第13・14図）。調査前は植林されていたが、さらに前の昭和50年代までは畑になつておらず、タバコ等が栽培されていた。地表面から20cm程度の深さまで黄褐色の耕作土が堆積し、室町時代から現代の遺物が出土した。その下で地山が検出され、郭1の東側は岩盤、西側は土砂に地山が分かれ

第3表 遺構名新旧対照表

郭		建物遺構		溝状遺構	
新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名
郭 1	郭 1	建物 1	SB01 (古)	溝 1	SD01
郭 2	郭 2	建物 2	SB01 (新)	溝 2	SD02
郭 3	帶郭	建物 3	SB02・SB03	溝 4	SD04
郭 4	帶郭	建物 4	SB04	溝 5	SD05
段状遺構		建物 5	SB05	溝 6	SD06
新遺構名		建物 6	SB06	溝 7	SD07
段状遺構 1		建物 7	SB07	溝 11	SD11
段状遺構 2		建物 8	SB08	溝 13	SD13
段状遺構 3		豎堀		溝 14	SD14
段状遺構 4		新遺構名		溝 15	SD15
段状遺構 5		古墓群・古墓			
段状遺構 6		古墓群 1	古墓群 1・段 8		
段状遺構 7		古墓群 2	古墓群 2		
段状遺構 8		古墓 1	1号墓		
段状遺構 9		古墓 2	2号墓		
欠番		古墓 3	3号墓		
段状遺構 11		古墓 4	4号墓		
段状遺構 12		古墓 5	5号墓		
段状遺構 13		古墓 6	6号墓		
段状遺構 14		古墓 7	7号墓		
段状遺構 15		古墓 8	8号墓		
段状遺構 16		古墓 9	9号墓		
段状遺構 17		その他			
堀切		新遺構名			
新遺構名		土坑 1	SK01		
堀切 1		土坑 2	SK02		
堀切 2		土坑 3	SK03		
		土坑 4	豎堀 3 → SX02		
		新遺構名		地滑り痕	
		石組遺構		SD03・SD04	
		集石土坑			

ていた。場所によっては、切り株の下、地山の上面で黒色の農業用マルチシートが出土しているので、耕作地にする際、遺構面が削平されていると考えられる。郭 1 の南北斜面は、50 ~ 80cm程度風化礫を多く含む褐色土が堆積し、室町時代から近世の遺物が少量出土した。

郭 2 と土壘、堀切 2 周辺は、中軸線である 6 ラインと、直行する、あ・きラインで土層観察をおこなった(第40図)。地表面から 20cm 程度の深さに、地山岩盤の礫を多く含む黄褐色土が堆積し、室町時代から近世の遺物が少量出土した。その下で地山の岩盤が検出された。

郭 3 は、中軸線である 8 ラインと、調査区の西壁と南壁で土層観察をおこなった。地表面から 20 ~ 80cm の深さに黄褐色と黄橙色の耕作土が堆積し、室町時代から戦国時代の遺物が少量出土した。郭 3 の西側には地山ブロックを含む黄褐色土がさらに 1 m 堆積し、その下で平坦に削平された岩盤の地山が検出された。

郭 4 は、重機による表土掘削をおこなったため、調査区西壁で土層観察をおこなった。地表面から 30cm 程度褐色土が堆積し、室町時代から戦国時代の遺物が少量出土した。その下で岩盤の地山が検出された。

第3節 山城遺構の調査

普源田砦跡は、岡見川に面した西に向かって伸びる丘陵の先端を大規模な2重の堀切で区画した山城跡である。発掘調査の結果、第12図で示すとおり、居住施設のある郭1を中心に、東・西・北側に小規模な郭が配置されることがあきらかになった。また、この規模の山城としては珍しく、大規模な切岸、堅堀11本、大型の溝2条等の防御施設を備えている。

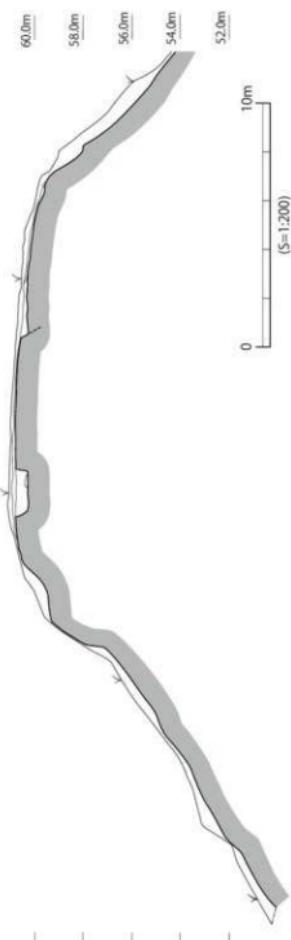
郭1は、遺跡内で最大規模の平坦面で、検出された建物の数や配置、遺物の出土状況から、普源田砦跡の中核となる遺構と言える。平坦面は、段状遺構や建物の分布から大きく3つに分かれ、郭の周囲は堀切と切岸で固く守られている。なお郭の中央から西側にかけて、南北方向の段差があり、大規模な地滑りによって郭が破壊されていることが判明した。

郭2は、郭1の北東方向に位置し、堀切1・2に挟まれた、小規模な平坦面と土壁で構成される。郭1と異なり、平坦面の造成は不十分で、建物や柵列は検出されなかった。一方、平坦面には断面がV字状の溝1・2が、傾斜が緩い北側斜面には堅堀が3本造られている。また、堀切は、発掘前の約2m下で堀底が確認され、この規模の山城の防御施設の実態があきらかになった。

郭3は、郭1の南西方向に位置する小規模な平坦面で、建物、柵列の他、調査区西側斜面に造られた堅堀群や溝が検出された。堅堀や溝は調査区の外に続いており、山城の範囲はさらに西側へ広がっている。

郭4は、当初郭3と一緒に遺構と考えられていたが、郭3との間は細長い通路状の平坦面になっており、溝11より北側が郭4の範囲と考えられる。柱穴群、堅堀、溝等の遺構が検出された。

以下、郭1で検出された遺構から、郭2・3・4とその周辺、北側斜面で検出された遺構の順に調査成果を記述する。



第13図 郭1Hライン断面図



第14図 郭1全体図

1. 郭1検出遺構

郭1（第13・14図、図版4・15・16）

郭1は、遺跡のほぼ中央に位置し、規模は長さ約50m、幅約10～15mである。発掘調査前は、東から西に向かって約6°傾斜する平坦な地形だったが、地山面で遺構を検出した結果、郭の中央と西側に段状遺構が造られていることがあきらかになった。また、東側は中央と西側に比べ、同時期のピットが大幅に浅いので、郭の床面を大きく削平されていると考えられる。このことから、郭1の本来の床面は、東から西に向かって下る階段状の地形だったと推測される。

地山面で掘立柱建物6棟、竪穴建物1棟、段状遺構4か所、大型の方形土坑1基、地滑り痕等を検出した。郭の周囲で土壘や柵列は検出されなかったが、東側は堀切1で尾根筋を遮断し、北・西・南側は傾斜41～49°の切岸が約8～10mの高さで造られている。

建物1（第15・16図、図版4・17～19）

郭1の東側に位置し、建物2・3と重複する。平面形はやや歪な台形だが、規模や床面の状況から竪穴建物と判断した。主軸方向はN-58°-Eで、ほぼ郭の中軸線上に造られている。壁面は60～65°の角度で掘り込まれ、北・東・西側は平坦に整えられている。南側の壁面は凹凸があり、P106の南側には小規模な段がある。床面はほぼ水平で、地表から深さ60cmの位置で検出した。規模は東西3m、南北2.4～3.1mである。床面および建物周辺で柱穴を検出しているが、建物1にともなう明確な柱の並びは復元できなかった。埋土は炭と地山ブロックを多く含む黄褐色土で、遺物や石が多数出土している。遺物は小片が多く、他の遺構出土遺物と接合するものも多いが、床面の北東隅で出土した瓦質土器の擂鉢（第84図1）は、建物1にともなうと判断される。その他、甲冑の部品と見られる笠鉾（第90図26）も出土している。石は拳大から人頭大のものが多いが、床面の中央では長さ50cmもある平坦な面をもつ石が検出された。石には被熱により赤く変色したものもある。

他の竪穴建物の調査例から倉庫・蔵と考えられる。

建物2（第15・16図、図版4・17・19）

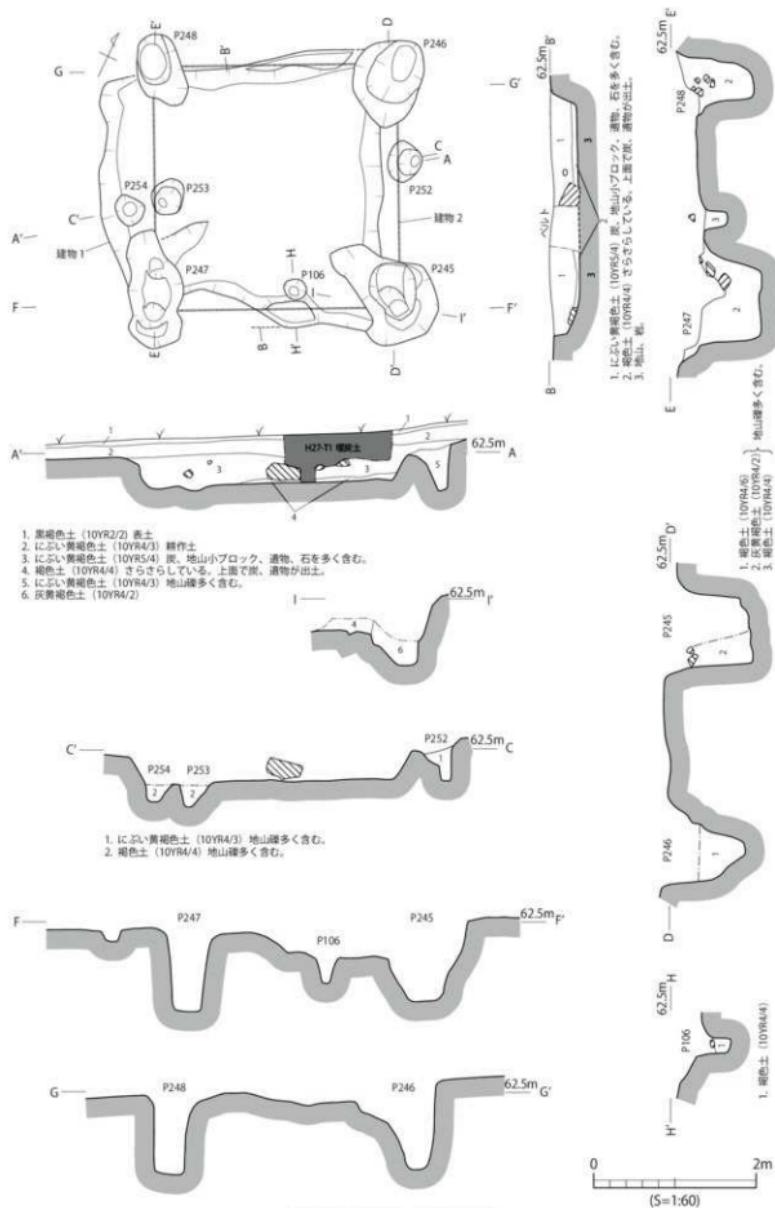
郭1の東側に位置し、建物1とほぼ完全に重複する。1間（3m）×2間（3m）の掘立柱建物で、主軸方向はN-64°-Eで、建物3～5と近い。P245土層断面の切り合いから、建物1より新しい時期の遺構であると判断した。主柱穴は、遺跡内の他の柱穴と規模が異なるため、P245・246を検出した時点では、土坑と認識していた。検出面の掘方の長さが0.95～1.45m、深さが約1.1mと規模が大きく、床面は楕円形で、柱を置いた痕跡が複数確認された。平面、土層断面で柱痕は確認できなかったが、石がまとめて入る部分は柱の位置を反映している可能性がある。東西の柱間の中間に位置するP252～254は、検出面の径が40～50cm、深さが約60cmと半分の規模である。

遺物は、主柱穴で陶磁器の小片が出土し、P253から16世紀前半の土師器皿（第86図1）が出土している。

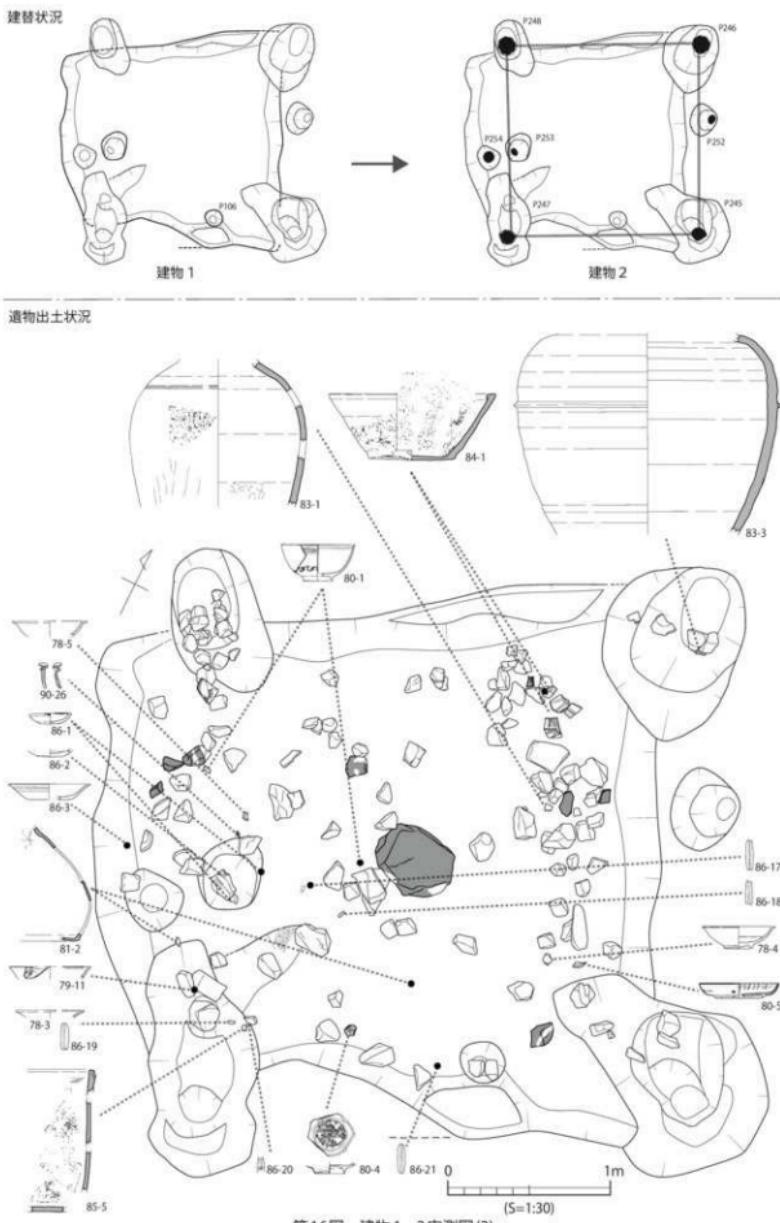
柱穴の規模から楕の可能性が考えられる。



建物1・2（人物が立つ方が建物2）



第15図 建物1・2実測図(1)

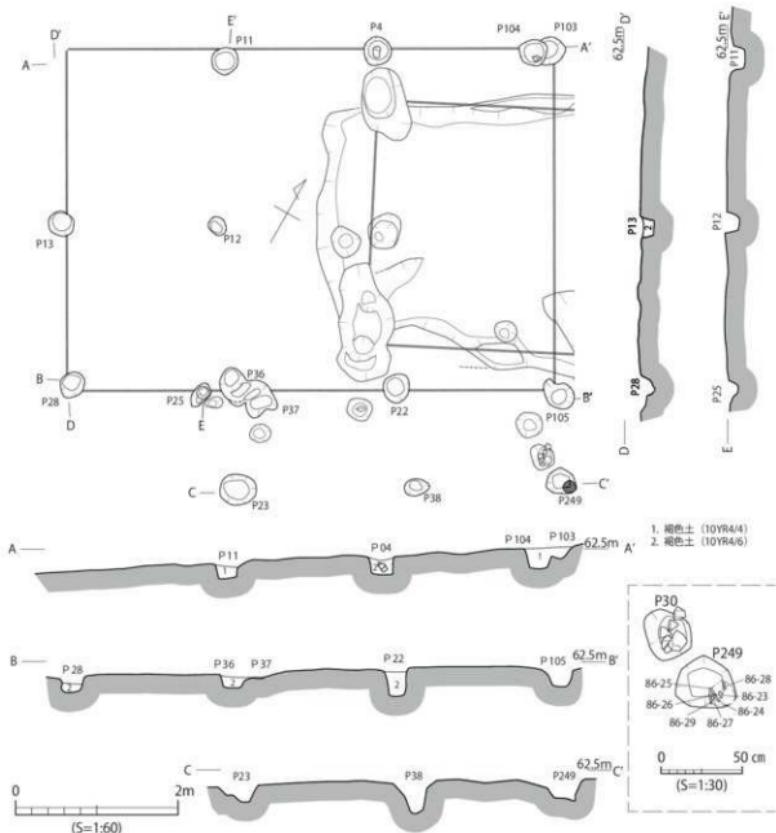


第16図 建物1・2実測図(2)

建物3（第17図、図版4・16・19）

郭1の東側に位置し、建物1・2と重複する。他の建物と重複し、建物周辺が大きく削平されているが、2間（4.2m）×3間（6m）の柱穴配置を復元した。主軸方向はN-61°-Eで、建物4・5と一致する。柱穴は深さが15～30cm、床面の径は15～20cmである。平面および土層断面で柱痕は確認できなかったが、P4・104では柱穴内で直立する石が検出されており、柱の位置を反映していると考えられる。遺構の時期を判断できる遺物は出土していない。

建物3の約1m南側には、建物3の柱穴と同規模のピットが3基並んでいる。建物3と結びつける積極的な根拠は無いが、平面の位置関係から関連する柱列の可能性も考えられる。このうち、東側に位置するP249は、東側の埋土が柔らかくなってしまっており、そこから土錘（第86図23～29）が7点まとまって出土している。



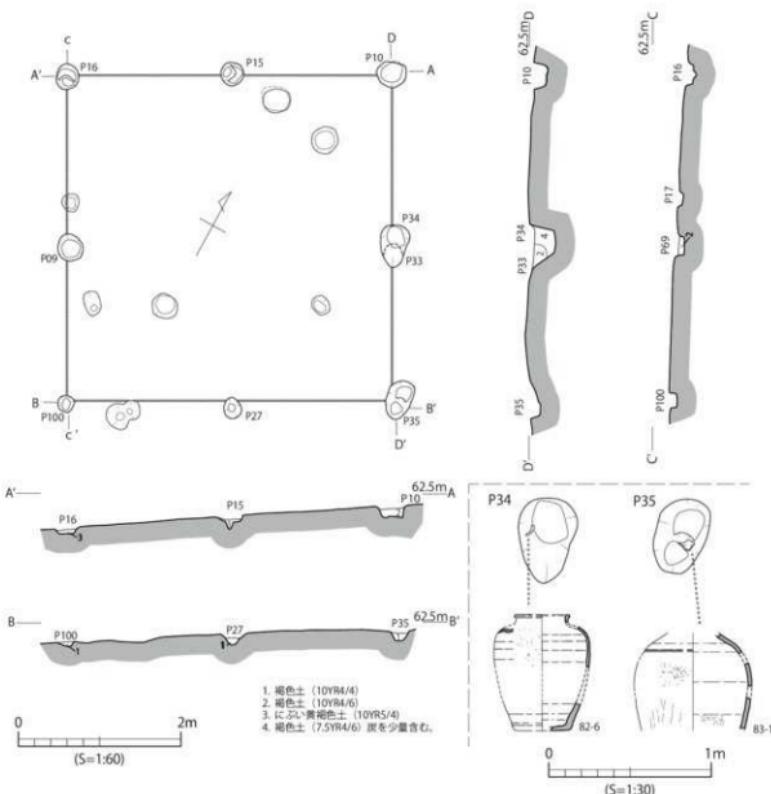
第17図 建物3実測図

建物4（第18図、図版4・16・19）

郭3の東側に位置し、建物3と重複する。2間（4m）×2間（4m）の整った柱穴配置の掘立柱建物である。主軸方向はN-61°-Eで、建物3・5と一致する。柱穴は深さが15～30cm、床面の径は10～25cmである。平面および土層断面で柱痕は確認できなかった。

P34・35から備前焼の壺の破片（第82図6、第83図1）が出土している。遺構の詳しい時期は不明だが、郭全体の遺物出土状況（第76図）や主軸方向から、建物1や郭1西側の建物や段状遺構より新しい時期の遺構と考えられる。

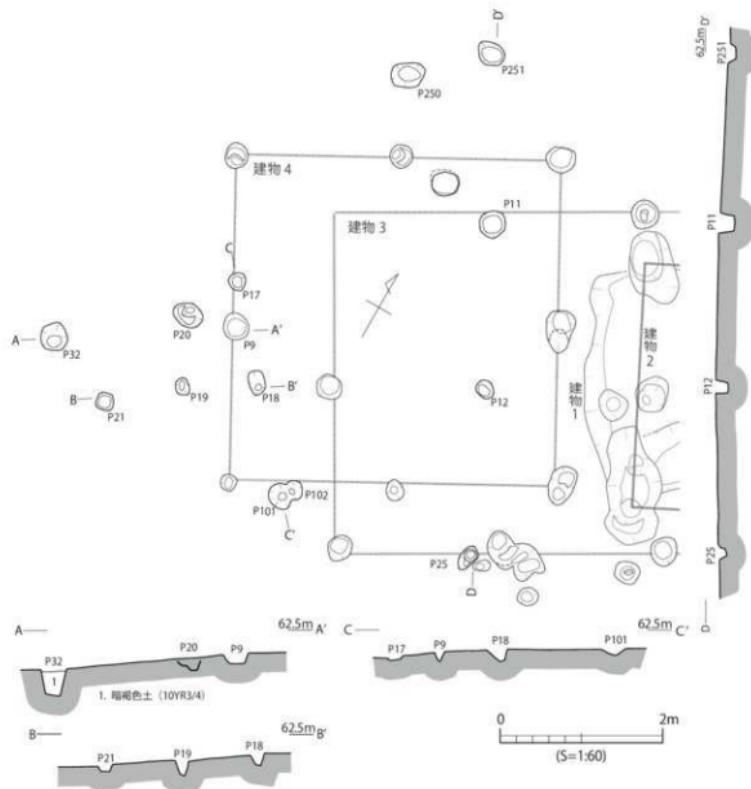
建物4は、本来の遺構面を大幅に削平されており、遺構の性格は不明である。しかし、第5章で記述するように、建物4と平面形がほぼ同規格の中世後半期の建物が、石見地方各地で確認されている。それらを参考にすると、建物4は檐や倉庫の可能性が考えられる。



第18図 建物4実測図

建物1～4周辺の遺構（第19図、図版16）

郭1の東側では、他にも建物または柵の柱穴とみられるピットを検出している。これらは深さが約10～30cmで、郭1中央で検出した建物5の柱穴が、深さ約40～80cmであるに比べていずれも浅い。また、遺跡全体の遺物出土状況図（第76・77図）で示すように、郭1東側で出土した遺物と、接合する遺物が西側で多数出土している。このことから、郭1の東側は、斜面下方に位置する段状遺構1・2を埋めるために、後世に40cm前後は削平されていると考えられる。



第19図 建物1～4周辺の遺構実測図

段状遺構1（第20・21図、図版5・20・21）

郭1の中央に位置し、床面で建物5が検出された。また、南側では、遺構の南壁のラインを揃える位置で、土坑2が検出された。主軸方向はN-58°-Eで、建物1と一致する。床面は、東側の壁付近で地表面から深さ約50cmの位置で検出した。床面の北西部は、地滑りによって約30cm沈んでいる。この部分も含めて、床面では24基のピットが検出された。また、東側と南側では45°の角度で壁が造られ、東壁中央部分には、長さ2.3m、幅30cmの平坦面が存在する。床面の壁際では、北端で長さ2.5m、幅15～20cmの溝が検出され、中央部分ではL字に曲がる短い溝を検出しているが、中央部分は建物5と必ずしも一致しないので、建物5に先行する別の建物が存在した可能性がある。

遺物は南側を中心に陶磁器が出土し、中央部分で青釉陶器の菊花形小皿（第80図11）が出土している。その他、床面ではP228東側で炭化物の塊が検出され、P238の周辺では、石がまとまって検出された。

建物5（第20・21図、図版5・20・21）

郭1の中央に位置し、段状遺構1の床面で検出された。2間（4m）×4間（6m）の柱穴配置の掘立柱建物で、主軸方向はN-61°-Eで、建物3・4と一致する。柱穴の配置は、桁行方向の南北の柱間が約1mで、中の2間は2mである。柱穴は深さが40～80cm、床面の径は10～25cmである。平面および土層断面で柱痕は確認できなかった。建物5の柱穴はほぼ規模が揃っており、床面の中心でP233が検出された。建物の平面規模は、中世後半期では一般的な大きさだが、このような柱の配置はあまり例を見ない。建物の北西部は地滑りの影響を受けており、P242は柱穴が南北に分割されている。

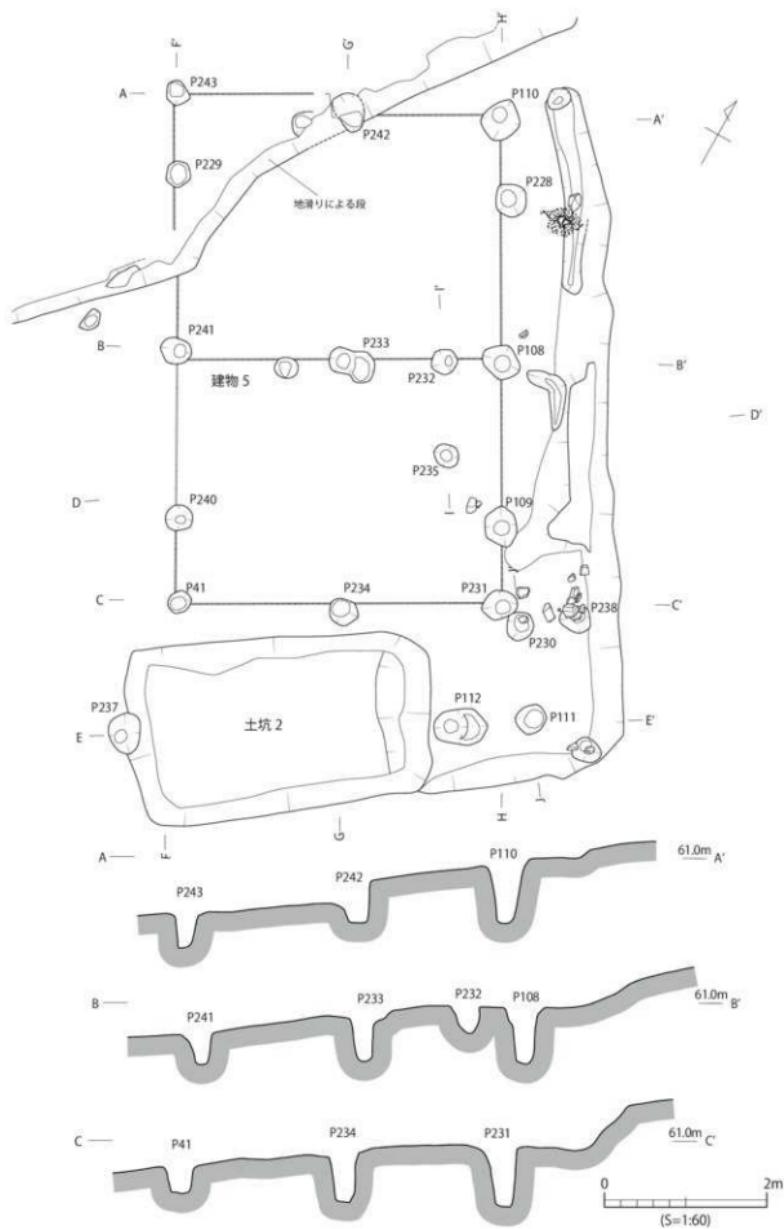
遺物は、柱穴から陶磁器の小片が出土している。P234では、根固めとみられる石とともに、青花碗（第80図2）が出土している。また、第4・5章で詳しく記述するが、遺構床上の埋土を洗浄し、炭化種実を分析した結果、稻とマメ科の大部分が、段状遺構1と建物5で出土している点は、建物5の性格を検討するうえで注目される。

段状遺構1、土坑2も含めた遺物の出土状況や主軸方向から、郭1西側の建物や段状遺構より新しい時期の遺構で、およそ16世紀前半頃の建物と考えられる。

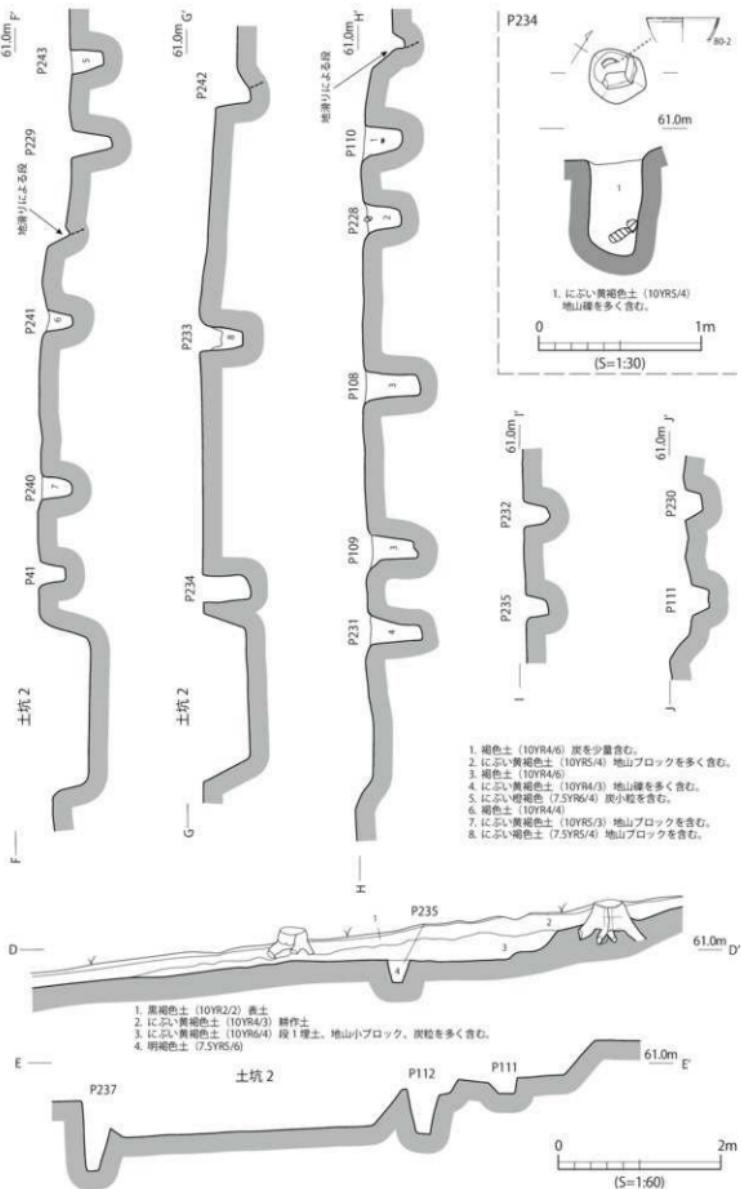
土坑2（第20～23図、図版5・21・22）

郭1の中央南寄りに位置し、南壁が段状遺構1の南壁と接続する。検出時は段状遺構1の一部と認識していた。Hラインの土層断面を観察する際、地山を確認するため、段状遺構1の南側床面を断ち割って大形の土坑であることが判明した。平面形は、西側が広い長方形で、壁面は63°～73°の角度で岩盤を直線的に丁寧に削り込んで仕上げており、さながら風呂の様な形状で、他の土坑とは大きく異なる。床面は西側がやや低くなるが、地山ブロックを多く含む黄褐色土で貼り床をして水平に整えている。東西の壁際では、P112とP237が検出されている。土坑2の長軸に近く、あるいは上屋を支える柱の穴とも考えられる。埋土はほぼ地山ブロックを多く含むにぶい黄褐色土で、段状遺構1の床面と同じ高さまで埋め戻されている。西側にはレンズ状の窪みがあり、炭、焼土を多く含む土が堆積している。また、床面で厚さ10cm前後の粘土の塊を複数検出している。

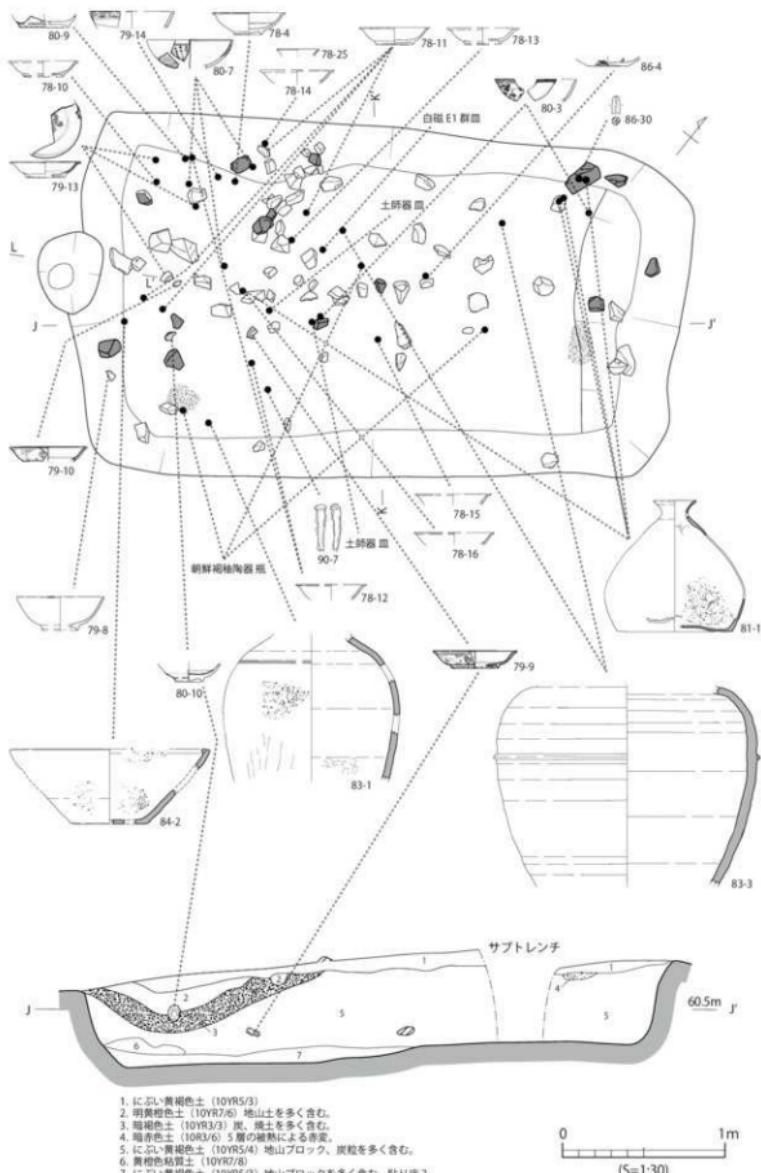
遺物は、陶磁器の小片が石とともに多数出土しているが、他の遺構の出土遺物と接合するものもある。白磁皿E群と青花は、土坑2と段状遺構1で最も多く破片が出土している。



第20図 段状遺構1実測図(1)

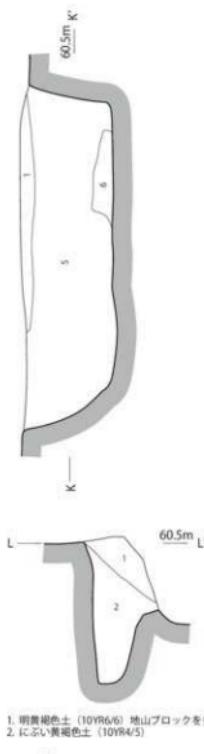


第21図 段状遺構1実測図(2)



第22図 土坑2実測図(1)

柱列2（第23図）



第23図 土坑2実測図(2)

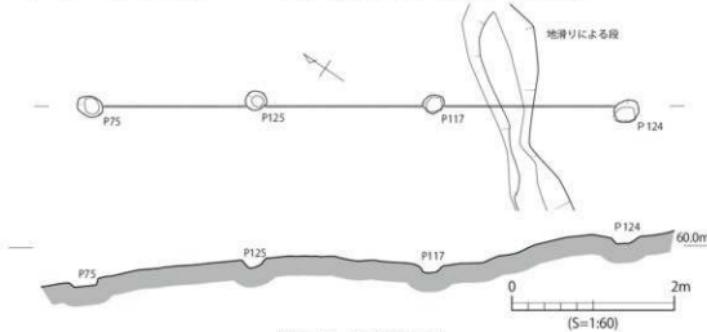
郭1の西側に位置し、段状遺構1と段状遺構2の間で検出された。2~2.4mの間隔で同規模の4基のピットが並ぶことから、柵列や板塀の柱跡と判断した。主軸方向はN34°Eで、建物1、段状遺構1・2とほぼ直交する。各ピットの平面規模は郭1東側のピットと大差ないが、深さは10cm前後と非常に浅く、大きく削平されていると考えられる。また、柱穴の間隔がやや不揃いだが、地滑りによって北側の地山が歪んでいることが原因と考えられる。

段状遺構1西側の遺構（第25図、図版24）

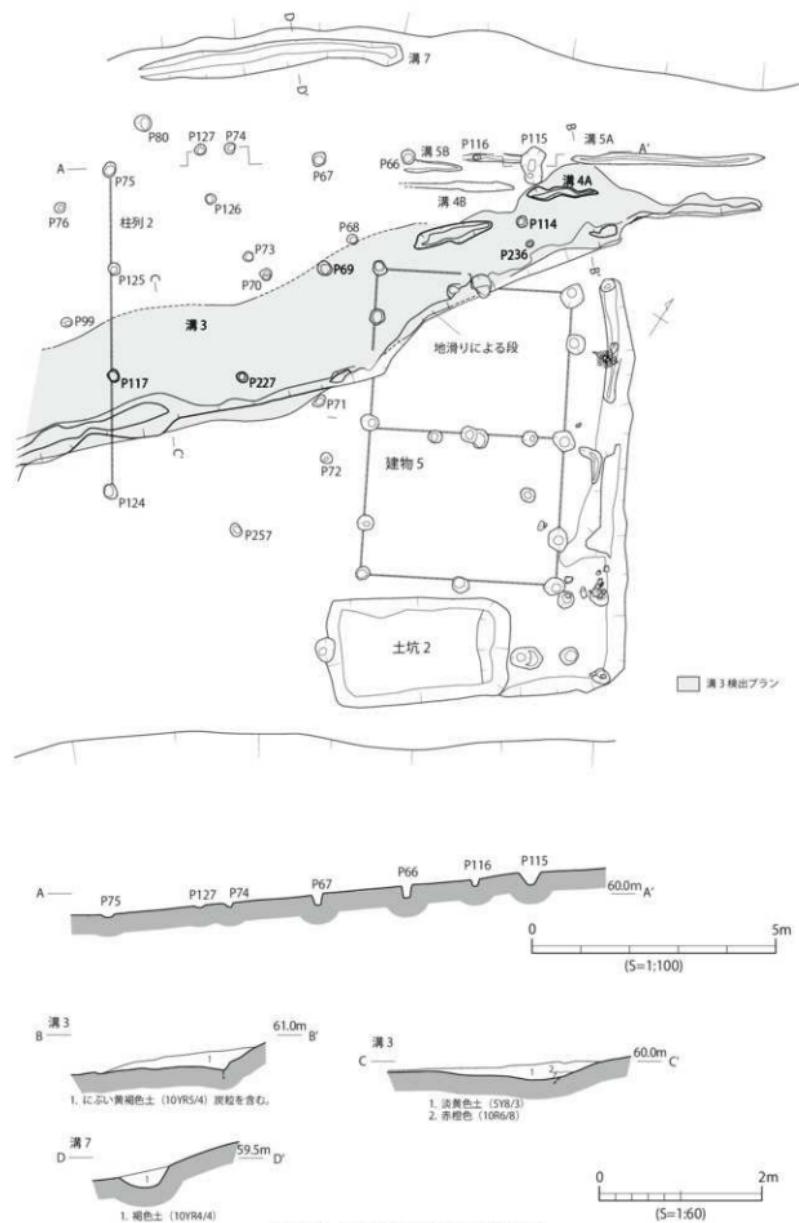
段状遺構1の西側では、耕作土の下で浅いピットや溝が検出された。これらのピットは、建物や柵列の明確な並びを抽出できなかったが、北側のピットは溝5とほぼ同一線上に並び、段状遺構1の東壁のラインや柵列1と直交する位置なので、郭1中央の遺構に関連する柵列の可能性も考えられる。

溝3は地山面を検出する際、幅2~2.5mの帯状のプランと浅い窪みを確認したので、当初は溝と認識して調査を進めた。調査を進める中で、床面が平坦で壁側に向かって傾斜し、溝の方向も郭を斜めに横断する等不自然で、18世紀代の陶磁器片が出土したことから、城跡と関係ない遺構と判断した。その後、段状遺構2の調査中に地滑りによる段差であることが判明した。溝4も地滑りに関連する亀裂とみられる。

溝7は郭1中央の北端に位置し、郭の肩と平行する方向で検出した。長さ5.4m、幅35~55cm、断面はU字状で深さは約20cmと浅い。周辺のピット同様遺構の上部を削平されていると考えられる。山城の柵列に布掘りで造られるものがあり、位置的にその可能性も考えられる。



第24図 柱列2実測図



第25図 段状遺構1西側の遺構実測図

段状遺構2（第26・27図、図版6・25～27）

郭1の西側に位置し、段状遺構3・4と重複する。主軸方向はN-56°-Eで、段状遺構1と一致し、建物1と近い。床面は、東側の壁付近で地表面から深さ約60cmの位置で検出した。床面は、地滑りによって南東部分のみ現位置を保ち、大部分は北西方向に沈んでいる。地滑りによる段差は東側で約40cmあり、段差側に向かい床面が約5°傾斜している。このため、段状遺構2は複雑に変形し、検出した床面や建物の規模はやや正確さに欠ける。検出した床面の規模は、南北10.6m、東西約9mで、東側には高さ30～40cmの壁が造られ、壁際には溝が設けられている。段状遺構2と周辺の遺構では、第27図で赤色で示すように、床面と遺構内で拳大から人頭大の石が多数出土している。壁際からは特に石が多く出土し、石列状になっていた。この石列が壁際中央の段差で分断されていたことから、地滑りの可能性に気付いた。

床面では遺跡内でもっと多くのピットが検出された。検出したピットのうち大型のものを中心に掘立柱建物2棟を復元した。柱穴の中には複雑に切り合うものもみられる。また、東側の床面では貼り床を確認し、その下でL字状に曲がる溝を検出しているので、さらに多くの建物が存在したこととは間違いない。また、西側は段状遺構3を、北側は段状遺構4を埋めて床面を造成し、柱穴を掘っている。

遺物は15世紀から16世紀前半を中心とする陶磁器の小片が多数出土している。郭1の東側や堀切1と接合する資料も多く、段状遺構2を埋めるために運ばれた土に混じった遺物も多いと考えられる。

建物6（第28～30図、図版6・27～29）

郭1の西側に位置し、段状遺構2の床面東側、建物7の東に隣接する場所で検出された。梁間方向が2間（4m）、東側の桁行方向が5間（約8.2m）、西側の桁行方向が4間（約8.2m）の柱穴配置の掘立柱建物である。また、北側で検出した小規模なピットの並びは、段状遺構2の壁の形状と一致しており、建物6に付随する遺構と考えられる。主軸方向はN-58°-Eで、建物7・段状遺構1と一致する。梁間方向の柱間は2mだが、桁行方向は不揃いである。

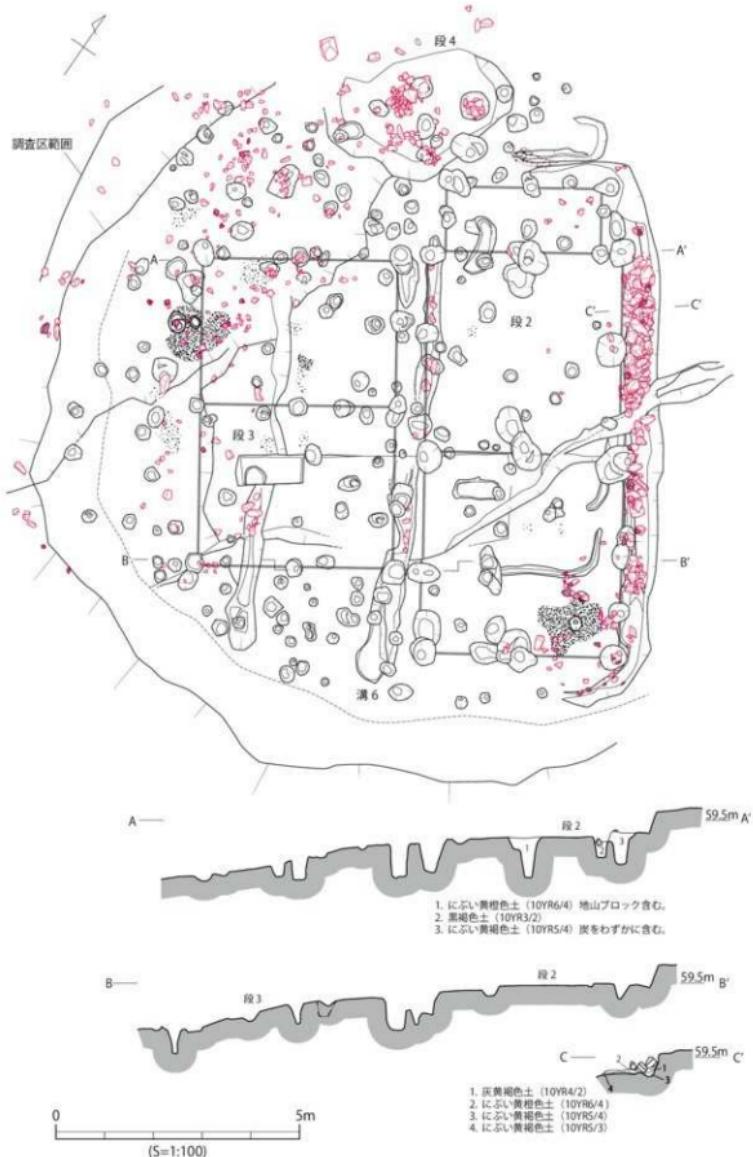
建物6の柱穴は規模が大きく、検出面で掘方の長さが90cmあるものや、P44・172・178・206のように浅いピットが付属するものもある。このような浅いピットは、大田市静岡城跡で検出された大型建物SBO3にもみられる。また、柱穴には深さが90cm以上のものもあり、平面および土層断面で柱痕や柱の抜き取り痕を確認できたものもある（第29図）。これらを確認すると、P135・166・167は、柱を床面近くで切取った後、柱の位置に石を据えているように見える。長期間建てられてきた掘立柱建物の部分修理を行ったとも考えられる。

遺物は、14世紀後半から16世紀前半の陶磁器や土師器、金属製品等が多数出土している。このうち、青花碗（第80図6）は、竪堀5で出土した破片と接合している。また、建物6の南東隅では、1×1.2mの炭の範囲で鉄鍋の破片が出土している。鉄鍋の2.3m西側で火箸が出土しており、炭の面を検出した範囲に、竈が築かれていた可能性が考えられる。

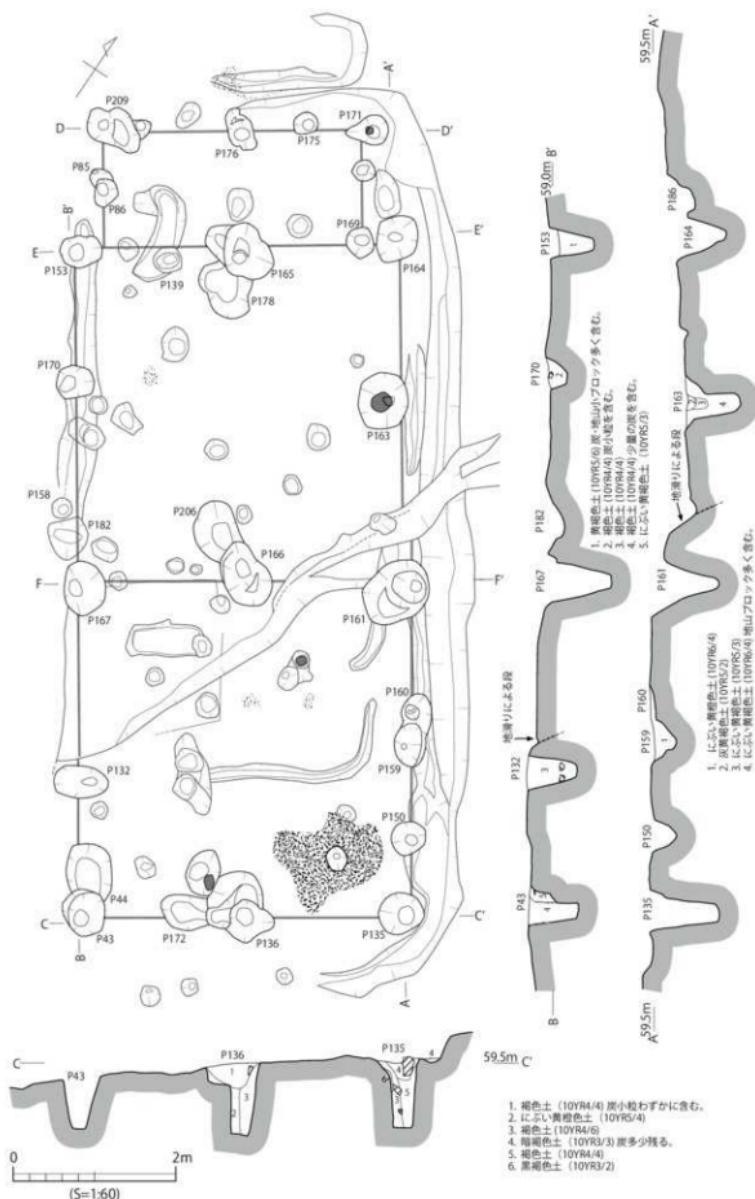
建物6は遺跡内で最大規模の建物であり、柱穴の切り合いや、石を使った改修の状況から、段状遺構2で長期間維持された建物と考えられる。県内の中世後半の建物の調査例を参考にすると、遺跡内で長く中核的な役割を担う施設だった可能性が高い。



第26図 段状遺構2実測図(1)



第27図 段状遺構2実測図(2)



第28図 建物6実測図(1)

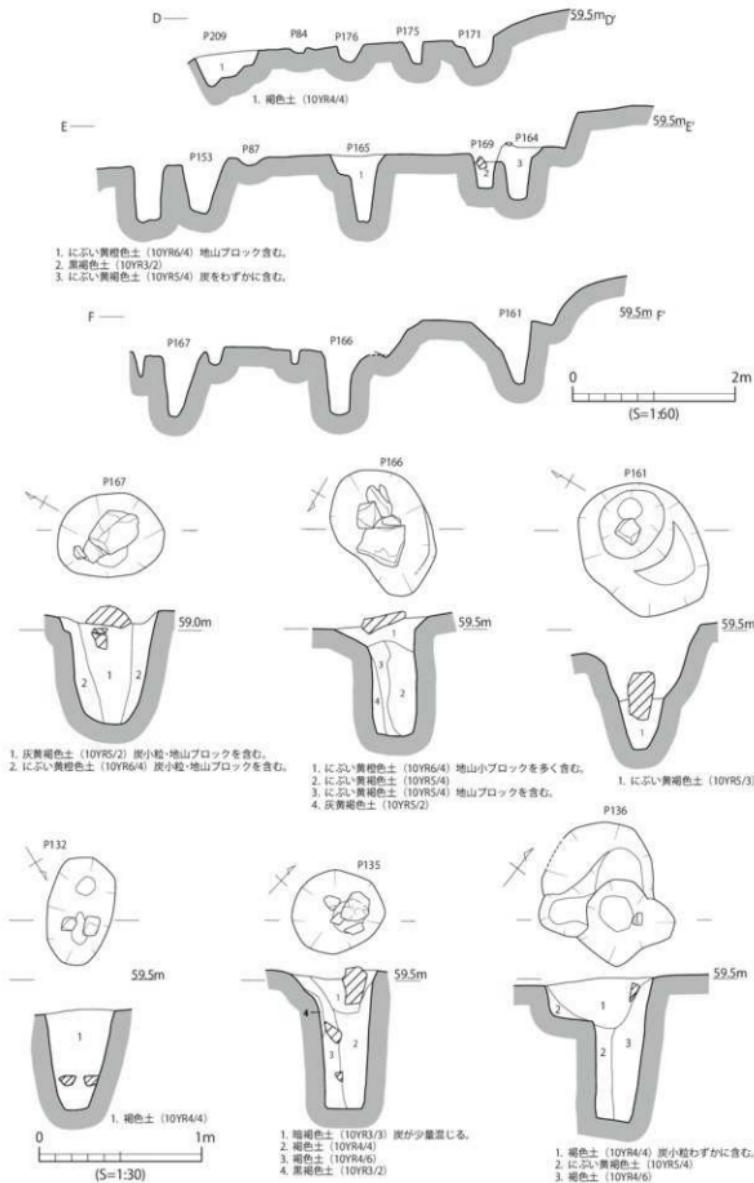
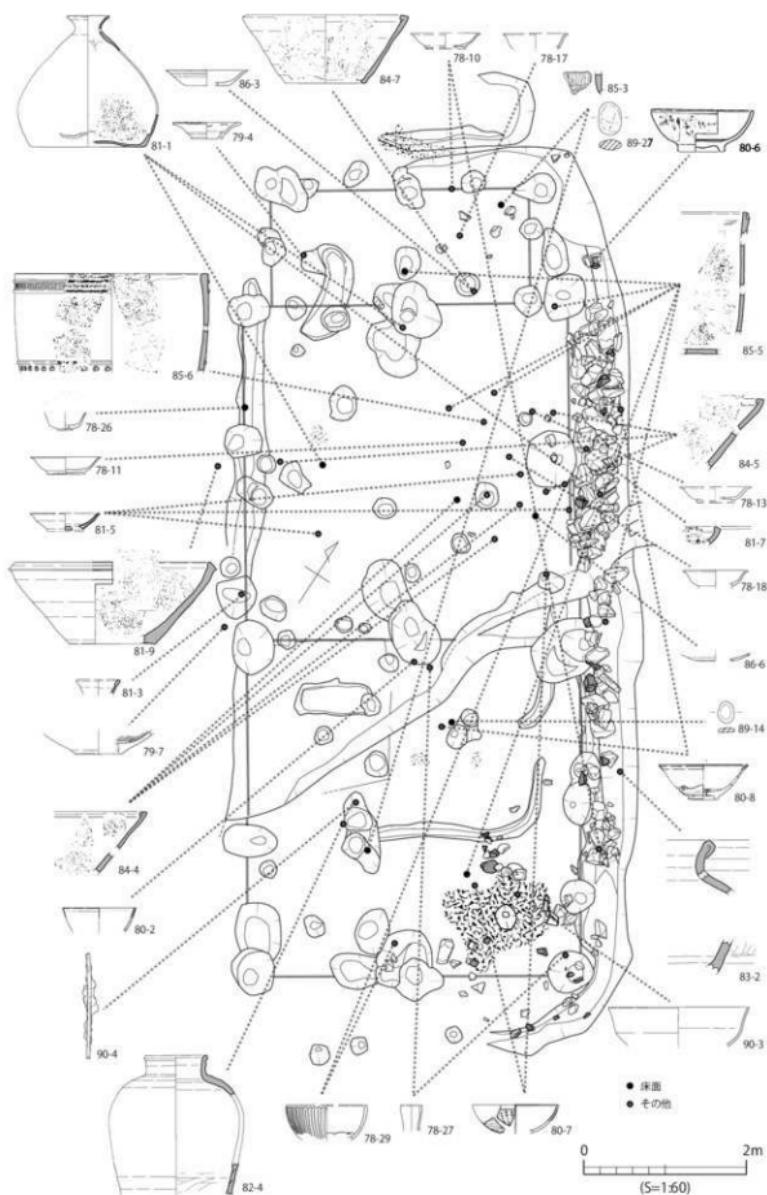


図29 図 建物6実測図(2)



第30図 建物6遺物、石出土状況図

炉（第31図、図版6・30）

段状遺構2の中央東寄りの位置で検出した炉で、長さ96cm、幅40cm、深さ28cmで、主軸方向はN-58°-Eである。南北の壁面はほぼ垂直に造られ、被熱により赤く変色している部分がある。位置的に建物6の範囲内であるが、建物6にともなうかは不明である。

床面から10～15cmの厚さで、炭を多く含む黒色土が堆積していた。この土を洗浄し、炭化種実を探取したところ、稻やキビ近似種等が確認された。

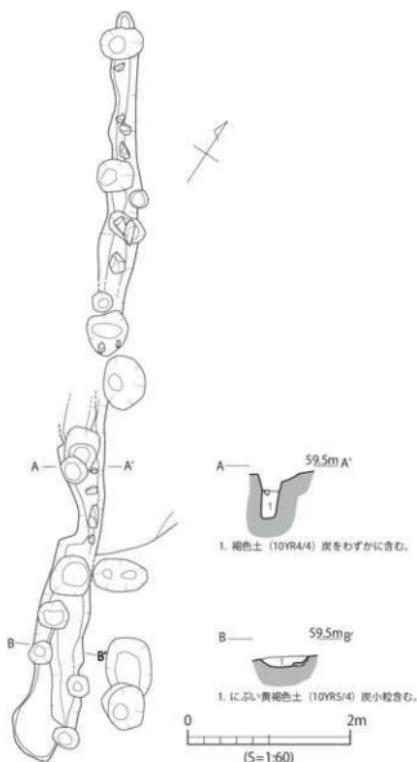


第31図 段状遺構2炉実測図

溝6（第32図、図版30）

段状遺構2の中央で検出した溝で、建物6・7と重複する。長さ9.4m、幅35～60cm、深さは約10cmで、主軸方向はN-29°-Wである。

非常に浅かったが、溝中から大小の石が出土した。土層断面から建物6・7との新旧関係は判断できなかったが、遺構の方向は約2.5m西側で検出した段状遺構3に近い。段状遺構2の床面に削平された、古い時期の布掘り遺構の可能性も考えられる。



第32図 溝6実測図

建物7（第34図、図版30）

郭1の西側に位置し、段状遺構2の床面西側、建物6の西に隣接する場所で検出された。柱穴の配置は、梁間方向が2間（4m）、東側の桁行方向が4間（6.3m）で、西側の桁行方向の柱穴は、配置、柱間とも不明である。主軸方向はN-58°-Eで、建物6・段状遺構1と一致する。柱穴は深さが10～70cm、床面の径は10～30cmである。平面および土層断面で柱痕は確認できなかった。また、建物7の西側は、段状遺構3や西側に傾斜する地形を盛土で造成して平坦面を拡張し、その上から柱穴を掘って建物を建てている。

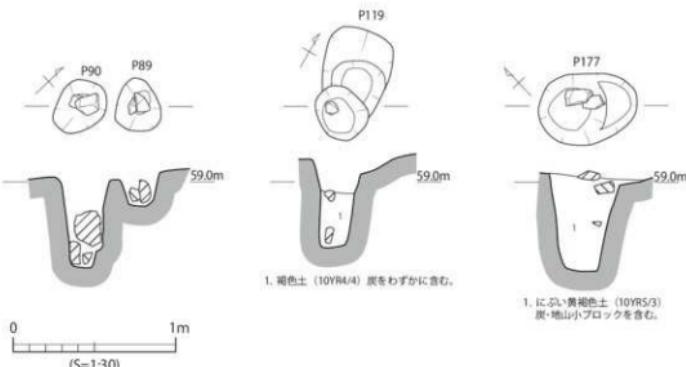
建物7の柱穴は、地滑りの影響を受ける西側桁行方向の柱以外はほぼ規格が揃っており、建物の中心ではP215が検出された。建物の平面規模は、中世後半期では一般的な大きさだが、柱穴の配置は桁行方向の南北の柱間が短く、中の2間は長くなるもので、建物5とよく似ている。ただし、柱間がほぼ揃う等、柱の配置は建物5の方が整っている。また、柱穴の規模は一回り小さいが、残りの良い東側桁行方向の柱穴には、建物6の柱穴のように浅いピットが付属するものや、柱部分に石が入るものもある。

遺物は、建物の範囲から14世紀後半から16世紀前半の陶磁器や土師器、金属製品が出土している。また、P59から赤色頁岩製の硯の破片が出土しており、遺跡が臨時の軍事拠点ではないことを示す資料として注目される。

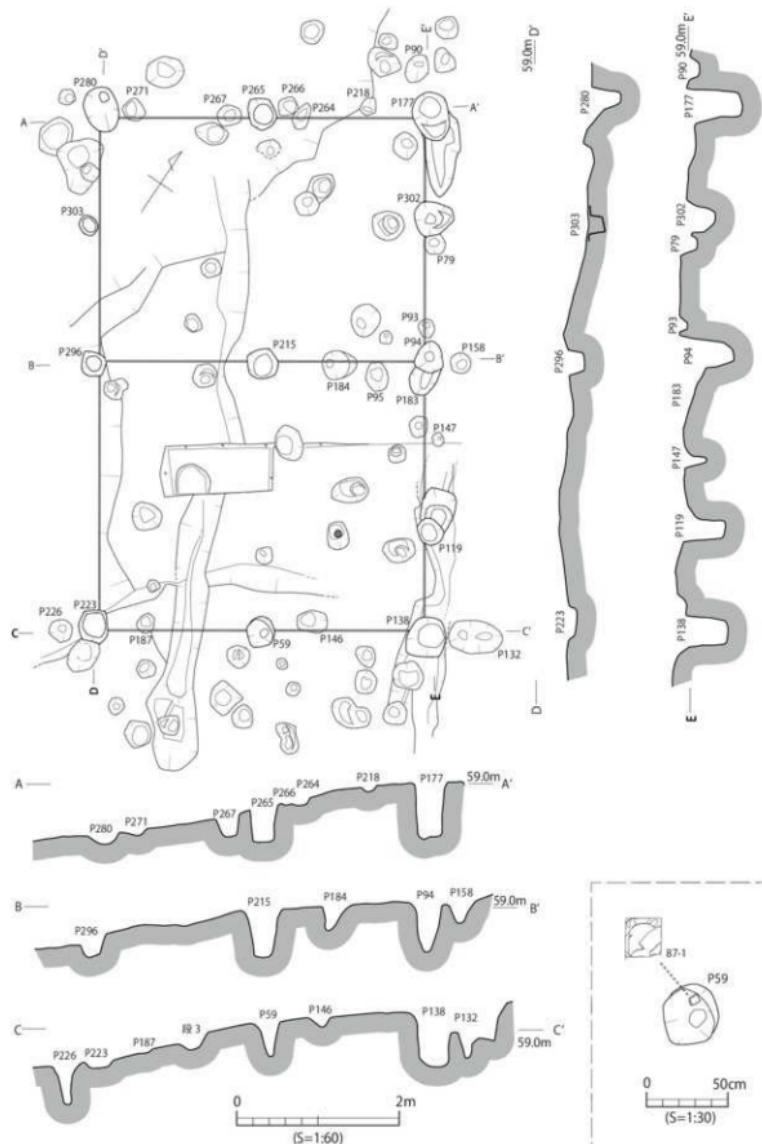
郭1西側盛土下の遺構（第27・35～37図、図版7・31・32）

段状遺構2の西側は30～40cm盛土されており、盛土内からは遺物が多数出土した。特に、建物7北西側のP280・296・303付近では、盛土内で炭・焼土の面が検出され、その中から瓦質土器の火鉢（第85図6・7）や、風呂（第85図3）、笠鉢（第90図27）等が出土した。段状遺構2の造成前に使われていた不用品を整理し、盛土造成に合わせて埋めたものとみられる。また、第27図で示すように、盛土内からは石が多く出土している。特にまとまりは見られず、被熱により赤く変色した石もあった。

盛土を除去し、地山面を精査すると、多数のピットが検出された。中には、検出面の径が50cm、

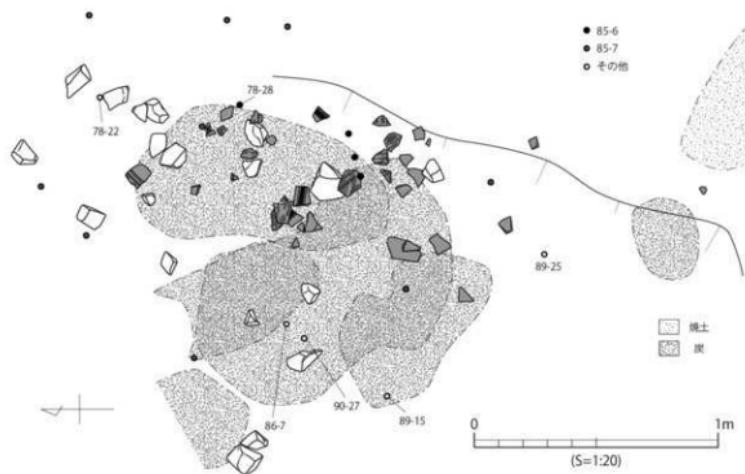


第33図 建物7実測図(1)

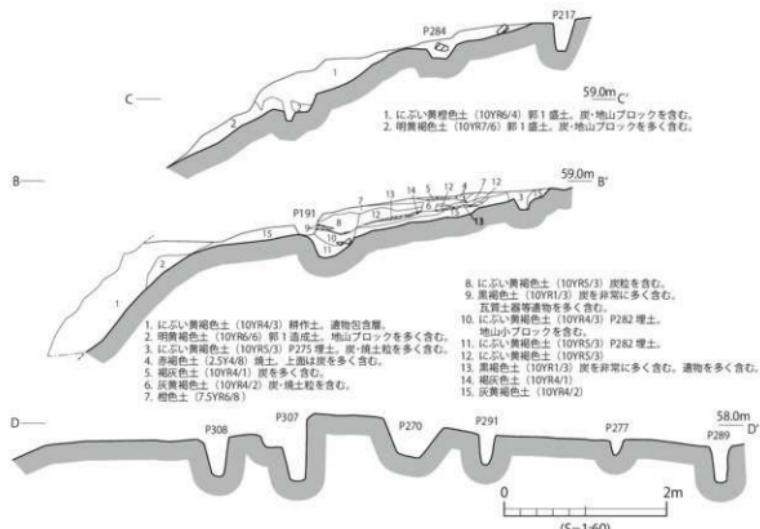


第34図 建物7実測図(2)

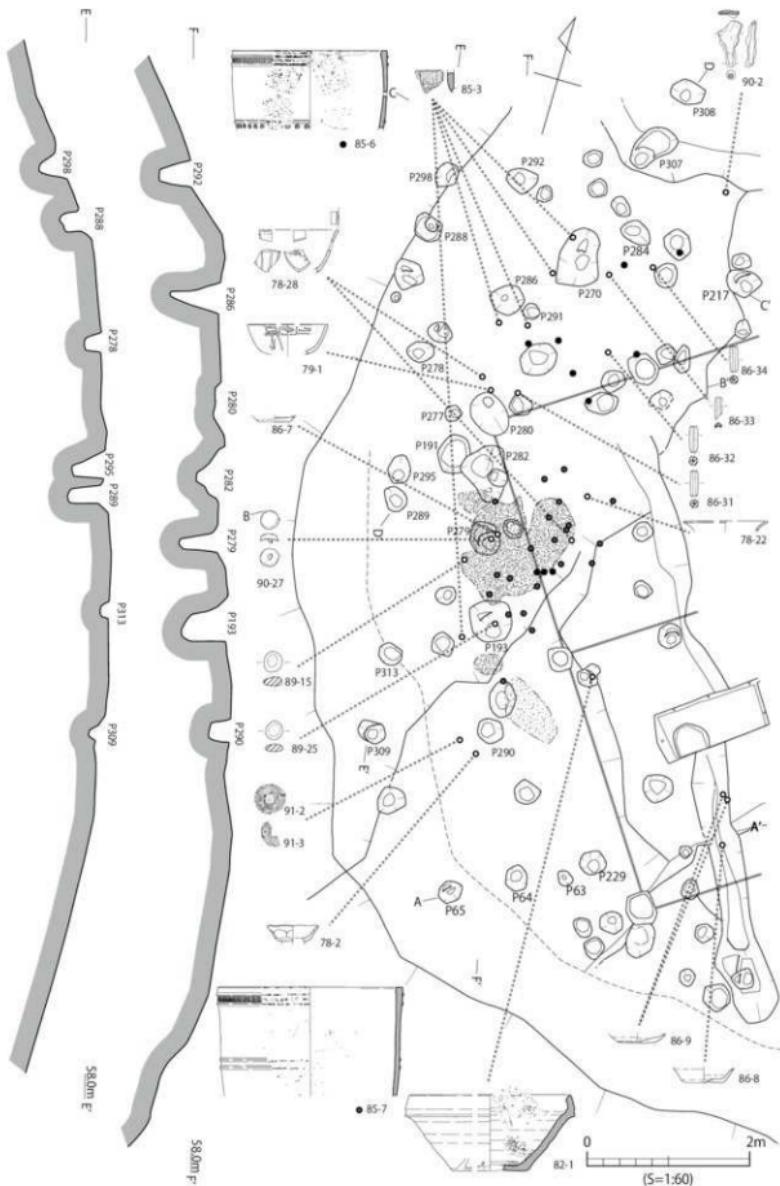
深さが50～70cmもある、掘立柱建物の柱穴とみられるものも確認されたが、建物の配置を復元することはできなかった。建物7の西側の柱穴がわずか10cm程度だったことを考えると、床面レベルの違いから、東側の柱穴と組み合わせることは難しいと思われる。



第35図 郭1西側盛土内遺物出土状況図



第36図 郭1西側盛土下層検出遺構実測図(1)



第37図 郡1西側盛土下層検出遺構実測図(2)

段状遺構3（第38図、図版33）

郭1の西端に位置し、段状遺構2の西側下層で検出された。遺構の残りは悪いが、東側の壁と壁際の浅い溝によって小規模な段を確認することができた。郭1の西側は地滑りの影響で亀裂や段差があり、遺構面も不整形になっている。段状遺構3の確認できた規模は、長さ7.3m、幅1.3mで、主軸方向はN-28°-Wで、溝6とほぼ一致する。遺構の床面と周辺では柱穴が多数確認されているが、建物の配置を復元することはできなかった。

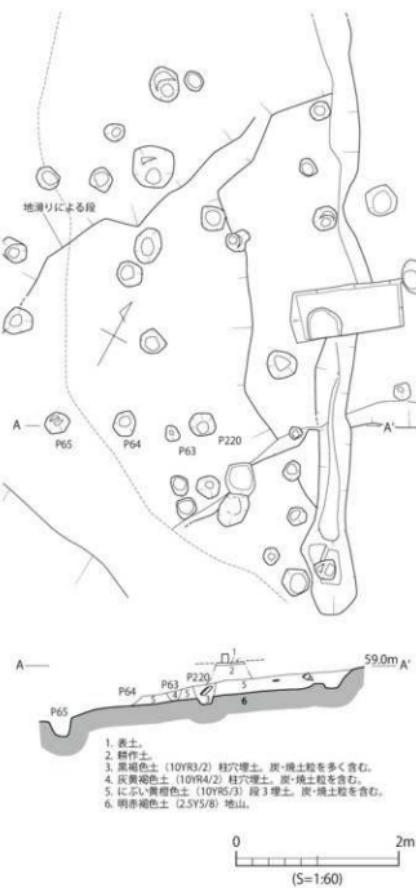
遺物は壁際の溝から15世紀前半頃とみられる土師器皿が複数出土している。段状遺構3の北西側では15世紀の青磁も出土しており、盛土下で検出した段状遺構3は、遺跡内で最も古い時期の遺構とみられる。

段状遺構4（第39図、図版34・35）

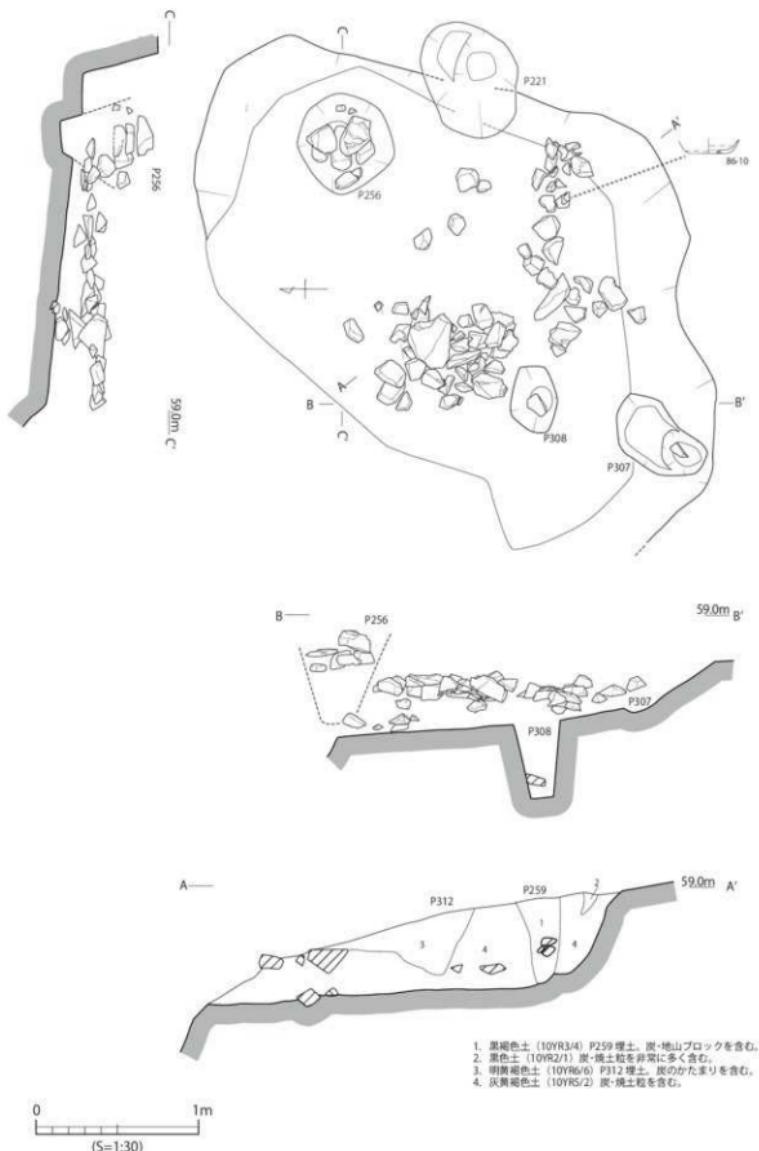
郭1の西端に位置し、段状遺構2の北側下層で検出された。平面は不整形で、規模は東西2.5m、南北2.5mで、遺構の方向は不明である。段状遺構2の床面で検出され、遺構埋没後に上から柱穴を掘り込んでいる。段状遺構2床面から、50cm前後下の位置で床面を検出している。また、床面から約20cm浮いた位置で、多数の石が検出された。床面は北と西に向かって傾斜しているが、石の高さはほぼ水平である。

遺物は床面南東の壁際で15世紀前半頃とみられる土師器皿が出土している。段状遺構3の土師器皿と共通する特徴を持つ。

遺構の性格については不明だが、郭の端に造られている点や、遺構内から石が多数出土する点、不整形だが規模が近い点から、土坑2のような大型方形遺構が地滑りで西側の壁面を失い、変形した可能性も考えられる。



第38図 段状遺構3実測図



第39図 段状遺構4実測図

2. 郭2と周辺の検出遺構

郭2（第40～43図、図版8・36～38）

遺跡の東側に位置し、西側の堀切1と東側の堀切2に挟まれた、小規模でやや造成が不十分な郭である。規模は東西7m、南北16mである。発掘調査前は、一回り大きい平坦面をもつ郭と考えられていた。地山面で遺構検出作業をおこなった結果、東側の土塁と接する部分と、西側の堀切1と隣接する部分で、断面V字状の大型の溝が検出された。そのほか、建物の柱穴やピット、土坑等の遺構は検出されなかった。床面は東西方向にはほぼ水平で、標高は郭1東側より約50cm高い。一方、南北方向には緩やかに傾斜しており、斜面部との境も明確でない。南北の斜面は傾斜が32°で、切岸で閉まれた郭1と様子が異なり、北側は竪堀によって防御性を高めている。

遺物は、表土とその下の黄褐色土から陶磁器の小片が少量出土している。また、遺跡は江戸時代以降に烟として利用されていたらしく、18世紀以降の陶磁器片も少量出土している。

郭2は、郭1と比較して平坦面や斜面の造成が不十分で、建物や焼土面も存在しない。遺物も非常に少ないことから、居住性は無く、純粹に防御施設として造られたと考えられる。

土塁（第40図、図版36～38）

郭2の東側に位置し、地山を削り出して高さ2.5mの土塁が造られている。東側は堀切2の法面になる。頂上部には、長さ6m、幅2mの平坦な地形がある。東側の斜面で備前焼の壺（第82図6）が出土している。

溝1（第41～44図、図版8・36・38・39・41）

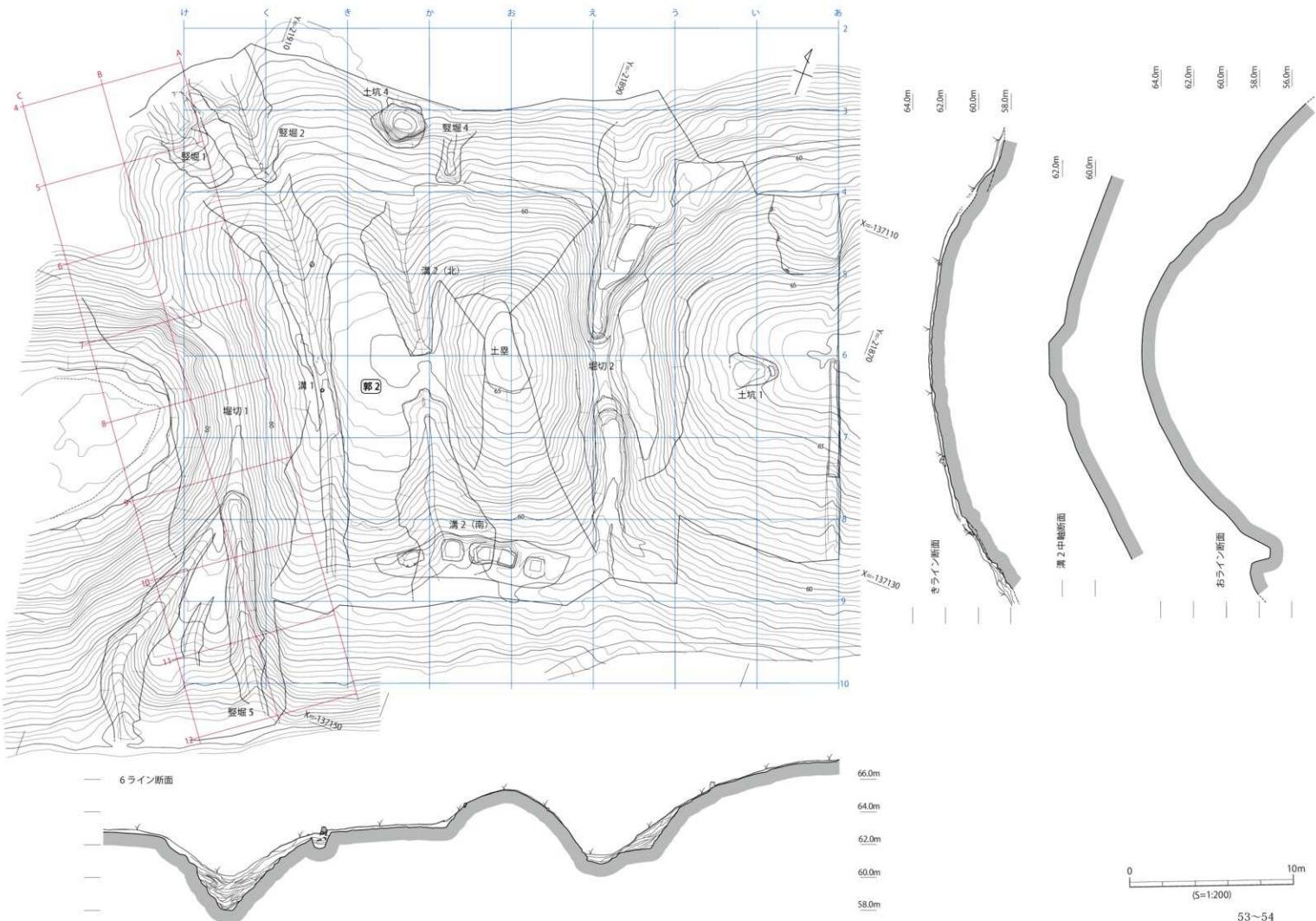
郭2西側で、堀切1の東側肩と隣接する位置で検出した。発掘調査前は完全に埋まっており、全く認識できなかった。埋土は、上層に地山ブロックを多く含む橙色土が堆積し、その下に暗い黄褐色土が堆積する。床面から約20cm上で再び橙色土と黄褐色土の順で堆積する。完掘後の規模は、長さ25m、幅1.1～5.5mで、主軸方向はN-30°-Wである。岩盤を32～44°の角度でV字状に掘り込み、床面中央は20cmの幅で平坦に造られる。北側の斜面下方は、上端が広がり、等高線に沿って造られた山道を挟んで竪堀1と竪堀2に枝分かれする。

遺物は出土しておらず、遺構の時期は不明である。

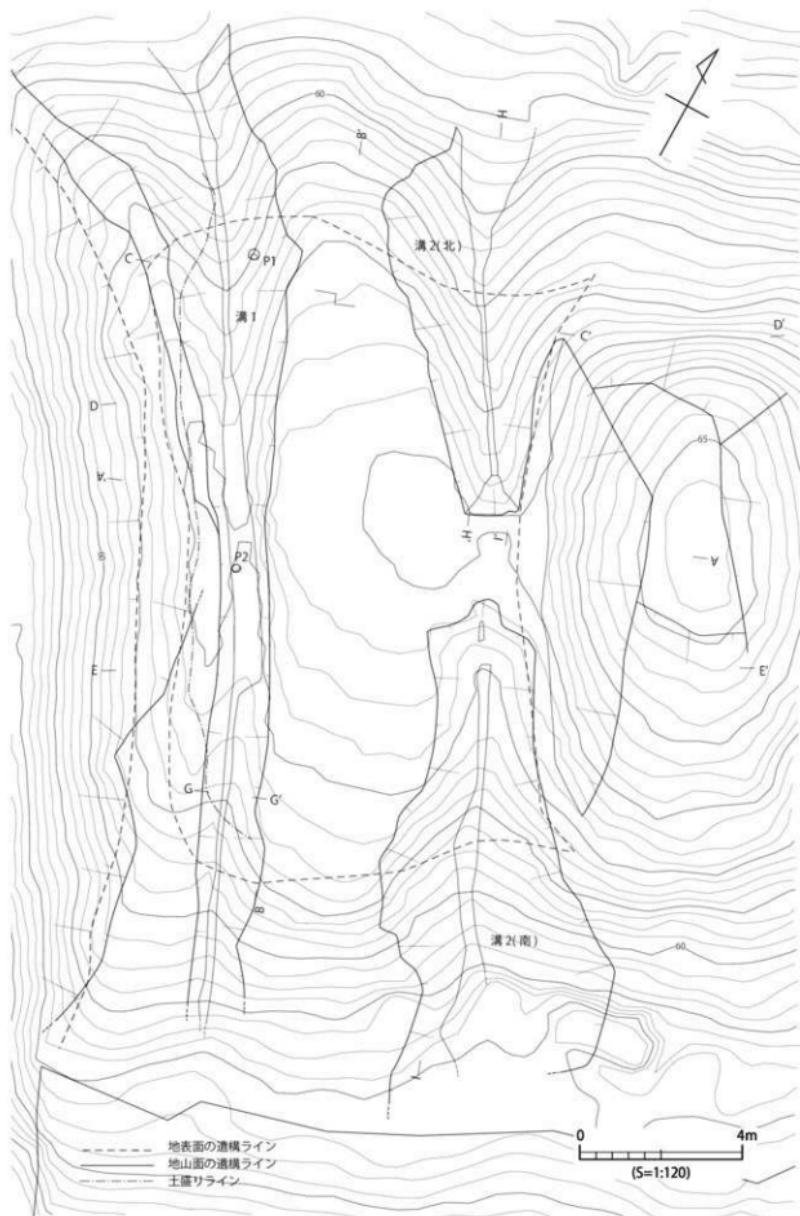
溝2（第41～44図、図版8・9・36・39～43）

郭2東側で、土塁との境界部分で検出した。溝1と同様、発掘調査前は完全に埋まっており、全く認識できなかった。地山面で遺構検出を行った際、地山の脈が途切れる部分があり、認識することができた。溝の規模や断面の形状等は溝1とよく似ているが、郭の中軸線手前で掘削を停止し、幅2.5mの土橋状に掘り残す点が大きく異なる。

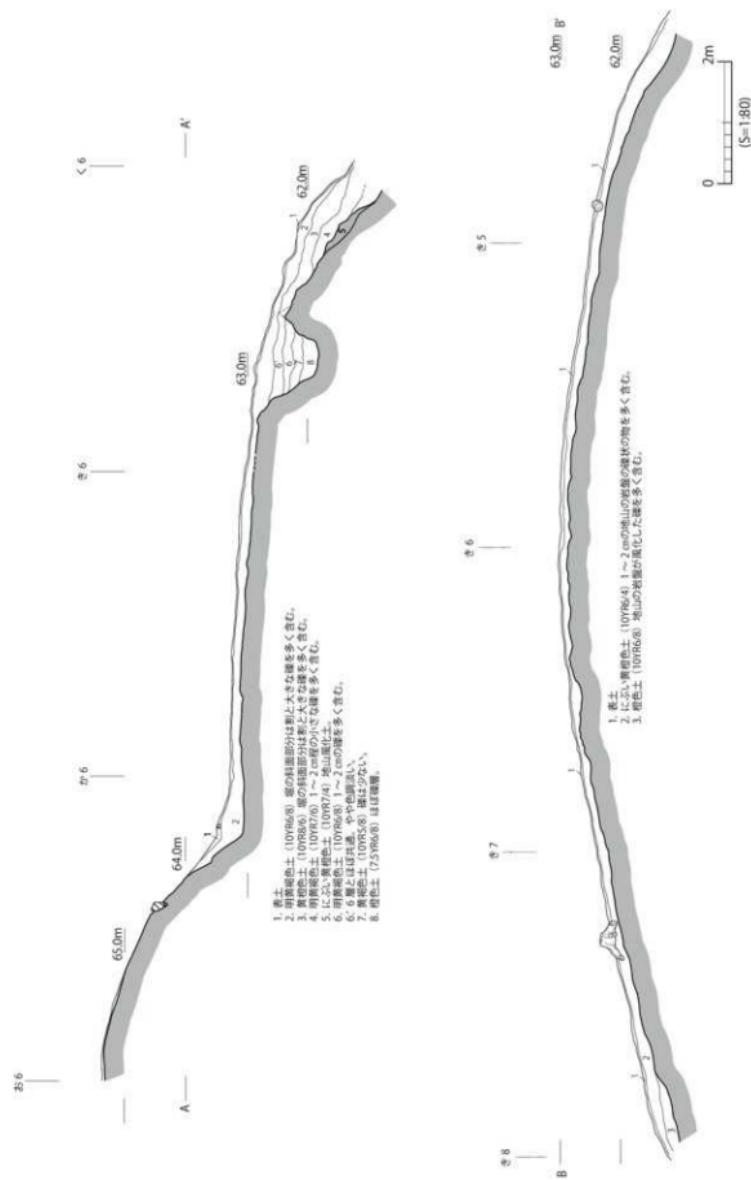
溝2の北側は、埋土の中層に10cm前後の礫を非常に多く含む明黄褐色礫層が、厚さ約50cm堆積する。その下には、1cm程度の小さな礫を均一に含む層が堆積している。床面から50cm程度まで自然に埋まった後、大型の礫を含む層で一気に溝を埋めたとみられる。完掘後の規模は、長さ9.7m、幅2.5～5mで、主軸方向はN-31°-Wである。岩盤を36～50°の角度でV字状に掘り込み、最高所には直線的な壁を造る。床面中央は20cmの幅で平坦に造られる。



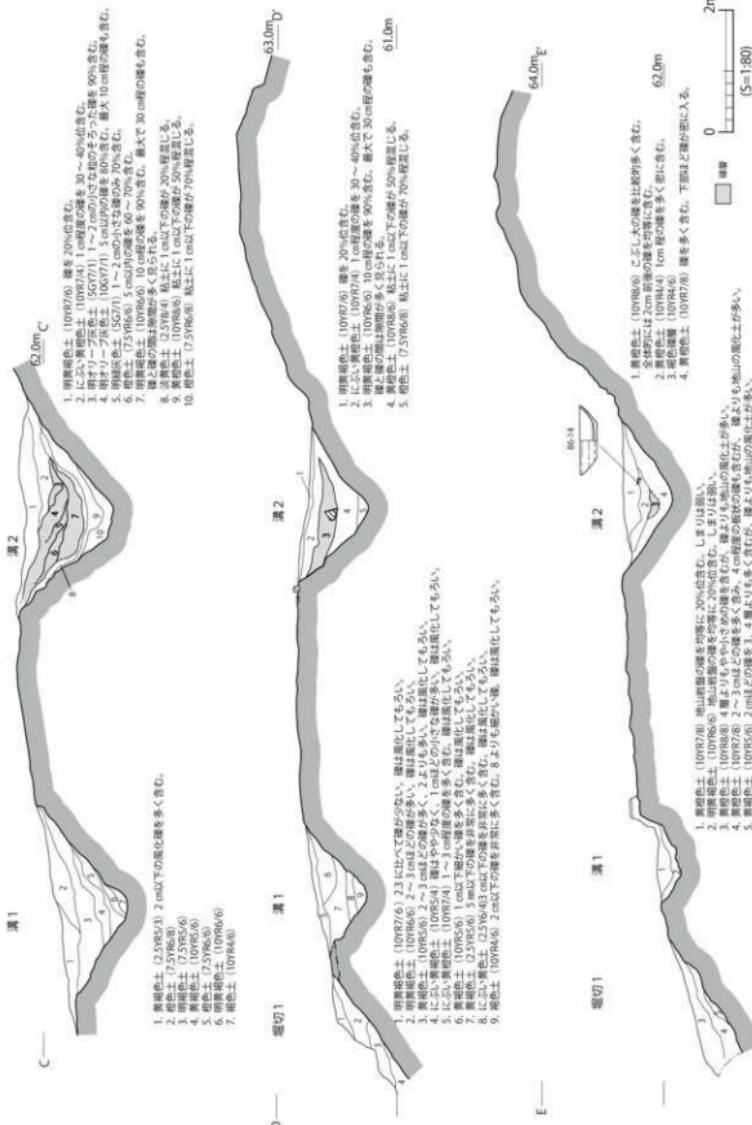
第40図 郭2全体図



第41図 郷2平面図



第42図 郡2土層断面図(1)



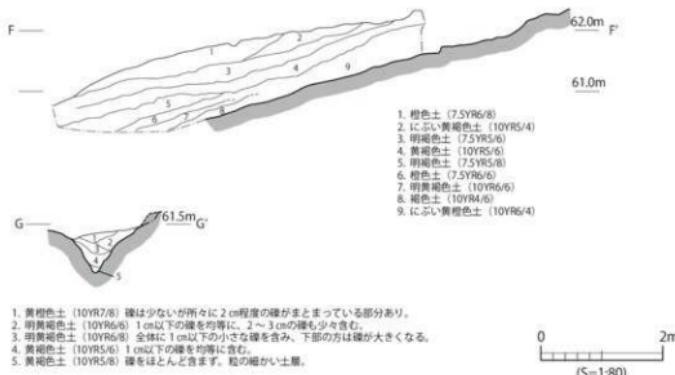
第43図 郡2 土層断面図(2)

溝2の南側は、埋土の下層に、10cm以下の礫を非常に多く含む明黄褐色礫層が、厚さ約20～30cm堆積する。その下には、1cm程度の小さな礫を均一に含む層が堆積している点は北側と同じである。南側は標高約60m付近で、溝の埋土を削って斜面下方に盛土し、古墓群1が造られる。完掘後の規模は、長さ12m、幅2.5～5mで、主軸方向はN-26°-Wである。岩盤を35～39°の角度でV字状に掘り込み、最高所には壁を造る。床面中央は50cmの幅で平坦に造られる。

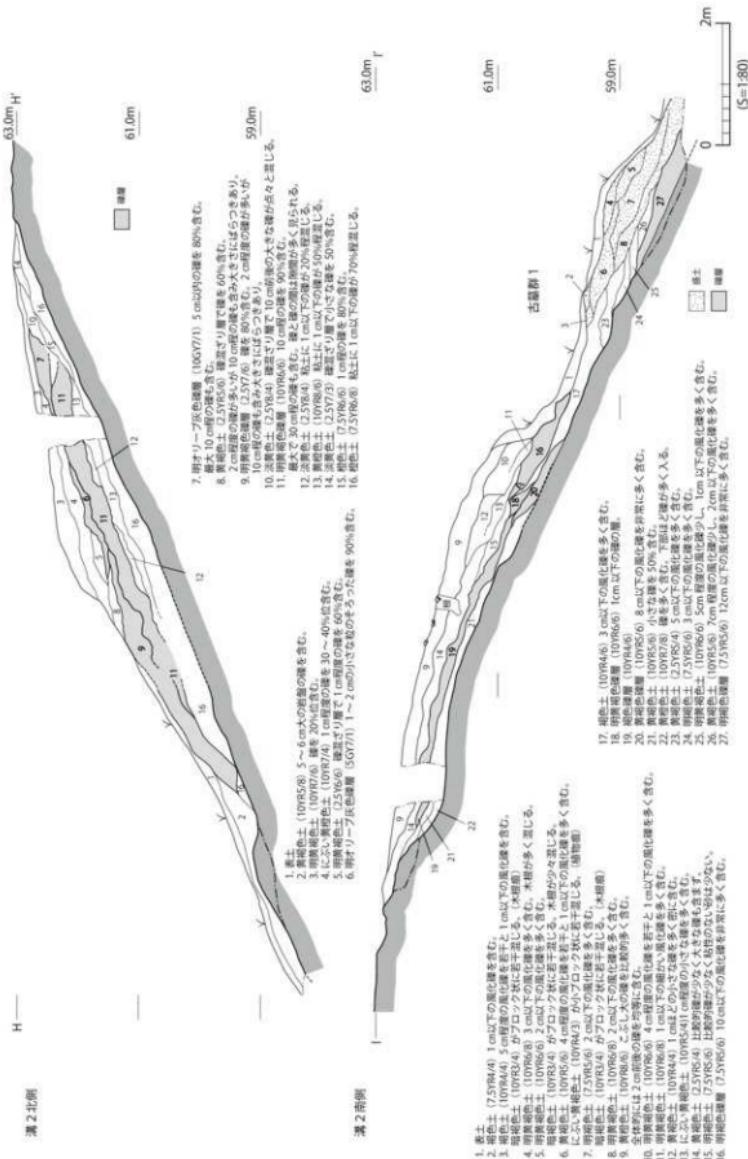
遺物は南側の2層上面で、土師器皿（第86図14・15）が2点出土している。14は正位置で置かれたように出土し、時期は16世紀後半頃とみられる。15もおよそ16世紀頃の土師器皿で、煤痕と灯芯の痕があるので灯明皿と判断した。

南北とも、溝の東側の肩と、土壘の西側斜面裾との間に、幅50cm程度の通路状の部分が掘り残される。ここが溝と土壘の境になるが、第43図の断面図で示したように、実際には土壘の西側斜面の傾斜がそのまま溝の傾斜になって溝の底まで続いている。

出土遺物が少なく、遺構の詳しい時期は不明だが、堀切1・2の丁度中間の位置に造られ、尾根筋に直交し、最高所に壁を作つて停止する様子は、堀切2の深掘部分や豊堀5と同様で、後に追加された防衛施設と考えられる。また、土師器皿の出土状況から、16世紀後半には半分以上埋まっていたとみられる。



第44図 溝1土層断面図



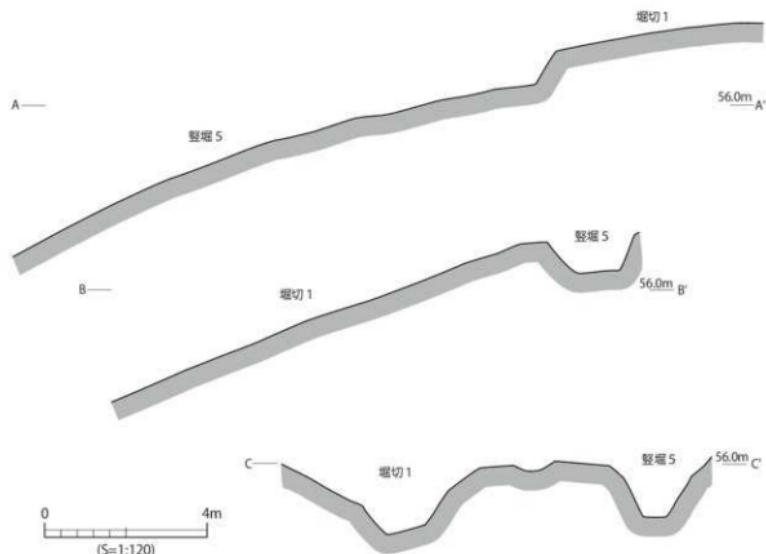
第45図 溝2土層断面図

堀切1（第46～48図、図版10・44～46）

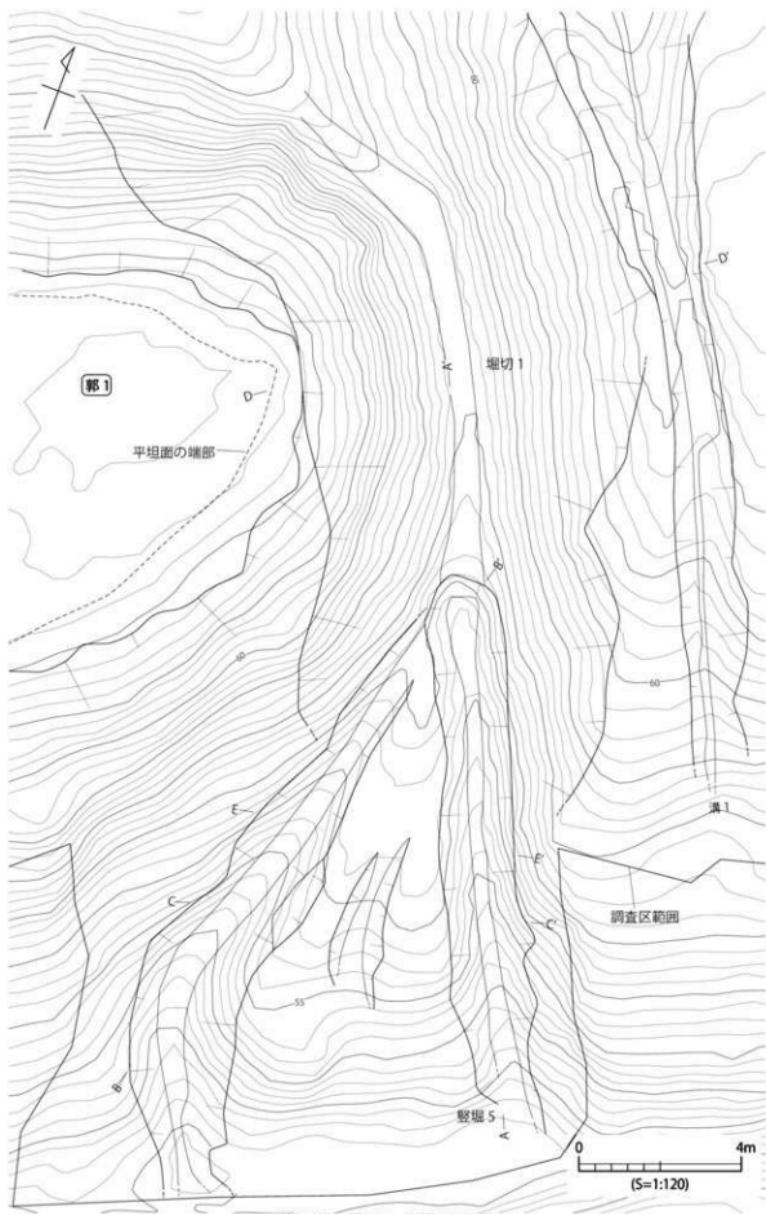
郭1と郭2の間に位置し、発掘調査前から幅約8m、郭と堀底との高低差が2.8mの大規模な堀切と認識されていた。発掘調査の結果、平面形は郭1に沿うように凸状になり、上端の最大幅は約10m、郭と堀底との高低差は、郭1が4.6m、郭2が4.8mであることがあきらかとなった。郭1を守る防護施設の中でも特に重要な位置にあり、岩盤を削った法面の角度は、郭2側が50°で郭1側は58°におよぶ急勾配である。堀切内には厚く崩落土が堆積し、中軸線上での深さは2m以上になった。遺構内には、土と礫層が交互に堆積し、特に礫層がまとまって堆積する時期が3回確認される。堀底は幅60cmの平坦な面になっており、通路として使用されたと考えられる。

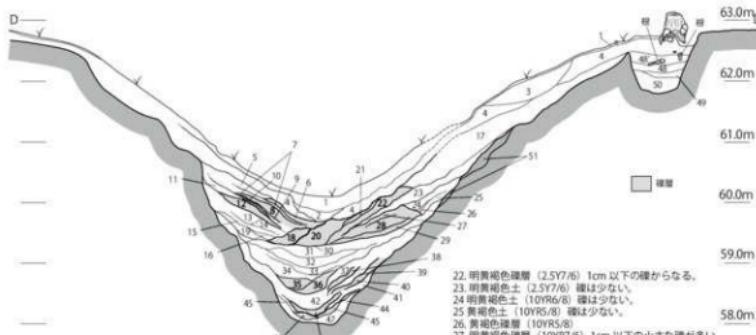
堀切1の北側は調査区外へ自然に下っていくが、南側はやや複雑である。発掘調査前は、堀切1は南へと広がらず、平面三角形の段状遺構に繋がっていると考えられた。しかし、段状遺構と考えた平坦面で遺構検出作業をおこなったところ、堀切1が郭1に沿って弧を描き、途中から南へ折れて調査区外へと続く遺構プランが検出された。堀切1の南側部分は、壁面の角度が53°～62°と急勾配で、堀底の幅は約60cmで、21°の緩い傾斜で南に下っていく。また、堀切1の中央部分から枝分かれし、まっすぐ南東へ伸びる溝のプランが検出された。調査の結果、堀切1よりも床面が一段深い豎堀であることを確認し、豎堀5とした。壁面の角度は60°～71°とさらに急勾配で、堀底は約50cmの幅で平坦に造られ、15°の緩い傾斜で南東に下っていく。堀切1と接する部分は高さ約80cmの壁になっている。豎堀5は、形状や造られた位置から、後に追加された防護施設と考えられる。

堀切1で出土する遺物は少なく、大型品の青花碗（第80図6）や、瓦質土器の火鉢（第85図5）のように基本的に郭1の遺物と接合する。また、30層以上では近世の遺物が出土している。

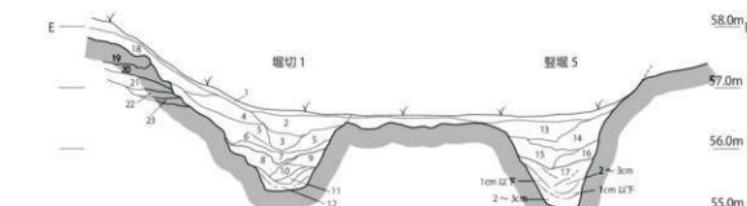


第46図 堀切1・豎堀5断面図





1. 表土。
 2. にぶい赤褐色土 (20YR5/4) しきり層の確はない。
 3. 深褐色土 (2.5YR8/6) 2cm 厚の土を含む。5cm 以上のものもあり。
 4. にぶい赤褐色土 (10YR7/4) しきり層はあまり無い。1cm 以下の確を含む。10% くらいが。
 5. 明黄色褐色土 (10YR6/6) 1cm 以下の確からなる。
 6. 明黄色褐色土層 (10YR7/6) 2cm 以下の確からなる。
 7. 棕色土 (7.5YR8/6) 1cm 以下の確を多く含む。
 8. 淡黃褐色土層 (7.5YR8/6) 2cm 以下の確からなる。
 9. 黄褐色土 (7.5YR7/8) 5mm 以下の確を多く含む。
 10. 棕色土層 (7.5YR8/6) 2cm 以下の確からなる。
 11. 淡黃褐色土 (7.5YR6/6) 2cm 以下の確からなる。
 12. 棕色土層 (7.5YR6/6) 2cm 以下の確からなる。
 13. 明黄色土 (7.5YR7/6) 確は少ない。
 14. 棕色土 (7.5YR8/8) 2cm 以下の確からなる。上半は 1cm 以下のものが多い。
 15. 明黄色褐色土 (10YR7/6) 確は少ない。枯れ物がある。
 16. 黄褐色土 (10YR5/6) 確は少ない。
 17. 明黄色褐色土 (2.5YR7/6) 確は少ない。
 18. 淡黃褐色土層 (7.5YR7/6) 1cm 以下の確からなる。
 19. 淡黃褐色土層 (10YR7/6) 2cm 以下の確からなる。
 20. 明黄色褐色土層 (10YR7/6) 5cm 厚の確が多く含まれる。
 21. にぶい黄褐色土層 (10YR5/4) 5cm 程の確からなる。
22. 明黄色褐色土層 (2.5Y7/6) 1cm 以下のがらなる。
23. 明黄色褐色土 (2.5Y7/6) 確は少ない。
24. 黄褐色土 (10YR6/6) 確は少ない。
25. 黄褐色土層 (10YR7/6) 確は少ない。
26. 黄褐色土層 (10YR7/6) 1cm 以下がらなる。
27. 黄褐色土層 (10YR7/6) 1cm 以下小さな確が多い。
28. 黄褐色土層 (10YR7/6) 1~2cm の確からなる。
29. 黄褐色土層 (2.5Y7/6) 3~5cm 程の確からなる。
30. 棕色土 (5Y4/1) 厚さ 3~4cm の旧赤土層
31. 淡黃褐色土 (2.5Y7/4) 確は少ない。
32. 明黄色褐色土 (10YR7/6) 2~3cm の確を含む。
33. 明黄色褐色土 (10YR7/6) 32 より確が多い。
34. 淡黃褐色土層 (10YR7/6) 1cm 以下がらなる。
35. 淡黃褐色土層 (10YR8/4) 5cm 以下のがらなる。
36. 黄褐色土層 (10YR8/6) 1cm 以下のがらなる。
37. 淡黃褐色土 (7.5YR8/6) 1cm 以下のがらなる。
38. 棕色土層 (7.5YR6/6) 1cm 以下のがらなる。
39. 淡黃褐色土 (7.5YR8/6) 1cm 以下のがらなる。
40. 棕色土層 (7.5YR6/6) 1cm 以下のがらなる。
41. 淡黃褐色土層 (7.5YR6/6) 1cm 以下のがらなる。
42. にぶい黄褐色土層 (10YR7/4) 確土上が 50%~50%
43. にぶい黄褐色土層 (10YR5/4) 1cm 以下の確層。
44. 黄褐色土層 (10YR7/8)
45. 黄褐色土層 (10YR7/8) 2~3cm の確からなる。
46. 棕色土層 (7.5YR6/6) 1cm 以下のがらなる。
47. 淡黃褐色土層 (10YR8/3)
48. 淡黃褐色土層 (10YR7/6) 1~2cm の確を多く含む。
49. 淡黃褐色土層 (10YR7/6)
50. 棕色土 (7.5YR6/8)
51. にぶい黄褐色土 (10YR7/4)

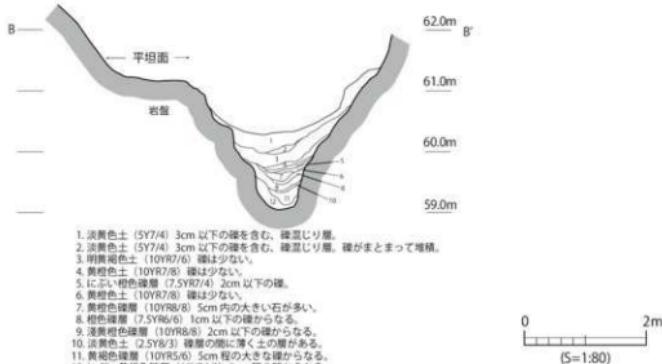


1. 表土。
2. 明黄色褐色土 (10YR6/6) 確は少ない。
3. 明黄色褐色土層 (10YR6/6) この部分だけ 2~3cm の確が混ざる。
4. 明黄色褐色土 (10YR6/6) 確は少ない。
5. にぶい黄褐色土 (10YR6/6) 確は少ない。
6. にぶい黄褐色土 (10YR6/6) 5 層中のやや確の多い部分。
7. 明黄色褐色土 (7.5YR5/6) 確は少ない。
8. 棕色土 (7.5YR6/8) 確が多い。3~4 割強。
9. 棕色土 (7.5YR6/8) 確が多い。3~4 割強 (8 層よりやや少ない)。
10. 棕色土 (7.5YR6/8) 確混合り層。下の層のものみレンガ色の明るい棕色土に確が多く混ざる。
11. 棕色土 (7.5YR6/8) 確混合り層。この層のものみレンガ色の明るい棕色土に確が多く混ざる。
12. 明黄色褐色土 (10YR7/6) 上半は確が多い。
13. にぶい黄褐色土 (10YR7/4) 確は少ない。
14. にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 1cm 以下の確を多く含む。
15. にぶい黄褐色土 (10YR5/3) 2~3cm の確を多く含む。
16. 明黄色褐色土 (10YR5/6) 1cm 以下の確を多く含む。
17. 明黄色褐色土 (10YR5/8) 中央部分と底は 2~3cm の確、壁際は 1cm 以下の細層。
18. 明黄色褐色土 (10YR6/8) 確は少ない。
19. にぶい黄褐色土 (10YR7/8) 確は多い。
20. 淡黃褐色土層 (7.5YR7/8) 確を複数した確層と泥炭じり。
21. 棕色土 (7.5YR6/6) 確が複数した確層と泥炭じり。
22. 淡黃褐色土 (2.5Y5/2)

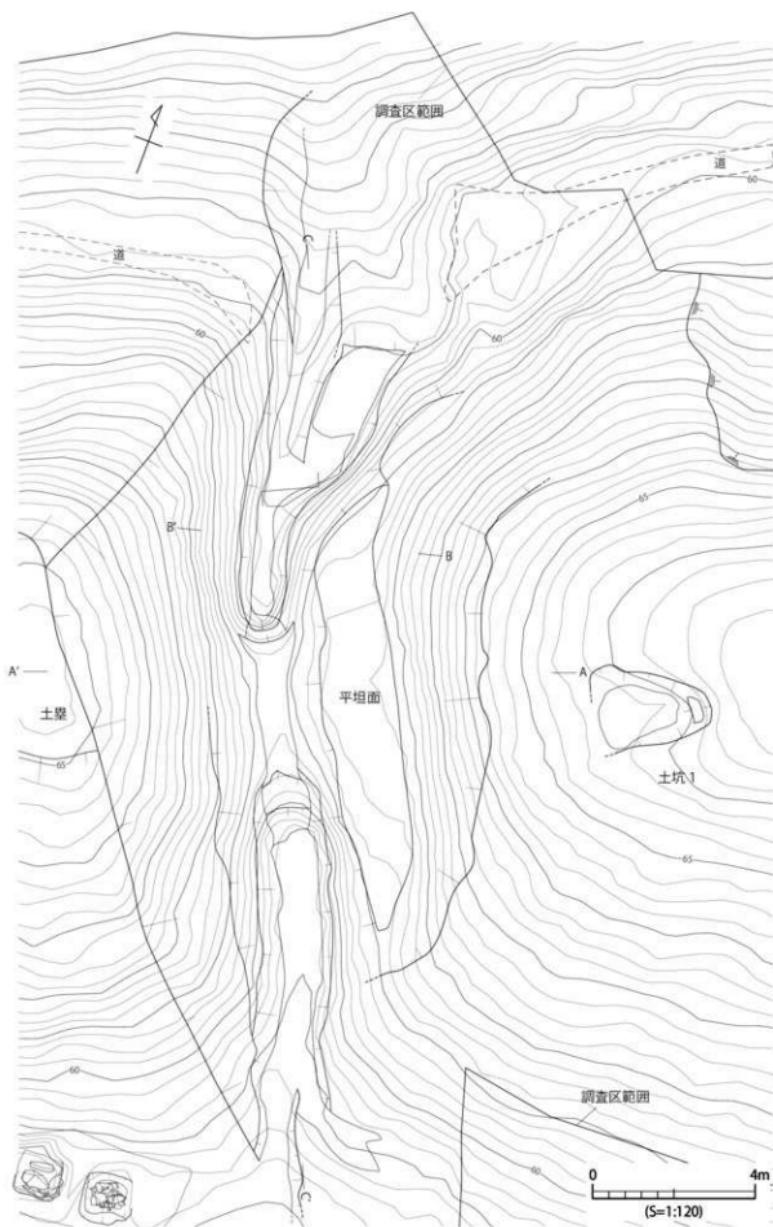
第48図 堀切1・豎堀5土層断面図

堀切2(第49~51図、図版11・47・48)

郭2の東側に位置し、堀切2までを域域として調査をおこなった。発掘調査前から幅約11m、土壌頂部と堀底との高低差が約4mの大規模な堀切と認識されていた。発掘調査の結果、堀底の中軸線部分が障子堀状に掘り残され、南北は調査前の地表面から1.4m深くなることがあきらかとなつた。東側の尾根筋を遮断する最も重要な位置にあり、岩盤を削った法面の角度は、土壌側が約55°におよび、南北の深堀部分はさらに垂直に近い角度で掘り下げられている。この一段深い部分は、斜面下方で枝分かれし、東西方向の道と接続するようにも見える。また、堀切の東側では、発掘調



第49図 堀切2土層断面図

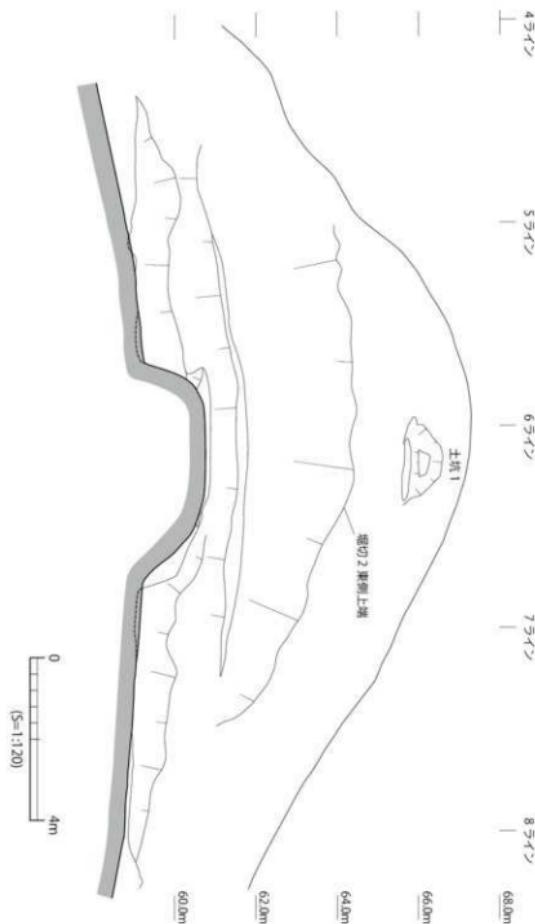


第50図 堀切2平面図

査前に全く認識できていなかった平坦面が検出された。平坦面の規模は、長さ5.5m、幅約90cmで、地山を丁寧に加工している。この位置に平坦面が造られた目的は不明だが、あるいは、古い段階の堀切の底になる可能性も考えられる。堀切2では、複数の遺構が複雑に組み合わさって検出されており、役割の重要性から何度も改修が行われていると考えられる。

土坑1（第52図、図版48・49）

堀切2の東側斜面に位置し、床面の規模は、長さ2m、幅1.5mで、主軸方向はN-64°-Eである。遺物は出土していない。遺構の時期は不明だが、堀切2中軸線上に位置する点は注意される。



第51図 堀切2実測図

豊堀1・2 (第53・54図、図版49～51)

溝1の北端と2本並んで隣接する。63～68°の急角度でV字に掘り込み、床面は豊堀1が約36°、豊堀2が28°の角度で傾斜している。斜面の崩落によって埋まつた後、再度掘り直している。豊堀間の盛土により深さは約1.7～2mになる。

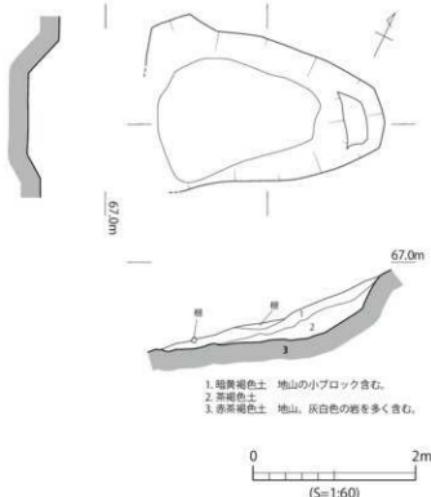
遺物は出土していない。

土坑4・豊堀4 (第55図、図版52・53)

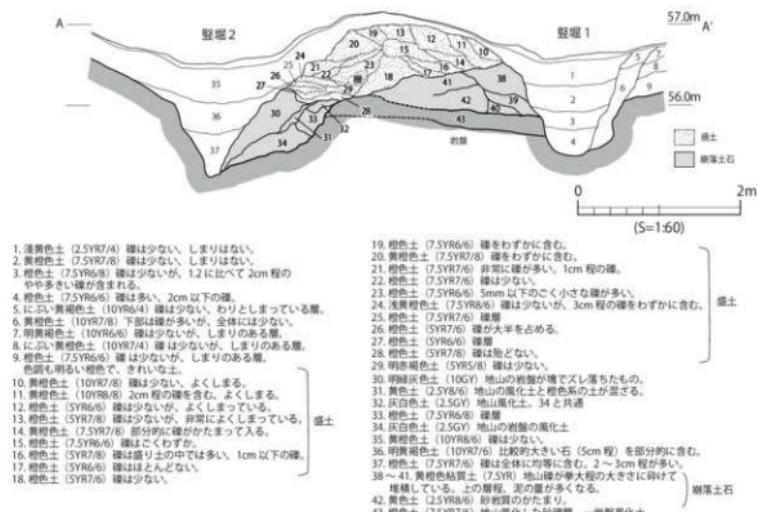
郭2の北側斜面下方に位置し、溝2の北端と並んで隣接する。土坑4は、当初地形の窪みを豊堀と認識していたが、斜面上方からの雨水を集める井戸と判断した。

豊堀4は形状から豊堀の先端部のみが検出できたと考えられる。断面はコの字状で最上部は壁になる。

遺物は出土していない。



第52図 土坑1実測図

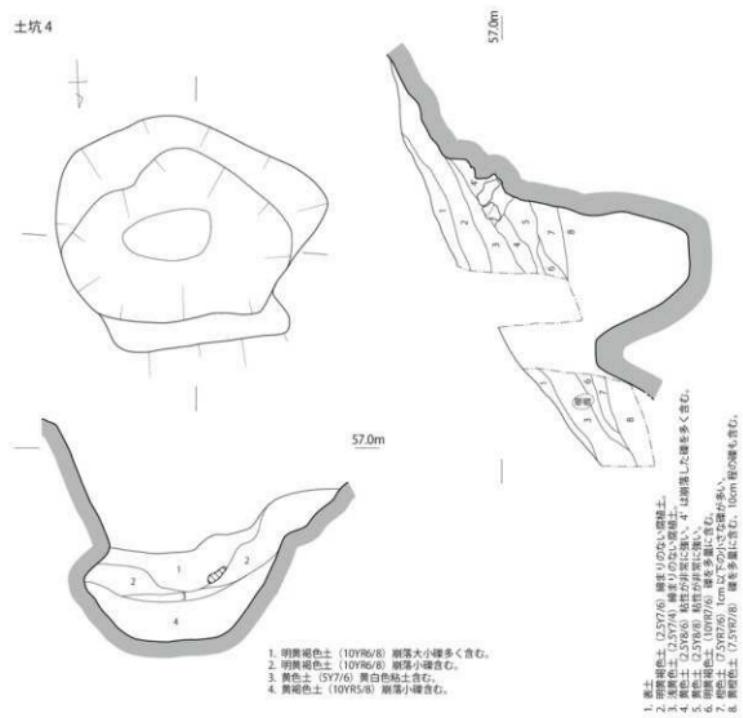


第53図 豊堀1・2土層断面図

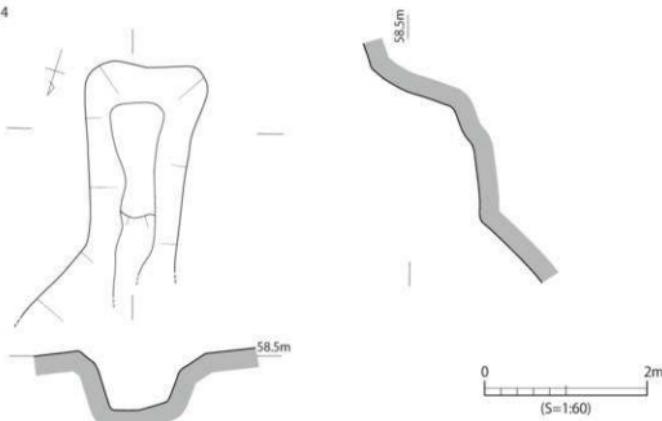


第54図 豊堀1・2実測図

土坑4



豊堀4



第55図 土坑4、豊堀4実測図

3. 郭3と周辺の検出遺構

郭3（第12・56図、図版12・55～57）

郭1の南西方向に位置し、規模は16m×11mで、郭1西側との高低差は約10.5mである。調査の結果、掘立柱建物1棟、柵列1列、土坑1基、竪堀3本、溝3条等の遺構が検出された。

建物、柵列等の遺構は、表土下の耕作土と地山ブロックを多く含む黄褐色土の下の岩盤を削平した平坦面で検出した。竪堀は、郭の肩部分の岩盤面で、大型の地山ブロックを含む橙色土や黄褐色土により埋められた状態で検出した。検出した遺構のうち、柵列は柱穴の深さから、竪堀は高所側の平面形から、本来の遺構面を大きく削平されているとみられる。また、郭3の東側では竪堀と溝状遺構が検出されたが、近世から近代に造られたとみられる段状遺構に削平されていた。

以上の状況から、当初郭3は、柱列1を中心とする竪堀9～11に囲まれた小規模な平坦面で、後に郭全体を水平に削平して竪堀を埋め、平坦地を拡大して掘立柱建物8を建てたと考えられる。

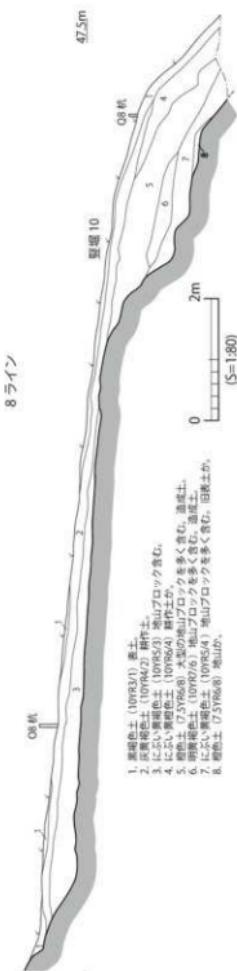
遺物はほとんど出土せず、郭1から転落した備前焼と瓦質土器の擂鉢破片が少量出土したのみである。

建物8（第57図、図版12・55・57）

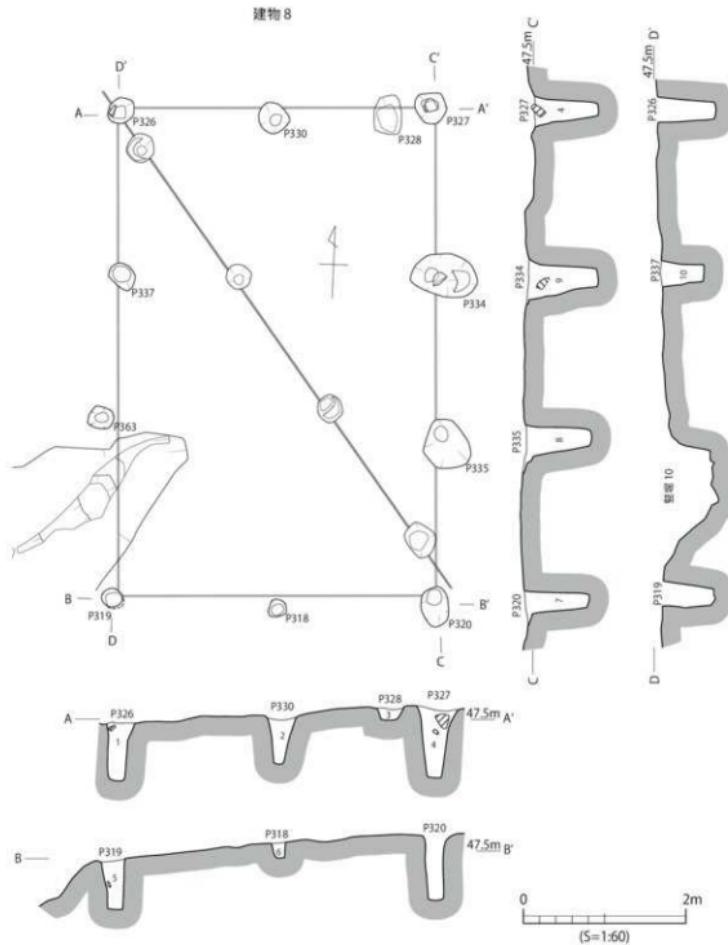
郭3のほぼ中央に位置し、柱列1、竪堀10と重複する。2間(3.95m)×3間(6m)の掘立柱建物で、主軸方向はN-2°-Eで、ほぼ南北方向である。桁行方向の柱穴は大きく、深さが70～80cm、床面の径は15～20cmある。郭1の段状遺構1・2の床面で検出された柱穴と同規模のもので、床面はほぼ残っていると考えられる。南側の梁間の中心にある柱穴は、掘方が深さ20cmしかないが、床面の径は15cmで他の柱穴とほぼ同じである。上屋を建てる際、最後に柱が置かれた可能性が考えられる。また、柱の配置は整っているが、西側桁行のP363は本来の柱位置からやや北西にずれた位置に柱穴が掘られている。これは、本来の位置に竪堀10が掘られており、竪堀を埋め戻した部分でなく、岩盤に柱穴を掘ることを優先したためと考えられる。

床面の範囲内で備前焼の擂鉢（第81図10）が出土しているが、破片の出土状況から、郭1西側から転落した遺物と判断される。

上面を削平された柱列1、竪堀10と重複し、建物の方向が山城遺構の主軸方向と一致しないことから、山城と異なる時期の建物である可能性が高い。

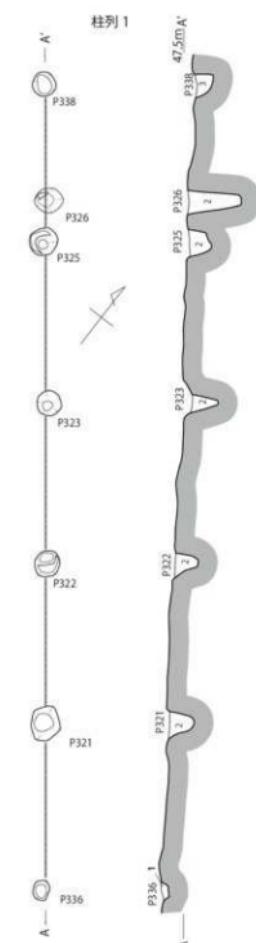


第56図 郭3土層断面図



- に含む黄色土 (2.5Y6/4) 1cm程度の地山ブロックを多く含む。
- に含む黄褐色土 (10YR5/4) 5cm程度の地山ブロックを含む。1cm以下の地山ブロックを多量に含む。灰片を微量に含む。
- に含む黄褐色土 (10YR6/3) 2cm以下の地山ブロックを多く含む。
- に含む黄褐色土 (10YR6/3) 5mm以下の地山ブロックを多く含む。
- に含む黄褐色土 (10YR5/4) 3cm程度の地山ブロックを含むG。
- に含む黄褐色土 (10YR6/3) 5mm以下の地山ブロックを含む。
- に含む黄褐色土 (10YR5/4) 地山ブロックを多く含む。
- 素褐色土 5cm程度の地山ブロックを含む。2mm以下のブロックを含む。
- に含む黄色土 5mm以下の地山ブロックを多量に含む。
- 灰黄褐色土 (10YR4/2) 3cm程度の地山ブロックを含む。

第57図 建物8実測図



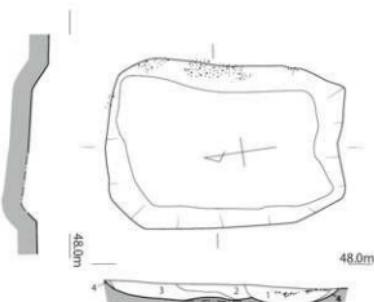
第58図 柱列1実測図

柱列1(第58図、図版12・55・57)

郭3の中央に位置し、建物8と重複する。ほぼ2m間隔で6基のピットが並ぶことから、柵列や板塀の柱跡と判断した。主軸方向はN-52°-Wで、郭1・3の主軸方向とほぼ一致する。各ピットの平面規模は建物8の南・北・西側の柱穴と大差ないが、深さは10~40cmと浅く、本来の掘り込み面は50cm前後削平されたと考えられる。柱列1の西側に直交する方向で竪堀10が、北側に並行する方向で竪堀11が掘られている。位置関係や削平の状況から、同時期の遺構である可能性が考えられる。

土坑3(第59図、図版57・58)

郭3の南東部で、建物8、柱列1の東側に隣接する。規模は長さ145cm、幅105cm、深さ10cmである。壁面が被熱により赤く変色し、埋土にも炭が多く含まれる。地山上層の黄褐色土(第56図3層)から掘り込まれており、柱列1や竪堀10・11が削平された後の遺構と判断される。遺物は出土していない。建物8と主軸方向が近いので、同時期の遺構の可能性が考えられる。

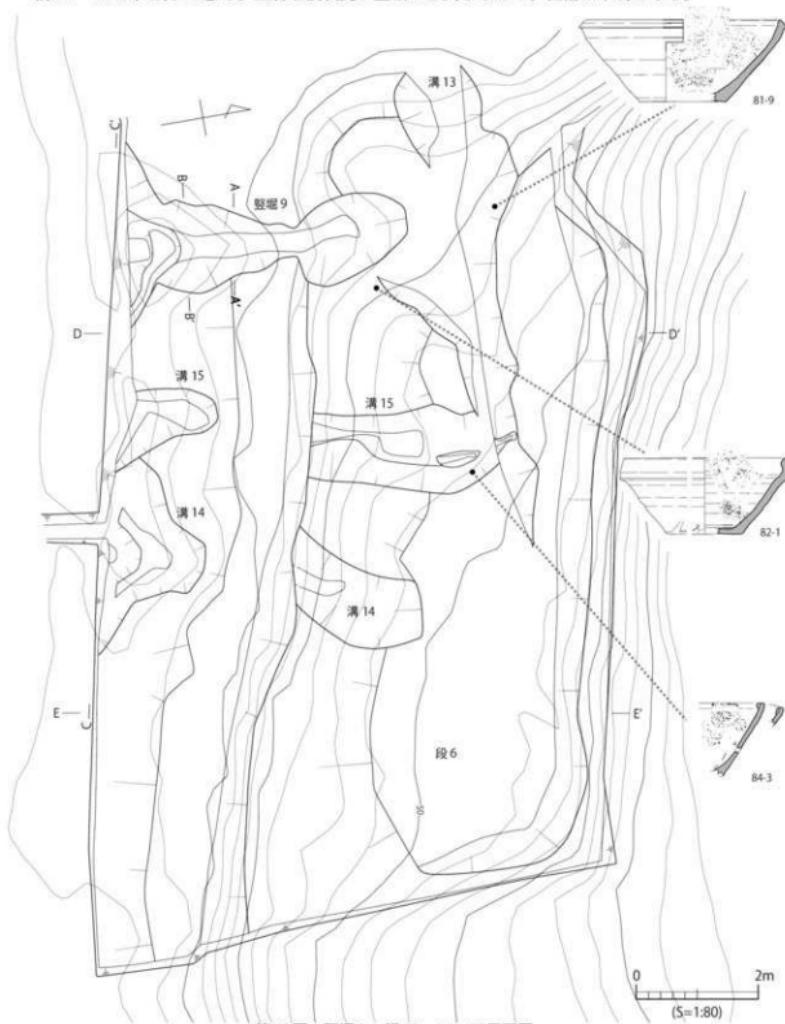


第59図 土坑3実測図

豊堀9、溝14・15（第60・61図、図版55・58・59）

郭3の東側で、溝14・15と並行する位置で検出した。岩盤を35～50°の角度でV字状に掘り込み、床面は30cm前後の幅で平坦に造られる。直交方向で重複する、段状遺構6と通路に削られてい るため、本来の平面規模は不明だが、壁面や床面の形状は、豊堀10・11と似ている。豊堀9を検出した位置は、傾斜が約26°と比較的緩いので、豊堀を設けて防御性を高めたと考えられる。

溝14・15は、残りが悪く、土層堆積状況が豊堀9と異なるため、性格は不明である。

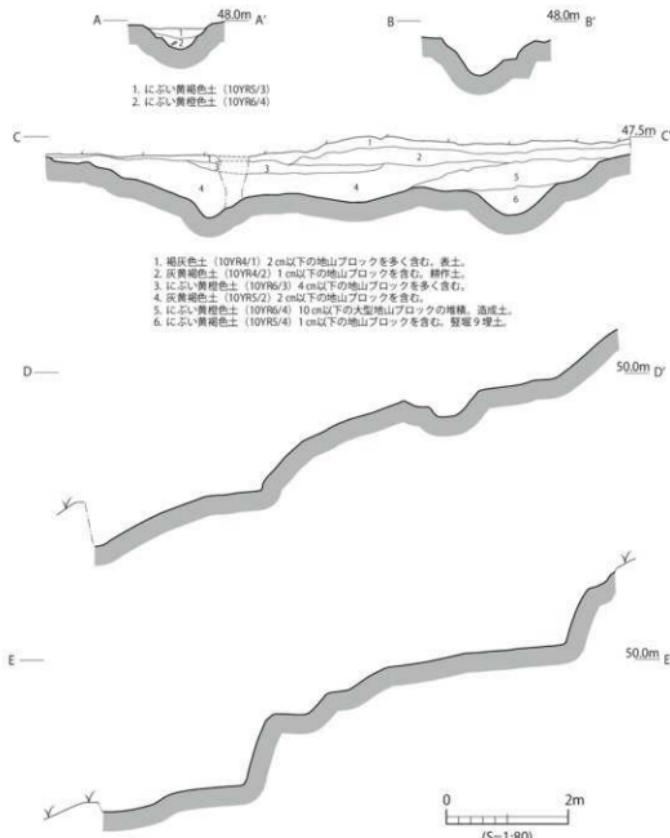


第60図 豊堀9、溝13・14・15平面図

段状遺構6、溝13（第60・61図、図版58）

郭3の東側に位置する段状遺構で、発掘調査前から長さ12m、幅4mの平坦面が確認されていた。表土下で岩盤を加工した遺構面が検出されたが、建物、柱穴等は確認されなかった。遺物は、備前焼と瓦質土器の擂鉢（第81図9、第82図1、第84図3）が出土しているが、同一個体の破片の出土状況から、郭1から転落した遺物と考えられる。段状遺構6の下方には、通路とみられる幅80cm前後の細長い平坦面が造られている。この通路と共に竪堀9・溝13・14・15を削平しているので、近世以降の耕作に伴う平坦面の可能性が高い。

その他、段状遺構6の西側で検出した溝13は、西端は土坑3の北側に、中央は竪堀9の北側に接している。段状遺構6は、郭3や通路より一段高い位置に造られており、溝13は検出位置から、出入り口と考えられる。

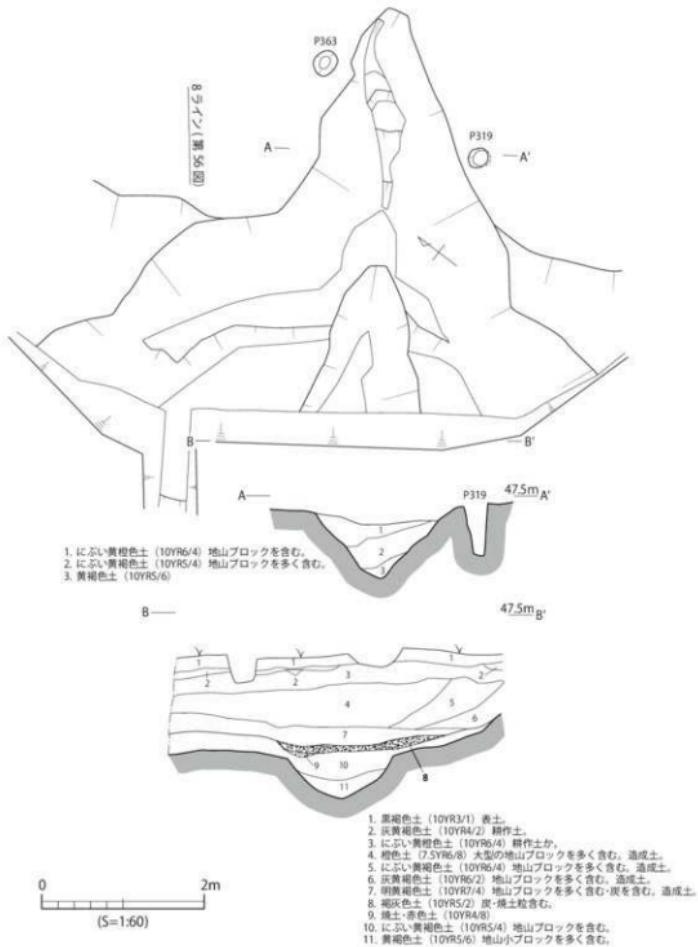


第61図 竪堀9、溝13・14・15断面図

豊堀10（第62図、図版12・55・57・60）

郭3の西側、建物8と重複する位置で検出した。岩盤を約45°の角度でV字状に掘り込み、床面中央は約23°の角度で傾斜している。床面は、調査区西壁付近で豊堀10を中心に、南北4m以上、1.9m以上の範囲で平坦面が造られ、さらに東側は一段高い位置に、凸状の平坦面が造られる。平面形は、高所側の郭3中央に向かって、三角形状に上端が狭くなるが、郭3の削平によるものと考えられる。本来は、溝2、堀切2、豊堀5のように、高所側の平面は方形に近く、壁になっていた可能性が考えられる。埋没後、しばらくして炭、焼土を多く含む層が堆積している。

床上で出土した備前焼の搖鉢（第82図3）は、郭1から転落した遺物と考えられる。

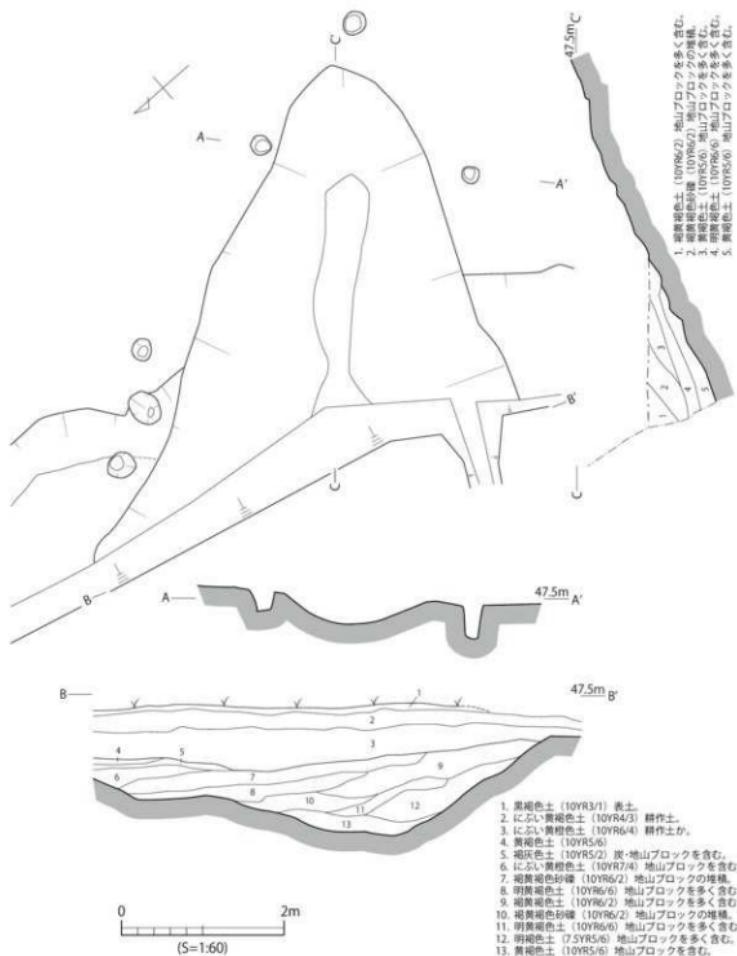


第62図 豊堀10実測図

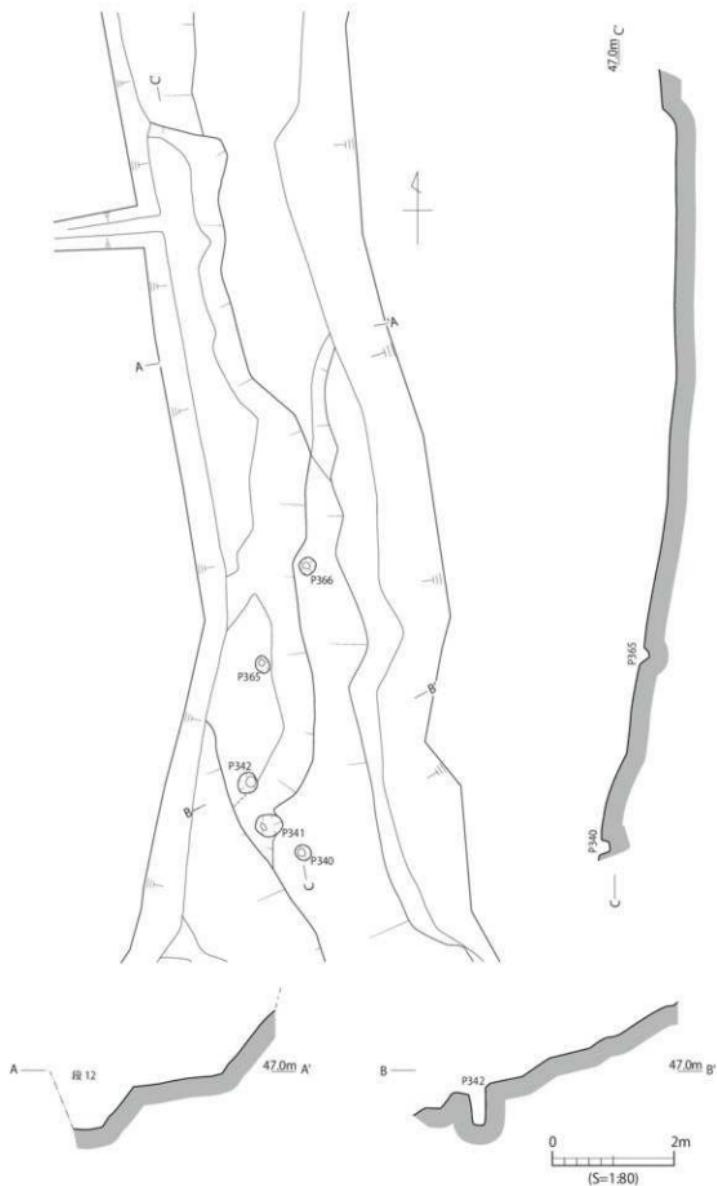
豊堀 11 (第 63 図、図版 12・13・55・61)

郭 3 の北側、段状遺構 12 の南側と接する位置で検出した。岩盤を 22 ~ 40° の角度で V 字状に掘り込み、床面は中央に幅 25 ~ 50cm の平坦面があり、約 35° の角度で傾斜している。平面形は、豊堀 10 同様、高所側の郭 3 中央に向かって、三角形状に上端が狭くなるが、郭 3 の削平によるものと考えられる。遺物は出土していない。

また、豊堀 11 の調査区西外側で、幅 7 ~ 8m の地形の窪みを確認している。造成土法面を挟んだ豊堀 11 の続きとみられ、調査区の外側に山城関係の遺構が埋没していることを示唆している。



第63図 豊堀 11 実測図



第64図 段状遺構12実測図

段状遺構 12（第64図、図版61）

郭3と郭4の間に位置する、幅3.5～4mの細長い平坦面で検出した。発掘調査前は、南側に隣接する竪堀11同様、地山ブロックを多く含む黄褐色土で完全に埋め戻されていた。床面の規模は長さ11m、幅1.2m以上、検出面から床面までの深さは72cmで、岩盤を掘削して造られている。床面は南側が一段高く、ピットが5基検出された。北側は、床面が長さ7.1mにわたって平坦に加工されているが、壁溝や柱穴、焼土面等は確認されなかった。遺物も出土していないため、遺構の詳しい時期や性格は不明である。急傾斜地の細長い平坦面の下方に立地し、床面の片側が一段高くなりピットが検出される点は、石組除去後の段状遺構16（図版76）と似ている。

4. 郭4と周辺の検出遺構

郭4（第12・65・66図、図版13・62）

郭1の北西方向に位置し、規模は約20m×5m以上で、郭1北側との高低差は約12.5mである。調査の結果、柱穴群、竪堀1本、溝1条等の遺構が検出された。柱穴群は、表土下の地山風化礫を多く含む褐色土下の岩盤を削平した平坦面で検出した。竪堀は、郭の肩部分の岩盤面で、5～10cmの大型の地山風化礫を非常に多く含む赤褐色土により埋められた状態を検出した。検出した遺構のうち、浅いピットと竪堀は、深さや平面形から本来の遺構面を現在の平坦面によって削平されているとみられる。遺物はほとんど出土せず、郭1から転落した備前焼等が少量出土したのみである。

柱穴群（第65・66図、図版62・63）

郭4では、地山面でピットを34基検出した。郭3と同様、掘立柱建物の柱穴とみられる深さ60～70cmのものと、深さ20cm程度のごく浅いものがある。郭3のように建物や柵列の並びを復元できなかった。調査区の西外側には、さらに2m程度平坦な地形が続いており、柱穴の分布範囲も広がっている可能性が考えられる。柱穴内には柱痕部分に石が入るものもあり、P362の中には茶白（第88図2）が入っていた。これらの柱穴の詳しい時期は不明だが、深い柱穴は竪堀12を削平した平坦面から掘られているので、山城より後の遺構である可能性がある。

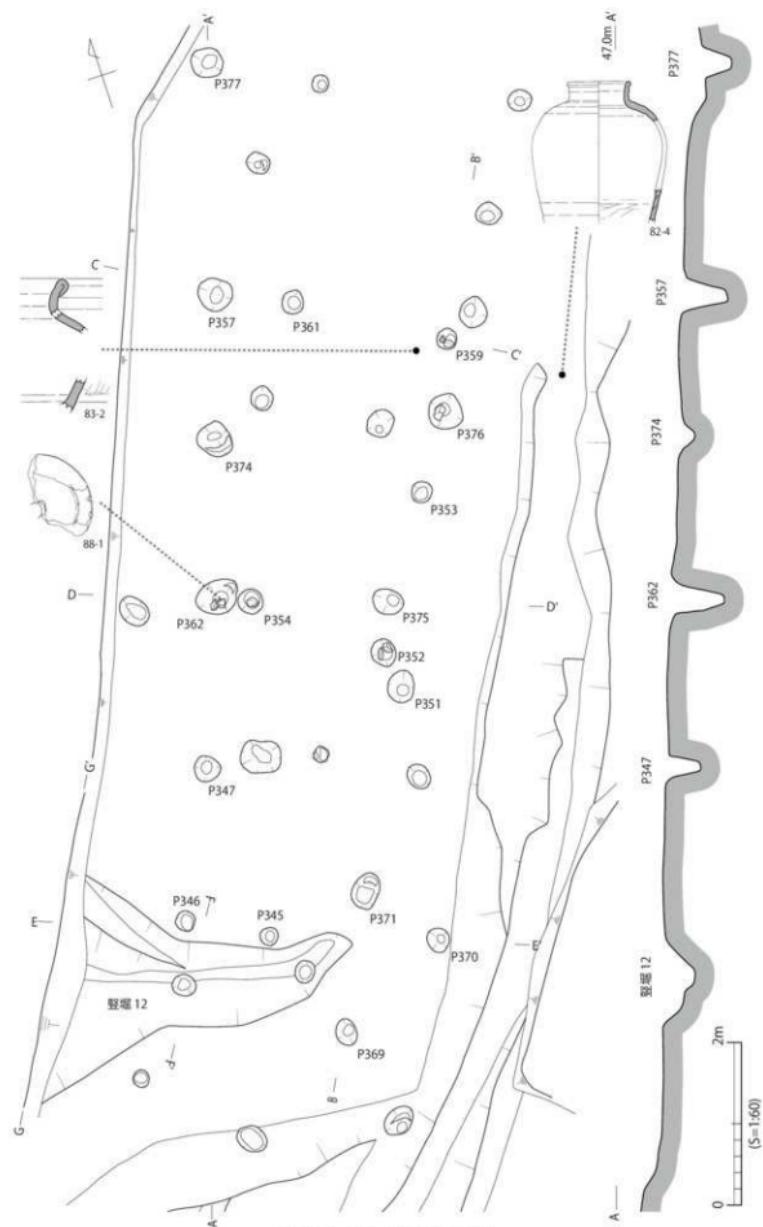
竪堀12（第65・66図、図版62～64）

郭4の南側、柱穴群と重複する位置で検出した。発掘調査前は、完全に埋められ全く認識できなかった。岩盤を26～30°の角度でV字状に掘り込み、床面は中央に幅15～20cmの平坦面がある。平面形は、竪堀10・11同様、高所側の東に向かって、三角形状に上端が狭くなるが、郭4の削平によるものと考えられる。遺物は出土していない。

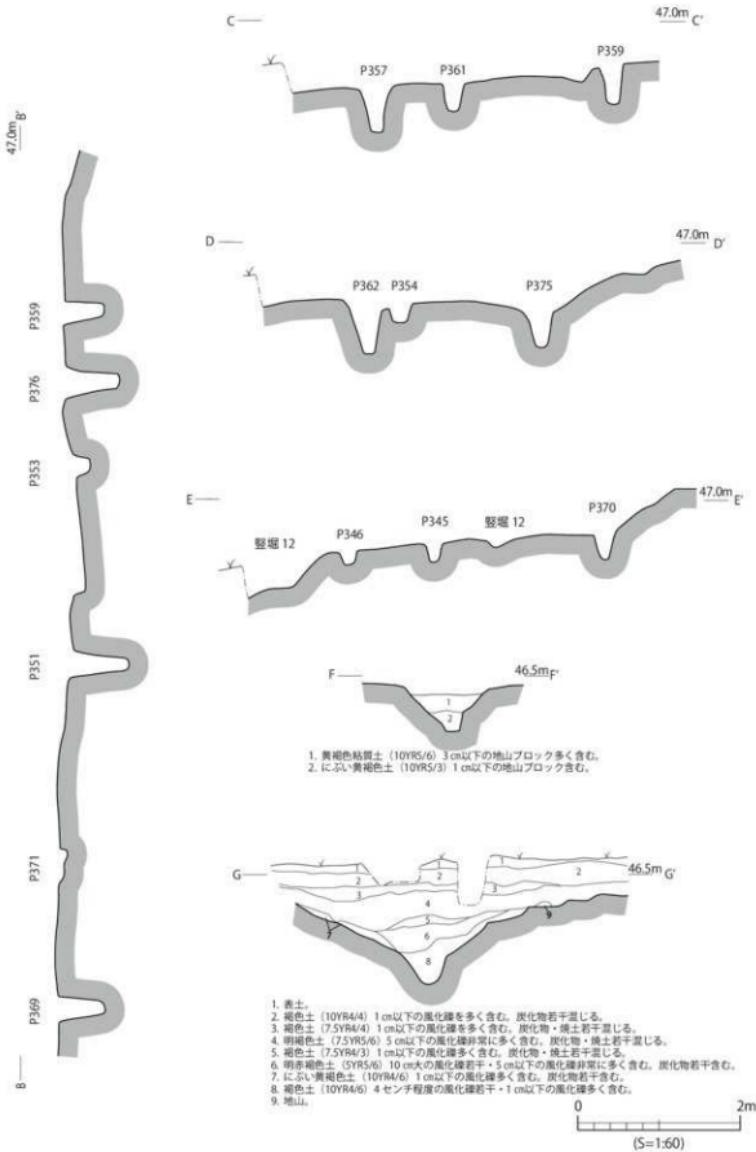
竪堀12の調査区西外側の下方には、長さ25mの平坦面をもつ段状遺構5があり、その下方で地形の窪みが確認できた。竪堀11のように、造成土を挟んだ竪堀12の続きの可能性が考えられる。

溝11（第67図、図版65）

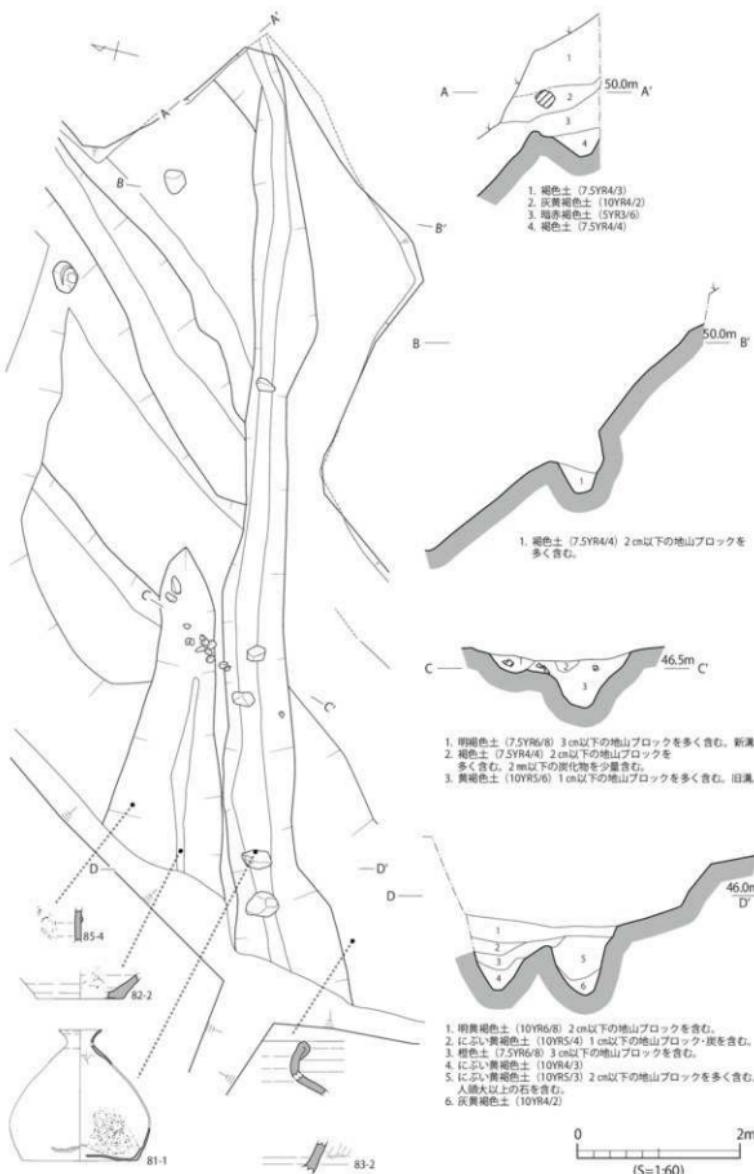
郭4の南側に位置し、郭4の南東斜面から、東西方向に伸びて調査区西外側へ続いている。岩盤をU字状に掘り込み、床面には幅20～30cmの平坦面がある。東端で北東方向に曲がり、郭1北側斜面で検出した段状遺構13に接続することが、H・Jラインの土層断面から判明している。郭3と郭4を結ぶ通路状の平坦面に切られ、そこから斜面下方にかけて、北側に並行する類似の溝が検出されている。遺物は郭1から転落した朝鮮陶器、備前焼、瓦質土器の他、拳大から人頭大の石が出土している。遺構の形状や北側斜面の遺構との関係から、通路の可能性が考えられる。



第65図 郭4・豊岡12実測図



第66図 郷4・豊堀12断面図



第67図 溝11実測図

5. 郭1北側斜面の検出遺構

郭1周辺の斜面は、切岸によって勾配が急にされている。北側の斜面は、傾斜が $46 \sim 49^\circ$ と特に急だったので、当初遺構は存在しないと考えていた。しかし、標高56m前後で傾斜が 30° 前後に緩くなり、そこから下方で段状遺構6か所、竪堀3本、石組遺構1基が検出された。東側の堀切1、溝1・2と北側斜面の竪堀が並ぶ様子は、麓から眺めた時の視覚的な効果を狙ったと考えられる。

竪堀6・段状遺構14（第68図、図版66・67）

郭4の東側斜面の、段状遺構16の南側で検出した。竪堀6は岩盤を約 45° の角度でV字状に掘り込み、床面は中央に幅15～30cmの平坦面があり、約 32° の角度で傾斜している。遺物は郭1から転落したとみられる備前焼の甕（第83図2）、瓦質土器の擂鉢（第84図7）、甲冑の覆輪金物（第90図25）が出土している。段状遺構14は小規模な平坦面で、竪堀6との関係は不明である。

竪堀7（第68図、図版66・67）

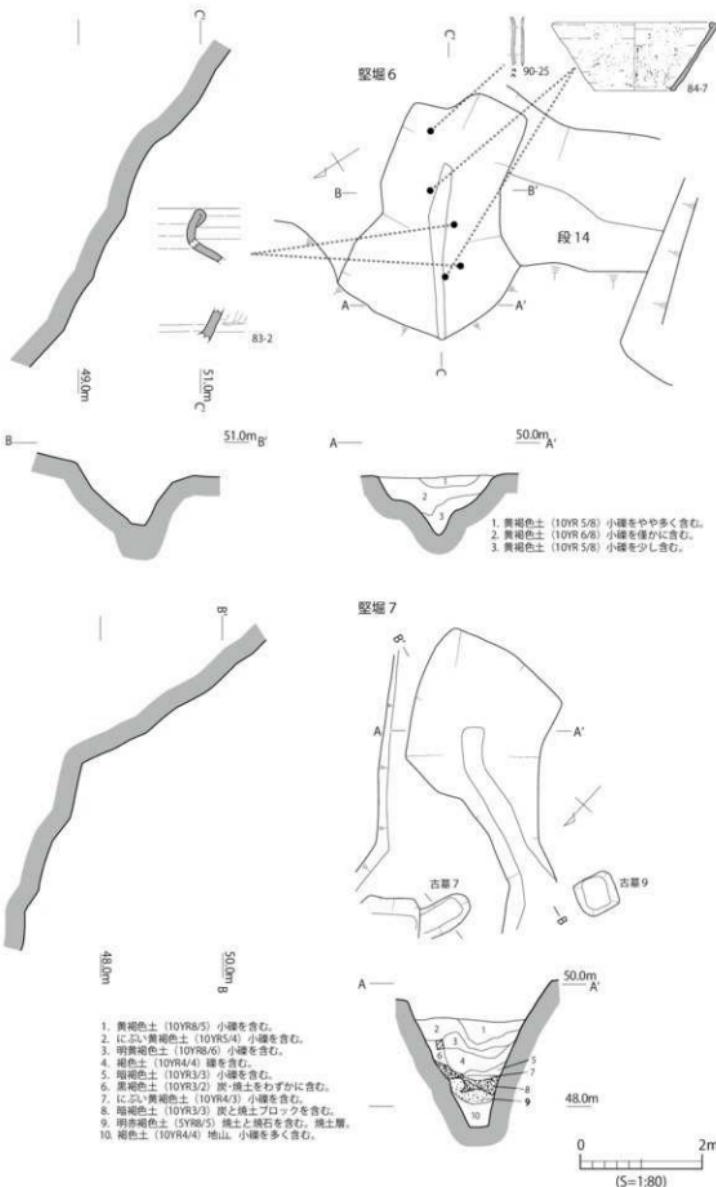
郭4の東北側の、古墓群2と接する位置で検出した。岩盤を約 65° の急角度でV字状に掘り込み、床面は中央に幅約35cmの平坦面があり、約 19° の緩い角度で傾斜している。遺構の下半部に、炭と焼土のブロックを多く含む土が堆積している。段状遺構17に東側を、古墓群2に西側を削られていて、平面形は歪で菱形状である。遺物は竪堀6で出土した瓦質土器の擂鉢（第84図7）の破片が出土している。

竪堀8（第69図、図版68）

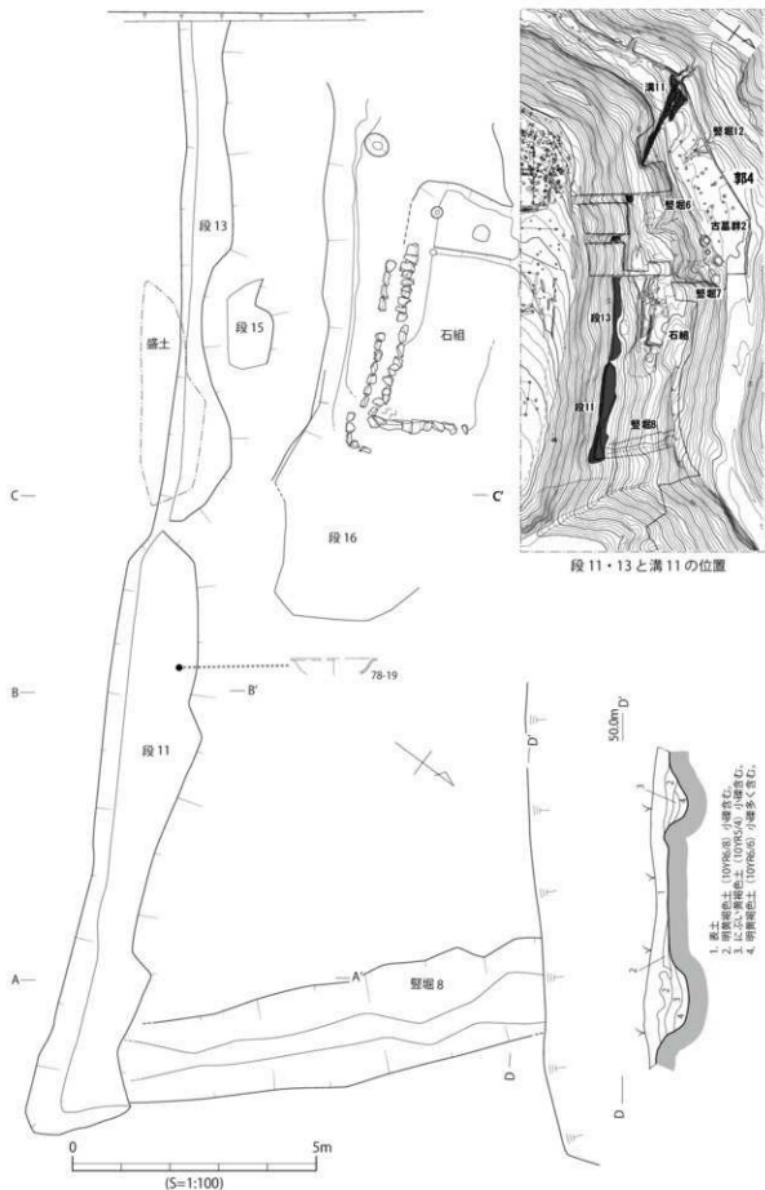
堀切1の西側の、段状遺構11東端に接する位置で検出した。当初認識できていなかったが、西側の石組遺構を調査するため、伐採用重機道から斜面上方に分岐する重機道を造った際、岩盤を幅広のU字状に深さ約70cm掘り込んだ断面が確認された。床面の幅は0.5～1mで、他の竪堀と比較して浅く緩やかである。遺物は出土していない。重機道の断面では、竪堀8の2.5m西側にも岩盤の窪みが確認されたが、平面的には遺構として検出できなかった。



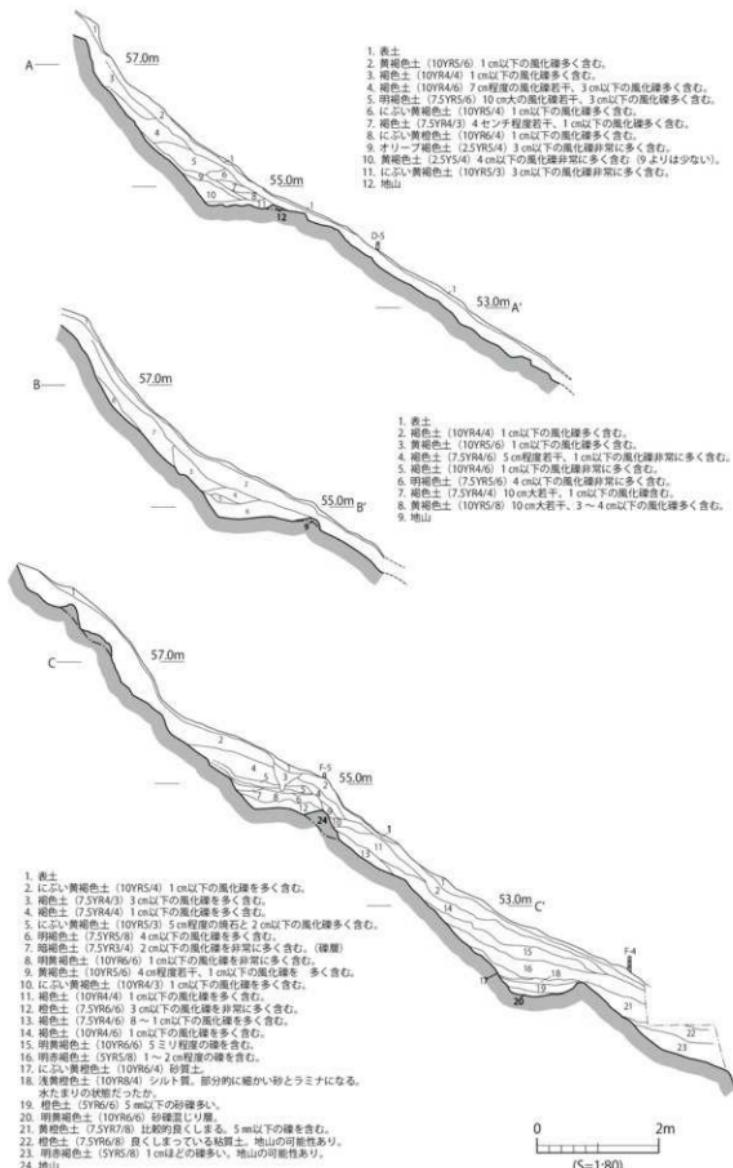
麓から見た北側斜面の遺構



第68図 堅堀6・7実測図



第69図 段状構造11・13・15・16、豊堀8実測図



第70図 郭1北側斜面土層断面図

段状遺構 11・13・15（第 69・70 図、図版 69・70）

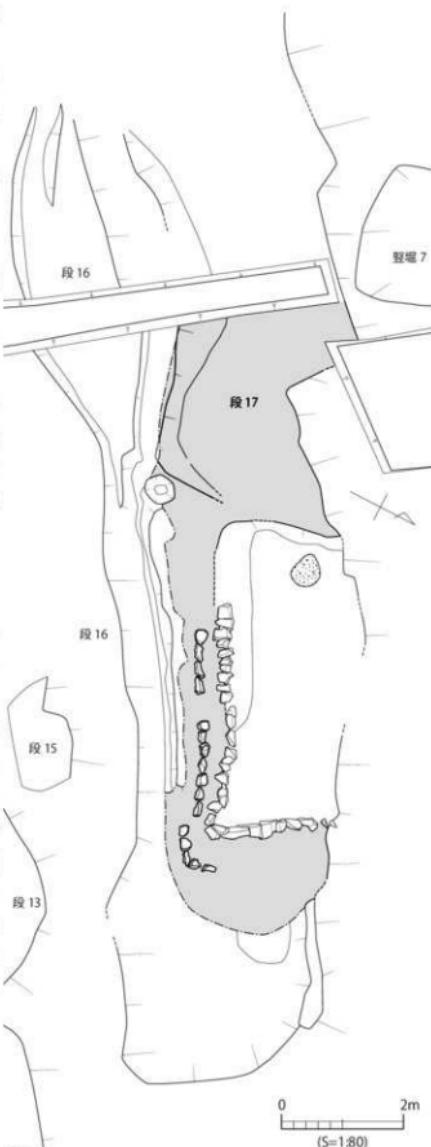
郭 1 と段状遺構 16 のほぼ中間の、斜面の傾斜角度が変わる標高 56 m 前後の位置で、段状遺構を 3 か所検出した。調査時には別々の遺構と認識していたが、段状遺構 15 の北側斜面下方に位置する石組遺構が、土圧により変形していることを勘案すると、地滑りによって段差や床面の崩壊が起きた一つの遺構である可能性が高い。

また、I・J ラインのトレンチで溝 11 と同様の断面を確認した。位置関係から、溝 11 も段状遺構 13 と繋がる一連の通路遺構であると判断した。段状遺構 11 の東端は、堀切 1 の西側で壁が造られて行き止まりになる。遺物は埋土から白磁皿（第 78 図 19）が出土している。

段状遺構 16・17（第 70～73 図、図版 71・72）

北側斜面のほぼ中央に位置し、調査前の地形測量で傾斜が緩くなる地形（段 4.2）を確認していた。北側斜面を面的に発掘した結果、長さ 16m、幅 3～4 m の大規模な段状遺構を検出した。段状遺構 16 は複雑な形状をしている。東側は等高線に並行して浅い窪みが造られ、西側は南北方向に 2 段の平坦面に分かれている。このうち北側を段状遺構 17 とした。さらに、それらを埋め戻して遺構中央に石組遺構が造られる。石組遺構を造る際、東側にあった浅い窪みは石の壁でふさがれている。遺物は郭 1 から転落したとみられる陶磁器片のほか石臼と茶臼が出土している。

麓から続く通路状遺構の真下にあたり、北斜面の中央に位置する段状遺構 16 には、少しずつ位置をずらしながらも、ほとんど同じ場所で何度も造り直される施設が存在したと推測される。



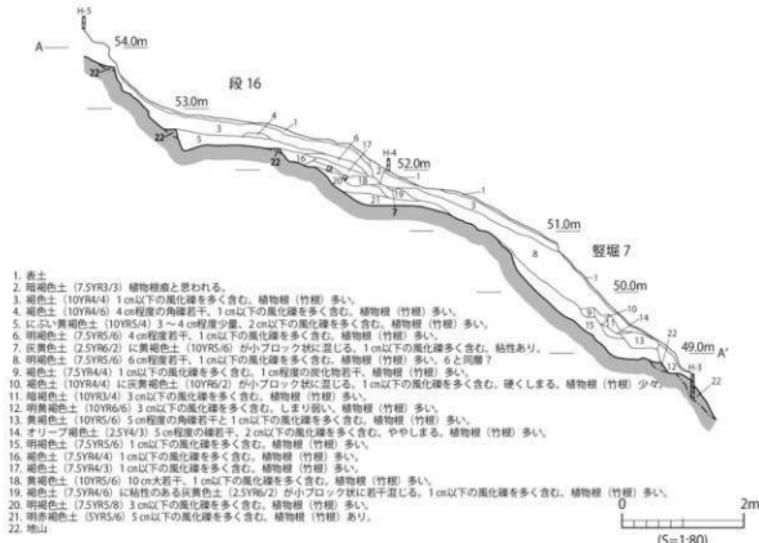
第 71 図 段状遺構 16・17、石組遺構平面図

石組遺構（第71・74・75図、図版14・71～76）

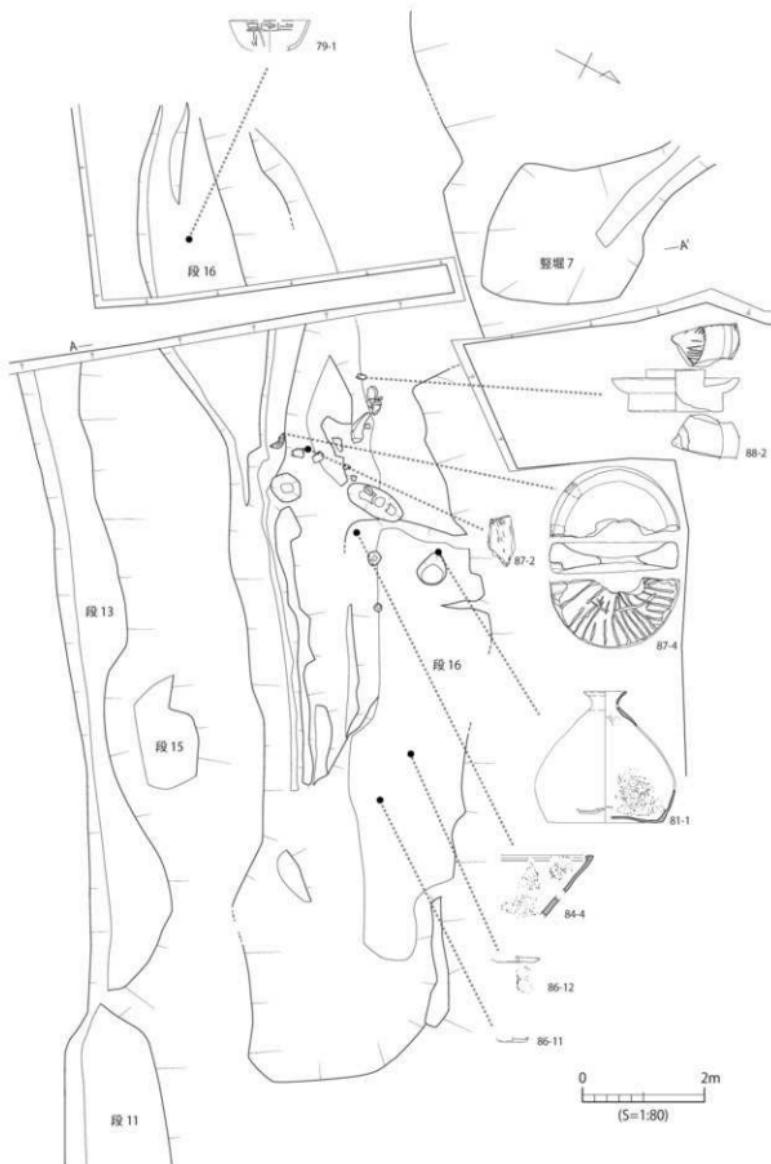
郭1北側斜面のほぼ中央に位置し、南側の斜面上方に段状遺構11・13・15が隣接する。段状遺構16の精査中に、中央部で拳大から人頭大の石が2重にL字状に並ぶ状況が確認された。この石列の長軸方向を基準とし、キの字状にサブトレーンチを設定し調査した結果、内側の石列の約1m下で平坦な床面を確認し、東と南の壁面に石が積まれた遺構であることが判明した。遺構内の埋土は橙色系と黄色系の土が交互に堆積する独特なもので、遺跡内の他の遺構と大きく異なる。

遺構の主軸方向はN-64°-Eで、壁面の規模は、東壁が長さ1.7m、高さ1.1mで、南壁は長さ3.7m、高さ1.05mで、南壁は床面から約40cmの高さまでは石が積まれていない。石組除去後、南壁の石の下で幅10～23cmの細長い平坦面が検出された。南壁の石は平坦面の上に積まれており、下側は岩盤を削って壁面にしていた。また、南壁の石は、斜面上方からの土圧により北側に20～30cmせり出している。一方、東側は段状遺構16を埋め戻しているため岩盤が使えず、全て石を積んだと考えられる。このように石組は、脆弱な部分や岩盤を壁面に利用できない部分に造られたと考えられる。遺構の西側では、石を積んだ壁は検出されず、平面長方形に地山がカットされ、床面が20cm高くなっていた。この部分の床面中央で焼土面が検出され、完掘後には南壁際で、70～80cmの間隔で並ぶピットを3基検出した。壁面の約30cm外側には、1段のみの石列が、壁面に沿うように並べられている。この石列は、南壁同様北側にせり出しており、L字に屈曲する石列の南東隅が原位置を保っているとみられる。石列の30cm南側には、排水用とみられる溝が岩盤に掘られている。土圧で移動する前の石列は、この溝の肩に並べられていたと推測される。

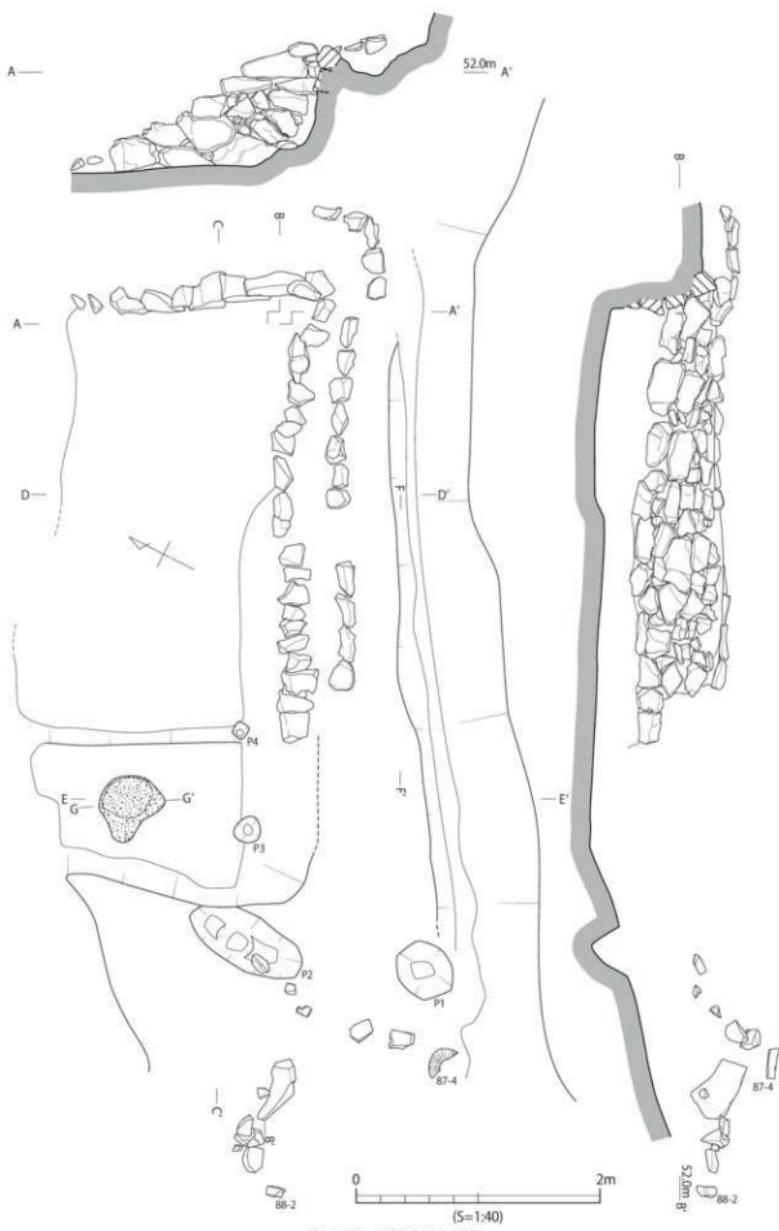
遺構の検出状況や出土遺物から、中世の遺構と考えられるが、遺跡や周辺に類例が無く、遺構の性格は不明である。



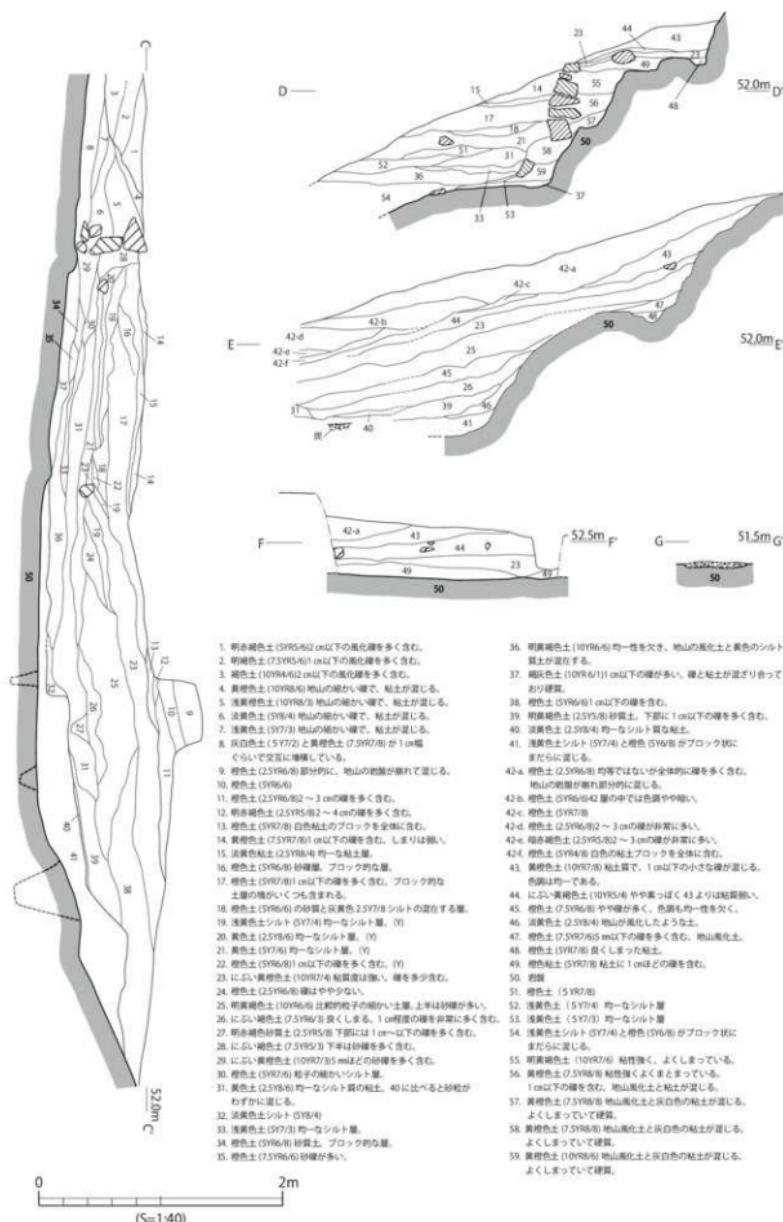
第72図 段状遺構16・17・竪堀7土層断面図



第73図 段状遺構16石組除去後平面図



第74図 石組遺構実測図



第75図 石組遺構土層断面図

第4節 山城遺構出土遺物

1. 遺物の出土状況（第76・77図）

山城に伴う遺物は、郭1を中心に約500点出土している。郭1以外で出土した陶磁器類も、郭1出土遺物と接合するか同一個体の破片と判断されるものが多い。このことから、出土遺物のほとんどは、本来郭1で使用されていたと考えられる。また、第80図6の大型青花碗は、直線距離で約35m離れた段状遺構2と堀切1の破片が接合した。備前焼や瓦質土器の中・大型品では、50m以上離れた位置で同一個体と判断される破片が出土した例もある。複数の遺構にまたがって出土する遺物が多いことから、中世の遺物は本節で種別ごとにまとめて報告することとした。

2. 貿易陶磁

白磁（第78図、図版83）

D群の白磁は皿(1)と八角壺(2)のみである。E1群の皿は、白磁の破片数73点のうち約84%を占める。3～5は建物1・2で出土した皿で、4は建物1南東床上の底部と、土坑2埋土中の体部が接合した。6～16は、段状遺構1と土坑2で出土した皿で、いずれも小片だが遺構別では最も多く出土している。その他、壺(25・26)や瓶類と見られる破片(27)も出土している。

青磁（第78・79図、図版84・86）

青磁は15世紀のものが多く、碗が皿のほぼ2倍出土している。第78図29・30等の蓮弁文碗B4類は、青磁の破片数54点の約30%を占める。次いで点数が多いのは第79図1・2等の雷門帶碗C2類で、約22%を占める。青磁もほぼ小片で、郭1の西側を中心出土している。その他数は少ないが、端反碗D2類(3)、稜花皿(4)、大型の盤または皿(6・7)、景德鎮系の碗(8)も出土している。また、二次的に熱を受け、表面に気泡が見られるものもある。

青花（第79・80図、図版85・86）

景德鎮系37点、漳州窯系24点、産地不明1点の計62点出土している。器種別の推定個体数は、碗16、皿14で、白磁・青磁の比率と異なる。土坑2出土品（第79図9・10・13・14、第80図3・7・9・10）と建物1出土品（第79図11、第80図1・4～6）が多く、第80図1・5のように、建物1と段状遺構1で接合する資料もある。第79図16は郭2で表採した碗で、郭2では数少ない中世の遺物である。その他、大型の碗第80図6は、内面に無数の傷が残る。茶筅傷とは考えにくいが、何かを非常に混ぜているとみられる。

中国陶器（第80図、図版86）

11は青釉陶器の小皿で、段状遺構1の埋土から出土した。12は褐釉陶器の壺の底部で、被熱により表面が剥離している。13は径が小さいが、見込みにロクロ成形痕が残るので壺の底部とみられる。底部周辺を円形に打ち欠いている。14は褐釉陶器の茶入れで、胴部の器壁は2mmと非常に薄く、丸みのある器形に光沢の無い暗赤褐色の釉薬が掛かる。段状遺構1北側の斜面で出土した。

粉青沙器（第80図、図版86）

15は外面に白土の象嵌で草花文が描かれる。15世紀の四耳壺の胴部とみられる。

朝鮮陶器（第80図、図版86・87）

16は全面に灰色の釉がかかる皿で、胎土目痕が内外面に残る。褐釉陶器の瓶は、調査区の北側で

小片が45点出土した。ほとんど接合できないが、色調や胎土の特徴から4個体に分けられる。1は二次的に熱を受けたため施釉範囲が不明瞭である。4はやや細身で肩に3条の沈線文が施される。

3. 国産陶器・土器類

瀬戸美濃系（第81図、図版87）

国産陶器の食器はほとんど出土していないが、灰釉皿5・6が段状遺構2周辺で出土している。備前系（第81～83図、図版87～90）

擂鉢は、推定個体数では瓦質土器のほぼ2倍出土している。第81図7は、焼成が備前系と同様に硬質だが、器形は16世紀の防長系瓦質土器の擂鉢に似る。9はIVA期で14世紀後半頃、10は15世紀後半頃、第82図1は16世紀前半頃の製品とみられ、底部2・3やその他の破片も含めて掘り目は縦方向に入る。4は口縁が玉縁状で垂直に立ち上がり肩部が張る壺で、内面と断面が赤褐色である。5・6は肩部に波状文が施される。6は郭1の段状遺構2から郭2の土堤までの、長さ63mにおよぶ広範囲に破片が散在している。第83図は大型品で、1は肩部に櫛描きの沈線が廻る。2は口縁端部を外側に折り返して玉縁にする。胴部外面には縦方向のナデが、底部外面には横方向のケズリが施される。3は水屋甕で、胴部最大径部分に断面三角形の突帯が貼り付けられる。

瓦質土器（第84・85図、図版90～92）

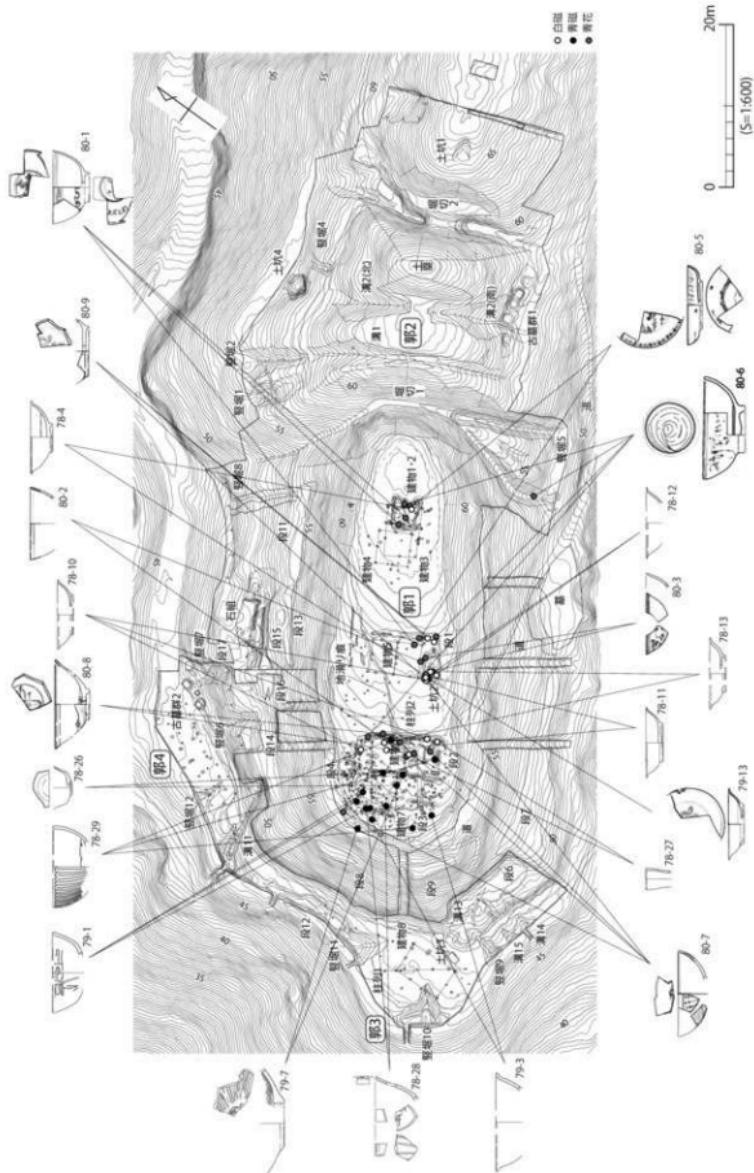
擂鉢は小片が多いが、第84図1・7は焼成が良好で全形がうかがえる。1は口縁内面を拡張し端部に平坦な面をもつ。内面と見込みに掘り目が施され、底部に幅2.7～3cmの板状の圧痕が残る。7は1とほぼ同サイズで、器壁は薄く焼成が良い。3・4は被熱により橙色になり土師器に近い。5は断面の外側と内側で色調が異なる。第85図1は丸みのある鉢で、全面に丁寧なミガキが施される。焼成は土師器に近い。3は外面に縦連子があり風炉型土器の口縁部と判断した。同一個体とみられる破片が13点出土しており、いずれも表面は被熱により橙色になる。5は焼成が良く、煙により表面が暗灰色、断面は灰白色である。外面はミガキ、内面はハケメとナデが施され、底部内面にヘラガキの線が1条確認できる。6・7は表面が土師器に近く、断面の内側が褐灰色になる。口縁部の二重の突帯の間にスタンプ文が連続で施される。瓦質土器は防長系のものが多いとみられるが、焼成が土師器に近く断面内側が暗い灰色のものは、地元産の可能性も考えられる。

土師器（第86図、図版93）

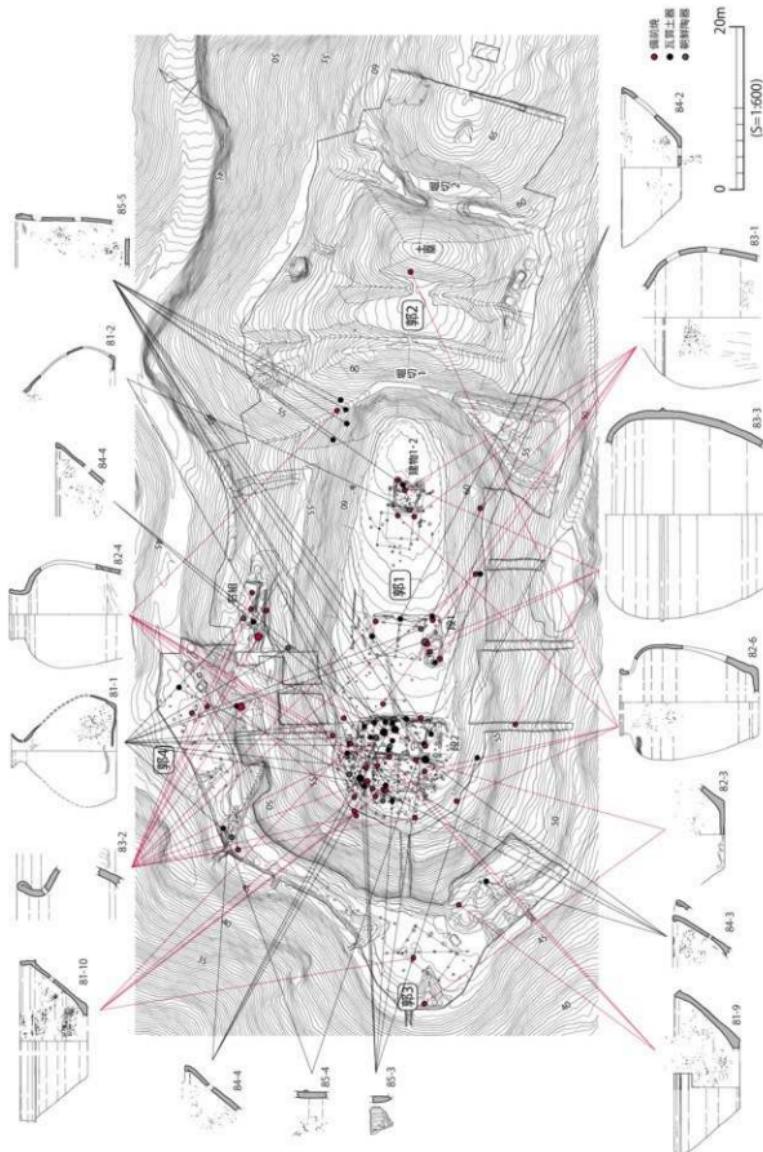
土師器の壺・皿は破片数が多いが、ほとんどが小片で全形のわかる資料は少ない。比較的器形の分かれる資料について、益田平野の土師器研究を参考にして年代を推定した。建物1床上で出土した3は、体部が大きく開き、内面の見込みから体部への立ち上がり部分の屈曲が不明瞭で、16世紀初頭のものとみられる。段状遺構3で出土した8は、体部が立ち上がり気味で、見込み中央がしっかり窪んでいることから15世紀前半頃とみられる。9・10も見込みの窪みが明確で、同時期と考えられる。郭2で出土した14は、見込みに渦巻き状のロクロ成形痕が残っており、3と比べて体部が開いていないので、16世紀後半に下る可能性がある。

土錘（第86図、図版93）

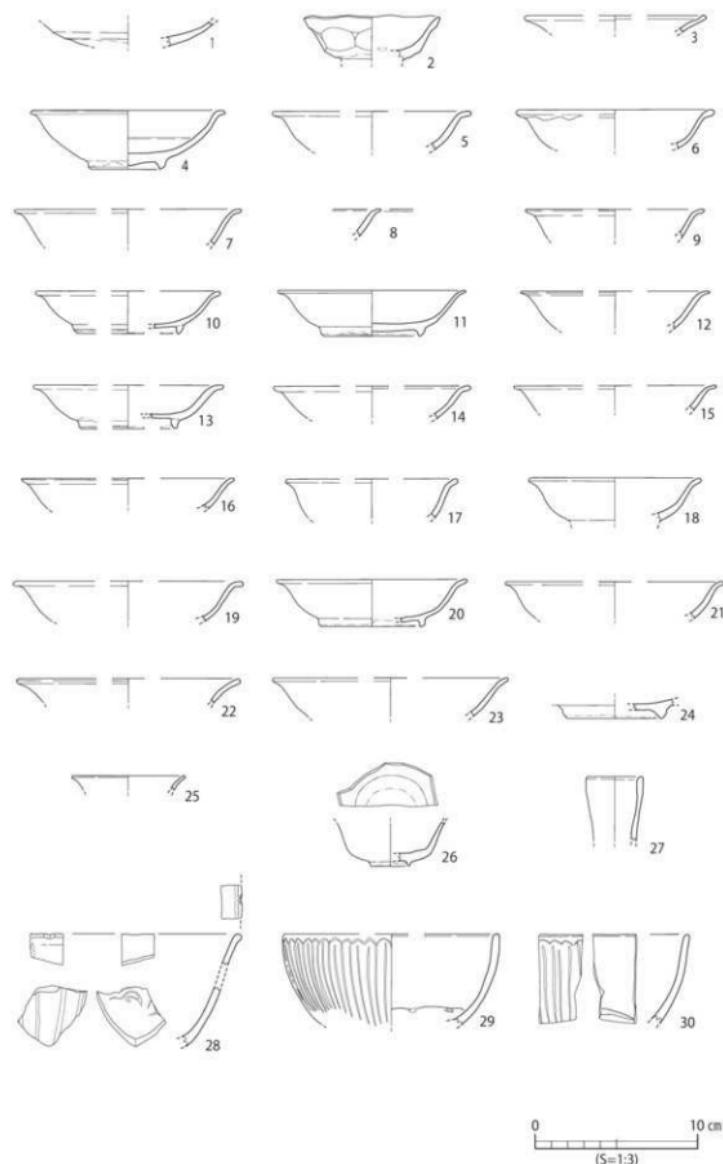
小型の土錘が27点出土している。郭1東側で出土したもの（17～30）は、長さが5cm前後で端部に丸みがあるものが多い。郭1西側で出土したもの（31～42）には、長さが4cm前後で端部に面があるものが多い。いずれも刺繍用の土錘と見られ、近隣の河川で使用されたと考えられる。



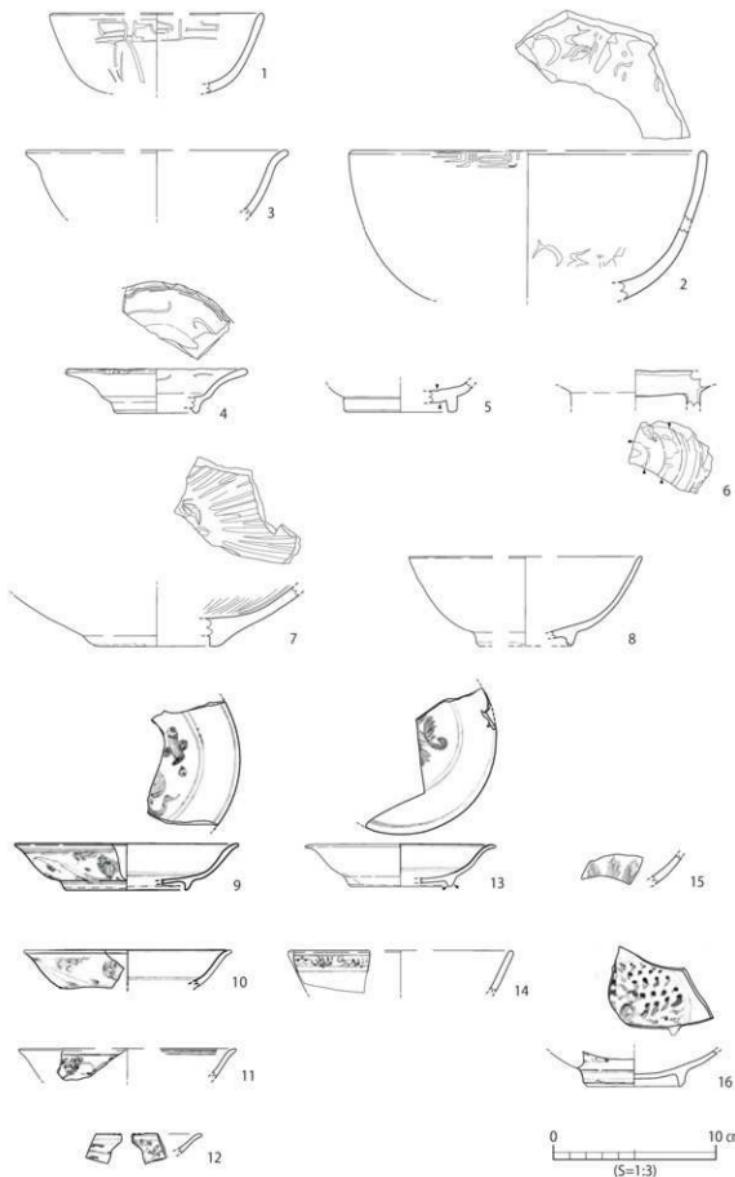
第76図 山城遺構遺物出土状況図(1)



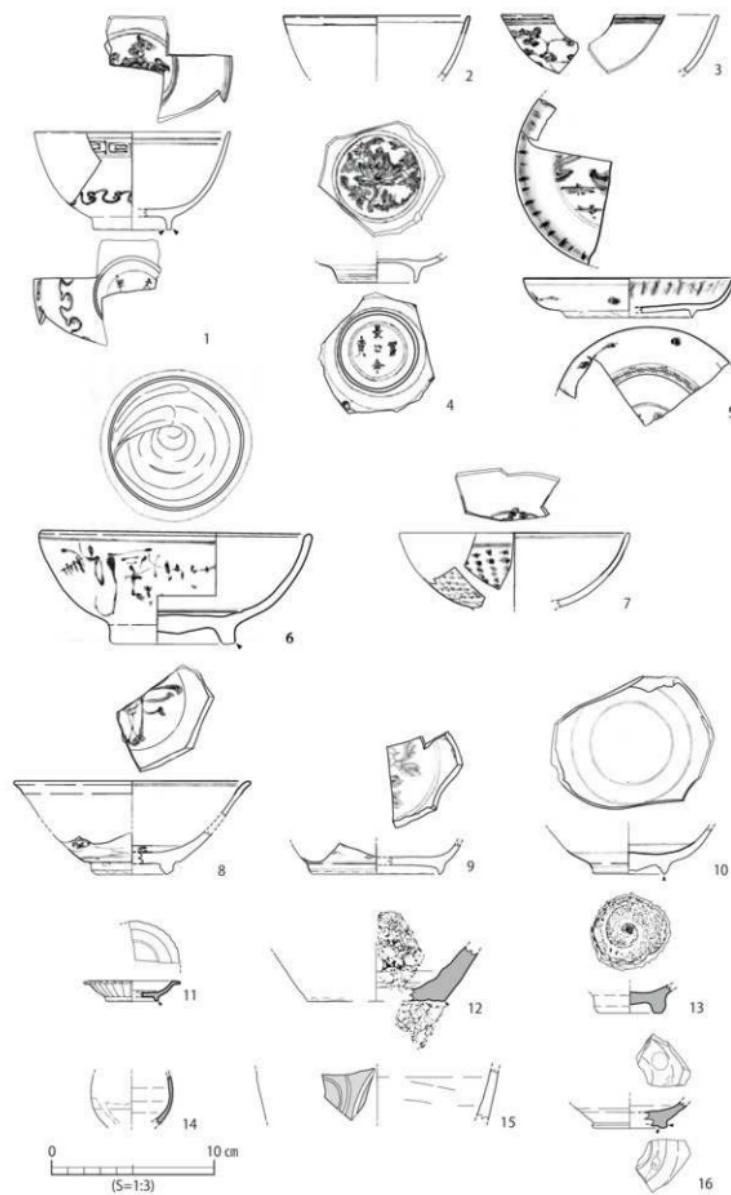
第77図 山城遺構遺物出土状況図(2)



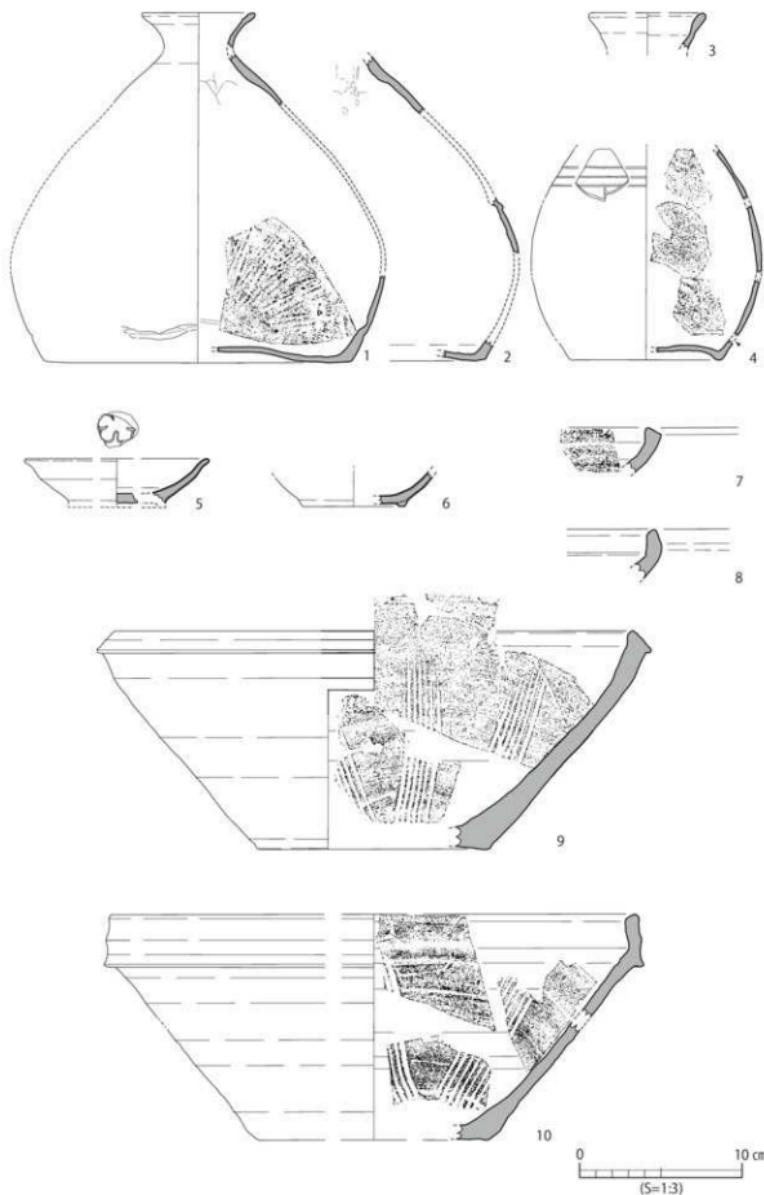
第78図 出土遺物実測図(1)



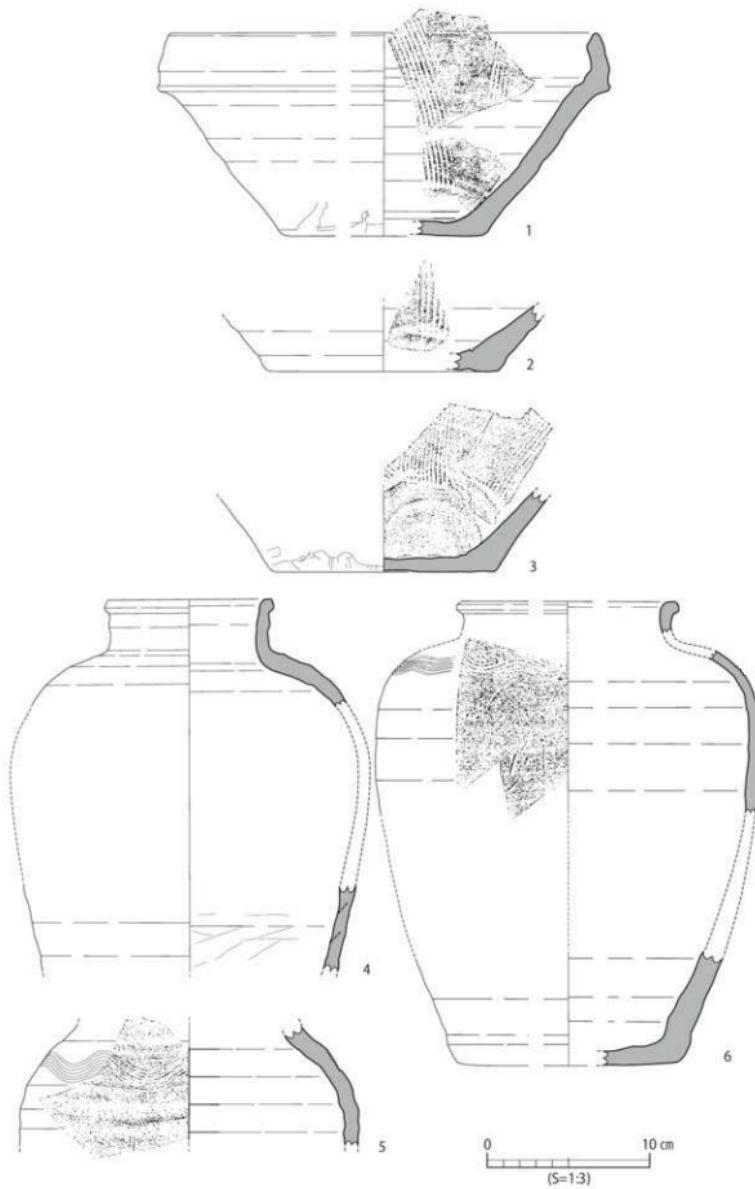
第79図 出土遺物実測図(2)



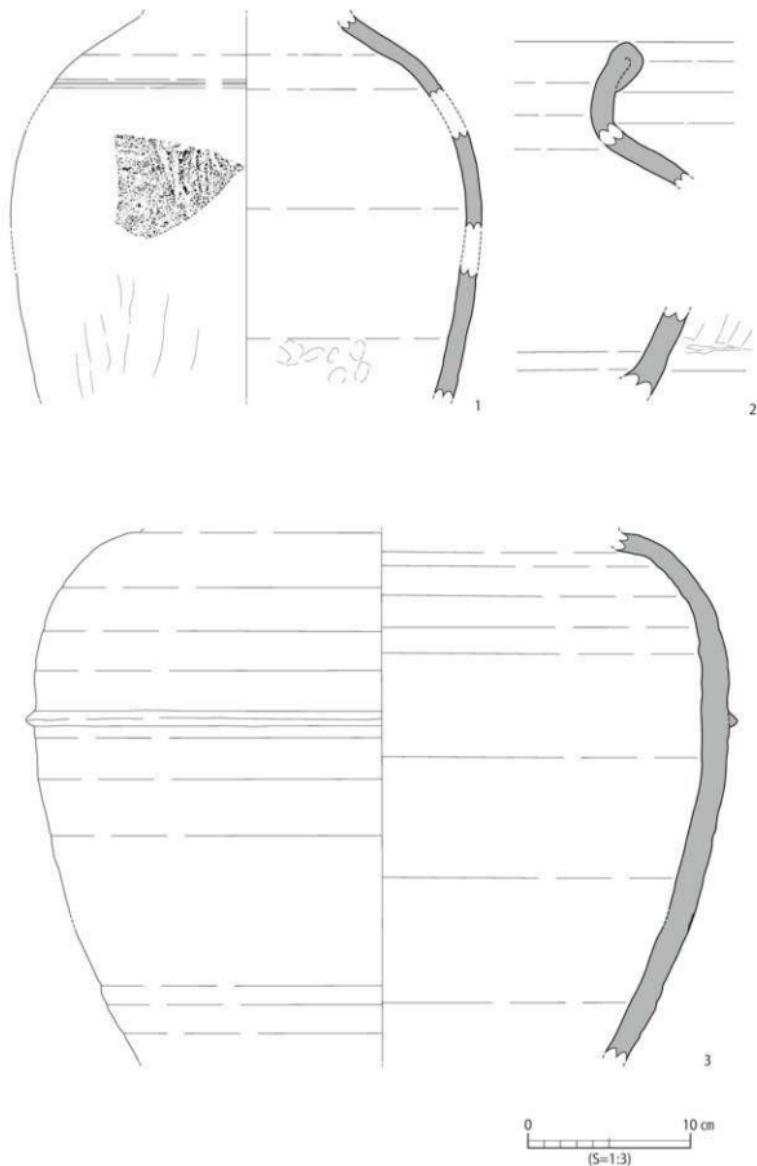
第80図 出土遺物実測図(3)



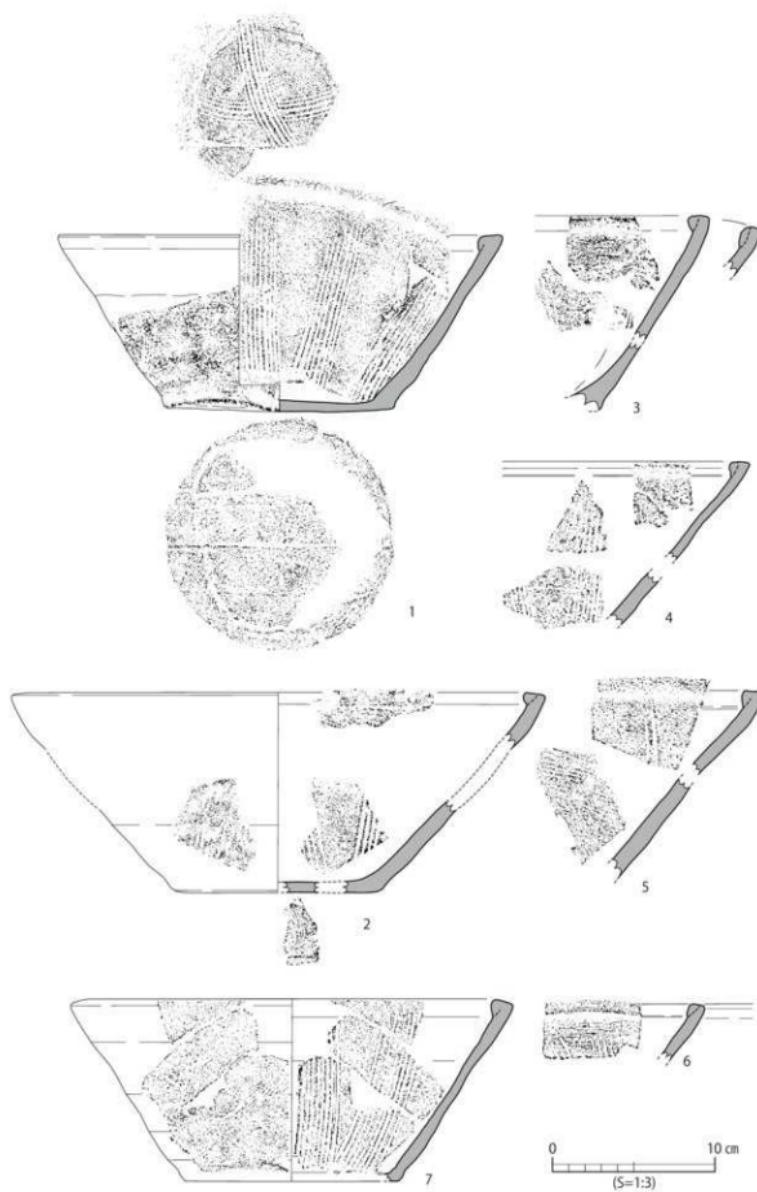
第81図 出土遺物実測図(4)



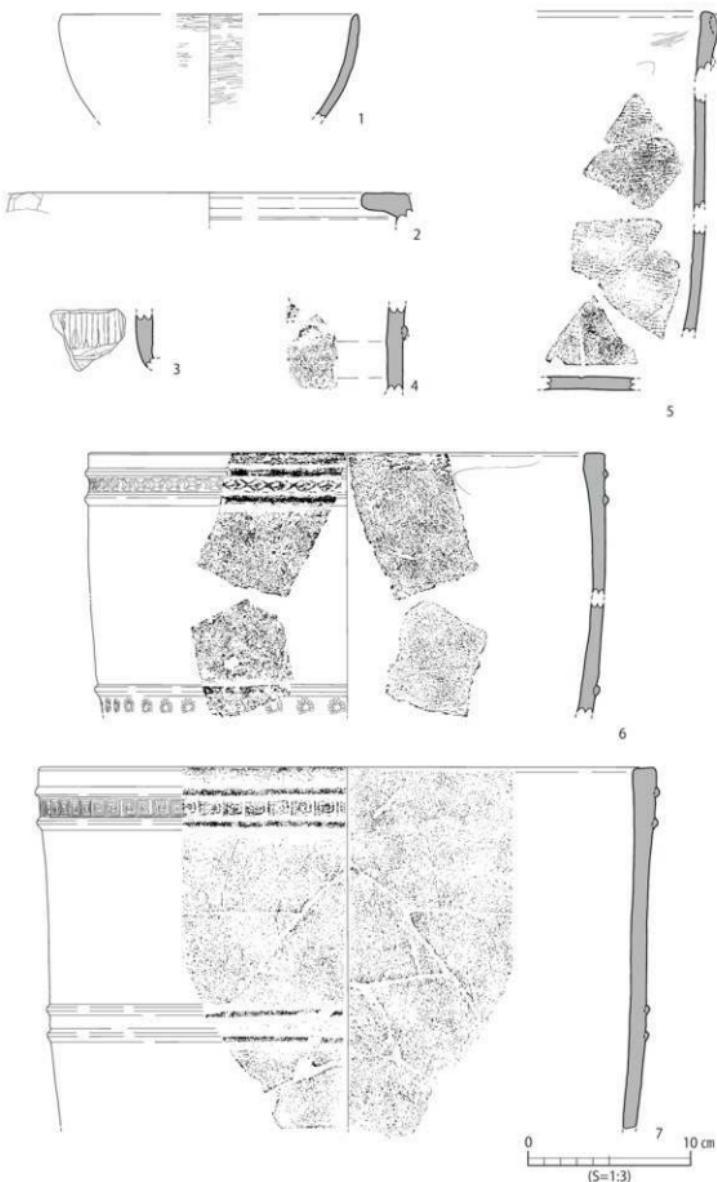
第82図 出土遺物実測図(5)



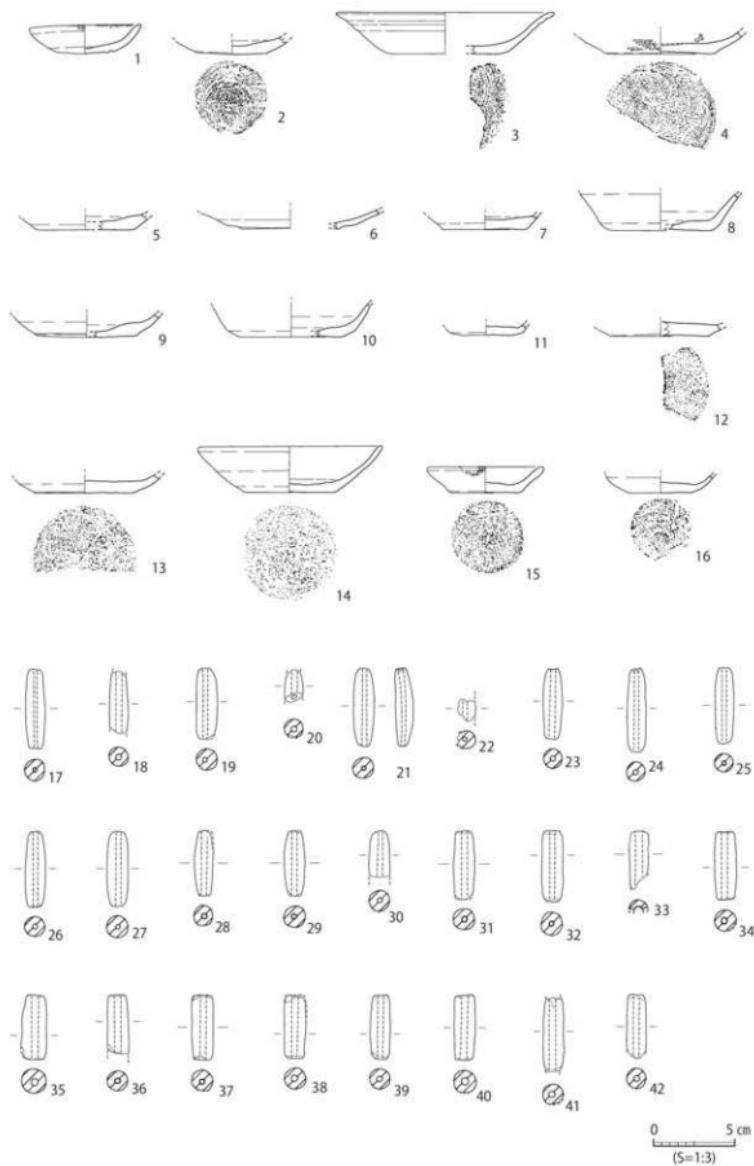
第83図 出土遺物実測図(6)



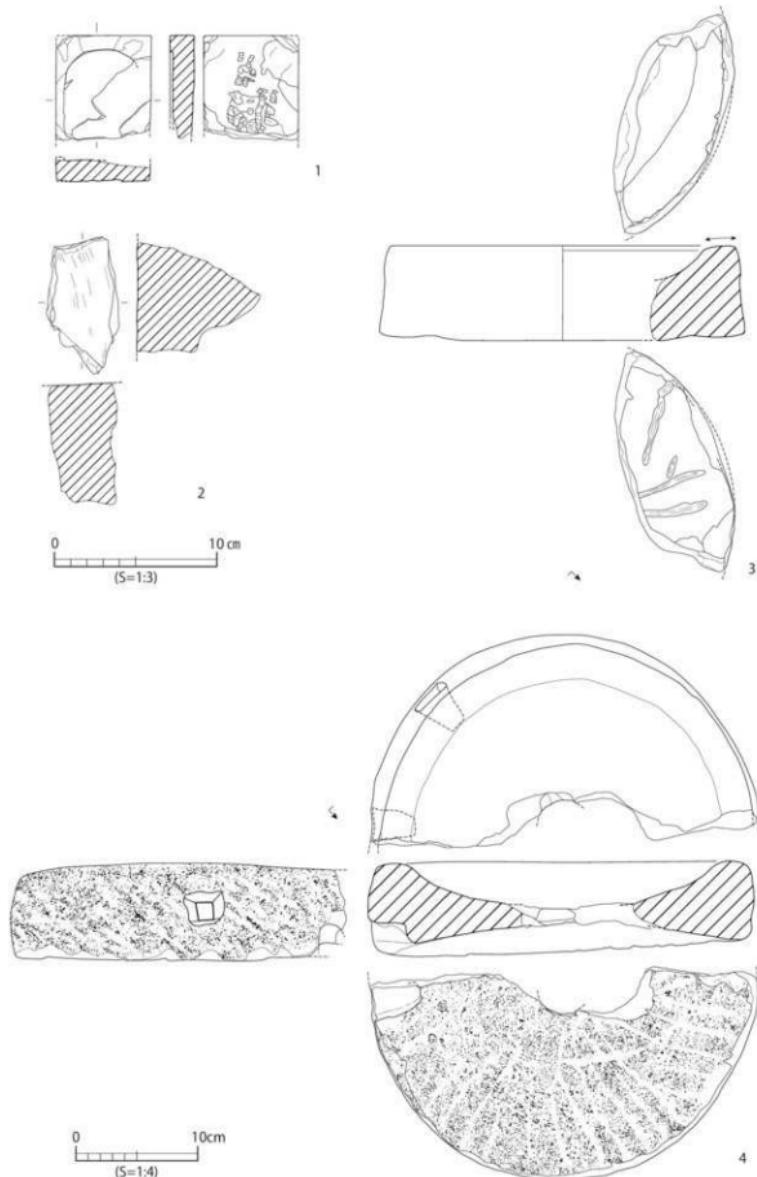
第84図 出土遺物実測図(7)



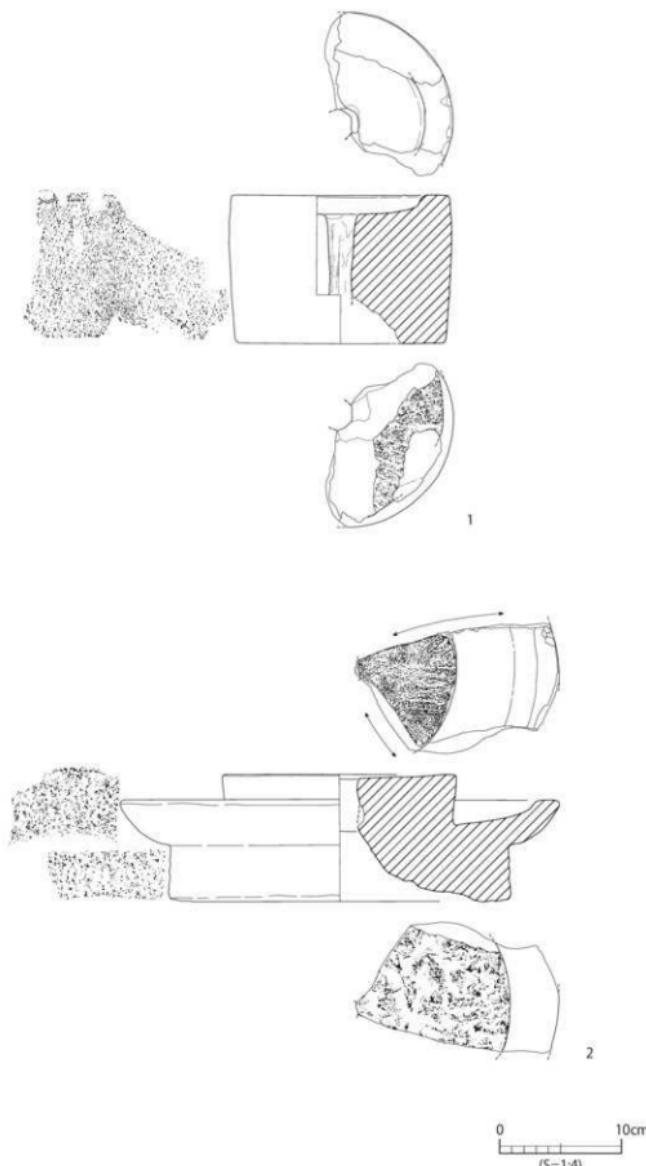
第85図 出土遺物実測図(8)



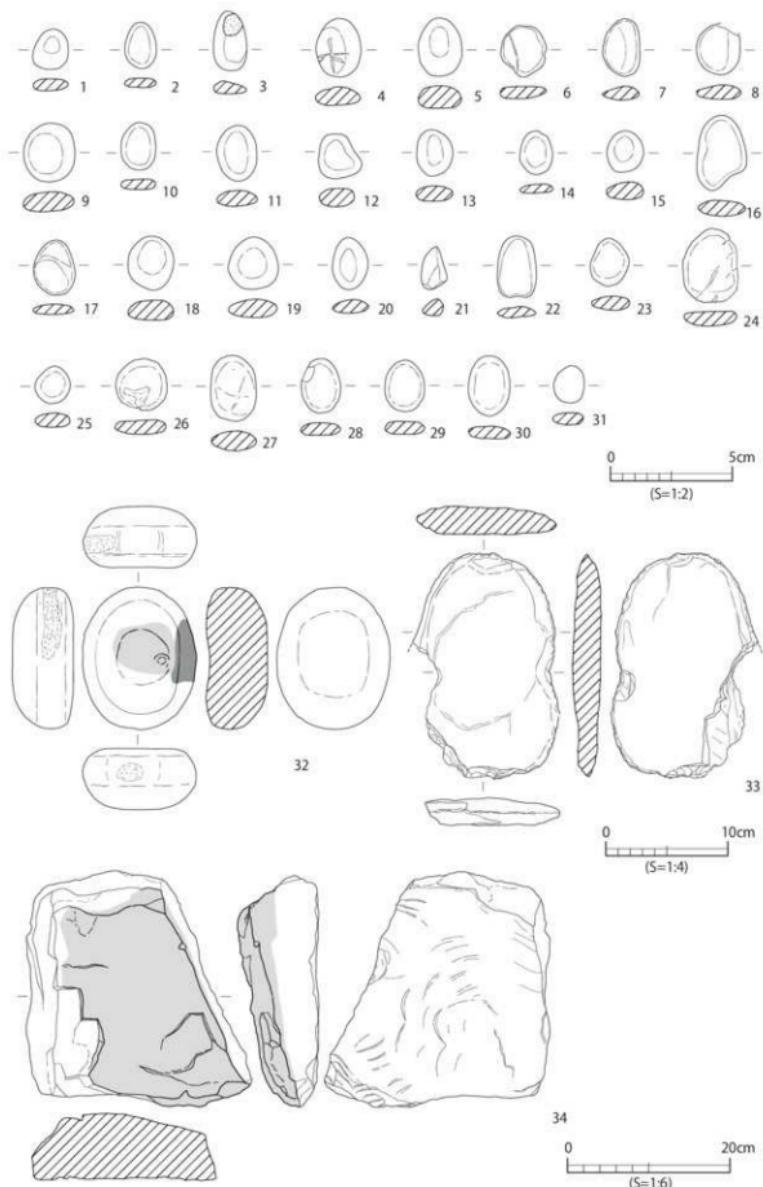
第86図 出土遺物実測図(9)



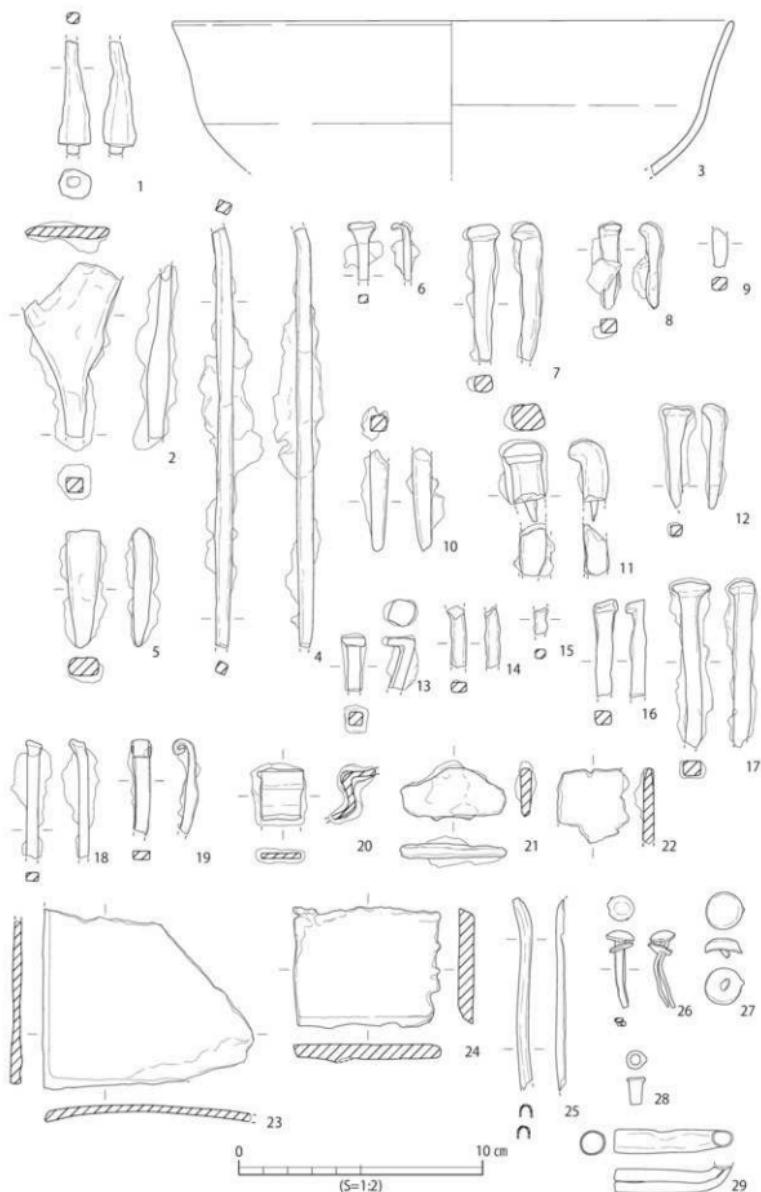
第87図 出土遺物実測図(10)



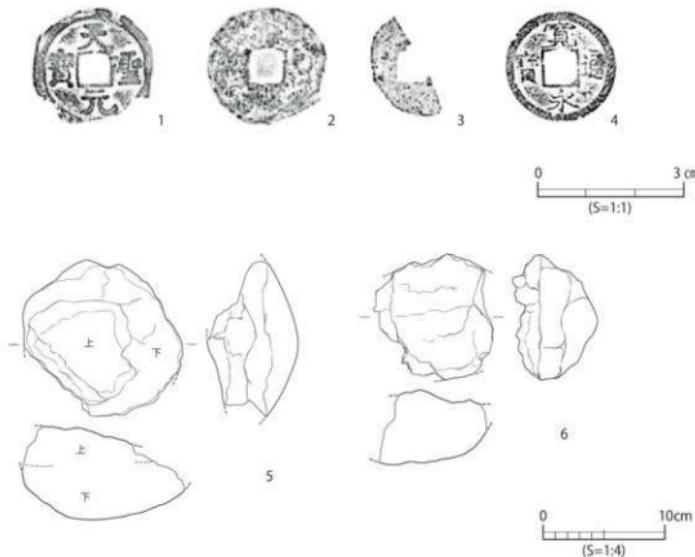
第88図 出土遺物実測図(11)



第89図 出土遺物実測図(12)



第90図 出土遺物実測図(13)



第91図 出土遺物実測図(14)

4. その他

石製品（第87～89図、図版94・95）

第87図1は建物7P59内で出土した赤色頁岩、いわゆる赤間石製の硯で、2分の1程度が残存する。石臼の破片が4点出土しており、このうち第87図3と第88図2は砥石に転用されている。また、第87図4は挽木を差し込む穴が2つある。下側の穴の位置まで磨り減ったため、上の穴を開け直したと考えられる。第89図1～31のような小礫が52点出土している。地山には含まれない石で、扁平で黒色系と灰色系のものは基石と判断した。

金属製品・古銭・鉄滓（第90・91図、図版96）

鉄製品は小片が多いが、武器（第90図1・2）と、鍋（3）、火箸（4）等の生活道具が確認できる。銅製品は甲冑の飾り金物の可能性がある製品が4点出土している。25は覆輪金物、26・27は笠鏡、28は鳩目か茱萸金物とみられる。また、24はタガネ切り後に表面が溶融しており、鉄素材の可能性がある。楕形滓（第91図5・6）が出土しているので、小規模な鍛冶が行われたとみられる。古銭2・3は、段3埋土から2枚張り合った状態で出土した。

近世の陶磁器

調査区内の表土や耕作土、地滑り痕から、18～19世紀の陶磁器・瓦の小片が出土している。遺跡は廃城後しばらくして耕作地や墓地になっており、それにともなって持ち込まれたものと考えられる。中世の陶磁器に比べて点数が大幅に減少する。城跡の遺構に直接関わらない遺物であり、報告書掲載は省略した。

第4表 普源田砦跡出土遺物観察表

編 番 号	遺 物 名	写 真 回 数	取 上 番 号	種 別	器種	グリッド・連続(土壌)	寸法 (口径 (cm) 高さ (cm) 底径 (cm))	断土	構成	色調	調整・手法の特徴	備考	
78 1 83				白磁	III	II7(耕作土・耕土)	— — —	—	粗目	白灰	外面：淡黄 2.5YR 4/4 内面：淡黄 2.5YR 4/4	外面：机脚痕有 D 磁	
78 2 83 365				白磁	八丸杯	第1西側(盛土内)	8.0 — —	—	粗目	白灰	外面：淡黄 10YR 8/4 内面：淡黄 10YR 8/4	外面：八丸の形をとる。 机脚痕有	
78 3 83 119				白磁	III	健物 2(唇)	10.8 — —	—	粗目	良好	外面：灰 1 SYR 1/1 内面：灰 1 SYR 1/1	外面：口縁部の内側が 肥厚する	
78 4 83 133, 160				白磁	III	健物 1(床東)(床上), 1(2) 2(土壌)	11.0 3.1 4.8	—	粗目	白灰	外面：明褐色 7.5GYR 8/1 内面：明褐色 7.5GYR 8/1	外面：一筋横線 内面：削り出し面有	
78 5 83 116				白磁	III	健物 1(床上)	12.0 — —	—	中空粗	白灰	外面：灰 2.5YR 2/2 内面：灰 2.5YR 2/2	外面：口縁端反 E1 磁	
78 6 83 25				白磁	III	G7・段(土壌), 段 1(床)	11.8 — —	—	粗目	白灰	外面：灰 3 10YR 8/1 内面：灰 3 10YR 8/1	E1 磁	
78 7 83 123				白磁	III	段 1(土壌)	13.80 — —	—	粗目	白灰	外面：灰 3 10YR 8/1 内面：灰 3 10YR 8/1	E1 磁	
78 8 83 122				白磁	III	段 1(唇)	— — —	—	粗目	白灰	外面：明オリーブ灰 2.5GY7/1 内面：明オリーブ灰 2.5GY7/1	E1 磁	
78 9 83				白磁	III	土坑 2(埋土)	(1)0.8	— —	粗目	白灰	外面：灰 3 10YR 8/1 内面：灰 3 10YR 8/1	E1 磁	
78 10 83 170, 197, 85				白磁	III	土坑 2(埋土), 段 2(床)(2個), II6(耕作土)	(1)0.6 2.65 (6.2)	—	粗目	白灰	外面：灰 3 10YR 7/1 内面：灰 3 10YR 7/1	高台：露胎 E1 磁	
78 11 83 321, 342, 334, 164, 236				白磁	III	土坑 2(床)(2個), 段 2(唇)	11.3 2.85 6.0	—	粗目	白灰	外面：灰 3 10YR 8/1 内面：灰 3 10YR 8/1	外面：白磁糊 内面：白磁糊 高台：露胎	
78 12 83 151, 155				白磁	III	土坑 2(埋土)	(1)1.5	— —	粗目	白灰	外面：灰 3 10YR 7/1 内面：灰 3 10YR 7/1	E1 磁	
78 13 83 146, 153, 223				白磁	III	土坑 2(埋土), 段 2(2)(3個)	(1)1.6	— —	粗目	白灰	外面：灰 3 10YR 7/1 内面：灰 3 10YR 7/1	高台：露胎 E1 磁	
78 14 83 148				白磁	III	土坑 2(埋土)	(1)2.0	— —	粗目	白灰	外面：灰 3 10YR 7/1 内面：灰 3 10YR 7/1	E1 磁	
78 15 83 336				白磁	III	土坑 2(床)	(1)2.1	— —	粗目	白灰	外面：灰 3 10YR 8/1 内面：灰 3 10YR 8/1	E1 磁	
78 16 83 333				白磁	III	土坑 2(唇)	(1)2.6	— —	粗目	白灰	外面：灰 3 10YR 8/1 内面：灰 3 10YR 8/1	E1 磁	
78 17 83 235				白磁	III	段 2(唇)	10.4 — —	—	粗目	白灰	外面：淡黄 2.5YR 8/3 内面：淡黄 2.5YR 8/3	E1 磁	
78 18 83 242				白磁	III	段 2(唇)	10.4 — —	—	粗目	白灰	外面：灰 3 10YR 8/1 内面：灰 3 10YR 8/1	E1 磁	
78 19 83 502				白磁	III	II5・段 1(埋土)	(1)3.0	— —	粗目	白灰	外面：灰 3 10YR 8/1 内面：灰 3 10YR 8/1	E1 磁	
78 20 83 410				白磁	III	I7(耕作土)	11.6 2.9 6.2	—	粗目	白灰	外面：灰 3 10YR 7/1 内面：灰 3 10YR 7/1	高台：露胎 E1 磁	
78 21 83 316				白磁	III	C9・郭 1(斜面)(埋土)	(1)3.2	— —	粗目	白灰	外面：灰 3 10YR 8/1 内面：灰 3 10YR 8/1	E1 磁	
78 22 83 381				白磁	III	郭 1(盛土)	(1)3.0	— —	粗目	白灰	外面：灰 3 10YR 7/1 内面：灰 3 10YR 7/1	E1 磁	
78 23 83 126				白磁	III	N7(細白粘質土)	(1)4.2	— —	粗目	白灰	外面：灰 3 10YR 8/1 内面：灰 3 10YR 8/1	E1 磁	
78 24 83 69				白磁	III	K6・郭 1(耕作土), 郭 1(地)(耕土)	— —	(5.8)	粗目	白灰	外面：灰 3 10YR 8/1 内面：灰 3 10YR 8/1	高台：露胎 E1 磁	
78 25 83 148				白磁	III	土坑 2(埋土)	6.8 — —	—	粗目	白灰	外面：灰 3 10YR 7/1 内面：灰 3 10YR 7/1	E1 磁	
78 26 83 100, 269				白磁	III	II7・段 2(床)(床面・耕作土)	— —	1.2	粗目	白灰	外面：灰 3 10YR 8/1 内面：灰 3 10YR 8/1	内面：埴込み物附 E1 磁	
78 27 83 48, 246				白磁	III	瓶?	II8・段 2(東西)・ルート (耕作土)	3.4 — —	—	粗目	白灰	外面：灰 3 10YR 8/1 内面：灰 3 10YR 8/1	
78 28 84 459, 382	青磁	III		青磁	III	K6・郭 1(埋土)	— — —	—	粗目	白灰	外面：明オリーブ灰 2.5GY7/1 内面：明オリーブ灰 2.5GY7/1	外面：梅蘭瓣分 (梅蘭瓣(蓮瓣?)) 内面：梅蘭分花文	
78 29 84 278, 188, 225, 426	青磁糊系 青磁	III		P965(埋土), 段 2(2個), 段 2(2)(3個), P966・瓶 1(唇) (土), 石臼(埋土), P5・郭 1(無鉢面)(埋土)	13.2 —	(5.8)	黑色の微小粒 子を少し含む	—	—	粗目	白灰	外面：明褐色 10CYR 7/1 内面：明褐色 10CYR 7/1	外面：埴込分 内面：埴込分花文

被調査物番号	遺物名	写真	取上番号	種別	基準	グリッド・遺構(土壌)	寸法(○) 内面・外観			施主	構成	色調	調整・手法の特徴	備考
							口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)					
78 30 84	442	鹿児島県 青磁	縦	部1西側(埋土)			—	—	—	施主	良好	外面:オーラーク灰 10YR 1/2 内面:オーラーク灰 10YR 1/2	外面:輪郭線付文(陰刻) 内面:輪郭文	B4類
79 1 84	105, 77, 101, 527, 388	鹿児島県 青磁	縦	段6・部1(耕作土), KG・部1(耕作土), H4・部1(耕作土), 段1(耕作土), 施1・部1(耕作土), 段1(地表土)	(12.0)	—	(4.3)	施主	良好	外面:明暦灰7.5GY7/1 内面:明暦灰7.5GY7/1	外面:輪文帶、蓮瓣文 内面:重文帶	C2類		
79 2 84	263	鹿児島県 青磁	縦	段2北側(表面), 段2(耕土)	(16.8)	—	—	施主	良好	外面:オーラーク黄 SYR 3/2 内面:オーラーク黄 SYR 3/2	外面:策文帶 内面:草花文(?) (陰刻)			
79 3 84	63, 106	鹿児島県 青磁	縦	KG・KB・部1(耕作土), 段1(地表土)	(15.8)	—	—	施主	良好	外面:明暦灰7.5GY6/3 内面:明暦灰7.5GY6/3	外側環	D2類		
79 4 84	109	鹿児島県 青磁	横花瓶	KG・部1(耕作土)	(11.2)	2.7	2.0	施主	良好	外面:オーラーク灰 10YR 1/2 内面:オーラーク灰 10YR 1/2	外側桃花			
79 5 84		鹿児島県 青磁	縦	部1(耕土)		—	—	(1.7)	施主	良好	外面:明暦灰 7.5GY7/1 内面:明暦灰 7.5GY7/1	外面:見込み輪郭ぎ 内面:輪郭ぎ		
79 6 84	409	鹿児島県 青磁	縦または 大皿	部1西側(耕作土)		—	—	—	施主	良好	外面:オーラーク灰 10YR 1/2 内面:オーラーク灰 10YR 1/2	内面:穂が厚い青苔 内面:輪郭ぎ		
79 7 84	411, 94	鹿児島県 青磁	縦	KG・部1(耕作土), J7・部1(耕作土)		—	—	(7.4)	施主	良好	外面:オーラーク灰 5GY6/1 内面:灰1/N7/	内面:輪文		
79 8 84	163	豊後鍋系 青磁	縦	土坑2(埋土)	(14.3)	5.5	6.0	施主	良好	外面:明暦灰 7.5GY7/1 内面:明暦灰 7.5GY7/1	外側環			
79 9 85	168-	豊後鍋系 青花	縦	土坑2(埋土)	(13.8)	2.85	7.2	施主	良好	外面:明暦灰SG7/1 内面:明暦灰SG7/1	外面:唐草文 内面:輪郭・瓣子目	B1類		
79 10 85	335	豊後鍋系 青花	縦	土坑2(3層)	(12.8)	—	—	施主	良好	外面:明暦灰SG7/1 内面:明暦灰SG7/1	外面:唐草文 内面:輪郭	B1類		
79 11 85	369	豊後鍋系 青花	縦	建物2(床面)	(13.2)	—	—	施主	良好	外面:明暦灰 7.5GY6/3 内面:明暦灰 7.5GY6/3	外側:明暦灰 唐草文 内面:二重輪郭	B1類		
79 12 85	423	豊後鍋系 青花	縦	KG・部1(造土)		—	—	—	施主	良好	外面:灰1.5GY8/3 内面:灰1.5GY8/3	外側:二重輪郭、唐草文 内面:二重輪郭、唐草文	B1類	
79 13 85	319, 341, 165	豊後鍋系 青花	縦	土坑2(床面・埋土)	(13.6)	2.6	—	施主	良好	外面:明暦灰SG7/1 SG7/1 内面:明サバーフ灰 SG7/1	外面:輪郭・二重輪郭、 草花文 内面:輪郭	B1類		
79 14 85	158	豊後鍋系 青花	縦	土坑2(埋土)	(13.5)	—	—	施主	良好	外面:明暦灰10GY8/1 内面:明暦灰10GY8/1	外面:輪郭、唐草文 内面:輪郭	C類		
79 15 85	468	豊後鍋系 青花	縦	輪郭2(埋土), 建物1(床面)(埋土)		—	—	—	施主	良好	外面:灰1.5GY8/1 内面:灰1.5GY8/1	外面:白文 内面:輪郭	C類	
79 16 85	2	豊後鍋系 青花	縦	部2(埋土)		—	—	6.2	施主	良好	外面:明暦灰10GY8/1 内面:明暦灰10GY8/1	外面:二重輪郭 内面:輪郭	C類	
80 1 85	115, 367, 128	豊後鍋系 青花	縦	建物1(床面), 建物1(北西 (1層), 段2(床面))	(12.0)	6.5	(4.8)	施主	良好	外面:明暦灰7.5GY8/1 内面:明暦灰7.5GY8/1	外面:明暦灰7.5GY8/1 内面:明暦灰7.5GY8/1	E類		
80 2 85	339, 250	豊後鍋系 青花	縦	PSG234(埋土), 段2土柱ベルト(5層)	(13.7)	—	—	施主	良好	外面:明暦灰7.5GY8/1 内面:明暦灰7.5GY8/1	外面:輪郭 内面:輪郭	E類		
80 3 85	143, 338	豊後鍋系 青花	縦	土坑2(上層・4層)		—	—	—	施主	良好	外面:明暦灰SG7/1 内面:明暦灰SG7/1	外面:二重輪郭 内面:輪郭	E類	
80 4 85	337	豊後鍋系 青花	縦	建物1(床面)		—	—	5.0	施主	良好	外面:明暦灰SG7/1 内面:明暦灰SG7/1	外面:輪郭 内面:輪郭	E類	
80 5 85	356, 138	豊後鍋系 青花	縦	建物1(床面), 段1(埋土)	(13.0)	2.4	(7.8)	施主	良好	外面:明暦灰5BG7/1 内面:明暦灰5BG7/1	外面:輪郭 内面:輪郭	E類		
80 6 86	61, 249, 473	瀬戸窯系 青花	縦	GB・部1(耕作土), 段1(望天塗1), 輪郭1(地表土)		16.4	7.0	7.7	施主	良好	外面:オーラーク灰 2.5GY8/1 内面:オーラーク灰 2.5GY8/1	外面:輪郭、草文 内面:達磨の痕 2の所残る 内面:輪郭	E類	
80 7 85	322, 320, 244, 159, 187, 71	瀬戸窯系 青花	縦	土坑2(3層・埋土・西壁面), 段2(北口縁・埋土), 段2(2層), KG・部1(耕作土)	(14.0)	—	—	—	施主	良好	外面:明暦灰7.5GY7/1 2.5GY7/1 内面:明暦灰7.5GY7/1 2.5GY7/1	外面:輪郭、列点文 内面:輪郭	E類	

測定番号	測定部位	写真番号	取上番号	種別	品種	グリッド・連鎖(土壠)	寸法(△) 内側元底			取土	構成	色調	調査・手法の特徴	備考	
							内深(cm)	高さ(cm)	底深(cm)						
80	8	85	172, 66	薄葉系 青花	繩	第1・地被り縫(埋土), 第1・第1(耕作土)	(14.4)	—	(5.0)	粘質	良好	外面: オーリーブ黄 5W6/3 内面: オーリーブ黄 5W6/3	外面: 網膜 内面: 十字文 高台: 露筋		
80	9	85	150, 121, 136	薄葉系 青化	繩	土壠(表面), 第1・表面(1層), 第1(埋土)	—	—	(7.0)	粘質	良好	外面: 淡白SYW/2 内面: 淡白SYW/2	外面: 草花文, 圆錐形, 二重網膜 内面: 草花文, 二重網膜 高台: 露筋	B1 箕	
80	10	85	162	薄葉系 青花	繩	土壠(表面)	—	—	4.4	粘質	良好	外面: 淡白SYT/2 内面: 淡白SYT/2	外面: 網膜 内面: 網膜 高台: 露筋, 削り出し		
1	86	87, 107		青磁	繩	第1, 土斜面, K7, (耕作土), (埋土)	—	—	—			外面: 淡白SYW/2 内面: 草花文, 二重網膜	B4 箕		
2	86	420		青磁	繩	第1L8° H27試験T6・段2, (埋貯)	—	—	—			外面: 草花文	C2 箕		
3	86	70		青磁	繩	第1, K6, (耕作土)	—	—	—			内面: 草花文			
4	86	1		青磁	繩	第2, 表土	—	—	—			— 熱を受け る			
5	66	176		留地網系 青花	繩	段2, (埋土)	—	—	—			C BB			
6	86			留地網系 青化	繩	H27試験T6・段2	—	—	—			C BB			
80	11	86	24	青釉向器	菊花形 小鉢	G7・段1(埋土)	(4.0) 最大 (6.0)	1.25	(2.0)	粘質	良好	外面: 淡墨7.5BG6/8 内面: 浅墨7.5BG6/8	製作り		
80	12	86		中国 青釉向器	巻	H4・段1HラインTr	—	—	(8.0)	0.5mm以下の砂 粒を若干含む	良好	外面: 淡墨7.5Y4/2 内面: 淡墨7.5Y4/2	外面: 回輪ヨコナデ 内面: 回輪ヨコナデ	熾熱	
80	13	86	311	中国陶器?	巻?	糊M1(埋土)	—	—	4.0	粘質	良好	外面: 淡黄2.5Y7/3 内面: 淡黄2.5Y7/3	外面: ナデ 内面: 回輪ナデ 高台: 剥離出し		
80	14	86		中国 青釉向器	巻	G5・部1北側凹面(表土)	—	—	—	粘質	良好	外面: 淡白2.5YR3/2 内面: 淡白2.5YR3/2	外面: 回輪ナデ 内面: 回輪ナデ, ナデ		
80	15	86	447	粉青沙器	四耳壺	K6・部1(包合物)	—	—	—	粘質	良好	外面: 淡灰7.5Y6/1 内面: 淡灰7.5Y6/3	外面: 参照, 草花文 内面: 回輪ナデ		
80	16	86		淡青沙器	瓶	第1(埋土)	—	—	(4.0)	粘質	良好	外面: 淡オーリーブ 5W5/2 内面: 淡オーリーブ 5W5/2	外面: 回輪ナデ 内面: 回輪ナデ		
81	1	87	330, 147, 288, 124, 125, 108, 293, 460, 295, 280, 504, 512	網繩 網繩向器	瓶	土壠(24枚), 底土: P60(6層), 段1(南口直), K7, 第1(耕作土), F4・部1北側凹面(埋土), J7・部1(底土), G5・部1ラ インTr北側(底土直), K6・部1(底土), 段2(西側 埋土), 段2(北側(埋土)), 段2(北側(埋土), L3・部 4(包合物), 石頭混立側斜 面(内底土), 石頭通隙(埋土)	(6.7)	—	(19.0)	1mm以下の砂 粒を微量含む	良好	外面: 网繩向器 10Y9/2/6 内面: にじみ(褐色 10YR6/4)	外面: ナデ, ユコイサエ 内面: ヨココロ, ユコイサエ, タキニ	— 熱を受け る	
81	2	87	112, 355, 126	網繩 網繩向器	瓶	物1(埋土), 物1(底土(床 上), 段1(底), C5・段1(埋土))	—	—	—	粘質	良好	外面: 網繩布系 2.5YR2/3 内面: にじみ(褐色 10YR6/4)	外面: ナデ 内面: ナデ, 細り		
81	3	87	189	網繩不明 網繩向器	瓶	段2(北側(2枚))	6.8	(2.0)	—	2mm以下の砂 粒を少量含む	良好	外面: 黑墨7.5YR3/2 内面: 黑墨7.5YR3/2	外面: 回輪ナデ 内面: 回輪ナデ		
81	4	87	132, 219	網繩 網繩向器	瓶	段1(埋土), G5・部1北側 凹面(表土), J6・部1(包合 物), 段2(北側(3枚))	—	—	(9.0)	粘質	良好	外面: にじみ(褐色 10YR7/2 内面: にじみ(褐色 2.5YR6/3))	外面: タキニ(下打) 内面: にじみ(褐色 10YR6/4) 底盤: 回輪ナデ, ナデ		
81	5	87	296, 38, 203, 220	繩 繩	繩	第1(埋土), J7・部1(耕作土), 第1(西側(底土内)), 段2(北側(2枚・3枚))	—	—	11.2	—	粗粒	良好	外面: オーリーブ灰 10Y6/1 内面: オーリーブ灰 10Y6/1	外面: にじみナデ, 回輪や中盤反 底盤: 回輪ナデ, ナデ	
81	6	87		繩 繩	繩	H4・部1・北側凹面(表土)	—	—	6.2	粘質	良好	外面: 淡白10Y7/1 内面: 淡白10Y7/1	外面: 回輪ナデ 内面: 回輪ナデ		
81	7	87	226	底盤不明 陶器	沫	段2(北側(3枚))	—	—	—	粘質	良好	外面: 淡白SY5/1 内面: 淡白SYW/1	底盤は IGC防長 系の跡跡 に似る		

編図 番号	遺物 名目 図版 番号	写真 番号	取上 番号	種別	基盤	グリッド・連続(土相)	寸法 (○) 内復元断面			粘土	構成	色調	調整・手法の特徴	備考
							口径 (mm)	高さ (mm)	底径 (mm)					
81 8	88	79		偏前	鉢	L7・部4(耕作土)	—	—	—	粘土	良好	外面: 黄灰 SY5/1 内面: 黄灰 2.5YS/1	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ	
81 9	88	499, 274, 95		偏前	陶鉢	N9・段4(地山土), 部1・北側斜面, 1ライン (表土), 3段1・北斜面(耕 作土), H7・部4(耕作土), 部1・西側(内面), K6・ 部1(耕作土), 段4(床面) A7・頸4(耕作土), OB・底部(底土)	(31.8)	13.8	(14.4)	粘土	良好	外面: 黄灰 7.5YR5/3 内面: 黄灰 SYRS/1	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ	N/A
81 10	88	480, 377, 68, 503, 508		偏前	陶鉢	N9・段4(地山土), 部1・北側(内面), K6・ 部1(耕作土), 段4(床面) A7・頸4(耕作土), OB・底部(底土)	(32.0)	—	(14.0)	粘土	良好	外面: 黄灰 2.5Y5/2 内面: 黄灰 2.5YS/1	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ・ 傾け7度	
82 1	89	300, 423, 408, 373, 387, 484		偏前	陶鉢	N9・段4(地山土), 部1・北側(内面), K6・ 部1(耕作土), 段4(床面) A7・頸4(耕作土), OB・底部(底土)	(26.2)	12.5	(12.4)	粘土	良好	外面: 黄灰 7.5Y4/1 内面: 黄灰 7.5YR5/1	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ・ 傾け7度	V.A.
82 2	89	505		偏前	陶鉢	L3・部4(包含層)	—	—	(13.6)	粘土	良好	外面: 黄灰 2.5Y5/2 内面: 黄灰 5Y5/1	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ・ 傾け	
82 3	89	229, 509		偏前	陶鉢	建物7・F11(底土), A7・頸4(耕作土), PB・窓附 10(床面)	—	—	(13.6)	粘土	良好	外面: にら・頂相 10YR6/3 内面: にら・壁 7.5YR7/4	外面: 回転ナデ・ ナデ 内面: ナデ, 傾け12度	
82 4	89	416, 417, 49, 480, 431, 313, 318, 537		偏前	壺	J6・K6・部1(包含層), J8・部1(耕作土), PIS27(1段土), B6・頸切 (表土), 窓附(底土), J6(床面 上), 段2(床面), 窓附6(北 西(耕土))	(10.0)	—	—	粘土	良好	外面: 黄灰 SYR5/2 内面: にら・外側 2.5YR5/4	外面: 回転ナデ・ ナデ 内面: 回転ナデ・ ナデ	
82 5	89	514		偏前	壺	E2・窓附12(床面)	—	—	—	白色粒子を含む	良好	外面: 黄灰 10YR5/1 内面: 黄灰 10YR5/1	外面: 回転ナデ・ 底化12度 内面: 回転ナデ	
82 6	89	140, 277, 300, 424, 3		偏前	壺	Pis3(裡), Pis4(裡), J7・部1(地山土), K9・ 部1(耕作土), A7・頸4 (底土), 部2(壁(土), 地 窓附(壁土), 部2(壁(土))	(13.2)	—	(13.6)	粘土	良好	外面: 黄灰 10YR5/1 内面: 黄灰 10YR4/3	外面: 回転ナデ・ 底化10度 内面: 回転ナデ	
83 1	90	113, 152, 72, 276, 129, 171,		偏前	壺	建物4(底土), D9・部1(底 土), 建物4(底土), 部1・東側(耕 作土), L6・部1(包含層), J6・部1(耕作土), 部1・ト レシヨン(底土), L6(底土), N9(底土), 部2(南側(底 土), 窓附(底土), 窓附6(北 西(耕土), 部4(底土), 地 窓附(壁土), 黄・シル・10 ～12層), L2・部4(底土), L3(茶褐色地縫隙)	—	—	—	白色粒子を含む	良好	外面: 浅黄 2.5Y7/4 内面: 黄灰 2.5YR5/2	外面: 回転ナデ・タキミ・ 沈み・回転ケツリ・ ナデ 内面: 自然発酵の 内面: 回転ナデ・ナデ・ ユビオサ	
83 2	90	332, 259, 429, 104, 15, 99, 196, 531, 533, 121, 511, 528, 519, 525, 522, 540, 507		偏前	便またし器	Pis11(底土), E9・部1(底 土), 表土, 部1・東側(耕 作土), L6・部1(包含層), J6・部1(耕作土), 部1・ト レシヨン(底土), L6(底土), N9(底土), 部2(南側(底 土), 窓附(底土), 窓附6(北 西(耕土), 部4(底土), 地 窓附(壁土), 黄・シル・10 ～12層), L2・部4(底土), L3(茶褐色地縫隙)	—	—	—	白色粒子を含む	良好	外面: にら・外側 2.5YR5/3 内面: 黄灰 2.5YR5/1	外面: ナデ・ケズリ 内面: ナデ	
83 3	90	372, 324, 471, 60		偏前	水底窓	建物2・PIS46(底土), L10 2(3層), 部1(南側(地山土上), J6・部1(耕土))	—	—	—	白色粒子を含む	良好	外面: 黄灰 SYR4/1 内面: 黄灰 SYR4/2	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ	
84 1	91	343, 114		瓦質土器	陶鉢	建物1(底土, 床上)	(27.0)	10.9	14.0	2mm以下の砂 粒を少量含む	良好	外正: 明褐色 10YR7/6 内面: 明褐色 10YR7/6	外正: ナデ 内面: ナデ, 傾け8度	傾斜系
84 2	90	59, 142, 331		瓦質土器	陶鉢	G1・部1(耕作土), 部1(底 土), 大2(4層)	(30.4)	—	(12.7)	黒・小白色粒子 を含む	良好	外正: 黑 N4/1 内面: 黑 N4/1 断面: 黑 10YR8/2	外正: ハベヌ 内面: ハベヌ	傾斜系
84 3	90	268, 493, 501, 253, 542		瓦質土器	陶鉢	建物7・PIS13(底土), PIS10(底土), M9・右側 (地山土), 窓附6(底土), 部3・ H2(地山土)	—	—	—	1mm以下の砂 粒を少量含む	良好	外正: 黑 7.5YR6/6 内面: 黑 7.5YR6/6	外正: ナデ 内面: ナデ, ハベヌ, 傾け	傾斜系
84 4	90	492, 218, 237, 238, 513		瓦質土器	陶鉢	M9・Pis26(底土), 段2(北 側(内面), N9・部3(包含層), 右脇邊柱北側斜面(内側底土))	—	—	—	2mm以下の砂 粒を少量含む	良好	外正: にら・頂相 2.5YR6/4 内面: 深灰 10YR8/4- 4.5(底土)	外正: ヨコナダ・ハベヌ 内面: ナデ, 傾け2.5度	傾斜系
84 5	90	221, 290, 227, 535		瓦質土器	陶鉢	段2(北側(内面), 底附6(底土))	—	—	—	1mm以下の砂 粒を少量含む	良好	外正: にら・頂相 10YR6/4 内面: にら・頂相 10YR6/4	外正: 調整不明 内面: ハベヌ, 傾け3度	傾斜系
84 6	90			瓦質土器	陶鉢	H4・1・北側斜面(底土), H4・14・平坦面(底土)	—	—	—	1mm以下の砂 粒を少量含む	良好	外正: ナデ 内面: ナデ, ハベヌ, 10YR7/4	外正: ナデ 内面: ナデ, ハベヌ, 傾け4度	傾斜系

測定番号	測定番号	写真番号	取扱番号	種別	品種	グリッド・選択(土種)	寸法 (cm)	内側元距離 (cm)	外側元距離 (cm)	土質	構成	色調	調整・手法の特徴	備考
84	7	90	532, 535, 539	玄質土層	火鉢	堅版(理土), H3+堅版(理土)	(27.2)	11.1	(13.2)	2mm以下の砂 粒を少量含む	良好	外面: 国白5YR1 内部: 国白5YR1	外面: ヨコナダ、ハケヌ ユビオサエ	良好系
85	1	92	538	玄質土層	火鉢	G3+堅版(理土)	(18.0)	—	—	1mm以下の砂 粒を微量含む	良好	外面: 黑褐10YR3/1 内部: 棕7.5YR7/6	外面: ハニカニ 内部: ハニカニ	
85	2	92	358	玄質土層	火鉢	Pn0(理土)	(19.0)	—	—	中砂軟質	良好	外面: 棕7.5YR6/6 内部: 棕7.5YR6/6	外面: ナデ 内部: ナデ	浅耕形
85	3	92	400, 368, 405, 290, 306	玄質土層	火鉢	Pn270(理土), K6+JH(包含 層), K6+部(西側(土内), H3+堅版(理土), H3(理 土), 段2北端(床面), 段 2南(床面))	—	—	—	1mm以下の砂 粒を少量含む	良好	外面: 棕2.5YR6/6 内部: 棕7.5YR7/6 断面: 黑褐10YR5/2	外面: 線達子 内部: ナデ	亂耕型
85	4	92	256, 506	玄質土層	火鉢	F9+部1斜面(理土), E3+部4(包含層)	—	—	—	1mm以下の砂 粒を微量含む	良好	外面: にじい-褐 7.5YR6/4 内部: にじい-褐 7.5YR6/4	外面: 国松ナデ、実葉, 葉裏文スタンプ 内部: 国松ナデ	
85	5	92	298, 410, 425, 345, 23, 184, 201, 214, 181, 45, 432, 430	玄質土層	火鉢	K7+部1(山土上), B6+部1(北側面(地山上), B6(地山上), C4+北側面(井 戸イン), C7-部1(理土), C7-部1(理土), H3+部1(理 土), H3(理土), J7+部1(理 土), J7(理土), A6+切削 1(山土上), B6+切削1(基 礎地脚土), 堅版(理土), C10+堅版(理土)	—	—	—	1mm以下の砂 粒を微量含む	良好	外面: 棕灰N31 内部: 棕灰N31 断面: 黑褐10YR8/1	外面: ヨコナダ、ミガキ、 ユビオサエ	深耕型
85	6	92	441, 485, 440, 385, 392, 391, 404, 396, 490, 294, 428, 393, 427, 212, 335	玄質土層	火鉢	部1内側(理土内底2-深部), 部1内側(理土内), J6+部 1内側(理土), J6+部1(耕作土), K6(未), J2+北側(3層), 堅版(理土)	(29.0)	—	—	2mm以下の砂 粒を少量含む	良好	断面: 暗赤灰10R2/1 表面: 黑褐5YR4/2	外面: ミガキ、ナデ, 実葉、花文, 葉裏文スタンプ 内部: ハケヌ、 ユビオサエ	深耕型
85	7	92	471, 482, 481, 478, 475, 474, 476, 376, 378, 383, 384, 443, 437, 463, 464, 465, 466, 487, 454, 446, 445, 455	玄質土層	火鉢	部1(理土), 部1内側(理土内), 部1内側(理土内底), 堅版②, 坚版③, 坚版④	(35.0)	—	—	2mm以下の砂 粒を少量含む	良好	外面: 黑褐10YR3/1 内部: 黑褐10YR3/1 断面外: にじい-黄褐 10YR5/4 断面内: 黄褐10YR4/1	外面: ナデ、ミガキ、 実葉、葉裏文スタンプ 内部: ハケヌ、 ユビオサエ	深耕型
86	1	93	346, 371	土耕層	灯明畠	建物2+P253(理土)	6.9	18	(3.6)	1mm以下の砂 粒を少量含む	良好	外面: 棕7.5YR6/6 内部: 棕7.5YR6/6	外面: 国松ナデ 内部: 国松ナデ	16C前?
86	2	93	118	土耕層	畠	建物1支内(床上)	—	—	4.5	1mm以下の砂 粒を少量含む	良好	外面: 棕5YR6/6 内部: 棕5YR6/6	外面: 国松ナデ, 田植柄切り 内部: 国松ナデ	16C前?
86	3	93	52	土耕層	畠	D7+建物1(床上)	(13.2)	2.55	(6.6)	1mm以下の砂 粒を微量含む	良好	外面: 黑褐10R2/1 内部: 黑褐10R2/1+ 黑褐10YR3/1	外面: 田植ナデ, 田植柄切り 内部: 田植ナデ	B-1(古) 16C前
86	4	93	145	土耕層	灯明畠?	段1+主風2(理土)	—	—	(6.5)	1mm以下の砂 粒を微量含む	良好	外面: 黑褐7.5YR6/1 内部: 黑褐7.5YR6/1	外面: 田植ナデ, 田植柄切り 内部: 田植ナデ、ナデ	B-16C 外内面に 偏植
86	5	93	194	土耕層	畠	段1(2)	—	—	(6.0)	1mm以下の砂 粒を微量含む	良好	外面: 棕5YR7/6 内部: 棕5YR7/6	外面: 田植ナデ, 田植柄切り 内部: 田植ナデ	
86	6	93	273	土耕層	畠	段2北側(床面)	—	—	(5.2)	1mm以下の砂 粒を微量含む	良好	外面: 棕5YR7/6 内部: 棕5YR7/6	外面: 田植ナデ, 田植柄切り 内部: 田植ナデ	16C中~
86	7	93	449	土耕層	畠	部1内側(理土内底)	—	—	(5.4)	1mm以下の砂 粒を微量含む	良好	外面: 棕7.5YR6/6 内部: 棕7.5YR6/6	外面: 田植ナデ, 田植柄切り 内部: 調整不明	
86	8	93	303	土耕層	畠	段3(理土)	—	—	(6.4)	砂粒をほとんど 含まない	良好	外面: にじい-黄褐 10YR5/3 内部: 黑褐10YR5/2	外面: 調整不明 内部: 調整不明	16C前?
86	9	93	317, 438	土耕層	畠	段3(理土), 段3(溝内)	—	—	(6.2)	1mm以下の砂 粒を微量含む	良好	外面: 棕7.5YR6/6 内部: 黑褐7.5YR7/8	外面: 調整不明 内部: 調整不明	E-1?
													16C前?	

構造 番号	遺物 番号	名前 ROM	取上 番号	種別	器種	グリッド・遺構（土相）	寸法 (cm)			内面 形状	出土 状況	構成	色調	調査・手法の特徴	備考
							口径 (cm)	底高 (cm)	底径 (cm)						
86_10	93	497		土師器	杯	段4(床土)	—	—	(6.3)	1m以下の砂 粒を微細含む	良好	外面：橙7.5YR6/6 内面：橙7.5YR6/6	外面：調整不明 内面：調整不明	■ 1.7 1SC 前半	
86_11	93	536		土師器	皿	石組遺構(黄色粘土層直下)	—	—	3.0	1m以下の砂 粒を微細含む	良好	外面：橙7.5YR6/6 内面：橙7.5YR6/6	外面：調整不明 内面：調整不明		
86_12	93	521		土師器	皿	石組遺構(10 ~ 12層)	—	—	(5.8)	1m以下の砂 粒を微細含む	良好	外面：橙7.5YR7/6 内面：橙7.5YR7/6	外面：調整ナダ、 刮削系切り		
86_13	93			土師器	皿	石組遺構西側(埋土)	—	—	6.1	1m以下の砂 粒を微細含む	良好	外面：明黄褐10YR7/6 内面：明黄褐10YR7/6	外面：調整ナダ、 刮削系切り		
86_14	93	380		土師器	杯	漢2(2層土面)	11.2	2.85	5.6 ~ 5.9	1m以下の砂 粒を少量含む	良好	外面：灰4-6 7.5YR6/4 内面：橙7.5YR7/6	外面：調整ナダ、 刮削系切り	■ 2.7 1SC 後半	
86_15	93	33		土師器	灯明皿	漢2(2層土面)	7.0	1.6	4.2	1m以下の砂 粒を微細含む	良好	外面：灰4-6 7.5YR7/4 内面：灰4-6 7.5YR7/4	外面：調整ナダ、 刮削系切り	■ 16C	
86_16	93			土師器	皿	か3-3・土坑4(床直付)	—	—	3.8	1m以下の砂 粒を微細含む	良好	外面：橙7.5YR6/6 内面：橙7.5YR6/6	外面：調整ナダ、 刮削系切り	■ 16C	
86_17	93	349		土製品	土糞	建物1(1層)	長さ 4.9	幅 1.2	0.2 × 0.25	1m以下の砂 粒を微細含む	良好	外面：灰4-6 7.5YR7/4	外面：調整ナダ、 刮削系ナダ	重量 7.42 g	
86_18	93	354		土製品	土糞	建物1(1層)	—	—	幅 1.15 × 0.35	1m以下の砂 粒を少量含む	良好	外面：灰4-6 7.5YR6/2	外面：ナダ	重量 4.49 g	
86_19	93	119		土製品	土糞	建物2(南北(床土))	長さ 4.35	幅 1.3	0.3 × 0.3	1m以下の砂 粒を微細含む	良好	外面：明黄褐10YR7/6	外面：ナダ	重量 6.97 g	
86_20	93	131		土製品	土糞	建物2(南北(床土))	—	—	幅 1.1 × 0.35	1m以下の砂 粒を少量含む	良好	外面：灰4-6 7.5YR6/2	外面：ナダ	重量 2.16 g	
86_21	93	347		土製品	土糞	建物1(床面)	長さ 4.8	幅 1.3	0.25 × 0.25	1m以下の砂 粒を少量含む	良好	外面：明黄褐10YR7/6	外面：ナダ	重量 7.59 g	
86_22	93			土製品	土糞	Ps6(埋土)	—	—	0.25 × 0.25	4mm以下の砂 粒を少量含む	良好	外面：黒褐10YR3/2	外面：ナダ	重量 1.17 g	
86_23	93	359-1		土製品	土糞	Ps249(埋土)	長さ 4.4	幅 1.15	0.3 × 0.3	1m以下の砂 粒を微細含む	良好	外面：に赤い消褪 10YR6/4	外面：ナダ	重量 5.59 g	
86_24	93	359-2		土製品	土糞	Ps249(埋土)	長さ 5.2	幅 1.15	0.3 × 0.3	1m以下の砂 粒を微細含む	良好	外面：橙7.5YR6/6	外面：ナダ	重量 6.93 g	
86_25	93	360		土製品	土糞	Ps249(埋土)	長さ 4.7	幅 1.15	0.25 × 0.25	1m以下の砂 粒を微細含む	良好	外面：に赤い消褪 10YR7/4	外面：ナダ	重量 6.01 g	
86_26	93	361		土製品	土糞	Ps249(埋土)	長さ 4.75	幅 1.2	0.3 × 0.3	1m以下の砂 粒を微細含む	良好	外面：に赤い消褪 10YR6/4	外面：ナダ	重量 6.56 g	
86_27	93	362		土製品	土糞	Ps249(埋土)	長さ 4.6	幅 1.3	0.25 × 0.25	1m以下の砂 粒を微細含む	良好	外面：に赤い消褪 10YR6/4	外面：ナダ	重量 6.16 g	
86_28	93	363		土製品	土糞	Ps249(埋土)	長さ 4.0	幅 1.1	0.3 × 0.3	1m以下の砂 粒を微細含む	良好	外面：褐色10YR4/3	外面：ナダ	重量 5.05 g	
86_29	93	363		土製品	土糞	Ps249(埋土)	長さ 4.0	幅 1.3	0.25 × 0.25	1m以下の砂 粒を少量含む	良好	外面：に赤い消褪 10YR7/4	外面：ナダ	重量 5.90 g	
86_30	93	328		土製品	土糞	土坑2(4層)	—	—	幅 1.3 × 0.3	1m以下の砂 粒を少量含む	良好	外面：明黄褐10YR7/6	外面：ナダ	重量 3.85 g	

調査番号	遺物番号	写真番号	取上番号	種別	器種	グリッド・連続(土相)	寸法 (cm)	高さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	土	焼成	色調	調査・手法の特徴	備考
86	31	93	389	土製品	土鉢	部1西側(盛土内)	直径 4.2	幅 1.3	0.35	1cm以下の砂 粒を少量含む	良好	外面: 深黄 2SY6/2	外面: ナデ	重量 684 g	
86	32	93	394	土製品	土鉢	部1西側(盛土内)	直径 4.4	幅 1.3	0.3 × 0.3	1cm以下の砂 粒を微量含む	良好	外面: にごい黄褐 10YR7/3	外面: ナデ	重量 346 g	
86	33	93	397	土製品	土鉢	部1西側(盛土)	—	—	0.4	1cm以下の砂 粒を微量含む	良好	外面: 淡灰 10YR5/1	外面: ナデ	重量 240 g	
86	34	93	403	土製品	土鉢	部1西側(盛土)	直径 4.2	幅 1.3	0.4 × 0.4	1cm以下の砂 粒を微量含む	良好	外面: 黒褐 10YR3/2	外面: ナデ	重量 802 g	
86	35	93	458	土製品	土鉢	J6・部1(盛土内)	直径 4.0	幅 1.5	0.35 × 0.4	1cm以下の砂 粒を少量含む	良好	外面: にごい黄褐 10YR7/3	外面: ナデ	重量 949 g	
86	36	93		土製品	土鉢	部1西側(盛土内削除)	—	幅 1.3	0.35 × 0.35	1cm以下の砂 粒を少量含む	良好	外面: 深灰 7.5YR4/2	外面: ナデ	重量 663 g	
86	37	93	292	土製品	土鉢	J6・部1(地山上)	直径 4.0	幅 1.3	0.3 × 0.3	1cm以下の砂 粒を微量含む	良好	外面: 淡灰 10YR5/1	外面: ナデ	重量 752 g	
86	38	93	450	土製品	土鉢	J6・部1(地山上)	直径 3.9	幅 1.35	0.35 × 0.35	1cm以下の砂 粒を少量含む	良好	外面: 淡灰 10YR5/1	外面: ナデ	重量 630 g	
86	39	93	451	土製品	土鉢	J6・部1(地山上)	直径 4.0	幅 1.25	0.3 × 0.3	1cm以下の砂 粒を少量含む	良好	外面: 深灰 2.5Y4/1	外面: ナデ	重量 598 g	
86	40	93	452	土製品	土鉢	J6・部1(地山上)	直径 4.0	幅 1.4	0.4 × 0.4	1cm以下の砂 粒を少量含む	良好	外面: にごい黄褐 10YR5/4	外面: ナデ	重量 792 g	
86	41		461	土製品	土鉢	J6・部1(地山上)	直径 4.6	幅 1.3	0.4 × 0.4	1cm以下の砂 粒を少量含む	良好	外面: にごい黄褐 10YR6/3	外面: ナデ	重量 642 g	
86	42		462	土製品	土鉢	J6・部1(地山上)	—	幅 1.2	0.35 × 0.35	1cm以下の砂 粒を少量含む	良好	外面: 深灰 2.5Y5/1	外面: ナデ	重量 554 g	

第5表 普源田跡石製品観察表

調査番号	遺物番号	写真番号	取上番号	種別	器種	連続・グリッド(土相)	直径 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	色調	備考	
87	1	94	255	石製品	扇	Pt59(埋土)	残存 (0.4)	幅 5.85	厚さ 1.5	—	白石	外面: 深灰 7.5Y4/2 内部: 廃 7.5Y4/4	鉄部破片 表面に工具痕あり	
87	2	94	545	石製品	砾石	石組連続(盛土)	残存 0.4 × 4.5			276.0	油刷拭いたは 油刷岩質解剖用			
87	3	94		石製品	石臼 (上臼)	石臼 (上臼)	上臼 (28.1)	直径 7.8	油刷 G29.0	—	礫石		被熱面あり 砾石に転用	
87	4	94	544	石製品	石臼 (上臼)	石臼連続(盛土)	上臼 03.0	直径 7.8	油刷 G30.0	—	礫石		挽木穴を開け直す	
88	1	94	541	石製品	石臼 (下臼)	Pt362(埋土)	上臼 01.0	直径 12.15	油刷 G7.0	—	チイサイト		側面に格子状の加工痕 あり	
88	2	94	543	石製品	石臼 (下臼)	石臼連続(盛土)	上臼 (14.0) 最大径 (36.1)	直径 10.4	油刷 G27.0	—	安山岩質解剖用		砾石に転用	
89	1	95		石器	砾石	建物(床土)	165	1.55	0.5	165		青黒 5PB2/1	黒	

標高 測定 番号	測定 番号	写真 番号	測定 番号	種別	岩種	測定・グリッド(土層)	長さ (m)	幅 (m)	厚さ (m)	重量 (g)	石M	色調	備考
89 2	95			右面	基岩	建物1北側(床土)	1.9	1.3	0.4	133		黒N2/	黒
89 3	95	344		右面	基岩	建物1(床土)	2.45	1.4	0.5	249		灰N4/	黒
89 4	95			右面	基岩	H8・露1(耕作土)	2.4	1.85	0.75	494		暗灰N3/	黒
89 5	95			右面	基岩	Pn77(埋土)	2.4	1.8	0.9	561		青黒SPB2/3	黒
89 6	95	92		右面	基岩	K8・露1(耕作土)	2.1	1.9	0.5	285		灰N4/	黒
89 7	95			右面	基岩	段2・付近(埋土)	2.35	1.5	0.55	26		黒N2/	黒
89 8	95			右面	基岩	Pn266(埋土)	残存 2.0	1.8	0.6	284		黒N2/	黒
89 9	95			右面	基岩	38・段2(床面)	2.4	2.1	0.8	607		暗灰T5VB4/1	黒
89 10	95			右面	基岩	Pn242(埋土)	1.95	1.4	0.4	185		灰N4/	黒
89 11	95	111		右面	基岩	J6・露1(地山土)	2.3	1.65	0.65	3.8		灰N4/	黒
89 12	95			右面	基岩	J6・露1(植土)	1.85	1.8	0.75	3.59		灰N4/	黒
89 13	95			右面	基岩	Pn170(埋土)	1.9	1.5	0.65	287		暗灰N3/	黒
89 14	95	309		右面	基岩	段2(床面)	1.8	1.35	0.35	144		黒N2/	黒
89 15	95	483		右面	基岩	K7・露1(堆土内)	1.7	1.5	0.7	278		灰N4/	黒
89 16	95			右面	基岩	Pn215(埋土)	3.1	2.05	0.65	518		黒N2/	黒
89 17	95			右面	基岩	露1西側(堆土内)	2.25	1.8	0.4	201		灰N4/	黒
89 18	95			右面	基岩	Pn265(埋土)	2.2	1.9	0.8	497		灰N4/	黒
89 19	95	315		右面	基岩	段2(床面)	2.15	2.0	0.75	468		暗灰N3/	黒
89 20	95			右面	基岩	Pn193(埋土)	2.15	1.5	0.55	253		灰N4/	黒
89 21	95			右面	基岩	Pn193(埋土)	1.8	1.1	0.7	148		灰SY5/1	黒
89 22	95	542		右面	基岩	H2・露3(地山上部)	2.5	1.6	0.4	298		灰N4/	黒
89 23	95			右面	基岩	建物1南東(床土)	1.9	1.6	0.6	226		灰D7YT/1	白
89 24	95			右面	基岩	G7・段1(耕作土)	3.0	2.2	0.6	747		オーラブ黒 5Y3/1	白
89 25	95	479		右面	基岩	K7・露1西側(堆土)	1.5	1.5	0.6	196		黒糊10YR3/2	白
89 26	95			右面	基岩	H7・露1(耕作土)	2.1	2.1	0.6	3.8		浅黄2.5Y7/4	白
89 27	95	306		右面	基岩	露1(埋土)	2.7	1.9	0.8	731		黄灰2.5Y6/1	白
89 28	95			右面	基岩	段2北側(床面)	2.2	1.6	0.5	224		灰SY6/1	白
89 29	95			右面	基岩	段2北側(床面)	2.1	1.6	0.5	286		灰10YY6/1	白
89 30	95			右面	基岩	段2南側(埋土)	2.4	1.7	0.5	343		黒糊2.5Y5/2	白
89 31	95			右面	基岩	段2南側(埋土)	1.5	1.3	0.5	165		灰オーラブ 5Y6/2	白
89 32	95			右面	基岩・鈍石	Pn293(埋土)	11.7	9.8	5.0	900.0			保護・錆斑あり
89 33	95			右面	石神	GH(表土)	18.4	11.8	2.3	700.0		暗灰黄 2.5Y4/2	
89 34	95			右面	全床石	Pn166(埋土)	29.0	27.8	8.2	8090.0		表:明褐色 3YR3/4 裏:淡黄 2.5Y7/4	裏面:平坦面 前面:ルビン風面

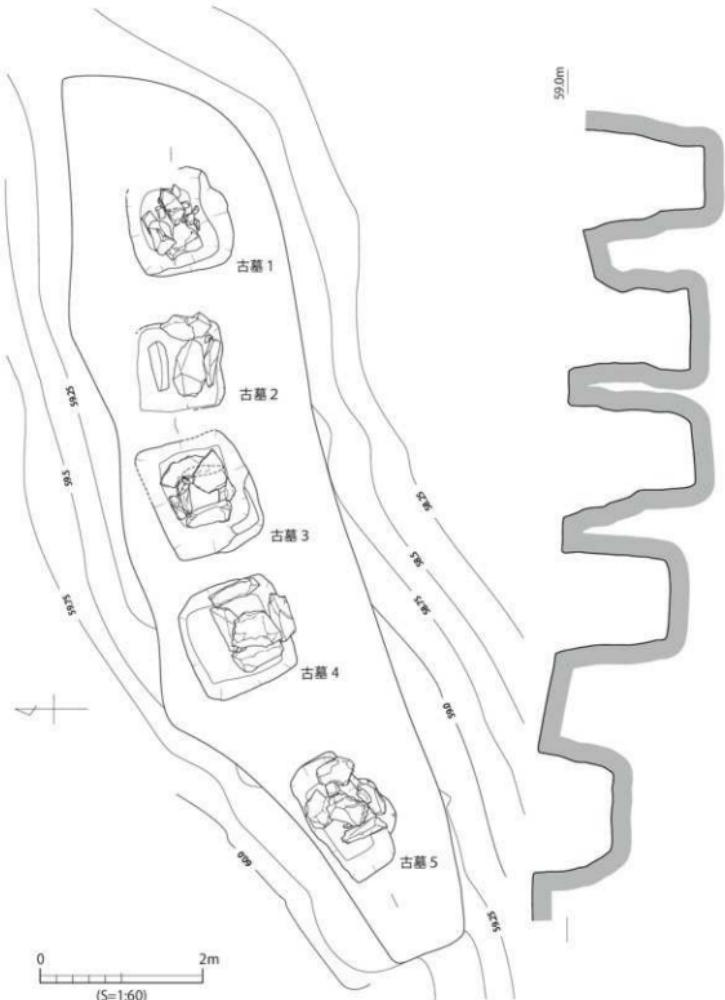
第6表 普源田砕跡金属製品観察表

調査番号	遺物名	写真番号	取上面番号	種別	器種	遺構・グリッド・土壌	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
90_1	96			金属製品	錠	鋸切1(ベルト)	残存4.7	1.4		7.36	丸板瓦端(中間部)14-15C 先端と基部を欠損する
90_2	96	546		金属製品	錠?	石組連鎖(表土)	残存7.1	塊分	0.5		先端と初期を欠損する
90_3	96	258		金属製品	鉄錠	段2 右側(床土)	Q230				体部はやや抵抗する 外端に木炭渣が付着
90_4	96	307		金属製品	火薬	段2 右側(床土)	残存17.2	0.75	0.7		両端を欠損する
90_5	96			金属製品	鉄錠?	土成2(床土)	4.9	1.4	0.8		
90_6	96			金属製品	鉄錠	建物1(床土)	残存2.4	0.4	0.3		頭面部分
90_7	96	154		金属製品	鉄錠	土成2左側(埋土)	残存5.7	頭面部分	1.0		0.9
90_8	96	260		金属製品	鉄錠	J7・段2北側(床土)	残存3.5	頭面部分	0.5		0.9
90_9	96	46		金属製品	鉄錠?	J7・帯1・地囁り縫(埋土)	残存1.6	0.6	0.5	1.15	
90_10	96	234		金属製品	鉄錠	段2北側(床土)	残存4.2	0.8	0.8		
90_11	96	177		金属製品	鉄錠	段2(埋土)	残存3.3	頭面部分	1.1		1.3
90_12	96	494		金属製品	鉄錠	Ph311(埋土)	残存4.4	頭面部分	0.6		0.8
90_13	96	456		金属製品	鉄錠	J6・帯1・西側(埋土)	残存2.2	頭面部分	0.6		1.0
90_14	96	398		金属製品	錠	帯1西側(土)	残存2.5	0.6	0.6		
90_15	96			金属製品	千明	帯1西側(土内下面)	1.1	0.6	0.4	0.3	
90_16	96	17		金属製品	鉄錠	J8(土)	残存4.0	0.9	0.5	3.15	
90_17	96	297		金属製品	鉄錠	K6・J8(床土)	残存6.9	頭面部分	0.7		1.6
90_18	96			金属製品	錠明1	(ベルト内)	残存4.8	0.6	0.4		
90_19	96			金属製品	建物1	北東(床土)	残存4.0	0.7	0.5		端部が丸くなる
90_20	96			金屬製品			残存2.1	1.7	0.2		5字銘に由る
90_21	96	254		金属製品	用途不明 鉄片	Ph50(埋土)	2.0	4.4	0.4		
90_22	96			金属製品	鉄片	土成2(床土)	3.1	3.0	0.4		
90_23	96			金属製品	鍛造品	帯1(北側)・1ラインTr(表土)	7.5	8.7	0.5		鍛ぐ池山、頭面を保有している かなり粗が入る
90_24	96	19		金属製品		Tr(表土)	5.4	6.0	0.6		タガキ通り後表面稍離 副溶出物の可塑性あり
90_25	96	534		金属製品	鋸割品	壁端6(埋土)	残存7.9	0.5	0.1		甲背捲輪金物
90_26	96	117		金属製品	鋸割品	建物1(北西)J1	残存3.2	頭面部分	0.3	0.1(頭部1本)	瓦頭
90_27	96	453		金属製品	鋸割品	帯1・西側(土内前面)	0.8	頭面部分	1.6		幅3mm厚さ2mmの鋸片が下部中央につく 甲背の歯力か刀頭
90_28	96			金属製品	鋸割品	右組連鎖(埋土)	1.1	0.8	頭面外径0.7 内径0.3		甲背部品? 頭目または某和金物
90_29	96			金属製品	鋸割キセラ	J7(埋土)	4.9	1.0	1.0		
91_1	96			古酒	天望元宝	段1 右側(床土)	2.4	2.4			
91_2	96	487		古酒	銘牌不明	段3(埋土)	2.5	2.5			第91回3とセットで出土
91_3	96	487		古酒	銘牌不明	段3(埋土)	2.4	1.5			第91回2とセットで出土
91_4	96	7		古酒	萬永酒造	調酒区外側土崎行道	2.2	2.2			
91_5	96			古酒	純酒洋	G4・石組連鎖・上側斜面(埋土)	12.9	13.2	7.6		上下2段になった純酒洋
91_6	96	518		古酒	純酒洋	右組連鎖(黄色シルト)	10.4	9.9	6.2		

第5節 古墓群の調査

1. 古墓群1（第92図、図版77・78）

郭2の北側斜面を段状に造成した平坦面にある。平坦面の広さは、長さ11.5m・幅1.8～2.3mで、標高59m前後に位置する。平坦面は、竪堀の埋土を切っていることから、竪堀が機能しなくなった後に營まれたとみられる。



第92図 古墓群1全体図

古墓は、計5基ある。丘陵斜面に平行に並び、等高線にはほぼ沿うように配置される。いずれも墓坑上に標石が置かれる。このうち、古墓1～古墓4は30～50cmの間隔で近接するが、古墓5は古墓4との間隔が1mあまりと広い。前者は、墓坑の平面形は概ね方形で木棺に使用された鉄釘を伴うのに対し、後者は長方形で鉄釘は検出されておらず、様相に違いがみられる。

古墓1（第93・94図、図版79・97）

標石は、墓坑のほぼ中央にある。長さ80cm・幅60cmほどの範囲に方形を意識して割石を置いたものである。高さは40cmほどあり、2段程度積まれる。

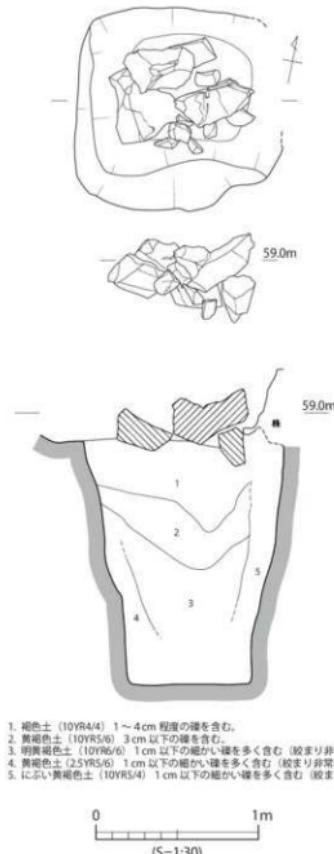
墓坑の平面形は、ほぼ方形である。上端で一辺120cm、下端で65～75cm、深さは150cmある。横断面形は、各壁が下端から上端に向かって外傾しながら立ち上がる。埋土は、上層から褐色土（1層）・黄褐色土（2層）・明黄褐色土（3層）、壁沿いに黄褐色土（4層）・にぶい黄褐色土（5層）が観察

できる。1層と2層は中央が大きく凹んでいるが、墓坑上の標石は落ち込んだ状況を示していないことから、内部に納められた木棺が腐朽した際に生じた陥没を埋めた後に標石を据えたものと考えられる。

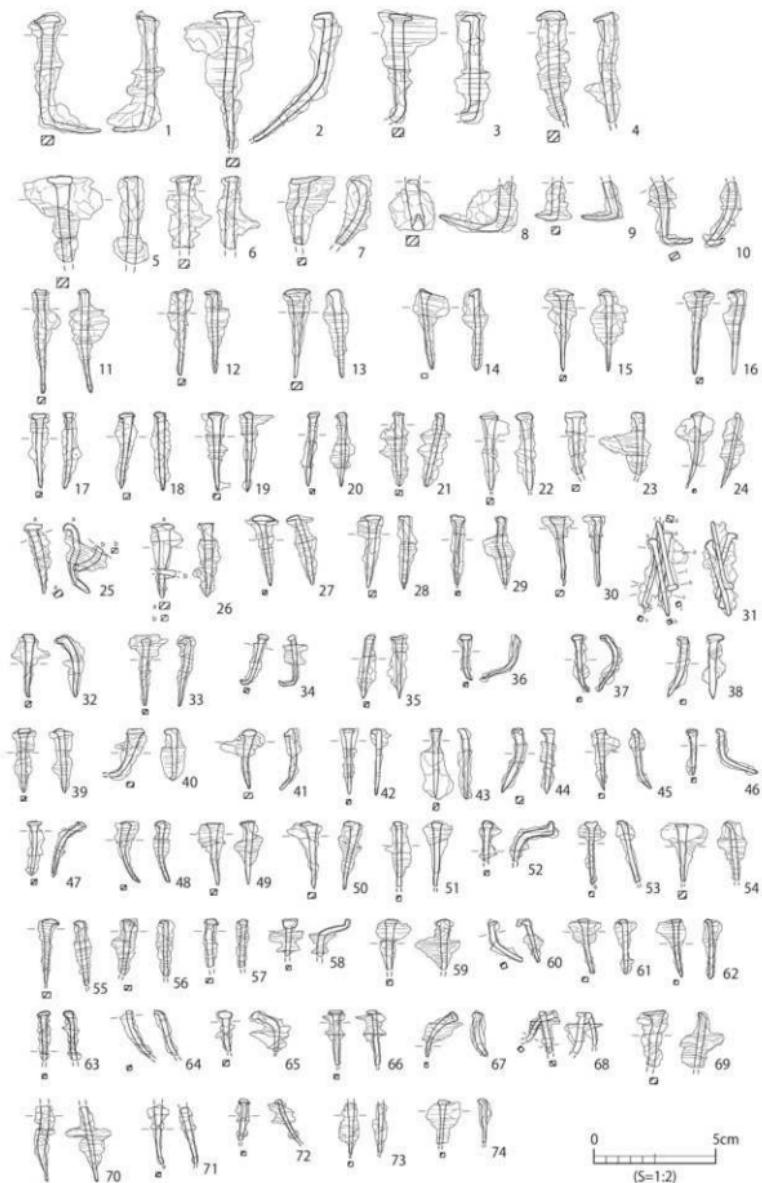
出土遺物としては、人骨のほか、木棺に使われた鉄釘がある。人骨は、遺存状態が良好ではなかったが歯と四肢骨があり、20才代の女性である可能性が考えられる（第4章第2節参照）。

鉄釘は大きさに違いがあり、①長さ6.5cm前後（1・2）、②5cm前後（4）、③4cm前後（11～13）、④2.5～3cm前後（14～67）がある。すべてに棺材として使われた板の木目が付着しており、木目の走る方向が直交方向になる木質が上下に付着する。

このうち、①は1・3・8～10のように先端部が直角に曲がるのが特色である。1は木目の状況から厚さ2.3cm程度の材を留めたもので、突き抜けた釘の先端を打ち曲げる。このような形状では側板どうしや天板・底板を留めた釘とは考えにくい。板材にも厚みがあることから、底板に棒状の棧を固定するためのものであろうか。釘の主体をなすのは、4cm以下の小さい釘で、頭部に厚さ1cmほどの板材を留めた痕跡が残る。また、31は未使用の釘4本が鏽で一塊になったものである。



第93図 古墓1実測図



第94図 古墓1出土釘実測図

古墓2（第95・96図、図版79・97）

標石は、墓坑のほぼ中央にある。割石を方形に組み、その中に板石を置いて基壇状にしたものとみられる。調査時には一部が失われ傾いていたが、南辺・東辺・北辺には板石が立った状態で残っていた。現状で長さ100cm・幅70cmで、高さは40cmほどはあったようである。

墓坑の平面形は、ほぼ方形である。上端で一辺105cm、下端で95～100cm、深さは150cmある。横断面形は、各壁がほぼ垂直に立ち上がる。埋土は、上半部と下半部で様相が異なる。上半部は、上層からにぶい黄褐色土（1層）・黄褐色土（2層）・明黄褐色土（4層）・褐色土（6層）・明黄褐色土（7層）となり、褐色土（3層）が1・2・4層の側面に入り込む。下半部は中央に橙色土（9層）その側面ににぶい橙色土（8層）と黒褐色土（11層）がある。上半部は、木棺の腐朽後に生じた陥没を埋めたものとみられる。下過半部のうち8層と11層が木棺の裏込土とも考えられるが、原状は留めて

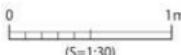
いないようである。古墓1と同様、墓坑上の標石は、陥没を埋めた後に据えたものとみられる。

出土遺物としては、人骨のほか、木棺に使われた釘がある。人骨は、遺存状態が良好ではなかったが歯と四肢骨があり、壮年男性の可能性が考えられる（第4章第2節参照）。

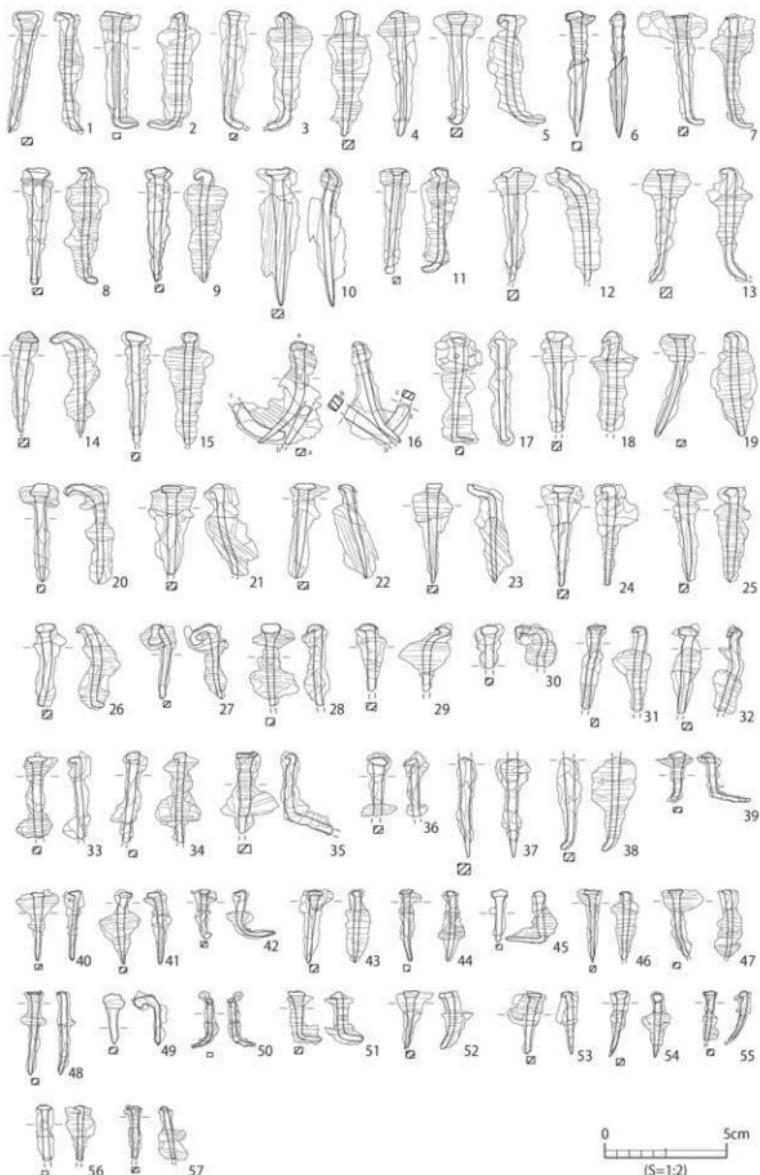
釘は大きさに違いがあり、①長さ4.5～5.5cm前後（1～20）、②4cm前後（21～26）、③2.5～3cm前後（39～55）がある。すべてに棺材として使われた板の木目が付着しており、木目の走る方向が直交方向になる木質が上下に付着する。

木目の痕跡から、板材は1cm程度の厚さとみられる。釘の大きさにかかわらず、頭部に板材の厚さほどの木質が付き、その下にこれが打ち付けられた板材の木質がついているので、基本的には側板どうしや天板・底板を留めたとみられる。一方、③の中には39・42・45・51のように先端が大きく曲げられたものも含まれる。

1. にぶい黄褐色土（10YR5/4）2cm以下の種を多く含む。
2. 黄褐色土（10YR5/6）5cm以下の種を若干含む。1cm以下の種を多く含む。
3. 褐色土（10YR4/4）3cm程度の種を少量含む。1cm以下の細かい種を多く含む。
4. 明黄褐色土（10YR6/6）1cm以下の細かい種を多く含む。
5. にぶい明黄褐色土（7.5YR5/6）7cm程度の種を若干含む。1～2cm以下の細かい種を多く含む。
6. 橙色土（10YR4/8）8cm程度の種を若干含む。1cm以下の細かい種を多く含む。
7. にぶい黄褐色土（10YR6/4）2cm以下の細かい種を多く含む。
8. にぶい黄褐色土（10YR6/4）5cm程度の種を少々含む。3cm以下の細かい種を多く含む。板まり弱い。
9. 橙色土（7.5YR6/6）3cm以下の細かい種を多く含む。板まり非常に弱い。
10. にぶい褐色土（7.5YR6/4）2cm以下の細かい種を多く含む。板まり弱い。
11. 黒褐色土（10YR2/2）木根腐？。



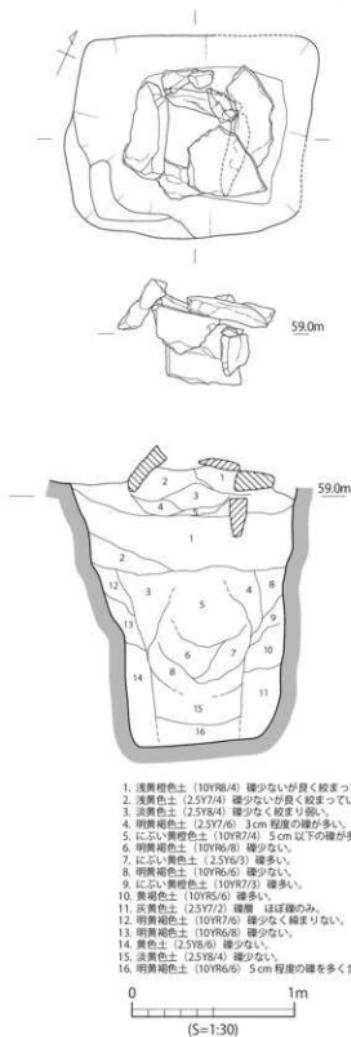
第95図 古墓2実測図



第96図 古墓2出土釘実測図

古墓3（第97・98図、図版79・80・98）

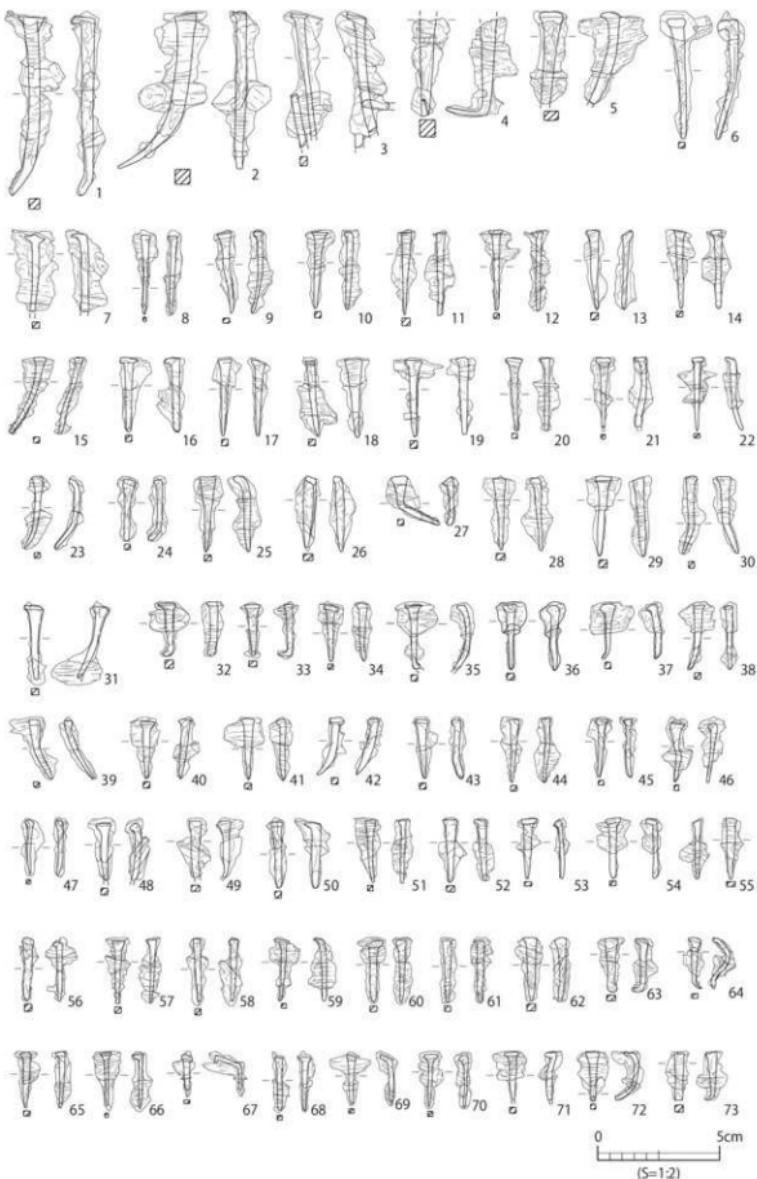
標石は、墓坑の中央やや東寄りにある。割石を方形に組み、その中に板石を置き基壇状にする。石材が埋土中に沈み各辺の高さに違いがあるが、四辺とも割石が立った状態で残る。現状で長さ90cm・幅70cmで、高さは50cmほどである。内部には土が詰められており、上層より浅黄橙色土（1層）・浅黄色土（2層）・淡黄色土（3層）・明黄褐色土（4層）・にぶい黄橙色土（5層）がみられる。



第97図 古墓3実測図

墓坑の平面形は、東西方向がやや長くほぼ方形である。上端は長さ150cm・幅125cm、下端は一辺80cm、深さは165cmある。横断面形は、各壁が外傾しながら立ち上がる。埋土は、深さが50cmまでの上半部と、それ以下の下半部で異なる。上半部は、浅黄橙色土（1層）が厚く、西辺沿いの下部に浅黄色土（2層）がみられる。下半部は、中央に上層から淡黄色土（3層）・明黄褐色土（4層）・にぶい黄橙色（5層）・明黄褐色土（6層）・にぶい黄色土（7層）・明黄褐色土（8層）・淡黄色土（15層）・明黄褐色土（16層）である。その両側面には、西側に明黄褐色土（12層）・明黄褐色土（13層）・黄色土（14層）、東側には明黄褐色土（8層）・にぶい黄橙色土（9層）・黄褐色土（10層）・灰黄色土（11層）があり、木棺の裏込土とも考えられる。墓坑上の標石は、やや落ち込むが、ほぼ原形を保っており、木棺腐朽後の陥没を埋めた後に据えられたとみられる。

出土遺物としては、木棺に使われた鉄釘がある。釘は大きさに違いがあり、①長さ7cm前後（1・2）、②5cm前後（6）、③3～3.5cm前後（8～31）、④2.5～3cm前後（32～73）がある。すべてに棺材として使われた板の木目が付着しており、木目の走る方向が直交方向になる木質が上下に付着し、基本的には側板どうしや天板・底板を留めたとみられる。木目の痕跡から1・2は厚さ2.9～3.3cmほどの板材に使われたようだが、ほとんどは厚さ1～1.5cm程度の材であったとみられる。

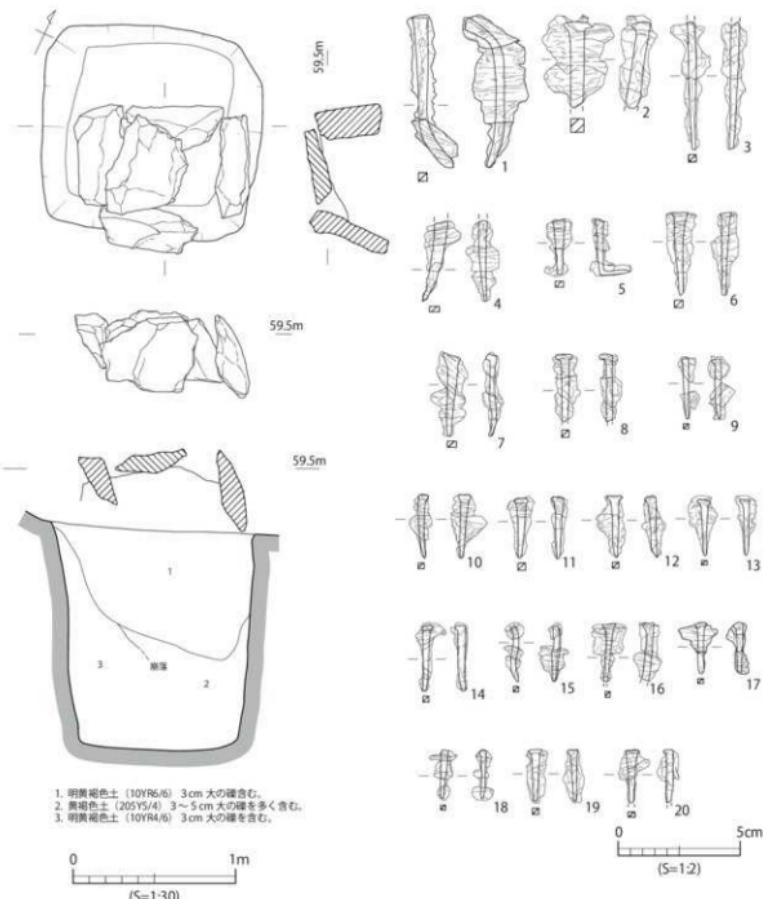


第98図 古墓3出土钉実測 図

古墓4（第99・100図、図版80・98）

標石は、墓坑のやや南東寄りにある。割石を方形に組み、その中に板石を置いて基壇状にしたものである。割石は、四辺とも立った状態で傾きもあまりなく最も保存状態が良い。大きさは、長さ100cm・幅85cmで、高さは50cmほどである。

墓坑の平面形は、隅部がやや丸みを帯びた方形である。上端は長さ130cm・幅120cm、下端は一辺90cm、深さは135cmである。横断面形は、各壁がやや外傾しながら立ち上がる。埋土は、上半部に明黄褐色土（1層）、下半部に黄褐色土（2層）、明黄褐色土（3層）がある。木棺の裏の状況は不明である。上半部の1層は、木棺腐朽後の陥没を埋めたものと考えられ、墓坑上の標石はその後に据えられたとみられる。



第99図 古墓4実測図

第100図 古墓4出土石実測図

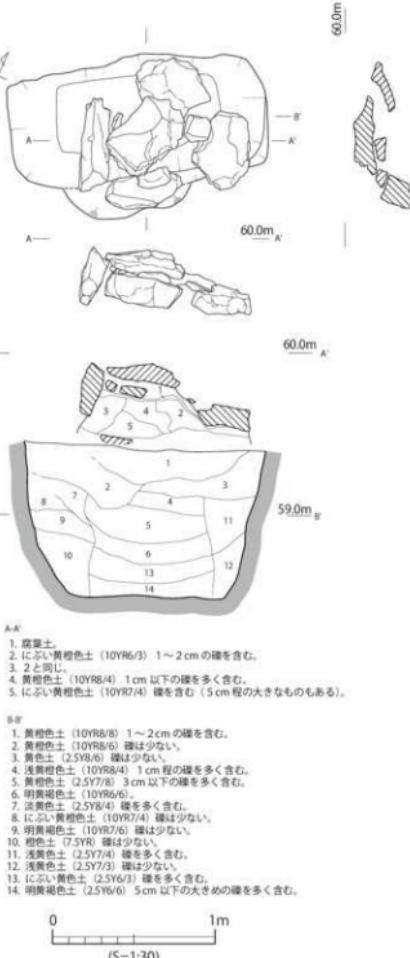
出土遺物としては、木棺に使われた鉄釘がある。釘は大きさに違いがあり、①長さ6cm前後(1)、②3cm前後(5~7)、③2.5cm前後(9~19)がある。すべてに棺材として使われた板の木目が付着しており、木目の走る方向が直交方向になる木質が上下に付着する。釘は、頭部に板材の厚さほどの木質が付き、その下にこれが打ち付けられた板材の木質が付着する。木目の痕跡から1~2は厚さ3cmほどの板材に使われたようだが、他は厚さ1cm程度の材であったとみられる。

古墓5(第101図、図版80)

標石は、墓坑の中央やや東寄りにある。割石を方形に組み、その中に板石を置いて基壇状にしたものである。北辺と東辺は石が倒れているが、西辺と南辺は石が立った状態のままで残っていた。大きさは復原すれば一辺80cmほどとみられ、高さは35cmである。内部には土が詰められており、にぶい黄褐色土(2・3層)・黄橙色土(4層)・にぶい黄橙色(5層)がみられる。

墓坑の平面形は、東西方向が長い長方形である。上端は長さ155cm・幅70cm、下端は長さ100cm・幅40cm、深さ90cmである。横断面形は、各壁が外傾しながら立ち上がる。埋土は、深さ30cmまでの上半部と、それ以下の下半部で異なる。上半部は、上層より黄褐色土(1層)・黄橙色土(2層)・黄色土(3層)で、木棺腐朽にともなう陥没を埋めた土とみられる。下半部は中央には上層から浅黄橙色土(4層)・黄橙色土(5層)・明黄褐色土(6層)・にぶい黄色土(13層)・明黄褐色(14層)がある。その西側面には、西側に淡黄色土(7層)・にぶい黄橙色土(8層)・明黄褐色土(9層)・橙色土(10層)、東側面には礫を多く含む浅黄色土(11層)・浅黄色土(12層)があり、木棺の裏込土とも考えられる。墓坑上の標石は、ほぼ原形を保っており、木棺腐朽後の陥没を埋めた後に据えられたものとみられる。

遺物は、鉄釘の小片が2点出土している。



第101図 古墓5実測図

2. 古墓群2（第102図、図版81）

郭4の東側、堅堀7のある斜面裾で確認された古墓群で、標高47m前後に位置する。古墓群は堅堀7とは切り合いがなく前後関係は不明であるが、堅堀が機能しなくなった後に營まれたものと推測される。

古墓は、計4基あり、古墓6・8・9は土葬、古墓7は火葬である。丘陵斜面に平行に並んでおり、等高線にはほぼ沿うように配置される。古墓群1で確認された墓坑上の標石はない。古墓6と古墓9は50cmの間隔で近接するが、古墓9と古墓8の間隔は2.71mあまりと広い。また、古墓7は古墓8によって切られていた。

古墓6（第103図、図版82）

墓坑の平面形は、ほぼ丘陵斜面に沿う方向がやや長いが、ほぼ方形である。上端は長さ80～100cm・幅75～85cm、下端は長さ65～70cm・幅55cm、深さは80cmである。横断面形は、各壁が下端から上端に向かって外傾しながら立ち上がる。

遺物は、鉄釘が11点出土している。

古墓7（第103図、図版81・82）

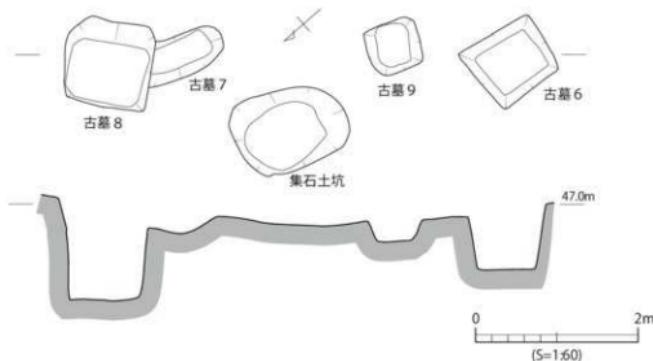
北辺を古墓8に切られており、これに先立って營まれたものである。

墓坑の平面形は、隅部の丸い長方形である。大きさは現状で、上端の長さ110cm・幅50cm、下端の長さ80cm・幅30cm、深さは50cmである。横断面形は、各壁が下端から上端に向かって外傾しながら立ち上がる。

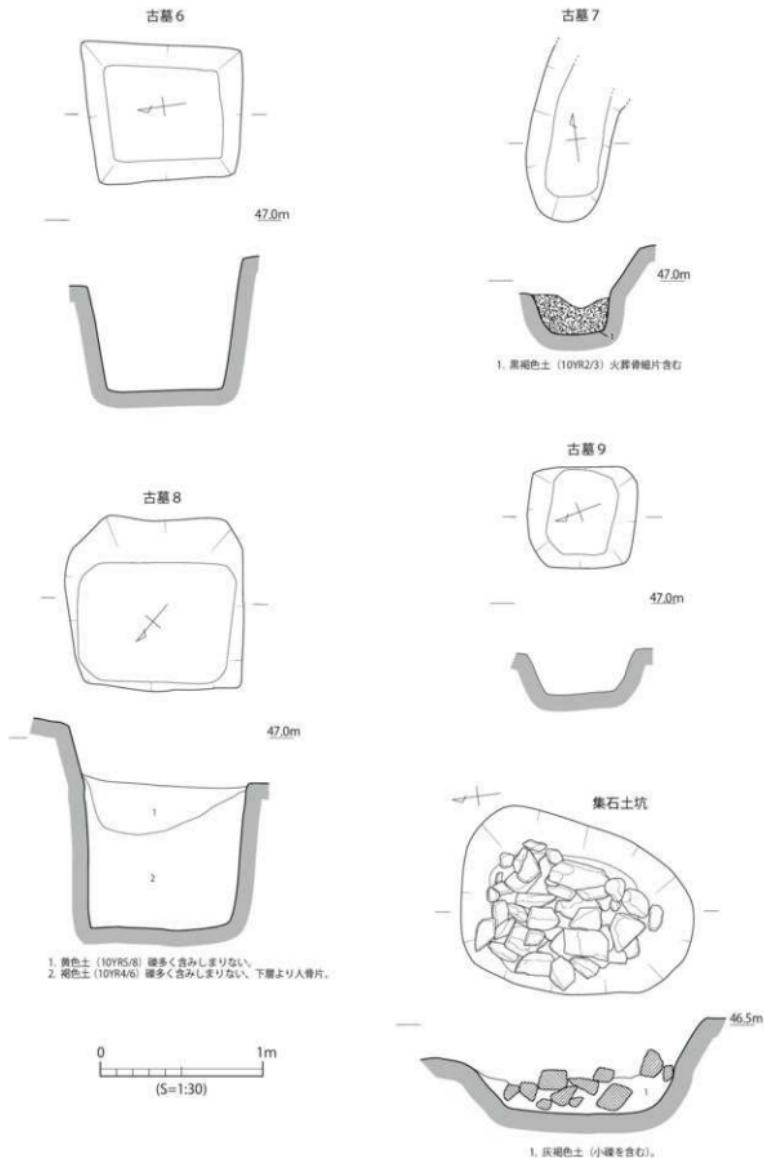
埋土は、黒褐色土である。内部より火葬された人骨片とかわらけ1点、鉄釘8点が出土した。人骨は、頭蓋骨片と四肢骨片があり、成人とみられるが、詳細は不明である（第4章第2節参照）。

古墓8（第103図、図版81・82）

墓坑の平面形は、ほぼ丘陵斜面に沿う方向がやや長いが、ほぼ方形である。上端は長さ100～110cm・幅100～105cm、下端は長さ90～95cm・幅70～75cm、深さは130cmである。横断面形



第102図 古墓群2全体図



第103図 古墓6～9、集石土坑実測図

は、各壁が下端から上端に向かってやや外傾しながら立ち上がる。

埋土は、上層より礫を多く含む黄色土（1層）・礫を多く含む褐色土（2層）である。2層からは人骨が出土した。鉄釘は2点出土している。

人骨は、頭蓋骨片と四肢骨片がある。成人の女性とみられるが、詳細は不明である（第4章第2節参照）。

古墓9（第103図、図版82）

墓坑の平面形は、隅部の丸い方形である。上端は一辺60～75cm、下端は長さ50cm・幅40cm、検出時の深さは25cmである。横断面形は、各壁が下端から上端に向かって外傾しながら立ち上がる。

出土遺物はなかった。

集石土坑（第103図、図版82）

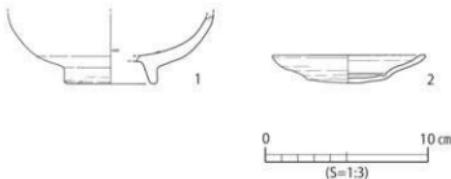
豊塙7の先端部、丘陵斜面裾部に位置する。土坑は、平面形が不整な梢円形をしており、長さ145cm・幅110cm・深さ55cmである。底面付近には、人頭大の石が詰め込まれていた。埋土は、小礫を含む灰褐色土である。

出土遺物はなかった。

3. 古墓群出土土器（第104図、図版98）

古墓群では、墓の年代を推測できる土器類はほとんど出土していない。

古墓群1では土器が全く出土しなかったため、古墓群周辺で出土した陶磁器を参考にした。1は陶器の碗で、外面の下半には回転ケズリ痕が明確に残る。高台内も薄く削らされている。見込みには焼台の跡があり、19世紀頃の地元産の陶器とみられる。2は型作りの土師器皿で、器壁が薄く、見込みには沈線が廻る。近世のものとみられる。



第104図 古墓群および周辺出土土器実測図

4.まとめ

遺跡内では郭1と2から、18世紀以降の陶磁器が細片で出土している。少なくともこの頃には、郭の平坦面が畠として利用され、南北の斜面には麓住民の古墓群が造られたと推測される。

今回調査を行った古墓は9基で、そこから出土した鉄釘は、第7表に示すとおり小片も含めると531点に及ぶ。さらに、これらの鉄釘の96%が古墓群1で出土している。釘が最も多く出土した古墓3では、完形の釘が65点、個体数を数えられる頂部の廻るものが、さらに66点出土している。

島根県内でも、近世墓の発掘調査がおこなわれた例はいくつかあるが、これほど釘が出土することは珍しいと言える。一方で、古銭やその他の遺物は出土しなかった。今後周辺の事例も確認しながら、大量の鉄釘の使用状況について、検討する必要がある。

第7表 普源田砦跡古墓群出土釘集計表

古墓番号 分類		古墓 1	古墓 2	古墓 3	古墓 4	古墓 5	古墓 6	古墓 7	古墓 8	合計
完形	掲載	41	34	62	14					151
	非掲載	3	2	3	2		3	4		17
	小計	44	36	65	16	0	3	4	0	168
頂部～基部	掲載	29	21	10	4					64
	非掲載	25	36	56	13	1	2	4	2	139
	小計	54	57	66	17	1	2	4	2	203
基部～先端	掲載	7	2	1	2					12
	非掲載	14	28	31	9		2			84
	小計	21	30	32	11	0	2	0	0	96
基部のみ	掲載	2	2							4
	非掲載	6	24	20	5	1	4			60
	小計	8	26	20	5	1	4	0	0	64
合計		127	149	183	49	2	11	8	2	531

第8表 普源田砦跡古墓群鉄釘観察表

編號	遺物番号	写真番号	区	遺物	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	頭面幅 (cm)	編號	遺物番号	写真番号	区	遺物	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	頭面幅 (cm)
94	1	97	古墳群 1	古墳 1	6.8	0.5	0.45	1.1	94	19	97	古墳群 1	古墳 1	3.2	0.25	0.25	0.6
94	2	97	古墳群 1	古墳 1	6.0	0.5	0.35	1.2	94	20	97	古墳群 1	古墳 1	3.0	0.2	0.2	0.5
94	3	97	古墳群 1	古墳 1	4.9	0.5	0.4	0.9	94	21	97	古墳群 1	古墳 1	3.0	0.3	0.2	0.4
94	4	97	古墳群 1	古墳 1	4.6	0.5	0.45	1.1	94	22	97	古墳群 1	古墳 1	2.9	0.25	0.25	0.7
94	5	97	古墳群 1	古墳 1	3.6	0.5	0.45	1.0	94	23	97	古墳群 1	古墳 1	2.5	0.25	0.25	0.8
94	6	97	古墳群 1	古墳 1	3.0	0.45	0.4	0.4	94	24	97	古墳群 1	古墳 1	3.3	0.1	0.1	0.5
94	7	97	古墳群 1	古墳 1	3.0	0.35	0.3	1.2	94	25	97	古墳群 1	古墳 1	a3.2 b1.25	a0.4 b0.3	a0.3 b0.2	a0.7 b—
94	8	97	古墳群 1	古墳 1	4.5	0.5	0.4	—	94	26	97	古墳群 1	古墳 1	a2.9 b0.75	a0.45 b0.3	a0.3 b0.25	a0.8 b—
94	9	97	古墳群 1	古墳 1	2.7	0.35	0.25	—	94	27	97	古墳群 1	古墳 1	2.9	0.2	0.2	0.9
94	10	97	古墳群 1	古墳 1	3.5	0.4	0.3	—	94	28	97	古墳群 1	古墳 1	3.0	0.3	0.25	0.7
94	11	97	古墳群 1	古墳 1	4.3	0.35	0.3	0.5	94	29	97	古墳群 1	古墳 1	3.0	0.2	0.2	0.55
94	12	97	古墳群 1	古墳 1	3.5	0.3	0.25	0.5	94	30	97	古墳群 1	古墳 1	2.75	0.35	0.25	0.6
94	113	97	古墳群 1	古墳 1	3.6	0.45	0.35	1.0	94	31	97	古墳群 1	古墳 1	a3.4 b3.2	a0.2 b0.25	a0.2 b0.25	a0.3 b0.5
94	14	97	古墳群 1	古墳 1	3.2	0.25	0.2	0.5	94	32	97	古墳群 1	古墳 1	a2.9 b2.8	a0.2 b0.3	a0.2 b0.3	a0.5 b0.4
94	15	97	古墳群 1	古墳 1	3.25	0.25	0.25	0.8	94	33	97	古墳群 1	古墳 1	2.8	0.25	0.25	0.4
94	16	97	古墳群 1	古墳 1	3.5	0.25	0.25	0.6	94	34	97	古墳群 1	古墳 1	2.5	0.2	0.2	0.5
94	17	97	古墳群 1	古墳 1	3.0	0.2	0.2	0.6	94	35	97	古墳群 1	古墳 1	2.5	0.2	0.2	0.5
94	18	97	古墳群 1	古墳 1	3.1	0.25	0.25	0.6									

測定番号	測定部位	写真番号	区	連続	長さ (m)	幅 (m)	厚さ (m)	面積率 (m)
94_36_97	古墓群1	古墓1	2.5	0.2	0.2	0.5		
94_37_97	古墓群1	古墓1	2.5	0.2	0.2	0.5		
94_38_97	古墓群1	古墓1	2.5	0.2	0.2	0.7		
94_39_97	古墓群1	古墓1	2.65	0.2	0.2	0.5		
94_40_97	古墓群1	古墓1	2.9	0.3	0.2	0.7		
94_41_97	古墓群1	古墓1	2.5	0.35	0.25	0.6		
94_42_97	古墓群1	古墓1	2.7	0.2	0.2	0.4		
94_43_97	古墓群1	古墓1	2.8	0.25	0.3	0.4		
94_44_97	古墓群1	古墓1	2.7	0.3	0.3	0.5		
94_45_97	古墓群1	古墓1	2.7	0.2	0.2	0.4		
94_46_97	古墓群1	古墓1	2.5	0.2	0.2	0.4		
94_47_97	古墓群1	古墓1	2.5	0.2	0.2	0.6		
94_48_97	古墓群1	古墓1	2.5	0.25	0.2	0.4		
94_49_97	古墓群1	古墓1	2.6	0.25	0.25	0.5		
94_50_97	古墓群1	古墓1	2.7	0.35	0.25	0.7		
94_51_97	古墓群1	古墓1	2.7	0.2	0.2	0.5		
94_52_97	古墓群1	古墓1	2.5	0.2	0.2	0.5		
94_53_97	古墓群1	古墓1	2.6	0.2	0.2	0.6		
94_54_97	古墓群1	古墓1	2.2	0.3	0.3	0.5		
94_55_97	古墓群1	古墓1	2.7	0.35	0.25	0.7		
94_56_97	古墓群1	古墓1	2.3	0.3	0.2	0.5		
94_57_97	古墓群1	古墓1	2.0	0.3	0.2	0.5		
94_58_97	古墓群1	古墓1	2.1	0.2	0.2	0.6		
94_59_97	古墓群1	古墓1	2.05	0.2	0.2	0.5		
94_60_97	古墓群1	古墓1	2.3	0.2	0.2	0.4		
94_61_97	古墓群1	古墓1	2.2	0.25	0.2	0.4		
94_62_97	古墓群1	古墓1	2.4	0.2	0.2	0.4		
94_63_97	古墓群1	古墓1	2.0	0.2	0.2	0.5		
94_64_97	古墓群1	古墓1	1.9	0.2	0.2	0.3		
94_65_97	古墓群1	古墓1	2.3	0.25	0.25	0.5		
94_66_97	古墓群1	古墓1	2.2	0.2	0.2	0.6		
94_67_97	古墓群1	古墓1	2.2	0.2	0.2	0.5		
94_68_97	古墓群1	古墓1	a1.75 b1.65	a0.3 b0.2	a0.3 b0.2	a0.3 b0.4		
94_69_97	古墓群1	古墓1	2.2	0.3	0.25	0.85		
94_70_97	古墓群1	古墓1	3.1	0.35	0.25	-		
94_71_97	古墓群1	古墓1	2.5	0.2	0.2	-		
94_72_97	古墓群1	古墓1	1.9	0.2	0.2	0.4		
94_73_97	古墓群1	古墓1	2.1	0.2	0.2	-		
94_74_97	古墓群1	古墓1	1.8	0.2	0.2	0.4		

測定番号	測定部位	写真番号	区	連続	長さ (m)	幅 (m)	厚さ (m)	面積率 (m)
96_1_97	古墓群1	古墓2	5.2	3.5	3.0	0.9		
96_2_97	古墓群1	古墓2	5.8	0.35	0.3	1.1		
96_3_97	古墓群1	古墓2	5.3	0.3	0.3	0.6		
96_4_97	古墓群1	古墓2	5.1	0.5	0.45	0.7		
96_5_97	古墓群1	古墓2	5.0	0.45	0.35	0.8		
96_6_97	古墓群1	古墓2	5.0	0.4	0.35	0.7		
96_7_97	古墓群1	古墓2	5.0	0.45	0.35	0.7		
96_8_97	古墓群1	古墓2	5.0	0.35	0.25	0.9		
96_9_97	古墓群1	古墓2	5.0	0.4	0.3	0.7		
96_10_97	古墓群1	古墓2	4.5	0.45	0.35	1.0		
96_11_97	古墓群1	古墓2	4.5	0.3	0.3	0.6		
96_12_97	古墓群1	古墓2	4.7	0.45	0.4	0.8		
96_13_97	古墓群1	古墓2	4.75	0.5	0.4	0.7		
96_14_97	古墓群1	古墓2	4.5	0.4	0.35	0.9		
96_15_97	古墓群1	古墓2	4.5	0.35	0.35	0.8		
96_16_97	古墓群1	古墓2	a4.5 b1.8 c2.25	a0.4 b0.55 c>0.3	a0.3 b0.4 c>0.25	a0.6 b— c—		
96_17_97	古墓群1	古墓2	4.3	0.5	0.3	0.6		
96_18_97	古墓群1	古墓2	4.1	0.45	0.4	0.9		
96_19_97	古墓群1	古墓2	4.5	0.4	0.25	0.8		
96_20_97	古墓群1	古墓2	4.5	0.4	0.3	0.8		
96_21_97	古墓群1	古墓2	3.8	0.4	0.3	0.8		
96_22_97	古墓群1	古墓2	4.0	0.4	0.3	0.9		
96_23_97	古墓群1	古墓2	4.0	0.4	0.3	0.6		
96_24_97	古墓群1	古墓2	4.0	0.45	0.35	0.9		
96_25_97	古墓群1	古墓2	4.0	0.35	0.3	0.6		
96_26_97	古墓群1	古墓2	4.0	0.4	0.35	0.8		
96_27_97	古墓群1	古墓2	4.0	0.3	0.25	0.6		
96_28_97	古墓群1	古墓2	3.3	0.35	0.5	0.8		
96_29_97	古墓群1	古墓2	3.0	0.4	0.35	0.6		
96_30_97	古墓群1	古墓2	2.7	0.35	0.35	0.7		
96_31_97	古墓群1	古墓2	3.4	0.3	0.3	0.8		
96_32_97	古墓群1	古墓2	3.5	0.4	0.35	0.7		
96_33_97	古墓群1	古墓2	a3.35 b0.15	a0.4 b0.3	a0.3 b0.25	a0.8 b—		
96_34_97	古墓群1	古墓2	4.0	0.35	0.25	0.5		
96_35_97	古墓群1	古墓2	4.4	0.55	0.55	0.8		
96_36_97	古墓群1	古墓2	2.4	0.4	0.35	0.7		
96_37_97	古墓群1	古墓2	4.1	0.5	0.45	—		
96_38_97	古墓群1	古墓2	4.0	0.4	0.3	—		

標高 測定 番号 番号	測定 場所 番号	区	遺構	長さ (m)	幅 (m)	厚さ (m)	面積 (m ²)
96 39 97	古墓群1	古墓2	3.0	0.35	0.25	0.7	
96 40 97	古墓群1	古墓2	2.8	0.35	0.2	0.55	
96 41 97	古墓群1	古墓2	3.0	0.35	0.2	0.5	
96 42 97	古墓群1	古墓2	3.0	0.3	0.25	0.5	
96 43 97	古墓群1	古墓2	3.0	0.35	0.3	0.6	
96 44 97	古墓群1	古墓2	3.0	0.25	0.25	0.6	
96 45 97	古墓群1	古墓2	3.0	0.25	0.2	0.7	
96 46 97	古墓群1	古墓2	2.8	0.25	0.25	0.6	
96 47 97	古墓群1	古墓2	2.75	0.35	0.25	0.6	
96 48 97	古墓群1	古墓2	3.5	0.3	0.25	0.6	
96 49 97	古墓群1	古墓2	2.6	0.35	0.25	0.8	
96 50 97	古墓群1	古墓2	2.4	0.25	0.2	0.3	
96 51 97	古墓群1	古墓2	2.7	0.35	0.25	0.7	
96 52 97	古墓群1	古墓2	2.5	0.35	0.3	0.6	
96 53 97	古墓群1	古墓2	2.5	0.35	0.25	0.6	
96 54 97	古墓群1	古墓2	2.5	0.35	0.25	0.5	
96 55 97	古墓群1	古墓2	2.9	0.3	0.25	0.5	
96 56 97	古墓群1	古墓2	2.3	0.3	0.2	0.6	
96 57 97	古墓群1	古墓2	2.2	0.3	0.25	0.6	
98 1 98	古墓群1	古墓3	7.4	0.4	0.4	1.1	
98 2 98	古墓群1	古墓3	6.35	0.6	0.6	0.6	
98 3 98	古墓群1	古墓3	6.22 6.50 6.15	0.63	0.5	0.67 — —	
98 4 98	古墓群1	古墓3	5.6	0.45	0.6	—	
98 5 98	古墓群1	古墓3	3.75	0.7	0.4	1.0	
98 6 98	古墓群1	古墓3	5.1	0.3	0.25	0.8	
98 7 98	古墓群1	古墓3	3.1	0.25	0.25	0.8	
98 8 98	古墓群1	古墓3	3.1	0.2	0.15	0.4	
98 9 98	古墓群1	古墓3	3.4	0.25	0.2	0.6	
98 10 98	古墓群1	古墓3	3.1	0.25	0.25	0.6	
98 11 98	古墓群1	古墓3	3.5	0.35	0.3	0.5	
98 12 98	古墓群1	古墓3	3.3	0.2	0.2	0.55	
98 13 98	古墓群1	古墓3	3.0	0.3	0.3	0.5	
98 14 98	古墓群1	古墓3	3.2	0.25	0.25	0.6	
98 15 98	古墓群1	古墓3	3.4	0.2	0.2	0.5	
98 16 98	古墓群1	古墓3	3.15	0.25	0.25	0.7	
98 17 98	古墓群1	古墓3	3.1	0.25	0.25	0.5	
98 18 98	古墓群1	古墓3	3.0	0.25	0.25	0.7	
98 19 98	古墓群1	古墓3	3.1	0.35	0.35	0.7	
98 20 98	古墓群1	古墓3	3.0	0.25	0.2	0.6	
98 21 98	古墓群1	古墓3	2.85	0.15	0.15	0.6	
98 22 98	古墓群1	古墓3	2.8	0.2	0.2	0.5	
98 23 98	古墓群1	古墓3	2.8	0.2	0.25	0.5	
98 24 98	古墓群1	古墓3	2.55	0.25	0.25	0.5	
98 25 98	古墓群1	古墓3	3.1	0.35	0.25	0.7	
98 26 98	古墓群1	古墓3	2.9	0.4	0.25	0.5	
98 27 98	古墓群1	古墓3	2.9	0.25	0.25	0.6	
98 28 98	古墓群1	古墓3	2.9	0.2	0.35	0.5	
98 29 98	古墓群1	古墓3	3.25	0.35	0.35	0.6	
98 30 98	古墓群1	古墓3	3.2	0.3	0.25	0.5	
98 31 98	古墓群1	古墓3	3.0	0.25	0.25	0.7	
98 32 98	古墓群1	古墓3	2.15	0.35	0.35	0.6	
98 33 98	古墓群1	古墓3	2.1	0.3	0.25	0.6	
98 34 98	古墓群1	古墓3	2.35	0.2	0.2	0.6	
98 35 98	古墓群1	古墓3	2.6	0.25	0.2	0.6	
98 36 98	古墓群1	古墓3	2.7	0.3	0.35	0.5	
98 37 98	古墓群1	古墓3	2.3	0.25	0.35	0.6	
98 38 98	古墓群1	古墓3	2.65	0.25	0.25	0.5	
98 39 98	古墓群1	古墓3	2.55	0.3	0.2	0.4	
98 40 98	古墓群1	古墓3	2.4	0.25	0.3	0.6	
98 41 98	古墓群1	古墓3	2.4	0.3	0.25	0.6	
98 42 98	古墓群1	古墓3	2.35	0.25	0.25	0.6	
98 43 98	古墓群1	古墓3	2.4	0.25	0.25	0.5	
98 44 98	古墓群1	古墓3	2.45	0.2	0.3	0.5	
98 45 98	古墓群1	古墓3	2.35	0.2	0.25	0.5	
98 46 98	古墓群1	古墓3	2.45	0.2	0.25	0.6	
98 47 98	古墓群1	古墓3	2.2	0.15	0.15	0.4	
98 48 98	古墓群1	古墓3	2.35	0.3	0.3	0.6	
98 49 98	古墓群1	古墓3	2.3	0.25	0.25	0.5	
98 50 98	古墓群1	古墓3	2.7	0.35	0.35	0.5	
98 51 98	古墓群1	古墓3	2.6	0.25	0.25	0.4	
98 52 98	古墓群1	古墓3	2.55	0.3	0.15	0.6	
98 53 98	古墓群1	古墓3	2.5	0.3	0.15	0.6	
98 54 98	古墓群1	古墓3	2.5	0.25	0.2	0.6	
98 55 98	古墓群1	古墓3	2.4	0.2	0.4	0.4	
98 56 98	古墓群1	古墓3	2.4	0.2	0.2	0.5	
98 57 98	古墓群1	古墓3	2.6	0.25	0.25	0.6	
98 58 98	古墓群1	古墓3	2.55	0.25	0.25	0.3	
98 59 98	古墓群1	古墓3	2.55	0.2	0.2	0.6	
98 60 98	古墓群1	古墓3	2.5	0.25	0.2	0.7	

調査 番号	遺物 番号	写真 番号	区	遺構	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	回復率 (cm)	調査 番号	遺物 番号	写真 番号	区	遺構	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	回復率 (cm)
98 61 98	古墓群1	古墓3	2.5	0.25	0.25	0.4		100 4 98	古墓群1	古墓4	2.35	0.2	0.4	—			
98 62 98	古墓群1	古墓3	2.45	0.35	0.25	0.6		100 5 98	古墓群1	古墓4	3.3	0.34	0.25	0.5			
98 63 98	古墓群1	古墓3	2.2	0.25	0.3	0.5		100 6 98	古墓群1	古墓4	3.4	0.3	0.3	0.7			
98 64 98	古墓群1	古墓3	2.1	0.2	0.25	0.5		100 7 98	古墓群1	古墓4	3.25	0.35	0.25	0.7			
98 65 98	古墓群1	古墓3	2.2	0.3	0.2	0.5		100 8 98	古墓群1	古墓4	2.6	0.3	0.3	0.7			
98 66 98	古墓群1	古墓3	2.15	0.15	0.2	0.5		100 9 98	古墓群1	古墓4	2.45	0.2	0.2	0.3			
98 67 98	古墓群1	古墓3	2.4	0.1	0.1	0.5		100 10 98	古墓群1	古墓4	2.6	0.3	0.3	0.4			
98 68 98	古墓群1	古墓3	2.2	0.2	0.2	0.4		100 11 98	古墓群1	古墓4	2.55	0.3	0.3	0.6			
98 69 98	古墓群1	古墓3	2.05	0.2	0.2	0.4		100 12 98	古墓群1	古墓4	2.4	0.2	0.25	0.7			
98 70 98	古墓群1	古墓3	2.1	0.2	0.2	0.6		100 13 98	古墓群1	古墓4	2.2	0.2	0.2	0.55			
98 71 98	古墓群1	古墓3	1.95	0.2	0.2	0.6		100 14 98	古墓群1	古墓4	2.7	0.25	0.25	0.4			
98 72 98	古墓群1	古墓3	1.95	0.25	0.2	0.5		100 15 98	古墓群1	古墓4	2.3	0.2	0.2	0.3			
98 73 98	古墓群1	古墓3	1.95	0.35	0.35	0.5		100 16 98	古墓群1	古墓4	2.4	0.2	0.2	0.6			
100 1 98	古墓群1	古墓4	6.1	0.35	0.35	0.65		100 17 98	古墓群1	古墓4	2.1	0.25	0.25	0.5			
100 2 98	古墓群1	古墓4	3.55	0.55	0.55	1.1		100 18 98	古墓群1	古墓4	1.95	0.2	0.2	0.3			
100 3 98	古墓群1	古墓4	5.2	0.3	0.3	—		100 19 98	古墓群1	古墓4	2.1	0.25	0.25	0.5			
								100 20 98	古墓群1	古墓4	2.15	0.3	0.2	0.55			

第9表 普源田砦跡古墓群出土遺物観察表

調査 番号	遺物 番号	写真 番号	取上 番号	種別	埋蔵	遺構	遺病・グリッド・土層	法規 (I) 内面元範			胎土	焼成	色調	調査・手法の特徴	備考
								I標 (cm)	II標 (cm)	III標 (cm)					
104 1 98				陶器	罐	えも・鋸切2(表土)	—	—	(5.4)	褐色	良	外面：明鏡面 10YR5/6 内面：明鏡面 10YR5/6 柱孔：透明な釉質			
104 2 98				土師器	杯	古墓7(埋土)	9.5	2.7	5.0	1mm以下の砂 粒を微量含む	良	外面：IV-V褐色 7.5YR7/4 内面：IV-V褐色 7.5YR7/4	外面：ヨコナデ、 コビオサエ 内面：ヨコナデ、浅縁		

第4章 自然科学分析

第1節 普源田砦跡発掘調査に伴う種実同定及びAMS年代測定

文化財調査コンサルタント（株） 渡辺正巳

はじめに

普源田砦跡は島根県西部、浜田市三隅町岡見に位置し、岡見川下流域の右岸丘陵上に立地する中世の砦跡である。

本報は、文化財調査コンサルタント株式会社が、発掘調査に伴い出土した炭化種実の分類群を明らかにするほか、遺構の時期を明らかにする目的で、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターからの委託を受け実施・報告した報告書を再編したものである。

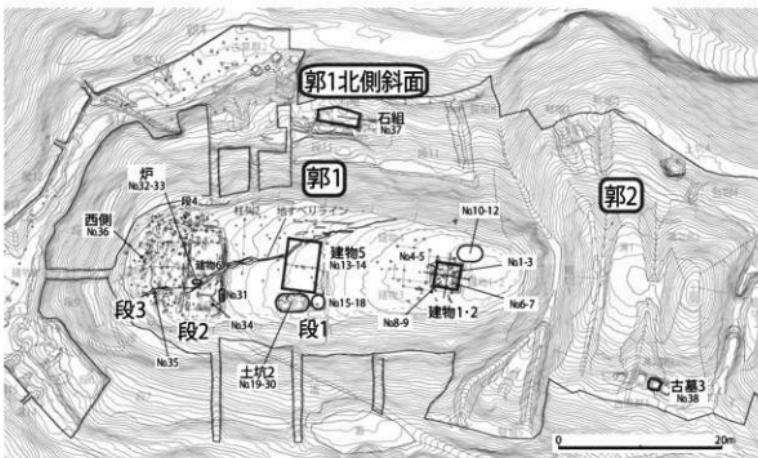
試料について

分析試料は全て、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターから提供を受けた。調査区平面図(第105図)中に、試料採取地点を示す。

分析方法

(1) 種実同定方法

水洗・選別を行った炭化試料を一括して受け取ったことから前処理は行わず、そのまま肉眼及び実体顕微鏡にて、同定・計数を行った。同定結果は試料別に、分類群別、部位別に計数し表形式にまとめた。



第105図 調査区平面図 (試料採取地点)

(2) AMS 年代測定方法

塩酸による酸洗浄の後に水酸化ナトリウムによるアルカリ処理、更に再度酸洗浄を行った。この後、二酸化炭素を生成、精製し、グラファイトに調整した。¹⁴C濃度の測定にはタンデム型イオン加速器を用い、半減期:5568年で年代計算を行った。曆年代較正にはOxCal ver. 4.4 (Bronk Ramsey, 2009) を利用し、INTCAL20 (Reymer et al., 2020) を用いた。

分析結果

(1) 種実分析結果

第10表に分析結果を示した。また、以下に分類ごとの記載を行うとともに、節末の写真図版に代表的な標本の写真を示した。

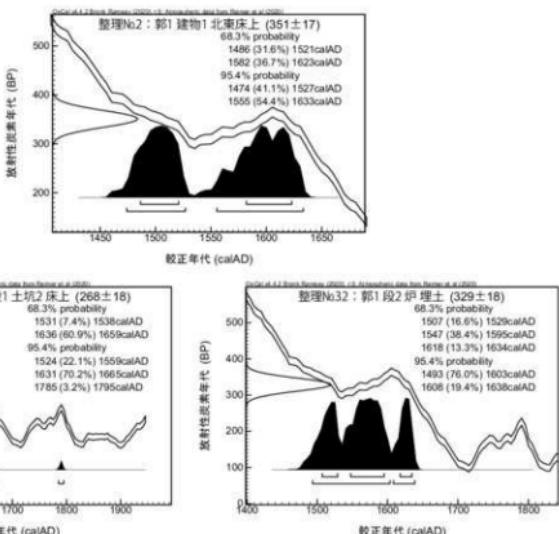
- 1) クワ属：種子は丸みを帯びた三角形で一端に短い線状のへそがある。
- 2) カキノキ：種子は長さ 11 ミリメートル、扁平な楕円形でへそのある一端が少し薄くなっている。表面はざらつく。
- 3) イネ：胚乳は楕円形で上下方向に 2 本の稜があり下端の片側が斜めに切れた胚の痕跡がある。
- 4) オオムギ：種子は紡錘形で下端がやや尖り腹面には中央縦方向に 1 本溝があり背面基部に縦長楕円形の孔がある。
- 5) コムギ：種子はやや角ばった円筒形で上端は平ら、背面下端に穴があり腹面には 1 本溝がある。
- 6) ムギ類：断面が円で片面に溝が確認された破片をムギ類とした。
- 7) アワ：種子は高さ 1.2 ミリメートル程度の丸みを帯びたひし形で胚の脱落痕は高さの半分くらい、腹面の孔はやや縦長である。
- 8) キビ近似種：種子は 1.6 ミリメートルのほぼ円形で胚の脱落痕は高さの半分よりやや高く腹面の孔は丸い。
- 9) ヒエ近似種：種子は高さ 2.3 ミリメートルのややひし形の卵形で胚の脱落痕は高さの 3 分の 2

第10表 種実同定結果

分類	種子																			根		茎葉												
	地衣									苔類									蕨類		被子植物													
	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8	No.9	No.10	No.11	No.12	No.13	No.14	No.15	No.16	No.17	No.18	No.19	No.20	No.21	No.22	No.23	No.24	No.25	No.26	No.27	No.28	No.29	No.30	No.31	No.32	No.33	No.34
クワ属	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
カキノキ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
イネ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
オオムギ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
コムギ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
ムギ類	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
アワ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
キビ近似種	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
ヒエ近似種	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
総計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	

第11表 年代測定結果

番号	地区	地層	地点	状況	測定方法	測定期間	測定値	$\delta^{14}\text{C}$ (‰)	$\delta^{14}\text{C}$ 標準年代 (yrBP ± 1σ)	標準年代 (yrBP ± 1σ)	C^14 年代 (yrBP ± 1σ)	${}^{\circ}\text{C}$ 年代を有するに算出した年代範囲		測定番号		
												1. 14C 年代範囲				
No.2	建物1 北床土上	北床土上 泥化材	0.79m	16世紀後	有機炭酸物質：アセトントンアカルボン酸 (濃度: 1.2 mmol/L, 比重: 1.036)	-26.14	403 ± 17	351 ± 17	350 ± 15	1486-1521 cal AD (91.4%) 1520-1622 cal AD (36.7%) 1555-1633 cal AD (54.4%)	1474-1527 cal AD (41.1%) 1525-1633 cal AD (54.4%)	1486-1521 cal AD (91.4%) 1520-1622 cal AD (36.7%) 1555-1633 cal AD (54.4%)	1486-1521 cal AD (91.4%) 1520-1622 cal AD (36.7%) 1555-1633 cal AD (54.4%)		32184	
No.23												1531-1538 cal AD (7.4%) 1636-1659 cal AD (90.9%)		1524-1538 cal AD (7.4%) 1631-1665 cal AD (22.2%) 1795-1799 cal AD (13.2%)	1524-1538 cal AD (7.4%) 1631-1665 cal AD (22.2%) 1795-1799 cal AD (13.2%)	32185
No.12												1507-1529 cal AD (10.0%) 1543-1595 cal AD (86.4%) 1608-1634 cal AD (13.3%)				32186



第106図 歴年較正結果表

程度、腹面の孔は丸い。

- 10) イヌビエ近似種：種子は 2.4 ミリメートルでヒエ近似種に比べると縦長で先端がやや尖る。
- 11) ヒエ属：種子はヒエ近似種とイヌビエ近似種の中間の形態で 1.6 ミリメートル程度。
- 12) イネ科 A：種子は高さ 1.1 ミリメートルで下端が尖ったやや細い楕円形で種子長と同程度の長い胚の脱落痕がある。炭化したヒエ属の未熟種子の可能性もある。
- 13) イネ科 B：1.5 ミリメートルの焼膨種子で半分程度の破片である。
- 14) イネ科 C：種子は 1.3 ミリメートルの紡錘形で下端の胚は小さく、表面には正方形に近い微細な網目がある。
- 15) イネ科 D：種子は 1.1 ミリメートルの円形で表面がややざらつき、キビに近似するが胚の脱落痕がかなり小さい。
- 16) スゲ属：果実は 2 面の卵形で表面に細かい網目がある。
- 17) カヤツリグサ科？：焼膨れた 0.8 ミリメートルの 3 棱形の果実。

- 18) ソバ：果実は4ミリメートルの3稜形で高さと幅は同サイズ、果皮面の中央から斜め上に筋がある。
- 19) タデ科？：果実は1.2ミリメートルの3稜形で上端は尖り表面に不明瞭な網目があるがやや焼けただれています。
- 20) ササゲ属：種子は5-6ミリメートル、楕円球が半分に割れた状態で内面に初生葉の痕跡がある。
- 21) マメ科A：種子は完形は1.0ミリメートル程度の球形で一か所にへこんだへそがありへそから短く浅い溝が伸びる、半球に割れやすく内面にはへこみがある。
- 22) マメ科B：種子はマメ科Aと形態は近似しているが種子径が2.0ミリメートル。
- 23) マメ科C：種子は楕円形で5-6ミリメートル、かなり焼け膨れているが中央付近に種子長の3分の1以下の短いへそが確認できる。
- 24) マメ科D：マメ科Cと形態は近似するが種子長が8-9ミリメートルと大きい。
- 25) 不明B：1.2ミリメートルの潰れた形であるが皮状の構造があり種実とみられる。

(2) AMS 年代測定結果

年代測定結果を第11表、第106図に示す。

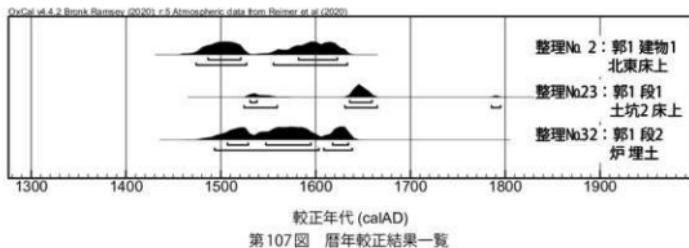
第11表には、試料の詳細、前処理方法、 $\delta^{14}\text{C}$ 値と4種類の測定年代を示している。第106図にはINTCAL20 (Reymer et al., 2020) を用いた曆年較正結果を示した。また、確率分布と σ 、 2σ の較正範囲を示している。

年代測定値について

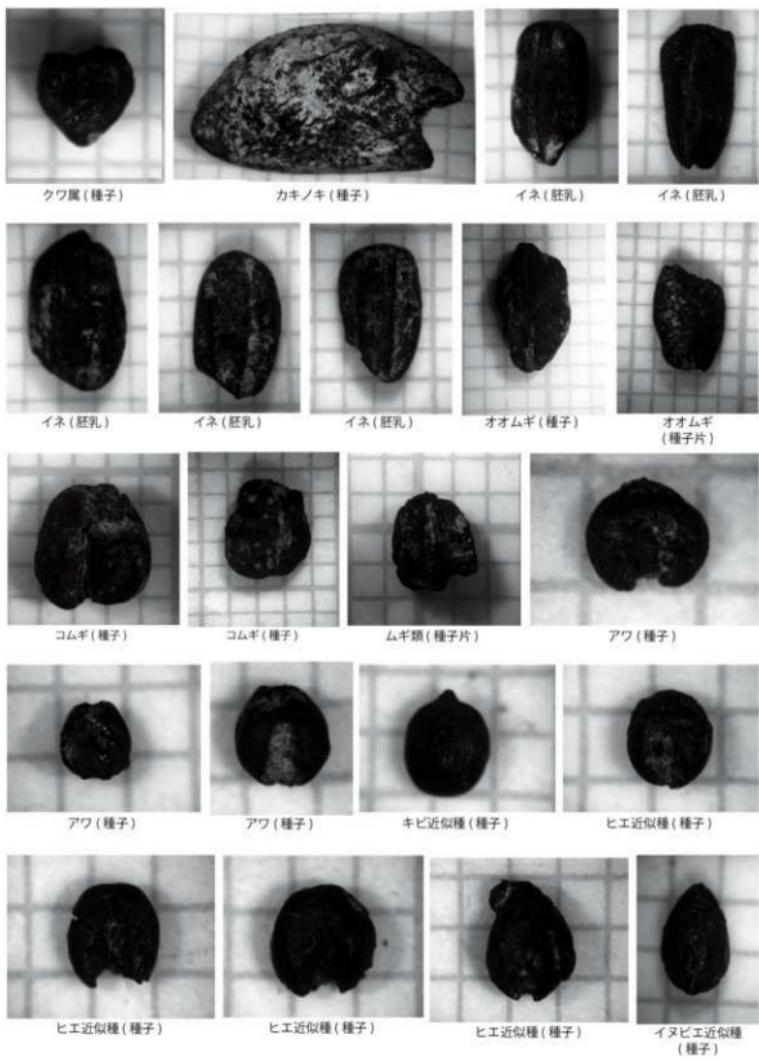
前述の分析結果及び第107図に示したように、整理No.23の示す範囲がやや広いものの、15世紀末頃から17世紀中頃の年代を示した。このことは、郭1で16世紀を中心とした遺物が検出されること、三隅氏が1570年に滅亡することと、ほぼ一致する。

引用文献

- Bronk Ramsey, C. (2009). Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Soutter, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

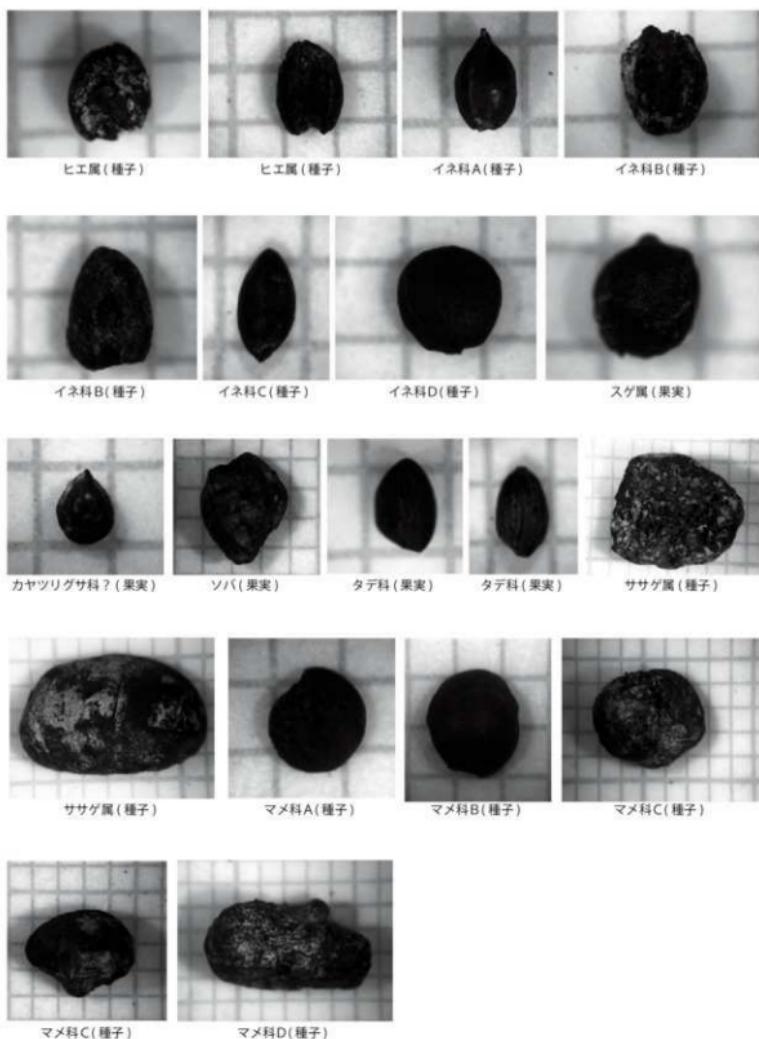


第107図 曆年較正結果一覧



背景は1mm方眼

種実写真 (1)



背景は 1mm 方眼

種実写真 (2)

第2節 普源田砦跡出土の人骨

奈良文化財研究所客員研究員 茂原信生
東京都立大学教授 山田康弘

普源田砦跡は島根県浜田市三隅町岡見にある遺跡で、2018年度に島根県埋蔵文化財調査センターによって発掘調査された。砦跡は中世の遺跡であるが、南東斜面（古墓群1）及び北西斜面（古墓群2）では近世と考えられる古墓群が検出された。このうち、古墓群1の古墓1・古墓2、古墓群2の古墓7・古墓8では人骨が出土している。今回はこれらの人骨について報告する。

人骨は、保存状態はさほどよくなく、表面があれていますものもある。一つの墓からの出土量は一體分の全量とはほど遠い量であり、比較的頑丈な部分の骨が部分的に残っているに過ぎない。植物の根に侵食されているものもある。歯は2つの墓に残っていた。古墓7から出土したものはすべて焼骨である。

人骨の計測は馬場（1993）によるマルチン法にしたがい、歯の計測は藤田（1949）にしたがった。

1. 出土した人骨

（1）古墓1

頭蓋骨は失われている。歯が15本ほど残っている。いずれもほぼ歯冠エナメル質だけが残る。前歯部の切歯や犬歯は残っていない（写真1）。上顎は右のC, P1, P2, M1, M2, M3, 左はM1, M3が残る。下顎は右のP2, M1, M2, M3と左のP2, M2?が残る。他に下顎の大臼歯と思われる歯種不明の歯が1本ある。重複はないので1体分であろう。歯はやや大きめである。咬耗は軽度で、上顎右Cの咬頭頂と上顎左のM1の近心と遠心の頬側咬頭頂にわずかに象牙質の露出があるほかには象牙質の露出はない。M3は萌出しているが、咬耗はほとんどないので20歳代前半であろう。

四肢骨は、表面が浸食されておりあれている。上腕骨と思われる11cmほどの骨幹、左大腿骨骨幹前面、右大腿骨骨幹上部やや外側、および左胫骨骨幹16cmほどが残る（写真2.3.4）。上腕骨も大腿骨も太くない。どちらも細く女性的である。右大腿骨は上部外側の殿筋隆起と思われる部分があるが発達していない。大腿骨後面の粗線は発達しておらず低い。骨は薄く、全体的に女性的な印象である。四肢骨に重複する部分はない。胫骨の後面の鉛直線は垂直に走っており、筋の発達がよかつたことを示している。断面の形態は四角形でヘリチカのIV型である。比較的残りのよい左胫骨の栄養孔位最大径（8a）は26.0mm、栄養孔位横径（9b）は18.9mmで扁平示数は72.7（広脛）で、繩文時代人にみられるような扁平さ（扁平示数62.9以下）はない。

この個体は20歳代の成人であり、歯はやや大きいが骨の細さから女性の可能性が高いと思われる。

（2）古墓2

歯は5本が残るがいずれも歯冠エナメル質のみである（写真5）。すべて上顎の歯で、左P2, M1, M3, 右M1, M2である。右M2と思われるものは舌側を主とする破片である。咬耗は軽度で、M1の舌側の咬頭頂に小さな象牙質の露出があるがP2には象牙質の露出はない。左M3の近心部にやや特殊な磨耗がみられる。M3が萌出しているので成人には達していたと思われる。壯年程度

であろう。

四肢骨は部分的にしか残っていない。左大腿骨の骨幹が残っている（写真6）。焼かれていない。骨に植物の根が入り込んでいる。表面は浸食されてあれている部分が多い。後面の粗線はあまり発達していない。上部外側の殿筋隆起の発達も弱くない。太さはやや太く男性的な大腿骨である。この大腿骨の上部横径（計測項目番号9）は推定33mm、骨体上矢状径（計測項目番号10）は推定28mmで、骨体上断面示数（扁平示数）は85で扁平大腿骨とは言えない。

この個体は壮年程度の年齢で、骨の太さから男性の可能性が高い。

（3）古墓7

すべて焼かれた骨である。全体で90グラムほどの少量である（ちなみに一般的な焼骨の一体分は約2Kgである；茂原・松島1996）。頭蓋骨片と四肢骨片が混在するが大きい骨はない。大きなものでも数cmの小片である。

頭蓋骨片は小さく、同定できるのは後頭骨の内後頭隆起部の1点にすぎない。外面の外後頭隆起部は膨隆しているが骨は厚くない。他に頭蓋冠（頭頂骨など）の一部と思われる数点が確認できる。骨の厚さはふつうである。

四肢骨では、寛骨の寛骨臼片縁部と考えられるものがある。縁は薄い。また、大腿骨の後面の粗線部と思われる小片があるが、骨は薄い。それ以外の破片は同定できない。

性別は不明である。成人には達していると思われる。

第12表 普源田砦跡発掘人骨上顎歯の計測値と比較資料（単位mm）

遺跡名		性別	C		P 1		P 2		M 1		M 2		M 3	
			m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l
普源田砦跡	古墓1人骨	右	8.1	-	7.9	10.0	7.7	9.9	10.9	11.6	9.9	-	-	11.5
		左												8.8 11.8
古墳時代人	古墓8人骨	右							10.9	12.2				
		左					7.3	10.1	10.6	12.5				9.3 11.1
古墳時代人	(松村：1990)	男性	8.19	8.76	7.54	9.77	7.16	9.69	10.85	12.31	9.81	12.10		
		女性	7.94		7.37		6.93		10.42		9.68			
江戸時代人	(Brace他：1982)	男性	7.7	8.5	7.2	9.6	6.9	9.5	10.5	11.6	10.0	11.7	9.5	11.3
		女性	7.9	8.6	7.4	9.5	6.8	9.2	10.4	11.4	9.9	11.5	9.7	11.6
現代日本人	(權田：1959)	男性	7.94	8.52	7.38	9.59	7.02	9.41	10.68	11.75	9.91	11.85	8.94	10.79
		女性	7.71	8.13	7.37	9.43	6.94	9.23	10.47	11.40	9.74	11.31	8.86	10.50

第13表 普源田砦跡発掘人骨下顎歯の計測値と比較資料（単位mm）

		性別	P 2		M 1		M 2		M 3	
			m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l
普源田砦跡	古墓1人骨	右	7.9	9.2	12.0	11.2	11.6	10.2		
		左	7.9	8.8				10.1		11.1 10.2
古墳時代人	(松村：1990)	男性	7.56		11.91		11.39			
		女性	7.23		11.43		11.03			
江戸時代人	(Brace他：1982)	男性	7.3	8.4	11.5	11.0	11.3	10.6	10.7	10.1
		女性	6.9	8.1	11.1	10.7	10.9	10.4	10.5	9.9
日本人	(權田：1959)	男性	7.42	8.53	11.72	10.89	11.30	10.53	10.96	10.28
		女性	7.29	8.26	11.32	10.55	10.89	10.20	10.65	10.02

(4) 古墓 8

頭蓋骨片と四肢骨片が残っている。

頭蓋骨は、左右側頭骨錐体部・左側頭骨頸骨突起・外耳道部（写真7）、頭蓋冠片2点が残る。頭蓋冠の骨の厚さは普通である。外耳道部に外耳道骨腫などの病変はない。下顎骨と関節する顎関節窩は正常である。錐体部の頑丈さも普通である。

四肢骨は、右大腿骨は全体のなかでも一番残りがよい。27cmほどの骨幹が残る（写真8）。後面の粗線は比較的発達し、幅のある棱を形成している。しかし、骨はさほど太くない。推定の中央付近の横径（計測項目番号7）は24.3mm、矢状径（計測項目番号6）は26.9mmで、断面示数（柱状示数）は110.3で柱状性は高い。柱状性が高いということは大腿骨に付着する筋がよく発達していることを示しており、縄文時代人などにみられる柱状大腿骨である。他に上肢骨では左の桡骨と尺骨の骨幹遠位部片（写真9）がある。どちらもかなり細い。下肢骨では、左大腿骨骨幹後部（約17cm）、右胫骨片？（約6cm）、左胫骨（約17cm）、右腓骨骨幹部片（写真10,11）、中足骨片がある。胫骨は太くないが後面の鉛直線はよく発達し、骨間縁も鋭く発達している。腓骨は樋状のように筋の付着面が凹んでいるが細い。成人には達しているが詳細は不明である。

この個体は成人で、全体に筋がよく発達していたことがわかる。しかし、全体に細く女性の可能性が高い。

2.まとめ

今回の調査で発掘されたうち古墓群1の古墓1と古墓2、古墓群2の古墓7と古墓8の4基から人骨が出土した。いずれも部分的な出土であったが、残っている骨のうちにしっかりとしたものがあるのは不思議である。保存状態に微妙な違いがあったのであろう。古墓7はすべて焼骨であった。このような保存状態のため歯冠ながら、この遺跡の人骨の形態的な特徴を明確にすることは出来なかった。歯の大きさでは他の資料と比べても特定の傾向は認められない（表12,13）。

出土した部分はいずれの墓でも部分的なものであるのでかなりの危険はあるが、性別と年齢を推測すると、古墓1は20歳代女性、古墓2は壮年の男性、古墓7の焼骨は成人で性別は不明、古墓8は筋の発達した成人女性と思われる。

参考文献

- 馬場悠男（1993）：人骨計測法、雄山閣 人類学講座別巻1、Pp.359.
- Brace,C.L.& M.Nagai(1982): Japanese Tooth Size: Past and Present. Amer. J. Phys. Anthropol. 59:399-411.
- 藤田恒太郎（1949）：歯の計測規準について。人類学雑誌、61:1-6.
- 權田和良（1959）：歯の大きさの性差について。人類学雑誌、43(1):151-163.
- Matsumura,H.(1990): Geographical Variation of Dental Characteristics in the Japanese of the Protohistoric Kofun Period. J. Anthropol. Soc. Nippon, 98(4): 439-449.
- 茂原信生・松島和巳（1996）：中村中平遺跡（長野県飯田市）から出土した縄文時代晩期の焼かれた骨片。飯田市美術博物館研究紀要 6: 137-151.

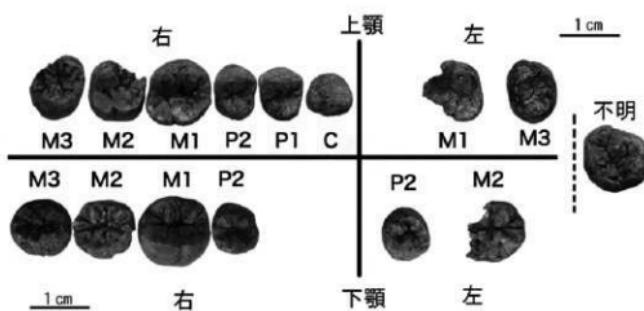


写真1 古墓1出土の歯。

C:犬歯、P1:P1:第1小白歯、P2:第2小白歯、M1:第1大白歯、M2:第2大白歯、3:第3大白歯。

不明は大臼歯であろうが歯種がわからないもの。

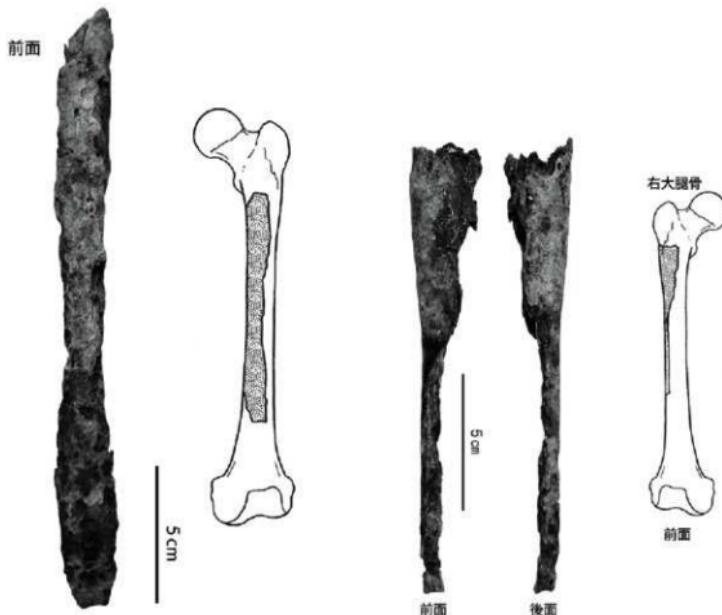


写真2 左大腿骨前面。

付図は出土部位を示す(図11まで同じ)。

写真3 右大腿骨前面と後面。

後面の粗線は発達していない。



写真4 左脛骨内側面、前面、外側面。

写真5 古墓2出土の歯。

すべて上顎歯である。

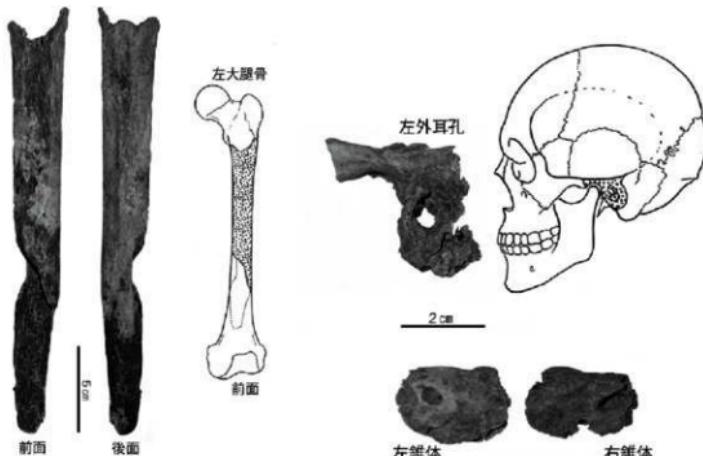


写真6 古墓2出土の左大腿骨骨幹前面と後面。

写真7 古墓8出土の頭蓋骨の一部。

左侧頭骨外耳孔部、左右の側頭骨錐体内面。

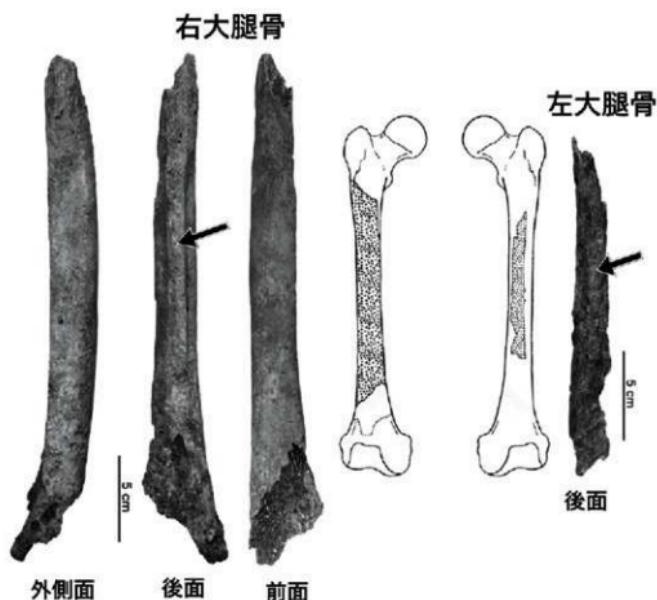


写真 8 古墳 8 出土の左右大腿骨。
後面の粗線（矢印）はよく発達しており柱状性が高い。



第5章 総括

発掘調査実施前の普源田砦跡の位置付けは、石見地方で多数確認されている小規模で臨時的な山城の一つだった。二重の堀切で尾根を遮断した主郭は特に大きな規模でなく、その他の郭も小規模で、これまで注目されていなかった。しかし、発掘調査の結果、多数の遺構が確認され、様々な遺物が出土すると、戦国時代のコンパクトな山城として、遺跡の評価も変化した。

本章では、発掘調査で確認された主な遺構・遺物について整理し、近隣や県内の同時期の資料と比較することで、普源田砦跡の地域における新たな位置付けを検討する。合わせて、発掘調査の成果から明らかになった課題についても整理したい。

第1節 普源田砦跡の遺構

1. 建物の変遷について

普源田砦跡では、これまで記述してきたように様々な遺構が確認された。中でも郭1の北東、中央、南西の3地点でそれぞれ複数の建物が検出された点は、小規模な山城でも複数の建物が一定期間計画的に配置された状況を示すものとして注目される。郭1の遺構は、切り合い関係や出土遺物の年代から同時期の組み合わせを特定することは困難である。しかし、各遺構の主軸方向（第14図）と郭西端の造成状況からは、大きく次の3つのグループに分かれるように見える。

A：建物2・3・4・5 主軸方向概ねN-61°-E

- 1間が約2mの比較的柱の配置が整った掘立柱建物で、主軸方向がほぼ揃っている。
- 郭北東と中央に位置し、建物4南側の柱列と、建物5中央の柱列がほぼ揃う。

B：建物1・6・7、段状遺構1・2、土坑2、溝5 主軸方向概ねN-58°-E

- 遺構の中心は、郭の中軸線である8ラインに近いが、Aに比べて主軸方向がやや不揃いである。
- 明確な掘立柱建物は郭南西に位置し、中央には段状遺構と大型土坑、北東には竪穴建物というように、郭全体に多様な遺構が位置している。

C：段状遺構3・4 郭西側の造成土下の遺構

- 建物7、段状遺構2床面造成土の下で検出された段状遺構、ピットで明確な建物は不明。

A・Bの新旧関係を判断する材料は少ないが、建物2は建物1埋没後に柱穴を掘っている。また、Cは床面で15世紀前半の土師器皿が出土しており、遺跡内で最も古い時期の遺構と考えられる。

以上の点から、郭1では南西から簡易な建物が建てられ始め、中央、北東にも建物が建てられた後、南西から順次整った掘立柱建物に建て替えていった可能性が考えられる。しかし、掘立柱建物の詳しい年代は不明で、主軸方向の異なる新旧の建物が同時期に存在する可能性もあり、遺構の変遷を示すには、慎重を期す必要がある。

2. 掘立柱建物について

普源田砦跡では、郭1を中心にピット約400基を検出した。このうち、1間の長さや床面のレベルが揃う等、柱の配置に一定の規則性があり、平面が方形にまとまるものは掘立柱建物と判断した。郭1で検出した掘立柱建物の時期は、柱穴内や周辺で出土する遺物から16世紀前半が中心であると考えられる。これらの掘立柱建物は、平面形や規模、出土遺物の特徴から、現地調査時に大型の

建物6が中心的な建物、中型の建物5・7は居住用の建物と考えられ、正方形の建物2・4は倉庫または櫓の可能性が指摘された。これらの掘立柱建物について、島根県内で発掘調査された中世後半の建物と比較し、さらに詳しく検討したい。

建物6の性格（第108図）

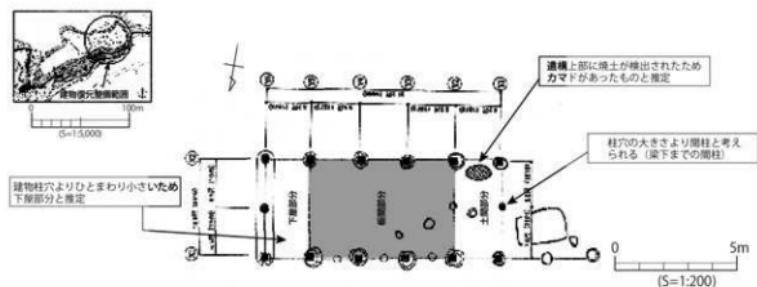
建物6は、普源田砦跡では最大規模の建物で、柱穴の規模も比較的大きく深く、建て替えの痕が明確に残るなど、遺跡内で長く中核的な施設だったと考えられる。一方で、平面形は桁行方向の柱間が揃わず、北西の1間は柱穴が小さく柱間も短くなる等や複雑である。この建物の性格について考える上で、参考となる掘立柱建物が安来市広瀬町の富田城跡花ノ壇で検出されている。花ノ壇SB01は、史跡整備に伴う建物復元のために上屋の検討がおこなわれ、現地に復元された県内では希少な中世の建物である。花ノ壇の南端に位置し、この郭の主屋と推定されている。柱間の長さは東西の1間が短く、東側は柱穴が一回り小さいことから下屋部分と推定され、西側は遺構上部で焼土が検出されたことから、竈がある土間部分だったと推定されている。建物6の北西の1間も柱穴の規模や配置の特徴から下屋部分と考えられる。また、建物6の東隅では、炭の面が検出され、鉄鍋の破片が出土していることから、竈が存在した可能性も考えられる。建物6とSB01は、地域も規模も異なる城跡で検出された建物で、郭内の位置も異なる。しかし、遺構そのものには、共通する要素が確認できるので、同様の性格だった可能性が考えられる。

普源田砦跡と石見地方で確認された建物の比較（第109図）

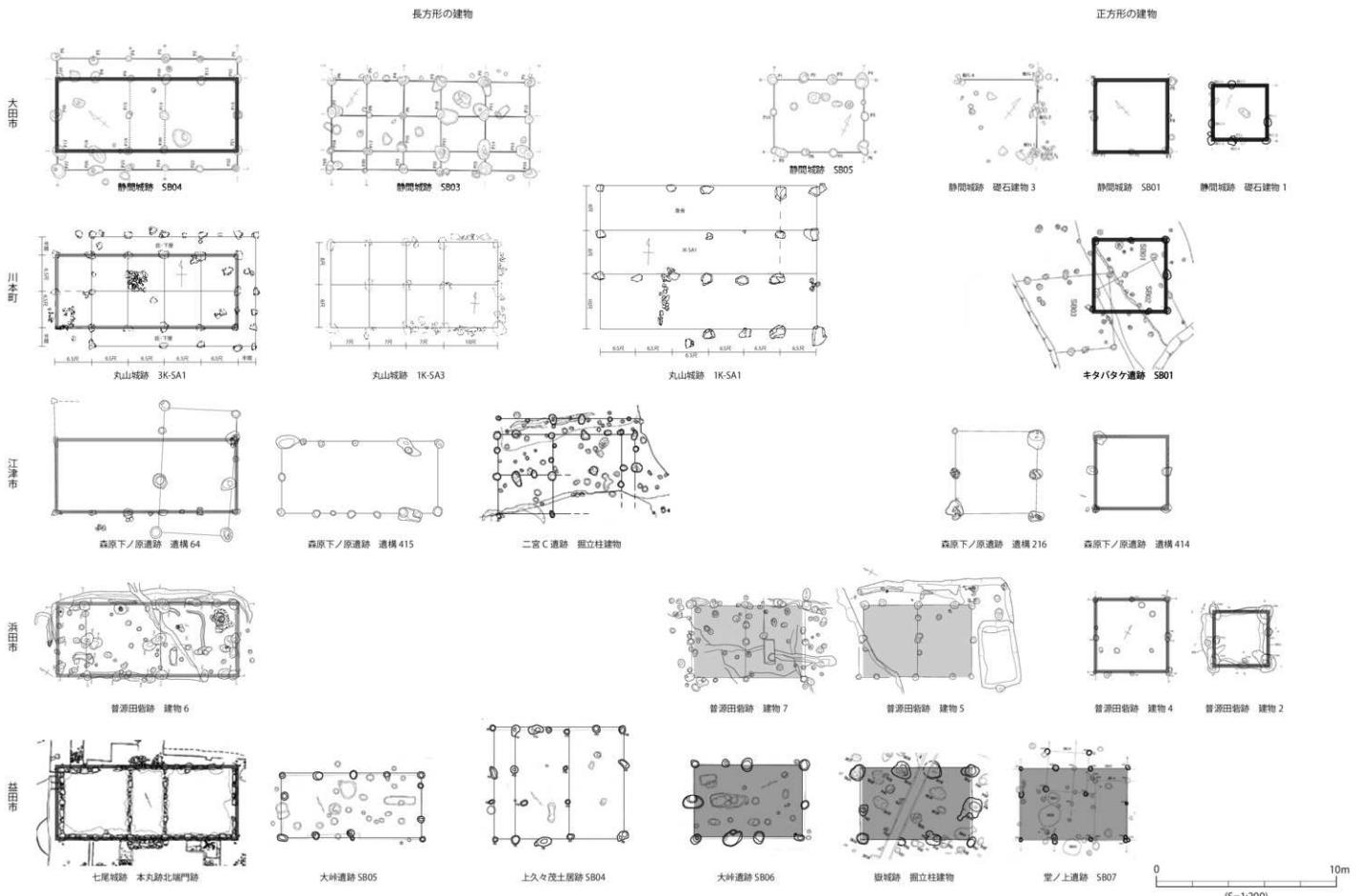
普源田砦跡で検出された掘立柱建物は、平面形が長方形のものと正方形のものに分かれる。また、柱間は様々だが、推定される建物の規模は、概ね1間約2m(6.5尺)を基準としたものとみられる。この状況が同時期の石見地方の遺跡において一般的なものか確認するため、石見地方で確認された掘立柱建物と礎石建物を整理し、比較・検討した。その結果、平面形が大きく長方形と正方形に分かれ、長方形はさらに3つに分けられる状況が確認できた。

(1) 桁行方向10m 梁間方向4mの長方形の建物

第109図のグレーの長方形の枠線は、桁行方向10m、梁間方向4mの大きさを示しており、静岡城跡SB04、丸山城跡3K-SA1、森原下ノ原遺跡遺構64、七尾城跡本丸跡北端門跡は、規模がほぼ同じである。普源田砦跡建物6と富田城跡花ノ壇SB01は、下屋部分も含めるとこれに準じた規模となる。また、森原下ノ原遺跡遺構415、大峰遺跡SB05は、平面規模が一回り小さく、柱穴の配置



第108図 富田城花ノ壇 復元建物平面図（環境整備報告書より引用・加筆）



第109図 石見地方の中世後半から近世初頭の建物（各報告書より引用・加筆）

が不揃いだが、比較的古い15世紀の建物であることに因るかもしない。これらは掘立柱と礎石、推定される建物の機能も異なるが、中世後半に石見地方で普及した規格の可能性が考えられる。

(2) 桁行方向6m 梁間方向4m の長方形の建物

第109図グレーの長方形の網掛けは、桁行方向6m、梁間方向4mの範囲を示しており、普源田砦跡建物5・7、大峰遺跡SB06、嶽城跡掘立柱建物、堂ノ上遺跡SB07は平面規模がほぼ同じである。このうち堂ノ上遺跡SB07は、17世紀の掘立柱建物として報告されているが、柱穴平面形が丸く小型で、近世墓と重複することから、中世後半に遡る可能性を考え参考にした。現在のところ石見地方西部で確認されているが、第108図の富田城跡花ノ塙SB01平面図のグレーの網掛けをした範囲が同じ大きさで、板間部分として復元されている。

(3) その他の長方形の建物

長方形の建物では、その他に床束を持つ建物が一定数確認されている。二宮C遺跡の掘立柱建物は、報告書ではSB-01・02と報告されているが、ここでは柱穴の並びから、より規模の大きい1棟の建物として掲載する。年代は15世紀頃とされる。上久々茂土居跡SB04も15世紀の掘立柱建物で、二宮C遺跡同様柱穴の規模は小さく配置がやや不揃いである。静間城跡SB03は、15世紀後葉から16世紀前葉頃の掘立柱建物で、柱穴の規模は大きく、配置が整っている。丸山城跡の礎石建物は1K-SA3と1K-1は16世紀末で、大型の礎石が整然と並び、時代が下るに従って平面規模が大型化し、柱の配置が整っていく様子がうかがえる。これらは(1)(2)と異なり、平面規模や柱の配置が建物ごとに異なる。いずれも中世領主の居城跡や館跡等で確認されていることから、建物の機能・位置付けが一般的でなく、他と異なるためと考えられる。

(4) 正方形の建物

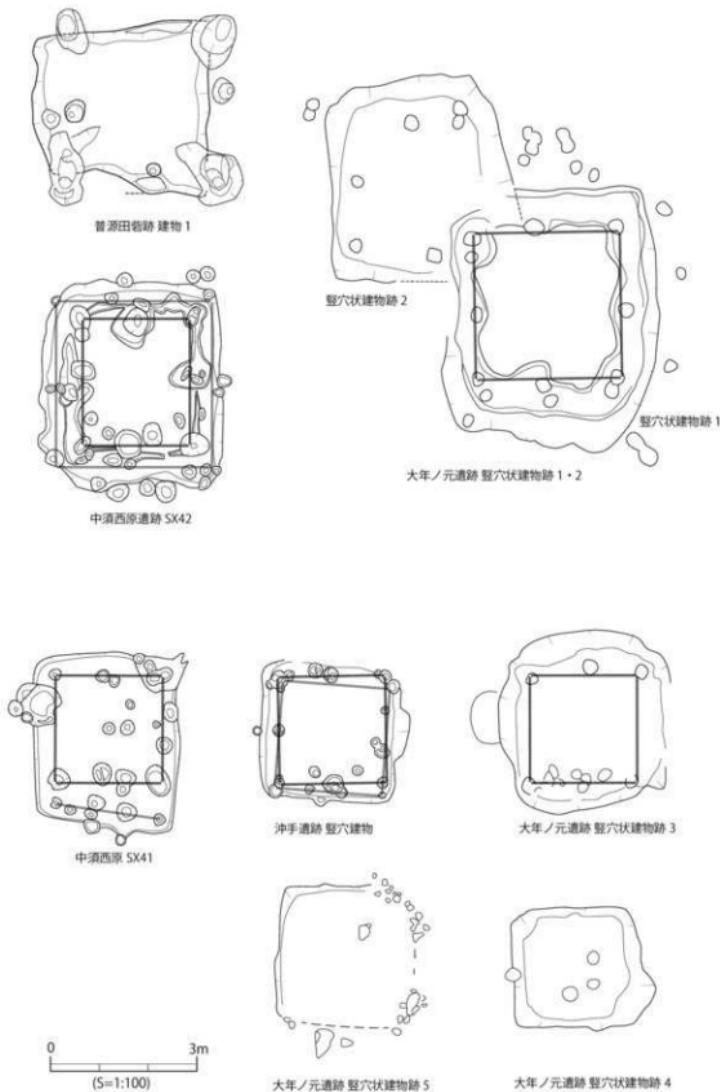
第109図グレーの正方形枠は、一辺3mと4mの大きさを示しており、静間城跡、キタバタケ遺跡、森原下ノ原遺跡、普源田砦跡でそれぞれの規模の建物が確認されている。柱の配置は1間×2間と2間×2間が多く、明確な総柱建物は確認されていない。掘立柱と礎石の相違や、倉庫、櫓等想定される建物の機能は異なるが、大小の規格が存在するようである。

以上のように、石見地方の発掘調査で確認された中世後半から近世初頭の建物を整理し、普源田砦跡の掘立柱建物の類例を確認した結果、平面形から大きく4つのまとまりが見えた。16世紀以降は柱の配置が整い、長方形の建物では特殊な例を除くと、梁間の長さが4m前後のものが多くなるようである。また、こうした状況が、大小領主の城館跡、集落遺跡等の遺跡の性格や、主屋、門、倉庫、櫓等の建物の性格に関わらず、石見地方の広範囲で確認できる点が注目される。

普源田砦跡郭1で確認された掘立柱建物の特徴は、基本的に中世後半の石見地方の建物のまとまりの中に納まるものである。一方で、石見地方の中世領主の城館跡等で確認される、(3)の建物が確認されなかった点は注意される。

3. 積穴遺構について

普源田砦跡では郭1で積穴遺構が2基検出されている。中世の積穴遺構は、全国的には広く確認されており、構造や機能について研究が進められている。報告書作成にあたり、全国の状況を参考にして県内の類例を確認し、当遺跡の積穴遺構と比較検討を行った。



第110図 島根県内中世穹穴建物（各報告書・参考文献より引用・加筆）

竪穴建物（第110図）

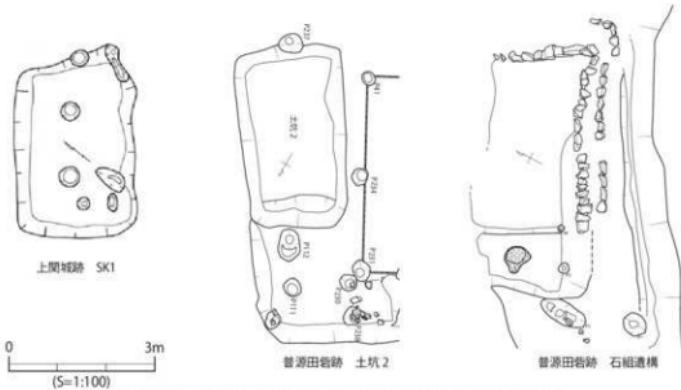
普源田砦跡の発掘調査以前、島根県内の遺跡で中世の竪穴建物が確認された遺跡は、石見地方西部の益田市域に所在する3遺跡のみである。益田川河口近くの湊町である沖手遺跡と中須西原遺跡で計3棟、益田川上流の銅精錬工房である大年ノ元遺跡で5棟以上が確認されている。いずれも出土遺物等から14～15世紀の遺構と推定されているが、沖手遺跡以外は報告書が未刊行のため詳細は不明である。山城跡で竪穴建物が確認された報告は無く、普源田砦跡建物1は初の例となる。

これらの竪穴建物の平面図を比較したところ、大きく2つの規模にまとまることが分かった。大型のものは床面の長辺が約3mあり、最も小型の大年ノ元遺跡竪穴状建物4は床面が約2×2mの規模である。平面形は正方形に近いものが多いが、普源田砦跡建物1、中須西原遺跡SX41、大年ノ元遺跡竪穴状建物2は台形状である。規格性のある柱穴配置が確認できるものは、 $2.2 \times 2.2\text{m}$ が3例、 $3 \times 3\text{m}$ が1例で、正方形になるものが多い。中須西原遺跡SX42では、 $2.6 \times 2.2\text{m}$ の長方形に配置された主柱穴の外側で、小型の柱穴が検出されている。これらの柱穴配置は、西日本の主要都市部以外で近年分類がおこなわれた大分県の例（大分県2010）を参考にすると、II 2AおよびII 3A類に相当すると考えられる。また、普源田砦跡建物1や大年ノ元遺跡竪穴状建物2・4・5では、規格性をもつ柱穴配置が見られない。大分県の竪穴建物分類の1類に相当すると考えられる。

大年ノ元遺跡以外の竪穴建物は、倉庫・蔵と推定されており、普源田砦跡建物1も同様の建物と考えられる。石見地方では第109図で示したように、中世後半には倉または櫓と推定される平面形が正方形の掘立柱・礎石建物が確認されている。これらに比べて石見地方西部の中世竪穴建物は床面の規模が小さいものが多いが、用途に違いがあったのか現状では不明である。こうした中、普源田砦跡で竪穴建物から掘立柱建物への建て替えが明確に分かる点は重要と言える。

大型方形遺構（第111図）

土坑2は、壁面と床面の掘削状況が建物1とよく似ているが、床面積が建物1の半分程度しかなかったため、調査時には大型の貯蔵穴と考えていた。今回、近県の竪穴建物の類例を探す中で、山口県上関城跡SK1に類似する点を確認した。上関城跡SK1は、床面の規模が $3.3 \times 2\text{m}$ と、土坑2とほぼ同じである。床面の長軸に径40cm、深さ80cmの柱穴が2本掘られており、上部構造を持つ



第111図 土坑2、石組遺構と竪穴遺構の類例（各報告書より引用）

施設だったと考えられている。土坑2は床面で柱穴が検出されなかつたが、東西の壁際の長軸上で深さ75cmと85cmの柱穴を1基ずつ確認している。柱間は約4mで、土坑2に伴うものであれば、上関城跡SK-1で推定されるような小型の建物となる可能性も考えられる。

また、郭1北側斜面で検出した石組遺構は、斜面上方からの土圧により南側の石積みが変形しているが、床面の規模はおよそ3.3×2mと推測される。遺構の立地は違うが、前述の竪穴遺構2基と共に通する規模である。中井均氏は中世の竪穴遺構を3つのタイプに分類し（中井1994）、簡単な木組みに板屋根をのせて土をかぶせ、側壁を石垣とし、長軸に張り出し部（出入り口）を設けたものは、II-b類とした。石組遺構の床面で壁溝は確認されず、石組上面の平坦面に壁溝が設けられていた。このため石組床面は屋内の可能性が考えられる。石組遺構の西側は床面が階段状で、ピットを4基検出している。この部分を出入り口と捉えると、急傾斜の北側を流失したII-b類に近い遺構の可能性も考えられる。石見地方で確認された方形土坑や段状遺構の中には、再度検討することにより、中世の竪穴遺構と判断されるものが存在する可能性がある。普源田砦跡で確認された竪穴遺構と石組遺構については、今後類例の増加を待って改めて検討する必要がある。

なお、今回の調査では、主な遺構の床上の埋土を洗浄し、炭化種実の抽出をおこなっている。その結果は、第4章第1節で報告したとおり、遺構により大きな違いがみられた。建物5で抽出した稻とマメ科は、それぞれ全体の75%と65%に上り、唯一柿も確認された。段状遺構2は炉の中でまとまった量が確認された。一方で、竪穴遺構からは少量しか確認されていない。こうした炭化種実の種類と数量の違いは、各遺構の機能を反映している可能性が考えられ注目される。

【参考文献】

- 大分県教育庁埋蔵文化財調査センター『豊後府内16（第3分冊）』2010
- 小野正利編『図解・日本の中世遺跡』財团法人 東京大学出版 2001
- 川本町教育委員会『キタバタケ遺跡』1992
- 川本町教育委員会『丸山城跡』1997
- 島根県教育委員会『上久々浅土居跡・大岡遺跡』1994
- 島根県教育委員会『一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書1』1995
- 島根県教育委員会『堂ノ上遺跡』2011
- 島根県教育委員会『静岡城跡』2018
- 島根県教育委員会『森原下ノ原遺跡現地説明会資料』2019
- 鈴木弘太「中世「竪穴建物」の検討—都市鎌倉を中心として—」『日本考古学』第21号 2006
- 中井 均「民衆」と「城館」研究試論—特に考古学的資料を中心に—』『帝京大学山梨文化財研究所研究報告第5集』1994
- 匹見町教育委員会『猿城跡発掘調査報告書』2000
- 広瀬町教育委員会『史跡富田城跡環境整備事業報告書』1997
- 益田市教育委員会『沖手遺跡・久城東遺跡』2010
- 益田市教育委員会『中須東原遺跡』2013
- 益田市教育委員会『都茂畠山のあゆみ～大年の元遺跡の調査概要を中心として～』『島根県古代文化センター第7回石見国巡回講座「遺跡からみた中世の美郡」資料』2015

第2節 普源田砦跡出土遺物

1. 陶磁器類（第14表）

中世の陶磁器類503点と土師器182点を分類、集計した結果を第14表に示した。遺物の年代は、15世紀は少量で、16世紀前半が大部分である。16世紀第3四半期も少量で、第4四半期初め以降は確認できない。可能な限り個体数の推定をおこなった結果、貿易陶磁器では白磁の点数が最も多く、青磁、青花の合計と同数だった。陶器は磁器に比べ点数が大幅に少ないが、褐釉陶器の茶入、象嵌青磁の壺が出土している点が注目される。

国産陶磁器の食器は少ないが、瀬戸戸美濃の皿の小片が出土している。備前系陶器と瓦質土器の総数は大差ないが、器種別には使い分けが見られる。また、瓦質土器の火鉢が出土しているので、柱の配置を復元できていないが、床のある建物が存在した可能性が考えられる。その他、土師器は点数が少なく、一括廃棄、祭祀が確認できない点は、城の性格を示していると考えられる。

2. 石製品

硯・茶臼が出土しており、茶入、象嵌青磁の壺、風炉等と合わせて、この城が恒久的施設であることを示す資料と考えられる。天目茶碗は出土していないが、眺望の良い郭1の西端の建物で、文化的な会が催された可能性が考えられる。

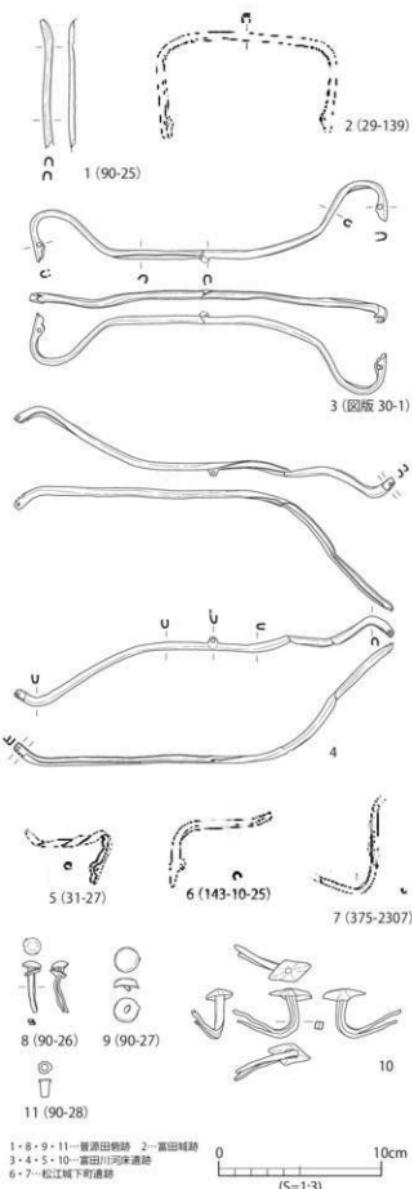
3. 銅製甲冑部品（第112図）

普源田砦跡では、甲冑の部品とみられる銅製品が4点出土している。県内の甲冑部品の出土状況を確認するため、令和2年度に佐藤寛介氏の指導を受けて、島根県内遺跡で出土した甲冑部品の確認をおこなった。島根県内で小札や飾り金具等の甲冑部品が出土した遺跡は少ない。これまでに石見地方では、普源田砦跡のほか、江津市森原下ノ原遺跡、川本町丸山城跡、邑南町日和城跡等8遺跡で、出雲地方では5遺跡で出土が確認されている。このうち、普源田砦跡と同様の銅製の甲冑覆輪が出土した遺跡は、安来市の富田城跡、富田川河床遺跡、松江市の松江城下町遺跡の3遺跡で、石見地方では例がない。

第7表 普源田砦跡出土陶磁器集計表（個）

	貿易陶磁器																								不明		
	白磁						青磁												青花								
	備前系			伊賀系			吉野系			伊賀系			吉野系			伊賀系			吉野系			伊賀系					
	D型 皿	D型 六角杯	E1型 皿	E2型 杯	平明	B3型	B4型 梅瓶 津文瓶	C2型 青磁 直腹	D2型 丸底	丸底 皿	盤 或 大底	青磁 片	白 皿	白 皿	白 皿	C型 皿	E型 皿	E型 皿	青花 片	白 片	白 片	白 片	白 片	白 片	白 片		
現行数	3	1	61	6	2	4	16	12	4	4	2	5	6	1	5	4	6	2	8	3	1	8	16	2	5	1	
推定個体数	1	1	42	2	1	1	4	3	2	1	1	3	5	1	5	2	5	2	4	1	1	8	3	3	3	1	

	貿易陶磁器										因縁陶器								土器						土器		
	中國陶器				朝鮮陶器				不明		瀬戸美濃系				備前系				吉野系				火鉢				
	青磁	黒磁	朱赤	青花	青磁	黒磁	灰皿	火鉢	青磁	黒磁	青磁	黒磁	灰皿	青磁	黒磁	灰皿	青磁	黒磁	灰皿	青磁	黒磁	灰皿	青磁	黒磁	灰皿		
	小皿	巻口瓶	茶入	青	白	瓶	瓶	壺	三	四	青磁	黒磁	灰皿	青磁	黒磁	灰皿	青磁	黒磁	灰皿	青磁	黒磁	灰皿	青磁	黒磁	灰皿	青磁	
現行数	1	4	1	1	1	45	1	1	10	1	24	9	19	31	2	4	84	14	47	1	4	9	182				
推定期体数	1	2	1	1	1	4	1	1	3	1	13	1	3	2	2	1	3	1	7	1	4	2	59				



2は富田城跡三ノ丸地区帶曲輪で出土した銅製品で、形状から腹巻の押付板用覆輪金物と判断される。3・4は富田川河床遺跡で出土した覆輪金物で、3は鎧の胸板または脇板用とみられる。その他にも、破損し捻じ曲げられているが、断面や取り付け部分の形状から、5～7は甲冑の覆輪金物と判断される。笠鉈8・9は、同型の類例を確認できなかった。10は安来市教育委員会所蔵資料で、やや大型だが参考に掲載する。

島根県内では甲冑の飾り金具は、出雲地方の大規模な城館跡や城下町遺跡でのみ確認されている。そのような状況で、普源田砦跡のような石見地方の小規模な山城跡で甲冑の飾り金具が確認された意義は大きい。今回確認できた資料で、明確に甲冑の覆輪金物として報告されているのは3と5だけで、未報告の資料もさらに存在する。今後は小規模な城館跡でも甲冑部品が出土することを意識した発掘調査をおこない、あわせて過去の城館跡や城下町遺跡で出土した金属製品を再確認し、県内の甲冑や刀剣類の飾り金具出土状況の実態を把握する必要がある。

【参考文献】

- 鳥根県教育委員会『富田川河床遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
1983
- 鳥根県教育委員会『富田川』1984
- 広瀬町教育委員会『史跡富田城跡環境整備事業報告書』
2003
- 松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業
団『松江城下町遺跡（殿町287番地）・（殿町279番地
外）発掘調査報告書』2011
- 松江市教育委員会・公益財団法人松江市スポーツ振興
財団『城山北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下
町遺跡発掘調査報告書3』2011

第112図 普源田砦跡出土甲冑部品と県内類例（カッコは報告書掲載番号）

第3節 普源田砦跡周辺の山城について

島根県立八雲立つ風土記の丘

高屋茂男

1. はじめに

普源田砦跡は、浜田市三隅町の岡見川右岸の低丘陵上に位置する。普源田砦跡の三隅地域での位置付けを検討するため、岡見地区に所在する、次郎丸砦跡、碇石城跡、茶臼山城跡の3つの山城について現地調査を行ったので報告する。

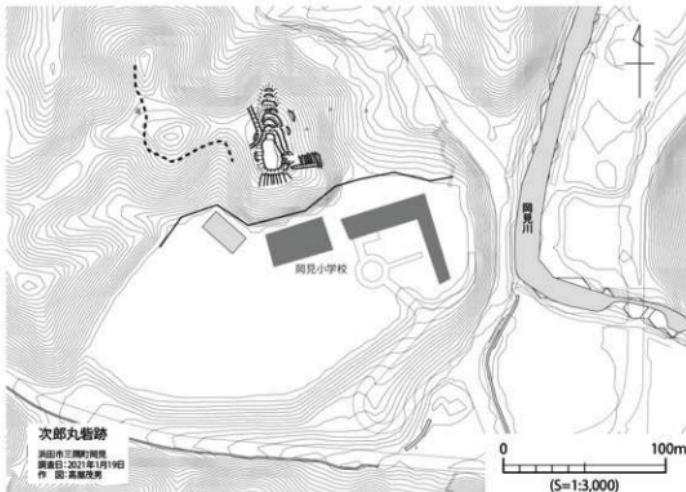
2. 次郎丸砦跡

小規模な城館で、ほぼ単郭の城である。主郭（東西11m×南北22m）は曲輪の端へ向けてやや傾斜しており、削平が十分とは言えない。西側の尾根は堀切で遮断し、東側にも堅堀が存在する。南側は小学校建設時に削られていると考えられる。

一部崩れているところもあり、西側では山道がつくられるなど、大きく地形改変を受けているところはあるものの、現存部分は良好に残っていると見られる。

西側の尾根続きにも緩やかな地形があるが、ほぼ自然地形で城館遺構とは判断しがたい。

小規模な城館であるものの、堀切や堅堀が存在し、厳重に守ろうという意識が見られるが、主郭の削平状況は必ずしも良好とは言い難いので、地域をおさめる領主クラスの城というより、村の城に近いものであろう。

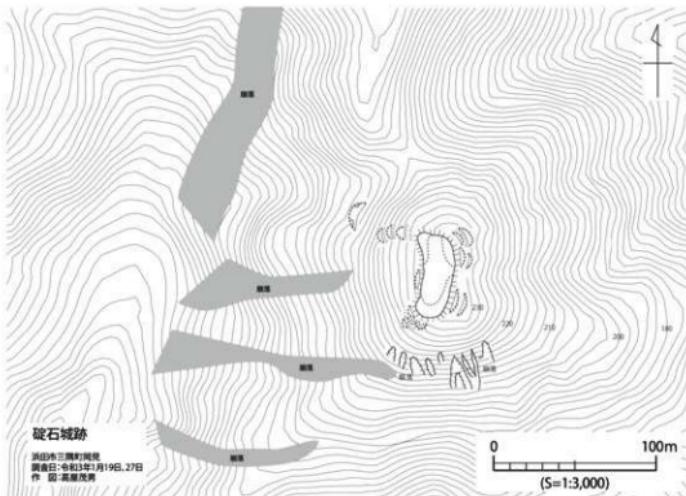


第113図 次郎丸砦跡縄張り図

3. 碇石城跡

碇石城跡を含む源田山は、昭和58年7月の豪雨災害の際に、各所において土砂崩落があったことが過去の報告によって明らかである¹。さらに小規模なものも各所で起っていたと考えられ、碇石城跡周辺だけでなく、源田山山頂周辺でも崩落とみられる溝や落ち込み、崩れた下方に土砂がたまたま箇所が数多く確認できた。先行図面¹では、碇石城跡の南側斜面を中心に畝状空堀群を示すが、下方に行くほど幅が広がったものや、斜面の下方ではなく斜めに溝が走るものもあり、土砂崩落により溝状に崩れた痕跡と考えられる。また源田山山頂周辺も城郭遺構とするが、溝が豊堀のように長く続かず、溝やえぐれたところの下方に土砂が溜まり小曲輪状になっているところが多数存在する。源田山山頂の南北には大規模な土石流が発生しており、その上部周辺にあたる城郭遺構とされる部分も、これに関連したものとみてよいであろう。

碇石城の縄張りは、ほぼ主郭のみと言ってよい構造である。主郭は東西20m×南北50m程度で、複数の段に分かれる可能性があるものの、規模としては小さいものである。ここからの眺望は良いが、益田市方面の西側は源田山があり見通すことはできない。そのため、碇石城は主に普源田砦跡の東や、南の金山町の方角を意識した城と考える方が良いであろう。



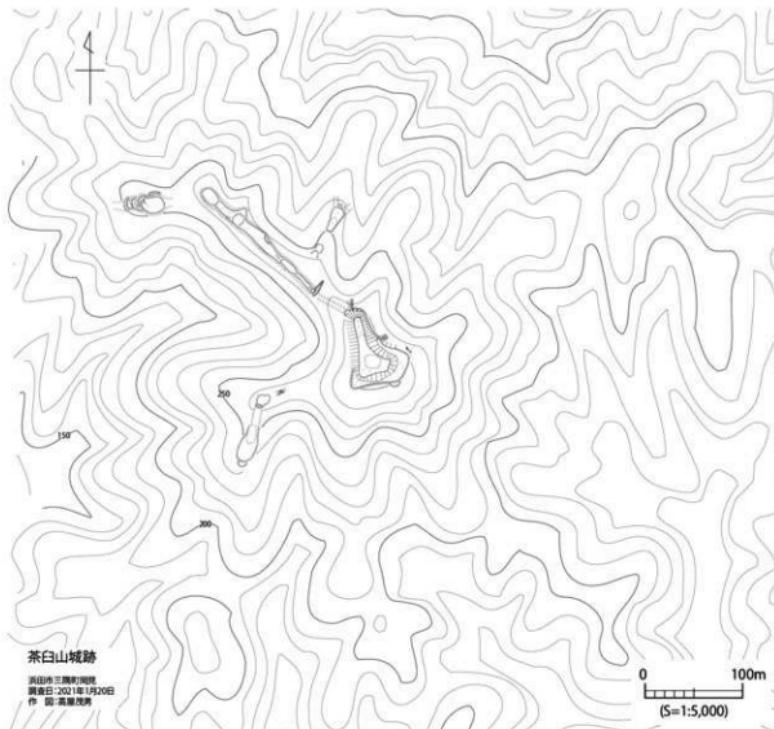
第114図 碇石城跡縄張り図

4. 茶臼山城跡

標高291mの高所に位置する。遺構は山頂周辺から延びる尾根筋に広がるが、削平が良好なのは山頂部分のみである。山頂部分は東西30m×南北60mの細長い主郭を中心として、南から東にかけて帯曲輪があるが、曲輪の縁にかけて下降しており削平は悪い。ただ曲輪の縁の方は盛り土で地盤沈下したと考えることもできる。主郭は北側に細長く伸びるが、やや傾斜を持っており、基本的には山頂部分の東西30m×27m部分が中心である。

豊堀は主郭の東側斜面と北側の2か所、小曲輪に隣接して確認できる。堀切は主郭東側と北側尾根に確認できるが、東側のものは現在の登城路によって確認しづらくなっている。北側尾根のものは大きな堀切で、尾根を完全に遮断している。

主郭から堀切を越えて西側へ延びる尾根には、一部土橋状になっている部分があり、その西に比較的緩やかな地形がある。ただし削平は悪く自然地形をそのまま生かしたような状態である。尾根先端で西へ曲がると、同じく切岸が明瞭ではない曲輪があり、先端部分に小曲輪が続く。この部分は曲輪の端が上部の曲輪とつながり、通路と考えられる。滝ノ谷城跡（邑南町市木）でも同様に尾根



第115図 茶臼山城跡縄張り図

筋の小曲輪が通路を兼ねている事例が確認できるため、ここも同様の事例と考えられよう。そのため、ここまでを城域として判断した。また主郭から西南方向に延びる尾根にも、切岸が明瞭ではない傾斜した地形がある。主郭北西方向の尾根と同様に、あまり大規模な普請をせず、自然地形を生かしたものと判断した。

全体として、城域は大きくなるが、普請状況からみると主郭中心の城である。

5.まとめ

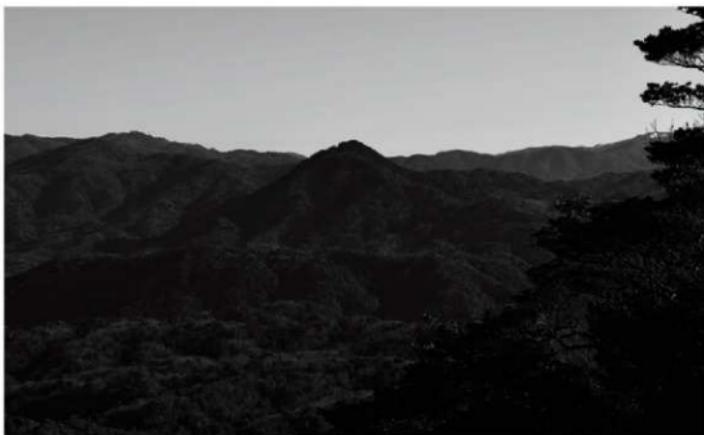
浜田市三隅町岡見の山城について見てきたが、主郭を中心としたもので規模が小さく、曲輪の削平も主郭以外は良好でない。これに対して、三隅氏の本拠である高城（三隅町三隅）や、河内城（三隅町河内）では、曲輪の削平は良好で面積も大きく、切岸もしっかりしている。そのため、地域の拠点城郭として維持されたものと判断される。そのため茶臼山城や碇石城は、地域の拠点城郭という類ではなく、軍事的緊張の中で一時的に維持された城と判断される。次郎丸砦は規模も小さく、標高も低いため普源田砦よりは下位に位置づけされる村の城的な要素を持った城と考えられよう。

註

1 昭和 58 年 7 月の豪雨災害については、数多くの報告があるが、例えば島根大学地質学教室調査団「58・7 山陰豪雨による斜面崩壊の地質学的特性」（『島根大学地質学研究報告 3』1984）では、主な崩落箇所を図化しており、源田山でも各所で大規模な崩落が起こっていることが確認できる。他に東元定雄・高橋裕平「昭和 58 年 7 月豪雨による島根県西部の山崩れと土石流」（産業技術総合研究所地質調査総合センター『地質ニュース 349』1983、土井 功・右近則男「昭和 58 年 7 月豪雨による島根県災害について」（砂防学会『砂防学会誌 36(2)』1983 なども参考とした。

2 岩崎 健「ふるさとの歴史 (79) 益田市周辺の山城 益田市最大の第三の主城 “源田山連峰の城”（大城）その 1 王山城」（三隅町岡見）『Nice To Meet You』VOL.167、1999

岩崎 健「ふるさとの歴史 (81) 益田市周辺の山城 益田市最大の第三の主城 “源田山連峰の城”（大城）その 2 上の社、普源田、碇石城」（三隅町岡見）『Nice To Meet You』VOL.169、1999



茶臼山城跡主郭から見た高城跡

第4節 普源田砦跡と石見地方の城館跡

統いて石見地方のさらに広範囲の城館跡を整理し、普源田砦跡を同規模の城館跡と比較してより詳しい位置付けを試みたい。石見地方には400以上の城館跡が存在するが、このうち発掘調査が実施された城館跡は約5%しかない（小都2010）。そこで、まず縄張り図を基に平面規模や遺構配置の比較を行うこととし、バラバラのスケールで掲載されることの多い縄張り図を同一縮尺にして整理した。その結果、第116～118図で示すように、大まかに大・中・小の規模に分かれる状況が確認された。大規模な城館跡は、益田市七尾城跡、浜田市高城跡、川本町丸山城跡等多数の郭や広い面積の郭をもつ大規模な城郭と、複数の防御施設が設けられている。中規模の城館跡は、益田市角井城跡や浜田市井野城跡、邑南町日和城跡のように、複数の郭と防御施設をもっている。小規模の城館跡は、基本的に1～3段の郭のみで、防御施設は尾根の先端を複数の堀切で区画するだけものもある。普源田砦跡をはじめ、益田市叶松城跡、道川城跡、丸茂城跡、浜田市風呂ノ木砦跡、八反原城跡等、石見地方西部に同様の平面プランを持つ山城が確認できる。なお、山城の規模の大小の違いは郭の数によるところが大きく、16世紀後半期以降の城以外は、個別の郭の大きさは極端に変わらないようである。益田市域の小規模城跡については、寺戸氏、斎藤氏、丸茂氏といった城主の名前が伝わっており、普源田砦跡も小領主の地域支配の拠点だった可能性が考えられる。

また、小都隆氏は、中国地方の中世城館跡を規模と比高、使用状況に基づいて「城」「屋敷」「平城」「陣」「砦」に分類している（小都2010）。近年城跡のほぼ全体を発掘調査した石見の2城をこの基準に従って分類すると、現在は山城とされる大田市静間城跡は、規模が約5,000m²、比高20m以下で、恒久的施設なので、中規模な「屋敷」に分類される。一方、砦とされた普源田砦跡は、規模が約7,000m²、比高約50m、生活度は恒久的施設と考えられるので、中規模な「城」に分類される。島根県は中世城館跡の発掘件数が少なく、今後は分布調査のデータも含めて、比高、平面規模の分類に基づく検討が必要と考えられる。

【参考文献】

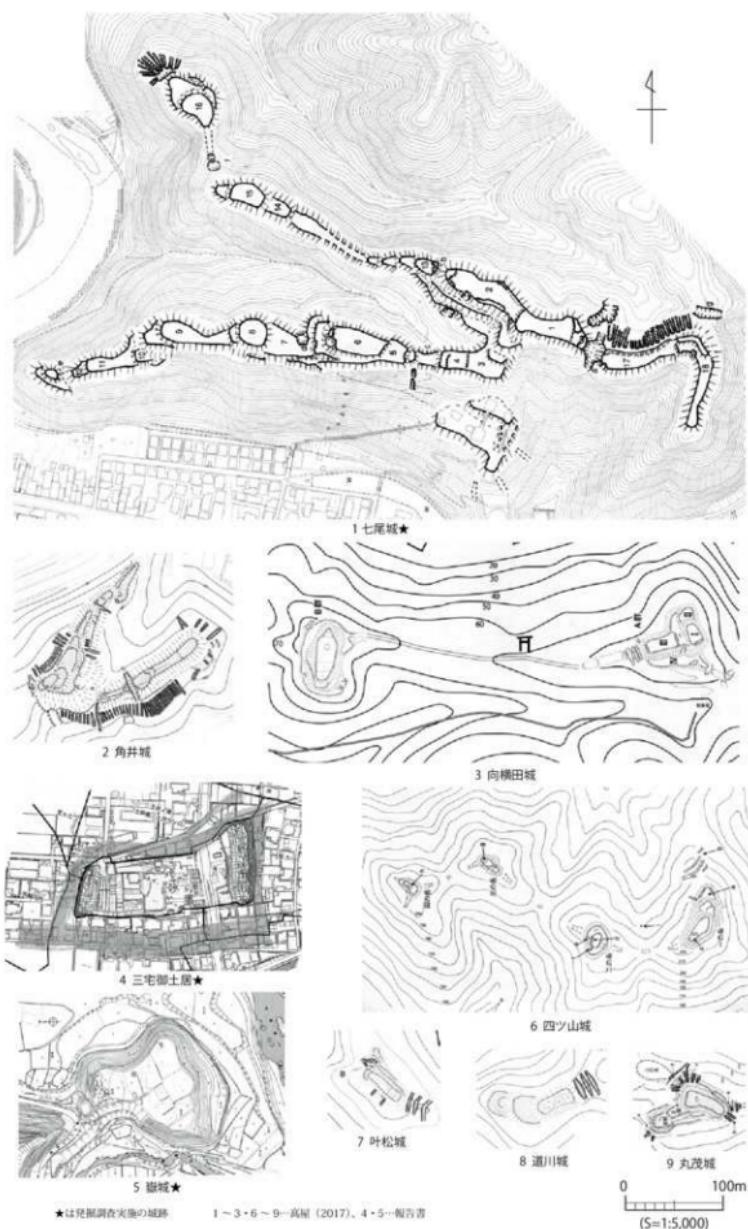
- 石見町教育委員会『日和城跡調査報告書』1996
- 小都 隆『西国の中世所遊館跡』『西国の権力と戦乱』
- 日本中世の西国社会 I 清文堂 2010
- 川本町教育委員会『丸山城跡』1997
- 佐々木芳賀郎『島根県中近世城館調査カード』1995・1996
- 島根県教育委員会『島根県中近世城館跡分布調査報告書（第1集）石見の城館跡』1997
- 島根県教育委員会『上久々茂上居跡・大蛇遺跡』1994
- 島根県教育委員会『静間城跡』2018
- 島根県教育委員会『普源田砦跡』2021
- 高屋茂男編『石見の山城』2017
- 匹見町教育委員会『嶽城跡発掘調査報告書』2000
- 益田市教育委員会『三宅御土居跡』2018

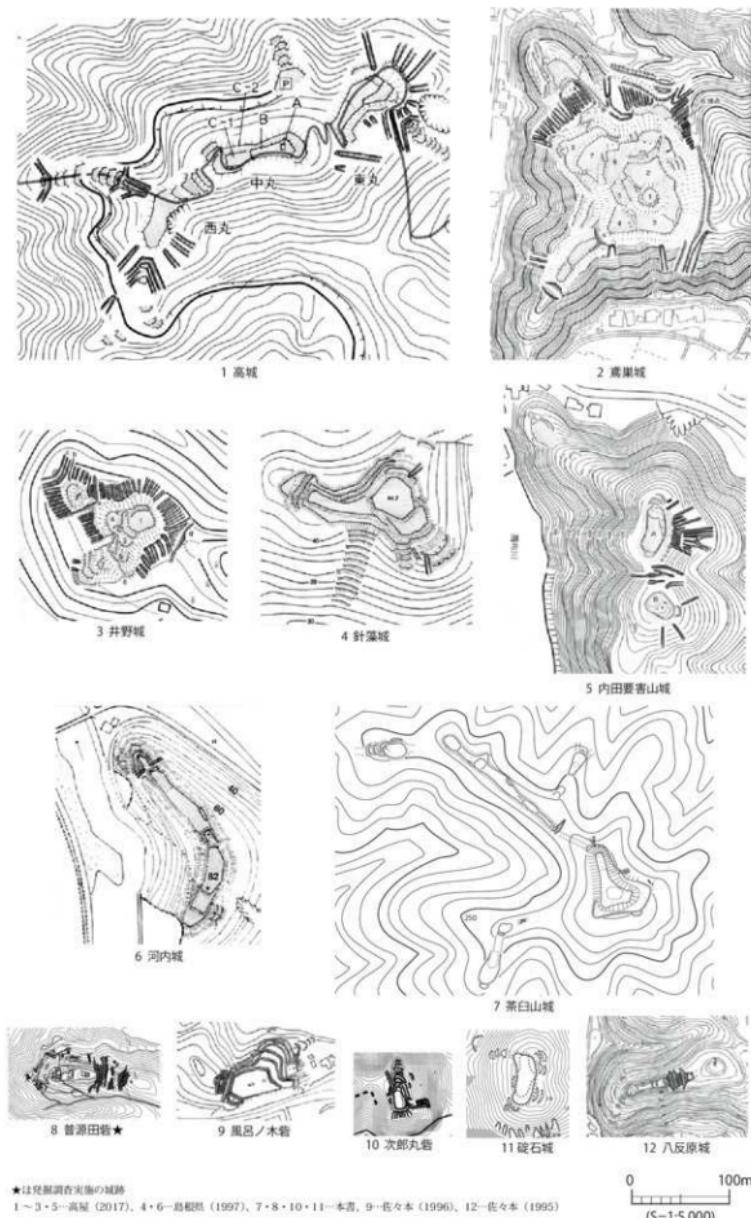


静間城跡遠景

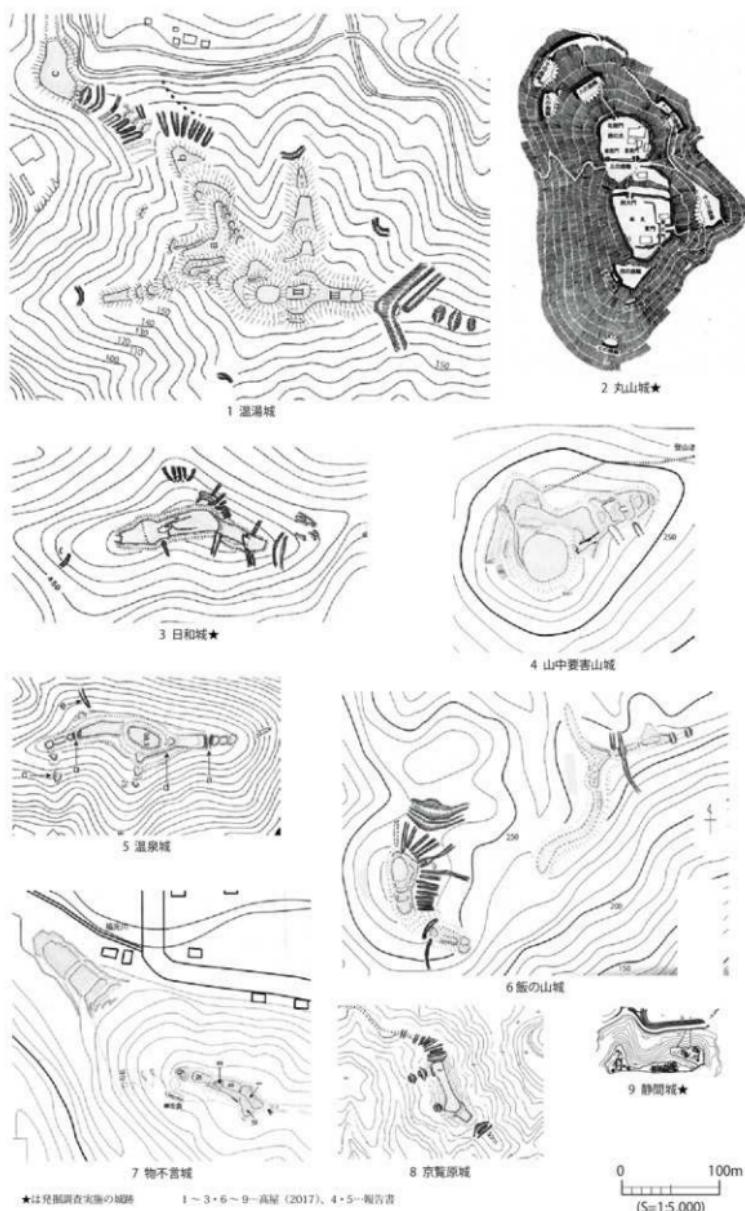


普源田砦跡遠景





第117図 石見地方の城館(2) (各報告書・参考文献より引用)



★は発掘調査実施の城跡

1～3・6～9—高尾 (2017), 4・5…報告書

第118図 石見地方の城館(3) (各報告書・参考文献より引用)

第5節 島根県内中世城館史料における城館を指す語句の検討

島根県古代文化センター

目次謙一

1. 課題と方法

城館跡の呼称 本報告書の掲載遺跡である普源田砦跡を、中世の人々はどのような名称で認識し、呼んだのだろうか。一般的に、遺跡としての城館跡の総数からみれば、同時代の文献史料から名称が読み取れる城館跡は少なく、そうではない無名の城館跡の方が圧倒的多数を占めるといってよい。関連史料を欠く普源田砦跡は、「砦」、「城」、「要害」のいずれかで呼ばれていたのだろうか。

おそらく答えの出ない問い合わせはあるものの、このことを考える手がかりとして、城館を指す語句に注目し検討することは有益と思われる。中国地方各地の城館跡の分布調査にかかる調査研究でも、城館関連の語句が同時代の文献史料から収集・整理され、検討が加えられている。

以下では、普源田砦跡所在の石見地域および出雲地域の中世城館史料を対象に、城館を指す語句を抽出・整理して検討する。

城館史料の調査 島根県では、「未確認の城館跡を発見すること、城館跡の所在と立地点を明確に把握すること、そして城館跡を取り巻く歴史的背景を把握すること」を目標として、県内中近世城館跡分布調査が実施された。同調査は平成5年度から5年間にわたり、その成果である『島根県中近世城館跡分布調査報告書<第1集>石見の城館跡』および『島根県中近世城館跡分布調査報告書<第2集>出雲・隠岐の城館跡』が、島根県教育委員会より平成9（1997）年・同10（1998）年にそれぞれ刊行された。調査内容の一つには城館に関連する文献及び地図類の調査が掲げられ、その結果が両書掲載の島根県内中世城館史料目録（石見編）・同（出雲編）（以下、まとめて史料目録と略記する）としてまとめられた。石見編に349件、出雲編に隠岐国の2件を含む447件の史料を載せている。

この史料目録における城館名称の基準として、「中世城館で、中世文書に明確に当該城館、もしくは、当該城館をめぐる事項と判断されるもの〔〕を付して表記」)が凡例で挙げられている。また、掲載対象の検索に用いた史料として、各対象地域の記事を多く収める既活字史料集・市町村史所載史料・未活字文書などが提示される一方、それら以外の史料は未参照の旨も示されている。

城館史料の課題と検討 県内中近世城館跡分布調査の実施時期と同じく、史料目録もまた20年以上前の作成になる。そのため、その後に刊行された史料集や自治体史、新出史料などは当然検索対象に含まれていない。本来であればそれらも含めた精査により、史料目録を更新したうえでここでの課題に取り組むことが望ましいだろう。しかし、島根県内の中世城館史料を直接の対象とした集成は管見の限り史料目録以降なされておらず、ひとまず本稿はこれを利用することとした。

具体的な検討作業の手順として、まず、史料目録の「事項」欄に抜き書きしてある個々の城館名称に注目する。石見・出雲地域以外の城館にかかる史料を除いたうえで、城館を指す語句（たとえば城、要害）の有無で分け、さらに抽出した史料を語句別に細分した。あわせて、「年月日」・「西暦」各欄の記載に基づき、史料を南北朝・室町、戦国（1467年以降）・安土桃山、江戸（1601年以降）の各時代に分類した。史料は時代別分類のいずれかに属するよう年次を可能な限り推定し、年未詳分は別にまとめた。以上の作業について史料全文を隨時参照しつつ行い、分類ごとの件数を数

えて表にまとめた。個別分類の中に含まれながら、語句の意味等が留意された史料については適宜検討した。

2. 検討結果

城館史料の分類 前項で述べた作業に基づき、島根県内中世城館史料分類表（表15）を作成した。城館の所在を基準に絞り込み、対象史料を出雲で433件、石見で344件とした。そこから城館を指す語句として城（城郭等含む）・要害・陣・固屋・土居を含む史料をそれぞれ抽出し、残りの語句を含まないものは「地名等」として分類した。前者の件数のみを集計した結果は小計の列を設けて示した。以下、南北朝・室町時代と、戦国・安土桃山時代に属する史料（出雲395件、石見301件）を中心に、各分類別に件数や該当史料の状況等を検討する。

第8表 島根県内中世城館史料分類表

	合計	小計	城	要害	陣	固屋	土居	地名等
出雲	433	160	104	30	24	0	2	273
南北朝・室町	9	7	7	0	0	0	0	2
戦国・安土桃山	386	139	85	30	22	0	2	247
江戸	30	14	12	0	2	0	0	16
年未詳	8	0	0	0	0	0	0	8
石見	344	202	163	36	0	3	0	142
南北朝・室町	80	66	65	1	0	0	0	14
戦国・安土桃山	221	104	70	31	0	3	0	117
江戸	39	32	28	4	0	0	0	7
年未詳	4	0	0	0	0	0	0	4

*出雲の事項「高矢倉要害城篤」と石見の事項「三隅端城板井川要害」は、出雲と石見の分類「要害」にそれぞれ含めている。

語句「城」 城館を指す語句を含む史料中で、中世の城の件数は出雲92(63.0%)・石見135(79.4%)と最も多く、一般的な呼称であることは言うまでもない。石見では南北朝・室町と、戦国・安土桃山の件数がほぼ同数であり、出雲で後者が大半を占める点とは大きく異なる。一つには、南北朝期の軍忠状を主とした史料が石見で数多く残されているため、石見の各地で合戦が生じた政治情勢を反映した結果によると考えられる。同じ南北朝期にのみ、2件と少数だが「城郭」と書く史料が存在する。

城館の機能を読み取れる史料として、「向城」を記すもの⁽¹⁾に注目したい。むかいじろ向城とは、攻める側が攻略対象の城館に相対して築いた城館を指し、付城・つけじろ対城ともいう⁽²⁾。該当史料では、元亀元（1570）年に大名毛利輝元が、敵の尼子氏方軍勢の籠城する出雲国高瀬城（出雲市）・熊野城（松江市）に対する向城数か所の構築を命じ、両城への通路を全て遮断することによって、遠からず攻め落とせると述べている。向城の軍事的機能が知られるとともに、攻城戦の厳しい様子がうかがえよう。

領主が拠点とした城館を表す際には、その領主の呼称に「城」あるいは「要害」等を組み合わせる例もある。たとえば、天文23（1554）年、石見国美濃郡の益田藤兼が、大内氏重臣陶晴賢と協調し、吉賀郡（鹿足郡）の吉見正頼を攻撃していた際の史料⁽³⁾もその一例である。これは、吉見大蔵少輔（吉見正頼）の本拠地三本松城（津和野町）への攻撃時に、家臣僕賀新蔵人の僕従が戦死・負傷するなどの働きを示したこと、右衛門佐（益田藤兼）が称賛したものである。三本松城は「吉見大蔵

少輔家城三本松」と記され、吉見氏に属する城館であることが明示されている。家城には「戦闘、防備を専らとしたものでなく、住居をも兼ねた城」という意味がある^⑨。家城はいわゆる居城に相当する城館であり、吉見正頼の本拠地三本松城を表す語句として妥当と考えられよう。

語句「要害」「要害」とは、地勢が険しく、守りやすく攻めににくい場所をいい、そうした場所に築かれた城塞も指す。また一般に堅固な城塞をいう。城と同様に中世の件数をみると、出雲 30(20.0%)・石見 32(18.8%) であり、城に対する比率は出雲が約 1/3、石見が約 1/4 である。同時期に同じ城館を指して城と要害の両方を用いている例が、出雲・石見ともに複数ある。そのため、両者はさほど区別されず使用される場合が多かったとみてよく、要害は城と同程度に一般的な呼称だったと考えてよいだろう。

語句としての要害と城の相違点は、使用された時代である。史料上の要害が概ね 16 世紀以降に頻出する点は、城が南北朝・室町時代から使用され続ける点と異なっている。類似の傾向は長門国においても指摘されており、戦国期には「要害」の表記が一般的とされている^⑩。

語句「陣」 軍勢の駐屯するところである陣は、城や要害に比べ臨時性が強い。城・要害と同じく件数を確かめると、出雲 22(15.0%) の一方、石見は該当なしである。この 22 件は全て戦国・安土桃山時代に属する。該当史料は大別して次の二つの類型に分類できると考えられる。

A. 主に軍勢の駐屯場所や駐屯することを指すもの。例として、「洗会在陣」など見える荒隈城跡（松江市）や、「神西在陣衆」等と表される神西城跡（出雲市）がある。荒隈城は尼子氏方の白鹿城に対する向城でありつつ、毛利氏方の軍事拠点として比較的長期間使用された。神西城も、永禄年間から元亀年間にかけての長きにわたり、毛利氏方の兵站基地だったと推測されている^⑪。

B. 敵方の城を間近から攻撃するために設けられ、臨時性が強いもの。前掲の「向城」を含む史料には「至牛尾令陣易」とあり、尼子氏方の牛尾城（雲南市）を攻撃するため、移動してきた毛利氏方は陣を設けたと推定される。このように、同じ毛利氏方による「高瀬陣」や大名大内氏の富田城攻撃時の「富田陣」など、攻撃対象の城館名称と陣を組み合わせて用いる例が多く見受けられる。一方、元亀年間（1570～1573）の史料に多い「鳩根陣」は、当時攻防が続いていた、尼子氏方の拠点真山城（松江市）に対する毛利氏方の陣と推定される。このような地名を冠した呼称もある。語句「固屋」 固屋を記す史料は、石見で戦国時代の 3 件のみである。うち 2 件は三本松城の「固屋口」・「坪尾固屋」で、残り 1 件は邑智郡の領主笠原氏領内の「旗山小屋」である。「固屋口」は固屋が設けられていた城内への進入路入口と理解できるから、固屋が城館の重要な防御施設であったことが明らかであろう。固屋は広島県下の複数の史料でも確認されている^⑫。

語句「土居」 いわゆる居館を指す「土居」の史料は、永禄 12（1569）年および元亀元（1570）年と推定される出雲の 2 件のみであり、ともに穴道湖岸の末次（松江市）を指して「土居」が用いられている。しかし、後者の 1 か月後と推定される年未詳 8 月 26 日付の史料では「末次城普請」と見え、以降の史料では末次に「城」を付す例が確かめられる。

これに関して末次の情勢を詳しくみると、永禄 12 年に尼子氏方が占拠したものの、翌元亀元 5 月には毛利氏方が奪取し、水上戦での豊富な実績を持つ野村士悦が入城している。さらに、8 月には兵糧米 100 俵が搬入され、9 月には真山城の向城に位置付けられて、その強化が命じられている^⑬。毛利氏が戦略上の理由から末次を重視していった時期と、末次の呼称が「土居」から「城」へ変化した時期とがほぼ重なる点は、興味深く思われる。

語句を付さない史料 史料目録のうち、これまで扱った「城」などの語句を含まない史料も検討しておきたい。これらを表で地名等に一括したのは、ほとんどが城館名や地名の表記のみによって対象の城館を表していることにもとづいている。

史料の件数をみると、出雲は395件のうち語句を含むもの146(37.0%)、地名等249(63.0%)で、石見は301件中に前者170(56.3%)、後者131(43.5%)である。出雲・石見のいずれでも、語句を含まない史料が多数存在する。これらのほとんどが書状であるから、発給者と受給者の双方が記載された城館の情報を共有していれば、「城」等の語句を省略しても意思疎通には問題なかったのであろう。

注目すべきは、これらに「にしの丸」「番所」等、城館の構造や施設を記すものが多々含まれる点である。先行研究の成果をふまえ、こうした語句から城館跡の実態を探ることも重要であろう。

3. 結び

以上、出雲・石見の文献史料における城館跡を指す語句について、史料目録を利用して検討を重ねてきた。南北朝・室町時代と、戦国・安土桃山時代に属する史料696件のうち、城館を指す語句（城・要害・陣・固屋・土居）を含む史料は316件あり、そのうち戦国・安土桃山時代に属する史料が243件(76.9%)と多かった。語句の割合をみると、城と要害が合わせて289件(91.5%)と大半を占めた。中世出雲・石見における城館を指す語句として、城と要害が一般的だったというのが結論である。

だが、冒頭で述べたように、現在の研究状況に即して城館史料を収集・精査することにより、史料目録を更新する格好で城館の研究を進めることが望ましい。また、もっぱら領主権力が関わって発給された文献史料には現れることのない城館こそ、いわゆる「村の城」として在地社会の人々の活動を伝えている可能性も充分に考えられよう。これらの諸課題を視野に入れつつ、今後の文献史料による城館研究が進展することを期待したい。

註

- (1)『萩藩閥閱錄』巻102 冷泉五郎 18
- (2)「向城」『日本国語大辞典 第二版』小学館 2002
- (3)益田藤兼感状「保賀文書」『中世益田・益田氏関係史料集』636号文書 益田市・益田市教育委員会 2016
- (4)「家城」註(2)文献所収
- (5)本多博之「第三章第一部 文献史料の概要」『山口県中世城館遺跡総合調査報告書 長門国編』山口県教育委員会 2017
- (6)山根正明「第二章 32 神西城跡」『出雲の山城 山城50選と発掘された城館』ハーベスト出版 2013
- (7)木村信幸「文献史料調査の成果のまとめ」『広島県中世城館遺跡総合調査報告書』第4集 広島県教育委員会 1996
- (8)山根正明「第二章 9 真山城跡(新山城)」、註(6)文献所収。

付記

本稿は、平成30～令和2年度の島根県古代文化センターテーマ研究「中世石見における在地領主の動向」の成果を含んでいる。

第6節 調査の成果と課題

1. 発掘調査の成果

島根県内で戦国時代の山城跡を全体的に発掘調査した例はほとんど無く、郭での生活や、防御施設の規模や配置等、これまでの小規模な山城に対する研究者の認識が変わる画期的な調査になったと言える。現地調査時には城郭研究者から、どこにでもある山城であり、これぐらいの城域と比高差でこんなに手をかけた城は島根県内に例が無いと驚かれた。特に堀切2の規模は、隣接する広島県の国人領主の城館の堀の規模に匹敵すると指摘された。今回の発掘調査では、郭平坦地の全面発掘に加え、斜面部を広範囲に掘削した結果、地表観察で認識できなかった防御施設の実態が明らかになった。普源田砦跡の調査成果は特殊な事例であるのか、発掘調査の規模によるものであるか現時点で判断することは難しく、今後記録保存の発掘調査は同規模で実施する必要がある。

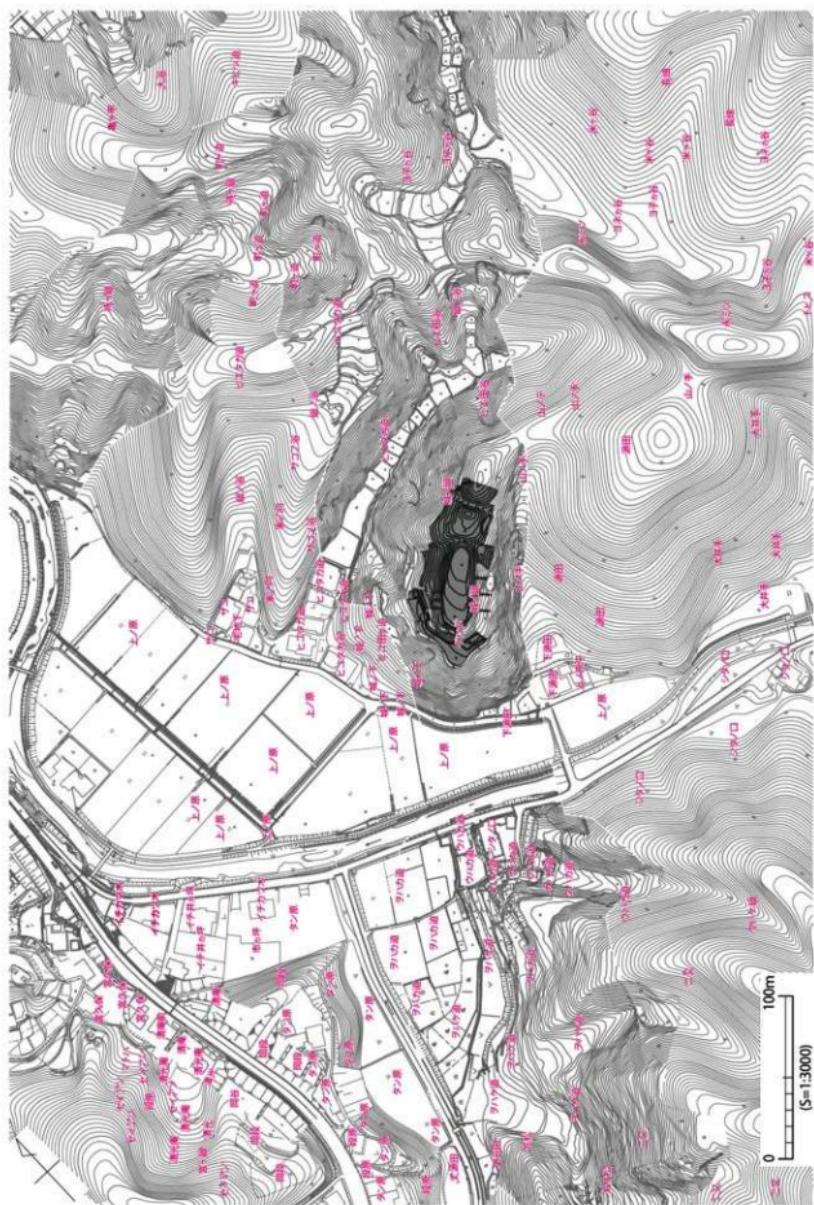
また、ここまで整理、検討の結果、普源田砦跡は三隅町岡見の南部を支配する小領主の拠点であると考えられた。整理作業に合わせておこなった岡見地区に所在する中・規模の山城跡の現地調査の結果、小地域においてそれぞれの山城が担う役割の違いも見えてきた。このことは、石見地域に数多くみられる同様の小規模な城館跡の位置付けを考える上で、参考となる成果と言える。

2. 他の資料からの検討

第119図は、浜田市教育委員会の協力により、普源田砦跡周辺の地名を現在の地形図に落としたものである。遺跡周辺にのみ「城ノ廻」「城ノ下」の小字があり、その他には石見地方の室町時代や戦国時代に多くみられる「城」「要害」の地名は確認できない。このことから、遺跡の立地する丘陵先端のみが城域と判断される。また、周辺にも同様の丘陵があるにも関わらず、この丘陵に城が造られた理由は、他の丘陵に比べて尾根の幅が広く、南北に谷によって急傾斜地になっており、当初から長期の居住を想定していた可能性が考えられる。

また、普源田砦跡の岡見川を挟んだ西側には、現在の県道171号線益田種三隅線が通っている。この県道が国道9号線と交わる位置に、「市カ坪」「イチ井カ坪」「イチカツ木」の地名がある。普源田砦跡の竪堀は北側と西側に設けられている。麓を通る街道や市にいる人間に視覚的に軍事力を示すものと考えられる。第10図に示すとおり、県道171号線は、現在は益田氏の居城である七尾城跡の南麓から三宅御土居跡の中を通り、北東へ進んで岡見に至り、さらに三隅町北部を東の折居方面に進んで国道9号に合流している。この道路の周辺には城館跡が分布しており、中世にも益田地域と三隅地域、さらに北東の浜田地域を結ぶ街道が存在したと考えられ、こうした街道、市の存在が普源田砦跡の立地に関わっていると推測される。

普源田砦跡が所在する三隅地域は中世の史料が少なく、築城時期や城主を特定することは困難である。一方、城の終焉時期の岡見地区をめぐる情勢が書かれた古文書が、平成27年10月に遺跡から約1km北方の岡見八幡宮で3通調査され紹介されている（中司・浜田・目次2017）。それによると、岡見八幡宮2号文書は、「永禄5（1562）年に益田氏当主の藤兼（官途は右衛門佐）が、神主市大夫盛口に、本郷の内東蔵懸の1町の地・代4貫文を安堵したものである。（中略）益田藤兼は、天文20（1551）年の陶隆房（後に晴賢）の下剋上に積極的に関わり、隆房が擁立した大内氏当主晴英（後に義長）から三隅氏領の領有を翌21年に認められた。そして、天文24（1555）年の正月



第119図 普源田砿跡周辺の地名 (網掛けは調査範囲)

から2月にかけて三隅氏領に攻め入り、正月29日に岡見で合戦し、2月10日に三隅氏本拠の高城目前の鐘尾城を攻め落とすなど、浜田市三隅町域の中心部や沿岸部をほぼ制圧したと考えられる。つまり、天文24年に岡見を含む地域の領主は三隅氏から益田氏に変わったのであり、岡見の新たな支配者となった益田氏が岡見八幡宮の神主にその社領を申告させ、これを認めたものが2号文書と考えられる。」と、される。本章第2節で述べたように、普源田砦跡の出土遺物の中心時期は16世紀前半である。16世紀第3四半期には遺物量が減少し、その後第4四半期の遺物がみられない。上記の史料研究と遺物の出土状況を勘案すると、普源田砦跡は三隅氏に属する領主の城だった可能性が高いと考えられる。

3. 今後の課題

今回の発掘調査では多くの成果を得ることができた一方で、新たな課題も見えてきた。調査に際しては、城館研究者、中世史研究者、地質学研究者のほか、甲冑研究者の指導、助言も受けながら発掘・整理作業を行った。しかし、建物について建築の研究者から十分な指導を受けていない。現地調査後に大田市教育委員会石見銀山課建造物係の生田光晴氏と清水拓生氏から、石見地方で発掘調査された中世の建物について、平面が長方形の建物の復元が多い点や、建物の名称の使用状況についての助言をいただいた。今後は現地調査時から継続的に各分野の専門家の指導を受ける体制作りが必要と考える。

普源田砦跡は、現地調査時から既に指導の方々に指摘されていたように、本来「城跡」とすべき遺跡だった。古い遺跡地図掲載情報や、中近世城館跡の分布調査を経て、遺跡の名称、位置を修正したにも関わらず、事業開始時の確認が不十分だったため再び臨時の砦跡とされた。その結果、報告書名も本来の位置付けと異なる「砦跡」となった。また、平成28（2016）年に発掘調査がおこなわれ、調査成果が注目された静間城跡は、開発事業に伴う分布調査で存在が明らかになり、発掘調査前年には名称を決定するため大田市教育委員会が小字の確認をおこなったところ、「城山」であることが判明した。普源田砦跡同様、地元では古くから城跡として認識されていた可能性がある。普源田砦跡のように、本来と異なる位置付けがされており、静間城跡のように存在すら認識されていない小規模城館は、島根県内で他にも存在する可能性がある。一方で、このような小規模城館跡は、「全国に3～4万存在する中世城館跡の大半が、小規模で数段の曲輪と堀切しか認められない、極めて防御性に乏しい構造なのである。」「わずか十数戸の集落を支配した在地領主であっても、城郭を築くことが領主としてのステータスシンボルであったことを見逃してはならない。」（中井1994）と指摘されるように、県内に現存する城館跡の大部分であり、たとえ単独の調査成果が全国的に注目されるものでなかったとしても、地域研究において欠かすことのできない存在である。

島根県の中近世城館跡分布調査は、前回の実施からすでに30年近く経過している。今後、近年の城館研究成果や、新たに発見された史料の研究成果、地名等を参考にした詳細分布調査を改めて実施し、県内の城館分布の実情を把握する必要がある。

【参考文献】

- 中井 均「『民衆』と『城館』研究試論—特に考古学的資料を中心に—」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第5集 1994
中司健一・濱田恒志・目次謙一「浜田市岡見八幡宮所蔵古文書・隨身坐像」『季刊文化財』141号 島根県文化財愛護協会 2017

第9表 島根県城館下発掘調査文献一覧

備考

番号	題名	所在地	書名	刊行機関	発行年	備考
	津和野町役場	津和野町役場	津和野町埋蔵文化財調査報告書 第1回 津和野の城下町 考古的・歴史的・社会的・文化的・景観的評価	津和野町教育委員会	1999	城下町・礎石・土塁・六箇・埋 蔵遺構
	津和野町役場口	津和野町役場口	津和野町埋蔵文化財調査報告書 第11集 津和野町役場口跡地に於ける発掘調査報告書一 津和野町役場口跡地に於ける発掘調査報告書二	津和野町教育委員会	2010	城下町・門戸・礎石・右門寺
	津和野町森村	津和野町森村	津和野町埋蔵文化財調査報告書 第12集 津和野町役場の七ツターナ建設工事に伴う発掘調査報告書一 津和野町役場町内道路3番地地区Ⅱ	津和野町教育委員会	2010	城壁・右門・土塁・右六門通構
	津和野町中街	津和野町中街	津和野町埋蔵文化財調査報告書 第25集津和の城下町遺跡6 高見堀川岸跡地	津和野町教育委員会	2010	城下町・右門
	津和野町役場	津和野町役場	津和野町埋蔵文化財調査報告書 2集 津和野町内道路跡地調査報告書 2	津和野町教育委員会	2007	城下町・扇石・右門・ピット(試掘) 城下町(試掘)
	津和野町役場森村・役場	津和野町役場森村・役場	津和野町埋蔵文化財調査報告書 5集 津和野町内道路跡地調査報告書 3	津和野町教育委員会	2008	城下町・堅石・壁・柱穴(試掘)
	津和野町役場口	津和野町役場口	津和野町埋蔵文化財調査報告書 9集 津和野町内道路跡地調査報告書 4	津和野町教育委員会	2009	城下町・用田・土坂(試掘) 城下町・礎石・集石・壁・土塁(試掘) 城下町・右門・用田・集石・土塁・ピッ ト(試掘) 城下町・相田石通構 城下町・土塁・右門(試掘)
	津和野町森村八	津和野町森村八	津和野町埋蔵文化財調査報告書 16集 津和野町内道路跡地調査報告書 5	津和野町教育委員会	2011	城下町・外堀・小倅武家居敷内(試掘) 城下町・町家内(試掘)
	津和野町役場口	津和野町役場口	津和野町埋蔵文化財調査報告書 16集 津和野町内道路跡地調査報告書 5	津和野町教育委員会	2011	城下町・上倅武家居敷内(試掘) 城下町・相田八幡宮境内の高馬場付近 (試掘)
	津和野町製糸	津和野町製糸	津和野町埋蔵文化財調査報告書 23集 津和野町内道路跡地調査報告書 7	津和野町教育委員会	2014	城下町・下倅武家居敷内(試掘)
	津和野町役場口	津和野町役場口	津和野町埋蔵文化財調査報告書 21集 津和野町内道路跡地調査報告書 6	津和野町教育委員会	2014	城下町・待原敷・加賀村(試掘)
	津和野町中街イ	津和野町中街イ	津和野町埋蔵文化財調査報告書 23集 津和野町内道路跡地調査報告書 7	津和野町教育委員会	2016	城下町・足利・城内(試掘)
	津和野町役場イ	津和野町役場イ	津和野町埋蔵文化財調査報告書 23集 津和野町内道路跡地調査報告書 7	津和野町教育委員会	2016	城下町・鶴見・鶴見の里(試掘)
	津和野町役場八	津和野町役場八	津和野町埋蔵文化財調査報告書 24集 津和野町内道路跡地調査報告書 8	津和野町教育委員会	2019	城下町・中倉武家居敷(試掘) 城下町・前入居敷・後土蔵・礎石(試掘) 城下町・足利の居敷・後土蔵・礎石 (試掘) 城下町・右門・石垣「鬼の手」・脚本 (試掘) 城下町(試掘)
2	向畠町本陣跡	津和野町中町	津和野町埋蔵文化財調査報告書 4集 津和野町本陣跡 「一丁丁子モコ」(津和野の中町)基地施設新設工事に 伴う発掘調査報告書一	津和野町教育委員会	2007	城跡・右門・土塁
	津和野町中町	津和野町中町	津和野町埋蔵文化財調査報告書 5集 津和野町本陣跡 「一丁丁子モコ」(津和野の中町)基地施設新設工事に 伴う発掘調査報告書二	津和野町教育委員会	2009	城跡・土塁
3	土居丸跡跡	津和野町中町・左門	津和野町埋蔵文化財調査報告書 2集 津和野町中町左門跡地調査報告書 2	津和野町教育委員会	2007	御跡・ピット(試掘)
	津和野町左門	津和野町左門	津和野町埋蔵文化財調査報告書 6集 津和野町中町左門跡地調査報告書 5	津和野町教育委員会	2008	御跡・城・土塁・右門・土塁・壁(試掘)
4	津和野藩御跡跡	津和野町役場	津和野町埋蔵文化財調査報告書 9集 津和野町役場跡地調査報告書 4	津和野町教育委員会	2009	扇形跡・右門・城内通構・地下室・右門
5	津和野町役場跡	津和野町役場・篠原	津和野町埋蔵文化財調査報告書 9集 津和野町役場跡地調査報告書 4	津和野町教育委員会	2009	吉世城跡・右門・神社跡・水路・井 戸跡
	津和野町役場八	津和野町役場八	津和野町埋蔵文化財調査報告書 23集 津和野町内道路跡地調査報告書 7	津和野町教育委員会	2010	吉世城跡・土塁(試掘)
6	トウノク城跡	津和野町三郎	津和野町埋蔵文化財調査報告書 第17集 トウノク城跡	津和野町教育委員会	2011	城跡・山輪・切引・壁・通路・右門
Q	6 道跡					

福田市

番号	選択数	選択名	所在地	書名	発行機関	発行年	備考
1	三宅博士跡	益田市三宅町		三宅博士跡	福田市教育委員会	1991	昭和・柱穴・土坑・石頭遺構・壁
				三宅博士跡Ⅱ	福田市教育委員会	1992	昭和・壁・廻廊施設
				上代御跡・三宅博士跡 —益田市開拓地内埋蔵文化財発掘調査報告書— 河原山尾根跡の整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査 —三宅博士跡	福田市教育委員会	1998	昭和・壁・柱穴・土坑・廻廊
				河原山尾根跡の整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 —三宅博士跡	福田市教育委員会	2002	昭和・新立柱建物・石頭みどり井・木 削り井・土坑・廻廊
				山田遺跡の調査報告書Ⅰ （七代御跡・三宅博士の跡・妙手遺跡・中世石造物 分類調査）	福田市教育委員会	2003	昭和・壁・柱穴・廻廊・成跡
				三宅博士跡Ⅲ 益田市内埋蔵文化財発掘調査報告書	福田市教育委員会	2018	昭和・新立柱建物・土坑・溝状遺構・ 土坑
				上久々友美子跡	福田市教育委員会	1992	昭和・新立柱建物・壁・柱穴・石列・ 溝（試掘）
				上今茂・伊藤・大庭遺跡 —1991年度改築工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 調査報告書	福田市教育委員会	1994	昭和・新立柱建物・土坑・ビット柱・ 溝・柱穴
				益田市開拓地跡Ⅰ —勝手井跡・足見井跡—	福田市教育委員会	1993	昭和跡・本丸跡・堀跡・石垣
				益田市開拓地跡Ⅱ —勝手井跡・足見井跡—	福田市教育委員会	1994	昭和跡・溝状遺構・廻廊・散石
				七代御跡 —三宅博士跡 —益田市開拓地内埋蔵文化財発掘調査報告書— 小山遺跡の調査報告書Ⅰ （七代御跡・三宅博士の跡・妙手遺跡・中世石造物 分類調査）	福田市教育委員会	1995	昭和跡・廻廊・建物4軒・門跡・溝
				沢田町理賃文化財調査報告書 第20集 沢田町内埋蔵文化財分類調査報告書	沢田町教育委員会	1997	昭和・宝鏡山跡・壁土・周辺地塊
				沢田町理賃文化財調査報告書 第26集 益田市理賃文化財調査報告書	沢田町教育委員会	1999	昭和・村井・土坑・溝状遺構・壁土・水路 井戸施設
				沢田町理賃文化財調査報告書 第27集 沢田町内埋蔵文化財分類調査報告書各2号	沢田町教育委員会	1999	昭和・土坑・柱穴
				沢田町理賃文化財調査報告書 第29集 —1986年4月辺境ハーバス工事に伴う— 埋蔵文化財調査報告書	沢田町教育委員会	2000	昭和・新立柱建物・土坑・柱穴
計 5 選跡							

須田市

番号	選択数	選択名	所在地	書名	発行機関	発行年	備考
1	内山EMO (矢本EM)	須田市須町		中世城郭跡新庄公民館付近建設予定地内 埋蔵文化財調査報告書	須田町教育委員会	1991	昭和・露・土坑・ビット群・ 新立柱建物・横・溝・廻廊跡及び2軒・ 溝状遺構・廻廊・壁土
2	高城跡	須田市須町		須田町理賃文化財調査報告書Ⅰ 高城跡付近調査報告書	須田町教育委員会	1998	昭和跡・柱穴
3	須田跡	須田市須町		須田町理賃文化財調査報告書 第26集 須田町内埋蔵文化財分類調査報告書各2号	須田町教育委員会	2007	昭和跡・小島（島山）跡・石垣・廻廊
4	須田跡	須田市須町		須田町理賃文化財調査報告書 第27集 須田町内埋蔵文化財分類調査報告書各2号	須田町教育委員会	2007	昭和跡・石垣・廻廊
5	須田跡	須田市須町		須田町理賃文化財調査報告書 第29集 —1986年4月辺境ハーバス工事に伴う— 埋蔵文化財調査報告書	須田町教育委員会	2020	昭和跡・土坑・廻廊
計 5 選跡							

江津市

番号	選択数	選択名	所在地	書名	発行機関	発行年	備考
1	江津EMO (矢本EM)	江津市二刀町		津上城跡・宝鏡店遺跡跡・古八幡村迹道路・ 橋跡石碑	須田町教育委員会	2000	昭和・露・土坑
2	江津EMO (矢本EM)	江津市二刀町		津上城跡付近津道跡付近（須田自治会） 津上城跡付近津道跡付近（須田自治会）	須田町教育委員会	2012	昭和跡・石垣跡（試掘） 廻廊跡・土坑・廻廊
3	井原跡	江津市二刀町		井原跡付近津道跡付近 —一般道路付近（二刀町道跡付近）改築工事に伴う埋 蔵文化財調査報告書各5号	須田町教育委員会	2021	昭和跡・新立柱建物・廻廊跡・土坑・ 柱穴・廻廊・壁土
計 1 選跡							

長岡町

番号	選択数	選択名	所在地	書名	発行機関	発行年	備考
5	須田跡	邑南町高社		邑南町城跡調査報告書	須田町教育委員会	1989	昭和・露・露
				須田町城跡調査報告書	須田町教育委員会	1992	昭和・第1集～第3集・ビット・ 柱穴
				多目的保育園整備整備事業に伴う —山形県保育園経営調査報告書	須田町教育委員会	1989	昭和跡・廻廊・廻廊施設・壁土
				山形県保育園経営調査報告書	須田町教育委員会	1991	昭和跡・露・廻廊状施設・石垣・柱穴・ 柱ビット・廻廊・廻廊施設・壁土
				山形県保育園経営調査報告書	須田町教育委員会	1995	昭和跡・第1集～第11集・廻廊・ 廻廊施設・壁土・廻廊・廻廊施設・壁土
				山形県保育園経営調査報告書	須田町教育委員会	1996	昭和跡・露・ビット群・新立柱建物・ 柱穴
				石川町文化財調査報告書 第15集 日和佐町調査報告書	石川町教育委員会	1996	昭和跡・露・ビット群・新立柱建物・ 柱穴

5	8	長瀬地本谷跡跡	益浦町八代石	福岡市西文化財調査報告書 第20集 長瀬地本谷跡跡地調査報告書 柱頭瓦江戸時代中期(前)・古墳陪塚跡建物に 伴う発掘調査	福岡市教育委員会	1997	城跡・窓
				計 2 項跡			

美術館

番号	遺跡数	遺跡名	所在地	書名	発行機関	発行年	備考
1	1	陣馬跡	美和町	尼寺跡・陣馬跡調査報告書	大和町教育委員会	1992	城跡・郭・加工段・溝状通路
6	1	土塁跡					

江戸街

番号	遺跡数	遺跡名	所在地	書名	発行機関	発行年	備考
7	1	丸山城跡	川本町三原	中曾城郡御調査報告書 右見・小笠原氏御調査 丸山城跡	川本町教育委員会	1997	城跡・曲輪 12・礎石建物・方丈下・ 廻廊・門・石垣
計 1 項跡							

大和市

番号	遺跡数	遺跡名	所在地	書名	発行機関	発行年	備考
1	1	石井加山(城跡)	大和町大森町	石井加山(城跡) 大和町大森町付近より発掘調査報告書 第一・山内町南西側の城跡構造の調査	山内町教育委員会	2014	城跡跡
8	2	御田城跡	大和町藤原町	御田城跡(弓削大野村跡面) 改修工事に伴う埋 蔵文化財調査報告書 1 駿府城跡	山内町教育委員会	2018	城跡・駿立社建物 5 棟・礎石建物 3 棟・ 土塁 2 基・石門跡・駿治御門跡
計 2 項跡							

出雲市

番号	遺跡数	遺跡名	所在地	書名	発行機関	発行年	備考
1	半分城跡	出雲市上池波町	中央電力石井庄屋跡跡地調査工事に伴う大谷町・半 分分岐跡発掘調査報告書	出雲市教育委員会	1979	城跡・郭・段状通路・土塁・土堀	
2	大坪谷城跡	出雲市上池波町	中央電力石井庄屋跡跡地調査工事にともなう大谷町・半 分分岐跡発掘調査報告書	出雲市教育委員会	1979	城跡・郭・駿立社建物 1 棟・礎石建 物	
9	3	大坪城跡	出雲市斐川町	斐川放水道建設工事に伴う内堀内側文化財調査報告書 古墳群	斐川町教育委員会	1998	城跡・駿立社建物 1 棟・礎石建 物
4	祓小沢西側跡	出雲市櫛原町	舟根川出雲市祓小沢西側跡地調査報告書	舟根川町教育委員会	1996	城跡・駿立社建物 12 棟・土塁・ 土堀・土堤	
5	鳴尾山城跡	出雲市上池波町	斐川放水道建設工事に伴う内堀内側文化財調査報告書 古墳群	斐川町教育委員会	1999	城跡・駿立社建物 12 棟・土塁・ 土堀・土堤	
6	鹿谷山城跡	出雲市大津町	斐川放水道建設工事に伴う内堀内側文化財調査報告書 古墳群	斐川町教育委員会	2003	城跡・郭・切妻・駿立社建物・礎石・ 石垣	
計 6 項跡							

雲南市

番号	遺跡数	遺跡名	所在地	書名	発行機関	発行年	備考
1	3	三方原城跡	雲南市三刀屋町	三刀屋城跡調査報告書 内容一・二 三刀屋城跡調査報告書 二・三	三刀屋町教育委員会	1983	城跡跡 (七乃木代官舎)・郭・溝・石垣
			雲南市三刀屋町	三刀屋城跡調査報告書 三	三刀屋町教育委員会	1984	城跡跡 (天守台)・石垣・土塁・石垣
			平成二十一年度防災事業工事に伴う大谷城跡文化財 調査報告書	大谷町教育委員会	1990	城跡 (大谷町)・石垣	
2	大谷城	雲南市大和町	船越埋蔵文化財調査報告書 第五集	船越町教育委員会	1983	城跡・郭	
3	丸山城跡 (丸山城跡)	雲南市三刀屋町	三刀屋城跡調査報告書 一・二	三刀屋町教育委員会	1984	城跡跡	
4	吉井城跡	雲南市大和町	丸山城跡跡・駿立社跡・吉井城跡	大和町教育委員会	1988	城跡・郭	
5	地上跡跡	雲南市三刀屋町	御前の耳跡・御前跡・御前跡調査報告書	三刀屋町教育委員会	1989	城跡・段状通路	
6	峯山山麓聚落	雲南市三刀屋町	堂ヶ崎の道跡・峯山山麓聚落・元施合寺跡 一村・元施合寺跡周辺について	大和町教育委員会	1993	城跡・郭・ビート	
10	7	宍山城跡 (宍山城跡)	雲南市大和町	宍山城跡跡 (連続埋蔵文化財調査跡地) の調査調 査報告書	大和町教育委員会	1996	城跡・履坂
			雲南市宍山城跡	雲南市宍山城跡跡地調査報告書	大和町教育委員会	2008	城跡・郭・礎石建物・土塁
8	美明跡	雲南市大和町	大和町跡跡 (連続埋蔵文化財調査跡地) の調査調 査報告書	大和町教育委員会	1996	城跡・郭・礎石建物	
9	萬葉跡	雲南市三刀屋町	中国須磨の須磨尾根跡地の調査調査 報告書	日本道路公団の須磨尾 根地盤調査報告書	2001	城跡・礎石・壁垣	
10	下布施氏跡跡	雲南市木次町	一小谷タム建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 5 - 前述跡跡 (2) 下布施氏跡跡 調査報告書 1区 (分譲地)	島根県教育委員会	2005	城跡・駿切・道路状況	
11	高瀬山城跡	雲南市三刀屋町	雲南市高瀬山城跡跡地調査報告書 高瀬山跡跡 (シラカバ林) に伴う埋蔵文化財調査 調査報告書	雲南市教育委員会	2013	城跡・郭・土塁・ビット・土坑	
計 11 項跡							

米子市

番号	遺跡数	遺跡名	所在地	書名	発行機関	発行年	備考
1	1	森脇山城跡	船出町志津見	「森脇山・朝原・朝原1・通跡・森脇山跡跡」 上通ダム建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 2	島根県教育委員会	1994	城跡
11	2	社山山城跡	船出町朝原村	私道山城跡跡地の調査調査報告書 (跡地) (跡地) (跡地)	日本土木学会の山城跡 跡地調査報告書	1998	城跡・郭・礎石・土塁
計 2 項跡							

東山町

番号	遺跡数	遺跡名	所在地	書名	発行機関	発行年	備考
12	1	牛ノ子跡跡 (牛ノ子地跡)	船出町志津見	「牛ノ子跡跡」建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 V 様屋尾跡・牛ノ子跡跡平地地区・小艇上 遺跡	島根県教育委員会	2006	城跡・駿切
計 1 項跡							

松江市

番号	調査数	調査名	所在地	書名	実行機関	実行年	備考
1	萬田勝	松江市大畠町	松江市大畠町	鳥取県文化財調査報告書 第5集	鳥取県教育委員会	1968	前脚・足型
				八幡山立・城土塁の古跡調査報告書	鳥取県教育委員会	1975	「鳥取県文化財調査報告 第5集」七 高岡山立
				城・土山の内・大庭町字御前瀬谷野字小門、宇間舟有 酒井一村古神社古跡	鳥取県教育委員会	1983	前脚・柱穴・溝
	東京田中和	松江市八雲町	松江市八雲町	東京田中和監修吉香古跡	鳥取県教育委員会	1970	前脚・石碑
				史跡松江城二丸子の鉄砲櫓調査	鳥取県教育委員会	1974	前脚・二丸・鉄砲櫓
3	松江城	松江市朝日町	松江市朝日町	史跡松江城二丸子の鉄砲櫓調査	鳥取県教育委員会	1980	近世城跡・本丸・石碑・櫓跡・米蔵
				史跡松江城二丸子の環濠跡発掘事業報告書	鳥取県教育委員会	1985	近世城跡・本丸・櫓跡・石碑
				史跡松江城二丸子の環濠跡発掘事業報告書	鳥取県教育委員会	1986	近世城跡・櫓跡・石碑・石段
				史跡松江城上ノ郷の跡調査報告書	鳥取県教育委員会	1987	近世城跡・石碑・櫓跡・土坑
				史跡松江城城郭の修理実業報告書 一二丸子の修理工事	鳥取県教育委員会	1995	近世城跡・石碑
	高岡	松江市内	松江市内	史跡松江城土塁の修理実業報告書	鳥取県教育委員会	1996	近世城跡・本丸・櫓跡・米蔵
				石碑調査報告書第一史跡松江城	鳥取県教育委員会	1996	近世城跡・石碑・櫓跡
				松江市文部省調査報告書 第88集	鳥取県教育委員会	2001	近世城跡・石碑・櫓跡・井戸・土坑
				史跡松江城整備事業報告書	鳥取県教育委員会	2007	近世城跡・石碑・櫓跡
				松江市文部省調査報告書 第111集 史跡松江城石碑調査報告書	鳥取県教育委員会	2007	近世城跡・石碑・櫓跡
13	吉田川	松江市大畠町	松江市大畠町	吉田川流域跡地調査報告書	鳥取県教育委員会	1980	前脚・月見・土坑・ピット
				吉田川・篠原跡	鳥取県教育委員会	1981	前脚・ピット・碇石・土堤
	高岡	松江市内	松江市内	吉田川流域跡地調査報告書	鳥取県教育委員会	1982	前脚・井戸・櫓跡
				松江市文部省調査報告書 第92集 (松)とむり跡地 (京)レーカーライン(国屋 造)とむり跡地・各人跡跡地・近隣跡地 空堀跡地報告書	鳥取県教育委員会	2002	前脚(小太郎跡地)・ピット・土堤・ 礎跡
	吉田川	松江市大畠町	松江市大畠町	鳥取県吉田川流域跡地調査報告書 第一丸子の跡地調査	鳥取県教育委員会	1983	MDB・井戸・土坑・櫓跡
				松江市文部省調査報告書 第130集 吉田川流域跡地調査報告書本稿(改訂)(改訂) 工事による跡地調査報告書	鳥取県教育委員会	2009	井戸・土坑・櫓跡
	吉田川	松江市山代町	松江市山代町	風・空の力の跡地調査報告書吉田川 ・新井山跡・南堀跡・西堀跡・櫻井跡	鳥取県教育委員会	1990	MDB・井戸・櫻井
				小中規模自然遺跡尾崎松山の発見と定め内 埋文化財発掘調査報告書第2号	鳥取県教育委員会	2000	前脚・井戸・免壁跡・ 界隈(2号跡)・山守源道跡・石碑・櫻井跡
	吉田川	松江市大庭町	松江市大庭町	小中規模自然遺跡尾崎松山の発見と定め内 埋文化財発掘調査報告書第3号 (京)・(国)・(大)の跡地・櫻山遺跡・ 櫻山跡地報告書	鳥取県教育委員会	2000	前脚・井戸・免壁跡
				小中規模自然遺跡尾崎松山の発見と定め内 埋文化財発掘調査報告書第4号	鳥取県教育委員会	2005	前脚・井戸・櫻井
	吉田川	松江市大庭町	松江市大庭町	松江市文部省調査報告書 第98集 ソフトビュースターの跡地に亘る大作遺跡群発 掘調査報告書	鳥取県教育委員会	1999	漢民族遺跡・土坑・櫻井
				小中規模自然遺跡尾崎松山の発見と定め内 埋文化財発掘調査報告書第2号	鳥取県教育委員会	2000	前脚・井戸・免壁跡
	吉田川	松江市大庭町	松江市大庭町	小中規模自然遺跡尾崎松山の発見と定め内 埋文化財発掘調査報告書第3号 (京)・(国)・(大)の跡地・櫻山遺跡・ 櫻山跡地報告書	鳥取県教育委員会	2000	前脚・井戸・免壁跡
				松江市文部省調査報告書 第112集 風・空の力の跡地調査報告書	鳥取県教育委員会	2005	前脚・井戸・櫻井
	吉田川	松江市大庭町	松江市大庭町	松江市文部省調査報告書 第119集 松江市文部省調査報告書本稿(改訂)(改訂) 今大庭地元(城跡)跡地調査報告書	鳥取県教育委員会	2009	MDB・井戸・井場
				松江市文部省調査報告書 第120集 松江市文部省調査報告書本稿(改訂)(改訂) 今大庭地元(城跡)跡地調査報告書	鳥取県教育委員会	2009	MDB・井戸・井場
	吉田川	松江市細川町	松江市細川町	松江市文部省調査報告書 第110集 松江市文部省調査報告書松山城跡(改訂)(工事 による跡地調査)跡地調査報告書	鳥取県教育委員会	2011	城下町・家老屋敷
				松江市文部省調査報告書 第111集 松江市文部省調査報告書本稿(改訂)(改訂) 今大庭地元(城跡)跡地調査報告書	鳥取県教育委員会	2005	MDB・井・ピット
15	松江城下町	松江市朝日町	松江市朝日町	松江市文部省調査報告書 第142集 アラシ・カミヤマ跡地調査報告書(1975年) 松江城下町跡地(100戸)発掘調査報告書(高岡町 681・682・683・7-1号)(高岡町52-32号)(高 岡町52-7号)(高岡町52-1号)	鳥取県教育委員会	2011	城下町・家老屋敷
				松江市文部省調査報告書 第143集 アラシ・カミヤマ跡地調査報告書(1975年) 松江城下町跡地(100戸)発掘調査報告書(高岡町 681・682・683・7-1号)(高岡町52-32号)(高 岡町52-7号)(高岡町52-1号)	鳥取県教育委員会	2012	城下町・中綱武士屋敷
				松江市文部省調査報告書 第153集 松江市文部省調査報告書(1975年) 松江城下町跡地(100戸)発掘調査報告書(高岡町 681・682・683・7-1号)(高岡町52-32号)(高 岡町52-7号)(高岡町52-1号)	鳥取県教育委員会	2013	城下町・中綱武士屋敷
				松江市文部省調査報告書 第154集 城下町公館跡地跡地調査(1975年) 松江城下町跡地(100戸)発掘調査報告書 第1プロローグ(案題)・第2プロローグ4・プロロ グ12(オラクル)	鳥取県教育委員会	2013	城下町・中綱武士屋敷
				松江市文部省調査報告書 第155集 城下町公館跡地跡地調査(1975年) 松江城下町跡地(100戸)発掘調査報告書 第1プロローグ(案題)・第2プロローグ4・プロロ グ12(オラクル)	鳥取県教育委員会	2014	城下町・町屋・上・中綱武士屋敷
	松江城下町	松江市朝日町	松江市朝日町	松江市文部省調査報告書 第156集 城下町公館跡地跡地調査(1975年) 松江城下町跡地(100戸)発掘調査報告書 第1プロローグ(案題)・第2プロローグ4・プロロ グ12(オラクル)	鳥取県教育委員会	2014	城下町・町屋・上・中綱武士屋敷
				松江市文部省調査報告書 第157集 城下町公館跡地跡地調査(1975年) 松江城下町跡地(100戸)発掘調査報告書 第1プロローグ(案題)・第2プロローグ4・プロロ グ12(オラクル)	鳥取県教育委員会	2015	城下町・下綱武士屋敷
				松江市文部省調査報告書 第158集 城下町公館跡地跡地調査(1975年) 松江城下町跡地(100戸)発掘調査報告書 第1プロローグ(案題)・第2プロローグ4・プロロ グ12(オラクル)	鳥取県教育委員会	2015	城下町・下綱武士屋敷
	松江城下町	松江市南田町	松江市南田町	松江市文部省調査報告書 第159集 城下町公館跡地跡地調査(1975年) 松江城下町跡地(100戸)発掘調査報告書 第1プロローグ(案題)・第2プロローグ4・プロロ グ12(オラクル)	鳥取県教育委員会	2015	城下町・下綱武士屋敷
				松江市文部省調査報告書 第160集 城下町公館跡地跡地調査(1975年) 松江城下町跡地(100戸)発掘調査報告書 第1プロローグ(案題)・第2プロローグ4・プロロ グ12(オラクル)	鳥取県教育委員会	2015	城下町・下綱武士屋敷
				松江市文部省調査報告書 第161集 城下町公館跡地跡地調査(1975年) 松江城下町跡地(100戸)発掘調査報告書 第1プロローグ(案題)・第2プロローグ4・プロロ グ12(オラクル)	鳥取県教育委員会	2015	城下町・下綱武士屋敷
16	松江城下町	松江市南田町	松江市南田町	松江市文部省調査報告書 第162集 城下町公館跡地跡地調査(1975年) 松江城下町跡地(100戸)発掘調査報告書 第1プロローグ(案題)・第2プロローグ4・プロロ グ12(オラクル)	鳥取県教育委員会	2015	城下町・下綱武士屋敷
				松江市文部省調査報告書 第163集 城下町公館跡地跡地調査(1975年) 松江城下町跡地(100戸)発掘調査報告書 第1プロローグ(案題)・第2プロローグ4・プロロ グ12(オラクル)	鳥取県教育委員会	2015	城下町・下綱武士屋敷

		松江城下町遺跡	松江市文化財調査報告書 第170集 小型八雲造御殿御茶室に伴う松江城下町下道発掘調査報告書 (昭和32年) 松江市立博物館 (現行) 322頁	松江市教育委員会 公益財団法人 松江市立博物館・アーツ モダン松江	2015	城下町・漢式遺構・櫛	
13	15.	松江市西町	松江市文化財調査報告書 第171集 城下町公園跡地御茶室御茶室に伴う松江城下町遺跡発掘調査報告書 (昭和33年) 松江市立博物館 (現行) 423頁	松江市教育委員会 公益財団法人 松江市立博物館・アーツ モダン松江	2015	城下町・上・中級武土屋敷・長屋門石垣	
		松江市西町	松江市文化財調査報告書 第182集 山形電力山陰線工事に伴う松江城下町遺跡発掘調査報告書 (昭和34年) 松江市立博物館 (現行) 115頁	松江市教育委員会 公益財団法人 松江市立博物館・アーツ モダン松江	2018	城下町・磯石建物	
		松江市西町・山田町	松江市文化財調査報告書 第185集 山形電力山陰線工事に伴う松江城下町遺跡発掘調査報告書 (昭和34年) 松江市立博物館 (現行) 113頁・114頁 第13ブロック (昭和34年) - 第14ブロック (昭和34年) 第15ブロック (昭和34年) 第16ブロック (昭和34年) 第17ブロック (昭和34年) 第18ブロック (昭和34年) 第19ブロック (昭和34年) 第20ブロック (昭和34年) 第21ブロック (昭和34年) 第22ブロック (昭和34年) 第23ブロック (昭和34年) 第24ブロック (昭和34年) 第25ブロック (昭和34年) 第26ブロック (昭和34年) 第27ブロック (昭和34年) 第28ブロック (昭和34年) 第29ブロック (昭和34年) 第30ブロック (昭和34年) 第31ブロック (昭和34年)	松江市教育委員会 公益財団法人 松江市立博物館・アーツ モダン松江	2018	城下町・孤立建物・磯石建物・漢式遺構	
16.		御治古墳	松江市文化財調査報告書 第193集 一帯古墳 (43号) (野村江口) 防災安全金 (交通安全) 工事に伴う調査報告書 (現行) 御治古墳	松江市教育委員会 公益財団法人 松江市立博物館・アーツ モダン松江	2018	城跡・壁塀・加工段	
		計 16 遺跡					
		安来市					
		番号 遺跡名	所在地	書名	発行機関	発行年	備考
1	三田城跡	安来市三田町	安来市三田城跡整備整備に伴う発掘調査報告書 (昭和31年近刊)	山陽教育委員会	1977	城跡跡	
			山中城跡 手取川右岸 50年 - 54年 施設開発整備報告書	山陽教育委員会	1980	城跡跡・赤堀塁・石垣・礎石建物	
			安来市三田城跡考古学 第1次発掘調査報告書	山陽教育委員会	1985	城跡跡・赤堀塁 1・櫛立柱建物 2・右門・石垣 3・礎石跡 2	
			安来市三田城跡考古学 第2次発掘調査報告書 (ふるさと工房研究会) に伴う 安来市三田城跡 発掘調査報告書 (山中城跡手取川右岸の環境内)	山陽教育委員会	2002	城跡跡・櫛立柱建物・磯石建物	
			安来市三田城跡 整備整備事業報告書Ⅱ	山陽教育委員会	2003	城跡跡・赤堀塁・石垣・建物	
			安来市三田城跡 分離跡発掘調査報告書	山陽教育委員会	2004	城跡跡・赤堀・櫛切	
			安来市三田城跡 古跡保護報告書	安来市教育委員会	2017	城跡跡・石垣・建物	
14.	2.	豊田城下町 / 蓼原川河床遺跡	安来市山田町	豊田川河床跡時刻発掘調査報告書	山陽教育委員会	1977	城下町・建物 1・井戸 15・道筋 5・施設の工事 2
		豊田城下町	豊田川河床跡時刻発掘調査報告書	山陽教育委員会	1980	城下町	
		豊田城下町 / 沖ノ瀬跡	豊田城下町の改修に伴う豊田川河床跡時刻発掘調査報告書	山陽教育委員会	1981	城下町・櫛立柱建物 3・土垣・櫛跡 3・溝	
		豊田城下町 / 沖ノ瀬跡	毎月定期的調査報告書	山陽教育委員会	1981	城下町・石垣・土垣	
		豊田城下町 / 新吉谷遺跡	新吉谷遺跡発掘調査報告書	山陽教育委員会	1982	城下町・櫛立柱建物・ビット・土垣・右門・井戸 1・溝	
		豊田城下町 / 萩谷遺跡	安来市山田町	安来市山田町開闢跡時刻発掘調査報告書	山陽教育委員会	1983	城下町・櫛立柱建物・ビット・土垣
		豊田城下町 / 萩谷遺跡	安来市山田町	安来市山田町開闢跡時刻発掘調査報告書	山陽教育委員会	1983	城下町・石垣・右門
		豊田城下町 / 蓼原川河床遺跡	安来市山田町	豊田川河床跡時刻発掘調査報告書 1期	山陽教育委員会	1983	城下町・櫛立柱建物・ビット・土垣・右門・井戸 1・溝
		豊田城下町 / 蓼原川河床遺跡	安来市山田町	新吉谷遺跡 第2次発掘調査報告	山陽教育委員会	1983	城下町・櫛立柱建物・ビット・土垣
		豊田城下町 / 蓼原川河床遺跡	安来市山田町	豊田川河床跡時刻発掘調査報告書 2期	山陽教育委員会	1984	城下町
		豊田城下町 / 蓼原川河床遺跡	安来市山田町	豊田川河床跡時刻発掘調査報告書 3期	山陽教育委員会	1984	城下町・櫛立柱建物・土垣・右門・井戸・溝
		豊田城下町 / 蓼原川河床遺跡	安来市山田町	豊田川河床跡時刻発掘調査報告書 4期	山陽教育委員会	1984	城下町
		豊田城下町 / 蓼原川河床遺跡	安来市山田町	豊田川河床跡時刻発掘調査報告書 5期	山陽教育委員会	1986	城下町・建物・ビット
		豊田城下町 / 蓼原川河床遺跡	安来市山田町	豊田川河床跡時刻発掘調査報告書 6期	山陽教育委員会	1986	城下町・建物・土垣・井戸
		豊田城下町 / 蓼原川河床遺跡	安来市山田町	豊田川河床跡時刻発掘調査報告書 7期	山陽教育委員会	1988	城下町・建物・ビット・土垣・右門・井戸
		豊田城下町 / 蓼原川河床遺跡	安来市山田町	豊田川河床跡時刻発掘調査報告書 8期	山陽教育委員会	1989	城下町・建物・井戸
3		御茨城	安来市佐伯町	大正安来市山田町御茨城調査報告書 カクウツ城跡調査報告書・御茨城・古石垣跡・小池はだか跡	山陽教育委員会	1992	城跡・郭
4		牛頭寺褒善	安来市上吉田町	安来市埋蔵文化財調査報告書第37集 牛頭寺褒善・官舎・土手斜面 11年所持(16年)事業 (上吉田) に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	安来市教育委員会	2001	M8
5		シケア遺跡	安来市佐伯町	シケア遺跡調査報告書 第4集	伯太市教育委員会	2002	M8・櫛立柱建物・堀切・土塁
6		土生城遺跡	安来市山田町	伯太城遺跡調査報告書 第6集 63年春新規工事に伴う伯太城跡調査事業に伴う	安来市教育委員会	2007	倒跡・櫛立柱建物・礎石建物・堀
		計 1 遺跡					
		西ノ島町					
		番号 遺跡名	所在地	書名	発行機関	発行年	備考
15.	1.	因幡城跡	因幡町内 / 長町	因幡城跡調査報告書	鳥取教育委員会	1985	M8・郭・土堤・堀切
		計 1 遺跡					
		隠岐の島町					
		番号 遺跡名	所在地	書名	発行機関	発行年	備考
16.	1.	夷久津城址	因幡町夷久津町	因幡夷久津城跡調査報告書	因幡城跡教育委員会	1994	M8・郭・平坦地
		計 1 遺跡					